

ハイスクールD×D 永  
遠の皇帝<エターナ  
ル・エンペラー>

てこの原理こそ最強

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

悪魔、天使、墮天使。どの種族よりも圧倒的に強いと言われている一人の悪魔の少年が自分の眷属達と“駒王町”で生活するお話

以前投稿していた「四大魔王より上がいた」のリメイク版です。ほとんど一緒ですがキャラとか一部変更していくので、よろしくお願ひします

# 目次

第7話	121	第18話	282
第6話	110	第17話	264
戦闘校舎のフェニックス		第16話	252
第5話	94	停止教室のヴァンパイア	
第4話	75	第15話	240
第3話	58	第14話	222
第2話	39	第13話	200
第1話	19	第12話	191
旧校舎のディアボロス		第11話	175
キャラ紹介2	10	月光校舎のエクスカリバー	
キャラ紹介	1	第10話	160
		第9話	152
		第8話	138

第29話

第28話

第27話

第26話

放課後のラグナロク

第25話

第24話

第23話

第22話

第21話

冥界合宿のヘルキヤット

第20話

第19話

444

423

409

396

381

371

359

344

331

318

304

第32話

第31話

第30話

488

472

459

# キヤラ紹介

・主人公

名前：神崎 蓮夜 「王」

二つな：永遠の皇帝「エターナル・エンペラー」

容姿：短髪の黒髪でめちやくちや立っている

顔は上の上で10人中10人が振り向くようなイケメン

体格は細くもなく太くもない、謂わば細マツチヨ

性別：男

身長：192cm

趣味：昼寝、散歩

好きなもの：自分の眷属たち、納豆

嫌いなもの：自分の眷属たちを馬鹿にするものや危険に陥れようとするもの

駒王学園に通う高校2年生。しかしその正体は天界、冥界、人間界の誰よりも強い最強と言われている悪魔。駒王町には高校に入る前に来ており、趣味が散歩ということも

あつて町のことなら大抵わかる。自分のことを言われるときは冷静だが、眷属のみんなや友達のことを悪く言われたりするとすぐに頭に血がのぼる。しかし自分より眷属のことを考えるため信頼性は高い。眷属のみんなからの好意には気づいているがところどころ鈍感

能力：ワンパンマンのサイタマほどの身体能力

ストライク・ザ・ブラッドの暁古城が所有する12体の眷獣（既に全て使用可能）

・蓮夜の眷属

名前：タツマキ 「女王」（ワンパンマン）

二つ名：【戦慄のタツマキ】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：強い者と戦うこと

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜を傷つける者（そんないない）、お子様呼ばわりされること

駒王学園に通う高校3年生。蓮夜の眷属の女王。妹が1人いる

親は早くに他界。養父母の下で妹と暮らしていたが、学校では自分たちの能力でバケモノと嫌われてそれのある日金に目が眩んだ養父母にある実験室に売り飛ばされる。そこから助けしてくれたのが蓮夜であり、それ以降彼の女王として生きてきた。性格はツンツンしていて短気。しかし、蓮夜に対してのそれはただの照れ隠しと眷属のみんなのもバレている。蓮夜には明らかな好意を抱いている

能力：原作と同じ

名前：紺野木綿季（ユウキ） 「騎士」（ソードアートオンライン）

二つ名：【剣聖】

容姿：原作のALO内での耳を人間のにしたバージョン

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：蓮夜と一緒に寝ること

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜を傷つける者、おばけ、ホラー

駒王学園に通う高校1年生。蓮夜の眷属の騎士の1人。姉が1人いる。昔難病にか

かっていたユウキは病院で寝たきりだった。その病気を治すには多額のお金が必要で、とても払える額ではなかった。しかしそんなときに現れたのが蓮夜であり、悪魔になれば病気は治ると言われ悪魔に転生。その後親と姉に事情を話し正式に蓮夜の眷属となった。今やユウキは騎士の中では知らない者はいないとまで言われる騎士となった。蓮夜には明らかな好意を抱いている

能力：【ソードスキル】

名前：姫柊雪菜 「騎士」（ストライク・ザ・ブラッド）

二つ名：【劍巫】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：人形集め

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな、かわいい人形

嫌いなもの：蓮夜を傷つける者、変態

生まれてすぐの頃に産みの親から捨てられた雪菜はとある機関に引き取られる。その機関で対悪魔、対天使、対墮天使戦闘の訓練を受けて育ってきた。そんなある日蓮夜



の監視の任を任せられ蓮夜の元へ来たのだった。しかしそのうち彼の信念や行動に惹かれて彼の側にいたいという気持ちになり、彼の眷属となった。何事にもきつちりとした性格をしているため蓮夜や十六夜、黒歌はよく怒られている。昔蓮夜にもらった人形をまだ大切に持っているなど乙女な一面ある。蓮夜には明らかな好意を抱いている

所有武器：【七式突撃降魔機槍】「シユネーヴァルツア」

能力：魔力、光の力の無力化

名前：逆廻十六夜 「戦車」 （問題児達が異世界から来るようですよ?）

二つ名：【アンノウン】

容姿：原作と同じ

性別：男

身長：原作と同じ

趣味：強いやつと戦うこと

好きなもの：戦闘

嫌いなもの：特になし

駒王学園に通う高校2年生。蓮夜の眷属の戦車の1人。昔から並外れた身体能力を持つていたため自分の人生がつまらなかつた。そんなある日強いやつがいるというこ

とを知る。それが蓮夜だった。十六夜は勝った方は負けた方の言うことをなんでも一つ聞くといい条件で戦い負けてしまった。蓮夜は自分の眷属にならないかと言つてきて、十六夜は「それは楽しいか？」と聞いたところ、蓮夜は「ああ」と言つたので眷属に。戦闘では真つ先に先陣を切るが意外と知能派でいろんなことを知つている  
能力：特になし

名前：司波達也 「戦車」 （魔法科高校の劣等生）

二つ名：【摩醯首羅】

容姿：原作と同じ

性別：男

身長：原作と同じ

趣味：鍛錬

好きなもの（好きというか大切なもの）：蓮夜、深雪、眷属のみんな

嫌いなもの：深雪の害になるもの、面倒ごと

駒王学園に通う高校2年生。蓮夜の眷属の戦車の1人。深雪の兄。達也と深雪の家柄は代々魔法を使う家系である。しかし彼は二つの魔法を持つせいで魔法師としての才能がなかった。それを治すため精神改造手術をして魔力を操る力を得たが一般の人

より劣っていた。またその手術のせいであらゆる感情が失われてしまったが、妹を愛する気持ちだけは失わなかった。そのため重度のシスコンである。ある時達也は一族に反抗し深雪と共に逃げ出し、ある森を徘徊しているところを蓮夜に助けられる。事情を話すと蓮夜は「自分の家族になってくれ」と言ってきた。最初は警戒したものの深雪が彼に心を許したのをきっかけに2人揃って眷属となった

所有武器：シルバートーラス二丁

### 大型魔法銃一丁

能力：【分解】あらゆるものを分解する

【再生】24時間以内ならあらゆるものを再生する

【精霊の目】【エレメンタルサイト】周囲の魔力、光の力を見

通す。よってなんの技を出すかわかる

【フラッシュキャスト】瞬間記憶能力

【仮想演算領域】脳内に仮想世界を作り出し、無限大の情報を入

れることができる

名前：司波深雪 「僧侶」 (魔法科高校の劣等生)

二つ名：なし

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：料理

好きなもの：蓮夜、達也、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜と達也を馬鹿にするもの

駒王学園に通う高校2年生。蓮夜の眷属の僧侶の1人。達也の妹。達也と同じく魔法師。深雪は並外れた魔法力量を持ち次期当主候補となっている。蓮夜との出会いは達也と一緒。達也と同じく最初は蓮夜を警戒していたものの、そのうち心を許すようになった。重度のブラコンであるが、蓮夜にも明らかな好意を抱いている。

所有武器：携帯型魔法デバイス

能力：魔法

名前：黒歌

全て原作と同じ

蓮夜の眷属の僧侶の1人。昔はぐれ悪魔として追われているところを蓮夜に助けられる。実の妹で駒王学園に通っている一年の塔城小猫だけ助かればいいという思いを

蓮夜に読まれ「お前がいなくなつたら妹はどうなる！」と一喝されたことで自分も生きなければならぬことを自覚。それを気づかせてくれた蓮夜に明らかな好意を抱いている

## キャラ紹介2

名前：クロメ 「兵士」 （アカメが斬る）

二つ名：【死者軍団】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：お菓子を食べること、蓮夜と寝ること

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな、お菓子

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にする者

駒王学園に通う高校1年生。蓮夜の眷属の兵士の1人。姉が1人いる。姉と共に養成機関で暗殺者として育てられた。途中で姉と離れ離れにされてクロメは大量の薬物を投与された。そんな生活から助けてくれたのが蓮夜だった。また蓮夜のおかげで姉とも再会することができた。

暗殺や情報収集は眷属の中で最も優れている。蓮夜には明らかな好意を抱いている。

所有武器：【死者行軍・八房】

能力：死体を最大8体まで操ることができる

ティナ スプラウト 「兵士」 (ブラック・ブレット)

二つ名：【呪われた子供】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：ピザ作り

好きなこと：蓮夜、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にする者、早起き

「駒王学園小等部に通う小学5年生。蓮夜の眷属の兵士の1人。生まれたときからフクロウの因子を持ち、興奮すると目が赤くなることから呪われた子どもとして嫌がられてきた。ある日とある研究者に人体改造手術を施され、思考駆動型インターフェイス『シエンフィールド』による超遠距離射撃能力が可能となった。またいろんな人物に雇われいろんな人物を暗殺してきた。そんなとき蓮夜を暗殺しようとしたが失敗。彼を暗殺しようとしたにも関わらず普通の女の子として接してくれたおかげで、また彼と彼の眷属との交流を経て眷属となった。彼女は夜型であり朝起きるのはまだ苦手らしい。

蓮夜には明らかな好意を抱いている

所有武器：狙撃銃、拳銃、ナイフなど

能力：思考駆動型インターフェイス『シエンフィールド』による超遠距離射撃能力

フクロウの因子による視力で暗闇でもはつきり見える

櫛名アンナ 「兵士」 (K)

二つ名：【炎帝】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：蓮夜とお出かけ

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にする者

駒王学園小等部に通う小学5年生。蓮夜の眷属の兵士の1人。両親を事故で亡くし、叔母の縁で蓮夜と知り合う。昔からビー玉を使って占いをしたり、ビー玉を覗いて相手の心を見抜く力があつたせいで周りから恐れられていた。そんな生活が嫌で蓮夜と一緒にいることを決意。眷属の中でマスコットの存在でいつも真紅のゴスロリドレス



を着ている。基本無口。蓮夜には明らかな好意を抱いている

能力：火、炎

名前：レム 「兵士」 (Re:ゼロから始める異世界生活)

二つ名：【青鬼】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：料理、演劇鑑賞、詩文

好きなもの：蓮夜、姉、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜と姉を馬鹿にする者

駒王学園中等部に通う中学3年生。蓮夜の眷属の兵士の1人。姉がいる。巫人の一種である「鬼」の生き残り。昔から蓮夜の家系と関係があり小さいころから蓮夜のメイドとして一緒にいる。雑務全般を一手に担っており、家の仕事の8割は彼女が行っている。とある事情から姉に対して負い目を持っており、自己評価が極端に低い。姉への贖罪の為に生きていたが蓮夜に救われ諭されたことでトラウマを克服する。そのため蓮夜には明らかな好意を抱いている

所有武器：鎖付きのモーニングスター

能力：水系魔法

### 回復魔法

名前：ジブリール 「兵士」（ノーゲームノーライフ）

二つ名：【天使悪魔】

容姿：原作と同じだが片方の羽が悪魔の羽

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：読書

好きなもの：蓮夜、知識

嫌いなもの：蓮夜の害となるもの

蓮夜の眷属の兵士の1人。元最上級天使の1人。ミカエルよりも権力があつたとか  
なかつたとか。自分が認めた相手でない限り従うことはなかつたが、好奇心から蓮夜と  
ゲームをし負けてしまった。自分より劣っていると思っていた悪魔の蓮夜の戦いぶり  
に感心し、彼をマスターと呼び尊敬している。天使であるのに蓮夜から無理矢理駒を奪  
い眷属となつた。いろんな知識を知りたがりいろんな本を読んでいる。蓮夜には明ら

かな好意を抱いている

能力：魔法と光の力

名前：前田利家（犬千代） 「兵士」（織田信奈の野望）

二つ名：特になし

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：蓮夜と一緒にいること

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな、羊羹

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にする者

駒王学園小等部に通う小学5年生。蓮夜の眷属の兵士の1人。蓮夜とは小さいころからの幼馴染。昔から彼を兄のように慕っている

無愛想ではないが本人曰く口下手で言葉数は少ない。虎の被り物にフェイスペイントと非常に傾いた格好をしているが出奔前やオフの時は普通の地味な格好になる。羊羹などの和菓子が大好き。蓮夜には明らかな好意を抱いている

所有武器：朱槍

能力：特になし

名前：柊シノア 「兵士」（終わりのセラフ）

二つ名：【デスサイズ】

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：悪戯

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな

嫌いなもの：蓮夜の害となるもの。柊の家系

駒王学園に通う高校一年生。蓮夜の眷属の兵士の一人。柊家の命令で蓮夜と彼の眷属のことを監視していたが失敗を犯し家に強制帰還。義兄から重い罰として十年以上の監獄を言い渡されて独房入り。しかしそこから助け出してくれたのが監視対象であった蓮夜だった。最初は同情や偽善でやったことだろうと思っていたがそのうち彼の心優しさに触れて彼のことを信用するようになった。それから家とは縁を切り家系云々ではなく一人の女性として蓮夜の元にいることを決意。蓮夜には明らかな好意を抱いている

所有武器：【四鎌童子】

能力：悪魔、天使、墮天使のどの勢力にも有効

名前：宇多良カナリア 「兵士」 （クオリディア・コード）

二つ名：特になし

容姿：原作と同じ

性別：女

身長：原作と同じ

趣味：歌うこと

好きなもの：蓮夜、眷属のみんな、笑顔

嫌いなもの：蓮夜を馬鹿にするもの、オバケ、ホラー

駒王学園に通う高校2年生。蓮夜の眷属の兵士の1人。コールドスリープというもので何十年もその歳のまま眠っていたのを蓮夜に目覚めさせられた。なぜ目覚めさせたかは不明。誰にでも相性をつけ明るく元気な子。やると決めたら突っ走る頑張り屋。「困ったときは笑顔」が口癖

能力：【愛を唄う者ハートウォーミング】

眷属の全員の身体能力強化

回復

# 旧校舎のディアボロス

## 第1話

とある朝。カーテンの隙間から入る太陽の光で目が覚める。クローゼットの上に掛  
けられている時計に目をやると5:30。いつもなら目覚ましか誰かに起こされない限  
り起きることはないのだが、今日はなぜか早く目が覚めてしまった

起きたと自覚してから約二分後、布団の中でオレの上に誰かが乗っていることに気づ  
く。しかも両腕はまた別の誰かに抱き枕のような扱いを受けているようだ。オレの上  
に二人、両隣に二人。オレも含めて計五人でこのベッドを使っていることになる。ベッ  
ド的にはかなりの重労働だろう。いつもお世話になってます

さて、このまま二度寝に入ってもいいのだが、せっかく早起きしたのだ。たまにはオ  
レが朝ごはんでも作ることにしようか。そう思ってオレは冬なんかオレのこと大好き  
すぎてなかなか離してくれないベッドを出る決意をした

布団の中に誰がいるか大体予想つく。起こさないようにそーつと手を抜き布団を剥  
いでみる。首だけ動かして誰だったのかを確認すると、オレの上には長い金髪でピンク  
のチェック柄のパジャマを着ている小学生ぐらいの女の子と、同じぐらいの年頃で白髪

の長い髪に黒がかった赤いワンピース型のパジャマの女の子がいた。二人とも気持ちよさそうに眠っている

そして右側にはオレに乗っている二人よりも長く紫がかった髪に薄紫の半袖パーカーとショートパンツというラフな格好でいる少女。左側には黒髪ショートで黒と赤ストライプパジャマを身につけている。この二人がオレの腕を抱き枕代わりにした犯人だ。しかし二人共心地良さそうに寝息を立てている

オレはオレの上に乗っている二人をそつと下ろし四人が川の字一本という形で寝るようにしてベッドから出て再び布団をかけるのであった。しかし今思うと一晩布団の中で暑くはなかつたんだらうか…

「うし。顔洗って支度すつか」

可愛い寝顔達の前で軽い伸びをしながら小さな声でそう告げた

四人を起こさないように部屋のドアを開け、外に出てまた静かに閉める。何気に神経を使う作業だ。あ、着替えは持って出ました

その後洗面所に行つて顔を洗い持ってきた着替えに着替える。まあ着替えて言つても学校の制服だけだ。そしてリビングへ行きキッチンに入る。うちはそこらにはいないなかなかの大家族で、家自体もそうだがそれぞれの部屋が大きく作られている。このリビングもそうだしキッチンも然りだ。キッチンには大人四、五人は入るだけのス



ペースはあるだろう

さして。今日の朝は何にしましょうかね

16 : 151

男が起きてから四十五分後、今度はある青髪の少女が自分の部屋で目を覚ました。シヨートヘアーで片目が前髪で隠れている少女はベッドから起き上がり時計を一度確認してから部屋を出た。顔を洗うために洗面所へ向かう途中、リビングの明かりがついていることに気づいた

「?誰でしょう。こんな時間に」

いつも家の住人の中で一番最初に起きている彼女はそんな疑問を口走る。自分の身だしなみよりも先にそっちの方が気になってしまつてリビングのドアを少し開けて隙間から中を覗いてみた

「っー」

中にいる人物を見て彼女の頬は赤みを帯びる。それもそのはず。なにせ中では彼女が好意を向けている人物がキリツとした顔で料理をしているのだ。そんな姿を見てキュンとしてしまつている彼女であつた

青髪の少女は一度覗くのをやめて急いで手櫛で髪型を整える。こんなときに自分の寝相の良さをありがたく感じてしまう彼女であった。最後に自分の気持ちを悟られぬようフーツと深呼吸をし心を落ち着かせてドアを開けて中へ入った

「おはようございます」

「ん？ ああ、おはよう。 ” レム ”」

青髪の少女ことレムは彼の笑顔でまた心臓の鼓動が早くなるのを感じる。しかし顔には一切出しておらず平然を保っている

「相変わらず早いんだな」

レム「朝食を作るのもレムの仕事の一つですから」

「そっか。いつもありがとな」

レム「いいえ。それにしても珍しいですね。こんなに早く起きているなんて」

「ん。なんか目が覚めちまってな。まあ早起きはなんたら徳とも言うし。今日は久しぶりにレムのパジャマ姿を見れたからな。こりやあ得だろうよ」

レム「なっ！ 何言ってるんですか！」

「ははっ、レムは可愛いな」

レム「からかわないでください！」

「ははは、悪かったよ。早よ着替えといで」

レム「もう…わかりました」

レムは彼の言葉に従い着替えをするため一旦自分の部屋に戻った

レムが戻つてくると朝食の準備を手伝つてくれた。まあいつもはレム一人でやってくれているのだがな。ホントに感謝いたします

「こうして一緒にキッチンに立つのも久しぶりだな」

レム「そうですね。普段の誰かさんはまだ起きていませんでしょうから」  
「ぐっ…面目無い」

レム「ふふっ、大丈夫ですよ」

レムとそんな他愛もない話をしながら料理を進めていると二階から誰かが降りてくる足音が聞こえてきた。開けっ放しになっていたドアから見えたのは上は黒の半袖スポーツウェア、下は黒のジャージで黒髪のイケメンだった

「あ、達也」。おはよう」

達也「ん？ああ、おはよう」

「おはようございます」

達也「珍しいな。今日は核ミサイルでも降るのか？」

「おい、物騒なこと言うんじゃないよ。これから鍛錬か？」

達也「ああ」

「そっか。先生によろしくな」

達也「わかった」

そう言つて達也は家を出て行つた。先生とは達也に稽古をつけている先生のことだ。この家からおよそ五キロほど離れた山の寺で普段住職として働いているがその正体は「忍び」らしい。オレも何度か稽古をつけてもらったことがあるが、おそらく世界の武道の選手の何十倍も強いお方だ

「達也はすげえな」

レム「はい。懸命に強くなられようとしていますね」

「そうだな。それが達也の強みだな。毎日欠かさずトレーニングを続けてる。そりゃ強くなるわ」

レム「そうですね」

「さて、続きやるか」

レム「はい！」

オレ達は引き続き朝食の準備に取り掛かった。まあもうほとんどできてるんだけど

17:201

達也「ただいま」

「おつ、おかえり」

レム「おかえりなさい」

大方朝食の準備も整ったところで達也が帰ってきた

「戦果はどうだったよ？」

達也「今日も一本も取れなかったよ」

「そうか。じゃあまた今度だな」

達也「ああ。シャワーいただくぞ」

「抜かりないぜ。四十度ジャストだ」

達也「そうか。すまん」

「いいってことよ」

達也の鍛錬はそんじよそこらの人達とはわけが違う。本人はシャワーでいいと言うがオレが半強制的に風呂に浸からせている。そして風呂に向かおうとする達也に親指をグツと立てた手を出して見送った

レム「あ、そろそろ時間ですよ？」

「ん？ホントだな。あとの皿出しとか頼んでいいか？」

レム「はい。任せてください」

「じゃあ頼んだ」

オレはあとのことをレムに頼み他の住人を起こすためそれぞれの部屋へ向かった

この家に住んでるのはオレを含めて十六人。一階と二階にそれぞれ部屋がある。オレは上から起こしていくことに決めて階段を上がり一番奥の部屋のドアをノックした

コンコン

「十六夜」。起きてるか？」

『ああ。大丈夫だ』

「わかった。もう朝食できてるからな」

『オツケーだ』

中から返事が返ってきたため次の部屋へ移動する。十六夜の隣の部屋は達也なのでスルー。その隣の部屋をノックしようとする

ガチャ。ポフツ

ドアが勝手に開き中の住人がオレの体とぶつかった。まあ走っているとところに衝突したわけじゃないから怪我はないだろう

「おはよ。『深雪』」

深雪 「く♪はっ！お、おはようございます！」

既に学校の制服に着替え終わっている純白の肌に綺麗な長い髪が際立つ深雪。なんか匂いを嗅がれた気がするのはいかんな？

「大丈夫か？」

深雪 「だだ大丈夫です！申し訳ありません！」

こんな何でもないことに全力で頭を下げて謝罪の言葉をかけてくる深雪。そんな深雪の頭に手を乗せる

「ごめんな。一応起こしに来ただけど、深雪にそんな心配はいらなかったな」

深雪 「いえ！とても嬉しいです！」

「そうか。あつ、達也なら日課の鍛錬から返って来てるぞ」

深雪 「わかりました」

「それと、悪りいんだが深雪。この階のやつら起こしてもらっていいか？」

深雪 「はい。承知しました」

「頼むな」

二階の他の連中のことを深雪に頼み階段を降りる。その際に深雪の頭から手を離すと「あつ」という小声と少し名残惜しそうな顔をしていた、かな…





誰も起きる気配なし。ダメだ…一人ずつ起こしていこう

「ほら、ティナ」。起きな」

ティナ「ん…ふあ…おはようございます、お兄さん。昨日は楽しかったですね…」  
「そうだな。朝食できてるから、顔洗って行きな」

ティナ「ふあ…い」

金髪の少女、ティナの言っていたことはおそらく昨日の夜のおしゃべりのことだろう。ティナは夜型のためたまにオレの部屋にやってきては雑談をする。昨日もそれをやった

さて、次だ

「アンナ」。起きな」

「…」

白髪の少女、アンナは声を発さずムクリと起き上がった

「おはよ。朝食遅れるぞ。今日はオレが作ったやつだ」

「っ！行く」

「オレはこいつら起こしてから行くから先に行つてな」

「…わかった」

そう言つてアンナはタツタツタ小走りで部屋を去つて行つた

さて、一番の難関だ。今寝ている二人はこの家で朝起きないナンバー1、2なのだ。起きないときはとことん起きない。しかも平日に起きないんだからタチ悪い。休日は「どっか連れてって！」って起こしにくるくせに

「ユウキ！」クロメ「起きろ！」

「zzz…」

「起きないならもう遊んでやらんぞ」

そう言うのと黒髪ショートのクロメの体が一瞬ピクツとなったのを見逃さなかった

「クロメは起きてんだろ。ホントに遊んでやらないぞ？」

その発言が決め手になったのかクロメはゆつくりと体を起こした

クロメ「やだー」

「なら早く行きな」

クロメ「ん」

寝起きなだけにそんな淡白な返事をして部屋を出て行った

さて、ラスボスだ。オレはユウキの体を揺さぶる

「ユウキ！」

ユウキ「んん…ふえ…？あれ、どうしたの…？」

まだ寝惚けているのか目を半開きのまま体を少し起こす

「どうしたもこうしたも朝だから起こしに来たんだよ。てかここはオレの部屋なんだけども」

ユウキ「朝…朝ごはん」

ユウキは目を擦りながら起き上がった

「もう用意できてんぞ。久しぶりにオレが作ったんだ。早く行こうぞ」  
「本当!?!」…お、おう…」

ユウキ「やったー!」

ユウキはよっぽど嬉しいのか走って行ってしまった。そこまで喜んでくれるのはありがたいんだけど…

「このやろう…」

起こしてやったオレは放置か!?

リビングに戻る途中洗面所のドアが開いた。中から腰まであるくらいの長い金髪に少女が出て来た

「あつ!おはよう!」

「おはよ、カナリア」

カナリア「遅かったね」

「クロメとユウキ起こしてた」

カナリア「ああ……ご苦労さま」

「ホントだわ」

二人でリビングに入るともう全員揃っていた。オレらも席に座る

「じゃあみんないいか？いただきます」

『いただきます』

朝と夜のご飯は余程のことがない限り一緒に食べる。この家のルールだ

「レム、残りのことありがとな」

レム「いえ。あとはお皿を出すだけだったので」

「そつか。ん？なんだよ、〃シノア〃」

「なんですか？二人でこそこそと」

紫の髪を後ろで束ねてリボンで留めている少女、シノアがジト目で尋ねてきた

「今日はたまたま早く目が覚めてな。朝食をレムと一緒に作ったんだよ」

シノア「ははくん。ということは今日の朝ごはんは二人の愛の共同作業でできたもの

ということですね？」

レム「シ、シノアさん！何を言ってるんですか！」

レムは恥ずかしいのか顔を真っ赤にして抗議する

「そうだとシノア。変なこと言うな」

シノア「え〜。でも、嫌ではなかったのでしょ〜?」

「そりやあな。久々にレムのパジャマ姿も見れたし」

シノア「可愛かったですか?」

「もちのろんよ!」

レム「っ〜!」

あ、やべ…レム顔真っ赤。蒸気でそう

ユウキ「レムりん、顔真っ赤!」

カナリア「可愛い!」

「もう!みなさん!そんなにレムさんをからかわないでください!」

“雪菜”…頬にご飯粒ついてるぞ?」

雪菜「ふえっ!」

黒髪で中学の制服を身につけている雪菜の頬についていたご飯粒を取りもつたいな  
いからそれを食べた

「っ!」

『あー!!』

「っ!な、なんだ!?!」

「雪菜だけズルいじゃ!」

黒い髪に猫耳を生やし、黒い着物を着ている黒歌が叫んだ

「うるさいぞ、黒歌」。静かに食べないなら一週間魚料理なしな」

黒歌「あ、あんまりにやー!」

「なら大人しく食べる」

なんとも騒がしい朝食だ。まあ、嫌いじゃないがな

するとそんなことを考えているオレの膝の上に隣の席に座っていたアンナが移動してきて座った

「アンナ? どうした?」

アンナ「::膝の上に座ってるだけ」

「それはわかるが::なんで?」

アンナ「なんとなく」

「さようか」

アンナはユウキやカナリアと違ってあまり感情を顔に表さない。でもこれでも昔よりは感情豊かになった方だ

「アンナだけズルい」

「犬千代? お前もか?」

犬千代「アンナがいいなら犬千代も」

「まあいいが…」

アンナに対抗してかアンナやティナと同じくらい背丈でなぜかトラの被り物を着ている犬千代も膝の上に座った

「そういえばアンナはなんでオレの部屋で寝てたんだ？ユウキとクロメもだけど」

アンナ「ティナの話し声が聞こえた。抜け駆けは許さない」

ティナ「あ、あれは…ただお話ししてただけで…」

アンナ「でも一緒に寝てた」

犬千代「何それ、ズルい」

ティナ「ううう…」

アンナと犬千代の威圧でシユンとしてしまふティナ

「アンナと犬千代はそこまで。ティナも大丈夫だから。それで？クロメとユウキはなん  
でだ？」

「ん？一緒に寝たかったから？」

ハモってるし。てかなぜに疑問形？

「はあ…先に一言言ってくれ」

「はーい」

こんな感じ、いつも通りの朝食を進めていく

『ごちそうさまでした』

みんなが食べ終えたところで終わりの号令をかける

「うし！皿を流しに持ってきて着替えてないやつは着替えてこい。他はテーブル拭いた  
り手伝ってくれ」

『はい（わかった）』

朝食を終え自分の使った食器は自分で流しに持っていく。これもこの家のルールだ。  
それからユウキやクロメといった着替えてない組、用意を終わらせてない組は自室へ、  
それ以外はリビングに残って手伝いとなった。オレは皿を洗うためキッチンへ

「マスター、お手伝いいたします」

「サンキュー、＼ジブリアル＼」

腹や足といった部分をさらけ出している露出度の高い服に完全に人間ではない耳に  
腰辺りからは羽が生えているジブリアル。彼女はレムには劣るものの家事全般はでき  
るようになった

「黒歌！お前も手伝え！」

黒歌「えー、めんどくさいにやー」

「じゃあお前これから一緒に寝るの禁止な」

黒歌「是非お手伝いするにやー」



「よろしい」

現金なやつ：黒歌がキツチンに入ってくると

ジブリール「マスター、そんな駄猫の手伝いなど不要でございますよ」

黒歌「屑鳥の言うことはよくわからないにや」

バチバチバチ

睨む合う二人。この二人会ったときから馬が合わないんだよな。なんでこんな仲悪  
いかなー

ペチッ！

「ひゃっ！」

「にゃっ！」

睨み合っている二人に軽いチョップをする

「睨み合っていないで早く終わらすぞ」

ジブリール「はいマスター」

黒歌「わかったにや」

二人は納得いつていないような表情を出しているが手際よくやってくれる。途中からレムや深雪も手伝ってくれたおかげで早く終わることができた

後片付けを終えたオレは今仏壇の前に座つて手を合わせている。そこにはまだ若く、30代の男女が写っている写真があつた

「父さん、母さん。この街に来てもう一年が経つよ」

オレの両親はとある事故で亡くなった、と聞かされている。実のところホントのことはわかっていない。そういう風に聞かされていたのでホントに事故だったかさえ曖昧である

「昔は父さんも母さんもいなくてめっちゃくちや寂しかったよ。でも今は一緒にいてくれる家族ができた。だから全然寂しくねえ。心配しないで見守つてくれ」

そう写真に報告するように話すと

『蓮夜（さん）（くん）！』

玄関からみんなの呼ぶ声がした

蓮夜「じゃあ行つてくる！」

写真に向かつてそう行つてみんないる玄関へ足を運ぶのだった

## 第2話

「今日から新学期初登校ということもあつて今日は生徒会も委員会も朝の活動がないため久々にみんな登校することができる。ちなみにジブリールと黒歌はさすがに学校に通える容姿ではないので申し訳ないが留守番してもらっている。犬猿の仲つてい  
うのが不安なのだが…」

雪菜「先輩、どうかしましたか？」

蓮夜「いや、留守番組がケンカしないか心配だな」

雪菜「問題ないと思いますよ？そんなことすれば後でどうなるか二人共わかっていますから」

蓮夜「それもそうだな」

「まあ今までもやってきたし大丈夫か。あの二人が本気でケンカした日には日本が崩壊するな…」

蓮夜「それにしても雪菜」

雪菜「はい？」

蓮夜「その呼び方どうにかならんか？」

雪菜「?何か問題ありますか?」

蓮夜「問題は、ないが。なんか他人行儀に感じるときがあつてな」

雪菜「: : : そう、ですか。なら、れ、れん: : : や: : : さん: : :」

雪菜はなんでかわからないけど昔からオレのことを先輩呼びしてくる。本人曰く「先輩であることに変わりはないですし、こつちの方が気軽に呼べるので」だそうだ。「蓮夜先輩」とは普通に言えるのにさん付けだとそんな難しいのか? 恥ずかしいのか? 恥ずかしいのか? 俯いていく雪菜

シノア「蓮夜さん、今度は雪菜さんイジメですか?」

蓮夜「人聞きの悪いこと言うな。雪菜、ゆっくりでいいから」

雪菜「はい: : :」

後ろかヒョコツと顔だけ覗き込むように出て来たシノア。こいつは何かと悪戯好きの子である。でも弄られるのが自分に向くととても弱い

シノア「ところで、蓮夜さんはなんでティナさんとアンナさんと手を繋いでいるんですか?」

シノアの言う通り今現在、つつても家を出たときからただけど右手をアンナと、左手をティナと手を繋いで歩いている

ティナ「まだ、朝に慣れてなくて: : :」

アンナ「蓮夜、あつたかい」

ティナは少し俯いた状態で答え、アンナはいつも通りの感じで答えた。しかしさつきからオレの背中に感じる視線が強まった気がする。それになんか寒気も。風邪引いたかな？

蓮夜「なんだ？シノアも手繋ぎたかつたのか？」

シノア「はい？」

蓮夜「そうなのか。シノアもまだまだお子ちゃまだな」

シノア「そ、そんなことありません！ふ、ふふん。私はもう立派な大人の女なんですよ」

深雪「でもたまに一人で寝るの嫌で私のところに来ますよね」

蓮夜「あ、オレんところにも来んな」

シノア「ちよつ！お二人とも!!」

さつきまでの余裕の表情は消え、反対にアタフタと焦っているようだ

ユウキ「へえ〜。シノアはまだまだ子供だったんだね」

シノア「ユウキさんだつて蓮夜さんのところに行つてるじゃないですか！」

ユウキ「ボクは蓮夜のことが好きだから行つてるんだよ♪」

シノア「わ、私だつて……！」

ユウキの言うことにムキになって言い返してはいるがそこで口ごもるシノア  
クロメ「私だって…なに？」

シノア「わ、私だって…その…」

カナリア「正直に言った方がいいよ！シノちゃん！」

そろそろ止めるか。シノアもう携帯のバイブ機能ぐらいプルプルしいてるし

蓮夜「はい、そこまでな」

学校まであと少しというところでオレはみんなに声をかける

オレ達が通う“駒王学園”は駒王町に存在し小・中・高の一貫校で元女子校というこ  
ともあり女子の比率の方が高い

その学校が近づくにつれてオレ達に視線が集まる。当然だ。オレの後ろには美男美  
女が揃っているのだから。みんな（不本意ながらオレも含めて）この学園の人気者なの  
だ。しかもそれぞれが訳のわからない称号を持っているらしい

ユウキ、クロメ、犬千代、は〈学園の五代マスコット〉のうちの三人だ。しかもそこ  
には本人は否定しているがタツマキも入っている。先輩の威厳…

オレと達也は〈学園の三大イケメン〉、〈学園の二大お兄様〉と言われているみたいだ。  
達也は確かにイケメンだし事実お兄様だから納得だな

深雪と雪菜は〈学園の二大清楚お嬢様〉。うん。納得

カナリアは〈学園の元氣ハツラツお姉さん〉

十六夜は〈学園の博識ヤンキー〉。ヤンキーみたいな言動なくせに頭がいいからこう呼ばれるようになったらしい

アンナ、ティナ、レムは〈学園の美少女妹〉だそうだ

シノアは〈学園の悪戯っ子美少女〉

みんな何かしらの称号を持っている。何人かは不本意な者もいるが…

校門を通ったところでこちらに全速力で走ってくる三人のバカを目視で確認した。それを見てオレと達也、十六夜は女性陣を守るようにして前に出る

蓮夜「深雪。悪いが少しだけ持ってきてくれ」

深雪「はい」

こつちに向かってくる三人を迎撃するために深雪にバックを預ける

「イケメンはみんな敵だ!!!」

三人のバカがそう叫びながら襲いかかって来た。しかも泣きながら。オレと達也は二人の拳を十六夜の方に払い十六夜は残りの一人に回し蹴りをくらわし三人仲良く空中に飛んで行った。そして五秒後に地面に戻って来た

蓮夜「朝からうるせえぞ、三バカ」

オレらに襲いかかって来たのはこの学園で（悪い意味で）知らないものはいない変態

三バカトリオの兵藤 一誠、元浜、松田の三人だ

元浜「うるさい！朝からこんな美少女達と登校できるやつらに俺達の気持ちなんてわかるものか！」

一誠「朝から見せつけんじゃねえ！このリア充共！」

松田「そーだそーだ！」

蓮夜「はあ、お前らは…十六夜襲うとか頭大丈夫か？瞬殺されるぞ」

十六夜「よおお前ら。ちよつとあつちで遊ぼうぜ」

十六夜が肩を回しながら言うのと三人の顔はどんどん青くなっていく

「「すいませんでしたー！！！！」」

三人は息びつたりと土下座をして謝罪した

蓮夜「まったく…あ、ありがとう深雪」

深雪「いえ」

深雪からバッグを受け取って三人方に向き直る。するとユウキが前に出て来て三人に笑顔で言い放つ

ユウキ「先輩達って本当にバカだよね」

三人は顔を上げてユウキの顔を見るとまた涙を流し始めた

「「天使だ…」」



ユウキ「あ、ボクには蓮夜がいるから。ごめんね」

と言ってオレの元に駆け寄り腕に抱きついて来た。その瞬間その場の空気が一気に寒くなった

蓮夜「この甘えん坊が」

ユウキ「えへへー♪」

こいつは昼夜問わずこういうスキンシップを取ってくるから大変だ。特に周りの視線とかが…

蓮夜「ほら、お前らもそろそろ教室行きな」

雪菜「わかりました」

レム「じゃあまたお昼に」

犬千代「犬千代達も」

ティナ「行ってきます、お兄さん」

アンナ「行ってきます」

蓮夜「ああ、行ってらっしゃい。また後でな」

雪菜とレムの中学生組、犬千代とティナとアンナの小学生組を見送ってからオレらも校舎に入り、ユウキとクロメとシノアは一年生の、タツマキは三年生の、その他は二年生の教室に向かった

ちなみにオレと達也、十六夜、深雪、カナリアは同じクラスでそのクラスにはあの三バカトリオもいる。なのかはわからないがいつも騒がしい。学校側から三バカのストッパー役を強制されて同じクラスにされたと疑うくらいだ

しかし一番大変なのは深雪とカナリアだ。言わずもがな種類は違えど二人共美少女だ。休み時間になると取り巻きがすごくなる。深雪にはその容姿から主に男子、カナリアには誰にでも隔たりなく接するその性格から女子といった感じだ。だからこのごろは避難という感じでオレの元に来ることが多くなつた。でもまあそんな中でも楽しく過ごすことができている

時は過ぎお昼。お昼は学園の敷地内ならばどこでも行けることができるため小・中高を行き来することも可能となる。そのためオレ達は生徒会や委員会の活動がないときはみんなが集まってお昼を食べることにしている。今日は幸いにもみんな参加できた

蓮夜「いただきます」

『いただきます！』

お昼は今日の朝にオレとレムで用意したものだ。三段の重箱を四つ用意したのだが

特に食べ盛りが多いので足りなくなるときもある。そしてお昼ではいつも小学生組の誰かがあぐらをかいているオレの上に座ることになっているらしい。今日は犬千代の日らしい

蓮夜「犬千代。その被り物取らないか？前見づらいんだけど…」

犬千代「蓮夜なら大丈夫」

蓮夜「なんの根拠だよ」

オレの目の前には犬千代の後頭部があるわけではなく犬千代が被っているトラの被り物の上部分がある。だから前がよく見えないから食べづらいし左手は犬千代の頭にあるためどうしようもできない

深雪「なら蓮夜さん。どうぞ」

どうやって食べるか悩んでいたところに深雪が箸で搦んだおかずをオレの口元へ持ってきてくれた。オレは「サンキュ」と言ってそれをありがたく頂戴した

『っ！』

蓮夜「ありがとう深雪」

深雪「い、いえ／＼／＼」

深雪は肌が白から赤くなるとすぐわかるな。どうしたんだ？

カナリア「ユツキーだけズルい！蓮ちゃん！あたしも、はいあーん！」

ユウキ「カナちゃんもズルいよ！蓮夜！ボクのもボクのも！」

クロメ「蓮夜、はい」

カナリアに続いてユウキとクロメもおかずをくれる。他のみんな（達也と十六夜以外）もこつちにおかずを差し出してきた。みんな優しいな。でも囲まれ過ぎて公開処刑みたいだ

蓮夜「そういえばみんな今日委員会あるのか？」

達也「オレはあるな」

深雪「私もあります」

雪菜「同じくです」

カナリア「私はないよー」

この学園では特に委員会や部活に入らなければいけないという規則があるわけでもないから入るか入らないかは本人の自由だ。しかし達也と深雪、雪菜は半ば強制的に入らされたと本人達は語る。深雪は生徒会に、達也と雪菜はそれぞれ中等部、高等部の風紀委員会に所属している。ちなみにカナリアは放送部に入っている

オレ達が入学当時は部活への勧誘がすごかった。達也や十六夜は見るからに運動ができてそうな体格をしているため引つ切り無しに運動部から「入ってくれ！」と頼まれたそう。しかし二人共興味はなく、達也が風紀委員に入ったのだって帰りが一人になる

深雪を心配してのことという理由があるからだ

部活の勧誘はユウキ達にも同様で特にユウキは運動という運動の部活から勧誘が毎日のように続いたそうなの：しかしあるとき一緒にいたオレが「誰も寄るな」オーラを全開にしたらそれ以来ユウキへの勧誘はなくなつた。ユウキ本人は、「体を動かすのは好きだけど、それより蓮夜と一緒にいたい！」という理由で部活には入らなかつたらしい。クロメやシノアも同じ意見だつたらしい

ちなみに中等部の方では雪菜がなんと野球部、サッカー部、バスケット部の男子部員全員から『うちのマネージャーになつてください！』と土下座までされたそうだ。後でそれを聞いたオレが先生に迷惑だと直談判して、その対策が風紀委員に入ると言うことらしい。なんか納得いかないけど雪菜がそれでいいと言つたのでそれ以上は何も言わなかつた

蓮夜「オレは放課後用事があるから先帰つててくれ。タツマキはすまないが付き合つてくれ」

タツマキ「仕方ないわね！」

蓮夜「すまん。夜のことは帰ってから話し合おう」

『わかつた（わかりました）』

「（ちそうさまでした）」

『いちそうさまでした』

話もお昼も終わり、重箱をカバンにしまつてそれぞれが自分の教室に戻つていった。それから五時間目、六時間目と授業を受けて放課後になった。委員会があるやつ、部活があるやつ、そのまま帰宅するやつ、友達とどこかに行くやつと様々だろう。

さて、オレはタツマキを連れて学園内の敷地にある古めかしい旧校舎に來ている。目的地はこの中にある“オカルト研究部”というなんとも辛氣臭い部の部室だ。

コンコン

『どひどひ』

その部屋の扉をノックすると中から声がしたので扉を開けて中に入る。

蓮夜「失礼します」

タツマキ「お邪魔するわ」

「ようこそ。ここに座つてちょうだい。朱乃」

朱乃「はい部長」

部長と呼ばれた先輩が座つているソファアの向かい側に腰をかける。

中にいたのは〈学園の二大お姉様〉のお二人、リアス・グレモリー先輩と姫島 朱乃先輩だ。部長と呼ばれた一際目立つ紅い髪をしてソファアで足を組んで座つているグレモリーに言われてこちらは地面に付くのではというくらい長い黒髪を後ろで縛つて

ポニーテールにしている姫島先輩がお茶を淹れている

朱乃「粗茶ですが」

蓮夜「ありがとうございます」

タツマキ「相変わらずな部屋ね。ここは」

リアス「オカルト研究部だもの」

グレモリー先輩がいう通り中はオカルトチックな内装になっている。カーテンはドラキュラの映画に出てきそうなものだし、イスとか机なんかもそんな雰囲気醸し出している

というか姫島先輩が淹れてくれたお茶うまつ！まあレムには劣るけど

蓮夜「あまり時間もありませんし本題を話しますね。最近この辺に墮天使がうろろしてみたいのです」

リアス「そのようね。まったく腹立たしい。それよりその敬語やめてもらえないかしら。なんだか変な感じだわ」

蓮夜「そうですか？一応この学校の先輩と後輩という立場があるので」

リアス「ここなら他に誰もいないし大丈夫よ」

蓮夜「わかった。んで、その墮天使どうするんだ？もし忙しいならオレに「ダメよ」

はあ……」

リアス「ダメよ！この土地の所有者は私なの。なら私と私の眷属で片付けるのが筋よ。あなた達に許してるのは夜の巡回だけ」

所有者とか眷属とか所々引つかかる単語があるがそんなことより彼女の態度だ。そのおかげでタツマキの怒りのパラメーターが着々と上がっている

蓮夜「わかった。オレらはいつも通り巡回だけしとくことにする」

タツマキ「ちよつと蓮夜！」

蓮夜「いいから」

リアス「わかればいいのよ」

蓮夜「ただし」

リアス「まだ何か？」

蓮夜「ただしなリアス。もし被害者なんて出してみろ。そんなときは……」

さつき話してたときよりもドスの効いた声で殺気をも感じさせるオーラを放つ

蓮夜「覚悟しろよ？」

リアス、朱乃「っ!!」

二人はそのオーラを感じたのか急にすごい汗をかき始めた。オレはオーラを出すのをやめてドアに向かう

蓮夜「邪魔したな。行くぞ、タツマキ」



タツマキ「…わかったわよ」

未だ何の言葉も発せない二人を背に部屋を出た。そして校舎を出たところでタツマキがさつきのことについて言ってきた

タツマキ「なんでよ！ここは日本神話の土地なはずでしょ!?!あの方々から許可もらつてるのは蓮夜でしょ！」

蓮夜「あの自分勝手我儘お嬢様に何を言つても耳を貸さないさ」

タツマキ「だからって！」

蓮夜「わかつてるよ。あの調子じゃ必ず足下を掬われる。だからちゃんとオレも動くさ。じゃないと天照や伊邪那美さん達に顔向けできねえ」

タツマキ「…」

それでも納得の行かないような顔をするタツマキ。安心させるためにタツマキの頭を撫でる

蓮夜「そこまで考えてくれてありがとな」

タツマキ「ふん！」

ふん！って自分でいうとこタツマキの可愛いとこだな。納得はしてないけど理解はしてくれみたいなので一緒に帰宅した

―その夜―

夕食を終えて、オレは夜の巡回のことを話し合うため全員リビングに集まってもらった

蓮夜「今日の巡回のメンバー決めるよー」

オレ達は毎日決まった時間にこの街を巡回している。余程のことがない限り危ないことはないだろうが一人ではやらせず最低でも二人で回ることになっている。誰が行くかはこうして話し合って決める。ちなみに深雪、アンナ、カナリア、ユウキ、レムは巡回に参加しない。させていない

蓮夜「昨日は達也と黒歌、それに雪菜にやつてもらったし…今日はオレが行こうか」

クロメ「ならついて行く」

ジブリール「お伴します、マスター」

ティナ「私も行けます」

犬千代「犬千代も行く」

シノア「私も行けますよ」

黒歌「二日連続でも全然行けるにや！」

雪菜「わ、私も！」

このようになぜかオレが行くときに限ってみんな（達也、十六夜、タツマキ以外）やる気を出す。なぜだ？

蓮夜「今日は広く見たいからな。ティナとジブリール、頼めるか？」

ティナ「もちろんです！」

ジブリール「はいマスター！」

完全に巡回に行くテンションじゃないな。どつちかっていえば遊園地とかに行くときのテンションだ

クロメ「ぶー」

蓮夜「そう膨れるなって。また今度な」

クロメ「…わかった」

一緒に行けないからなのか不貞腐れるクロメの頭を撫でる。わかってくれたようなのでティナとジブリールを連れて家を出た

今日もいつもと何ら変わらない街並みが広がっている。特に変わった様子もないが念には念を入れる

蓮夜「ジブリールは魔力、光の力の感知をやってくれ」

ジブリール「かしこまりました」

蓮夜「オレとティナは目視による警戒だ。ティナの方が目がいいから頼りにしてる

「よ」

ティナ「はい！」

巡回を始めてから数分もしないうちにジブリールの感知に何か引つかかった

ジブリール「マスター この教会から墮天使の力を感知しました」

蓮夜「わかった。ありがとう」

ジブリール「いかがいたしますか？」

蓮夜「今日のところは帰ろう。明日からの巡回は必ずここを通るように伝えて、昼間

は黒歌に監視を頼もう」

ティナ「そうですね」

蓮夜「もしかしたらティナのビットに頼ることもあるかもしれない」

ティナ「大丈夫です」

蓮夜「ありがと。でもムリはするなよ？」

そう言いながらティナの頭を撫でる

ティナ「あ、ありがとございます…」

この暗さでもわかるくらいティナの顔が赤くなっていく

ジブリール「マスター… 私にもなにかないのですか？」

蓮夜「ああ、それはすまんかった。ほれ」

テイナと同じようにジブリールの頭も撫でてやる  
ジブリール「なんでしょう。とても落ち着きます」

蓮夜「それはよかった。じゃあ帰るぞ」

ここのごとは今日はとりあえず発見できただけで大丈夫だろう。そして他にも同じ  
ようなところがないか巡回を続ける

## 第3話

―次の日―

昨日の夜はあれから特に異常という異常はなくジブリールが墮天使の力を感知したところを今黒歌に監視をしてもらっている

今日も昨日と同様みんなで一緒にお昼を食べていると一匹の黒猫がやってきた。その猫はオレの方に向かって来て膝に乗るや否やその姿を変えた。正体は黒歌だった。まあわかってたけど

黒歌「蓮夜。あいつらに動きがあるにや」

蓮夜「わかった。引き続き頼むぞ」

黒歌の報告への感謝と監視の続行のお願いを含めて黒歌の頭を撫でる

黒歌「にゃ〜…了解にゃ♪」

ここまで気持ちよさそうにされるとしているこつちもいい気分になるな。オレには頭を撫でる才能があるかもしれない

ユウキ「クロちゃんだけズルいよ〜」

クロメ「蓮夜。私にも」

と黒歌のことを撫で続けているとユウキやクロメ、小学生組の甘えん坊達からも催促される。してやりたいのは山々なんだがもうすぐお昼終わるんだよな

蓮夜「わいい。Time is upつてやつだ。もうチャイム鳴るから全員教室に戻りな。黒歌は悪いが念のため放課後もう一回来てくれ」

黒歌「了解にゃ」

オレのあぐらから降りた黒歌は猫の姿に戻り茂みに入ってしまった。他のみんなも各々自分の行くべきところへ向かっていった

―放課後―

ユウキ「あれ、一誠先輩じゃない？」

蓮夜「そうみたいだな」

午後の眠くなる時間に行われるという地獄の授業も終わり、生徒会や委員会のないメンツで帰ろうと校門に向かっている。ちなみに頭の上には黒猫姿の黒歌が乗っている。そしてユウキの指差す方向に一誠がいた。しかも見知らぬ女の子と一緒にいる。服装からこの学園の子ではないだろう。しかも人間でもないみたいだ…

犬千代「蓮夜、あいつから墮天使の匂いがする」

蓮夜「やはりか」

黒歌『あいつ例の教会にいた墮天使にや』

全員一誠とその墮天使から目を離さず会話していると墮天使が一誠から離れて行く。一誠も墮天使に手を振ってから帰って行った

蓮夜「今日は何もないみたいだな。一先ず様子を見るか」

墮天使が一誠に接触してきたということは何かを企んでいると考えるべきだろう。なぜ一誠なのか、というのは何となくわかる。その原因の兆しを察しているからだ。監視を教会と一誠に絞るか

帰宅してからオレは全員をリビングに呼んだ。教会と一誠の監視を頼むためだ

蓮夜「さつきも話した通り墮天使の一人が一誠に接触した」

五人は黙ったままオレの方を見て聞いている

蓮夜「だから一誠の監視もやることにした。黒歌には引き続きオレらが学校に行っている間、教会の方を監視してもらいたい」

黒歌「わかったにや」

蓮夜「そんで一誠の方だが、その日その日でオレが決めるわ」

みんなは同時に頷く



蓮夜「深雪、達也、雪菜、カナリアは生徒会や委員会あるからムリしなくていい」  
達也以外の三人は申し訳なきような顔をするが納得してくれた

―また次の日―

いつも通りの時間にみんな登校し、高二メンツで教室に入るとなんか騒がしかった  
一誠「あつ！蓮夜！聞いてくれ！」

蓮夜「ど、どうした…？」

教室に入った途端一誠が駆け寄ってきた。と思つたら片腕を腰にあてもう片つぽの腕で顔を隠し何かを宣言しようとしている

一誠「聞いて驚け！なんと、俺に彼女ができたんだ！」

少しの沈黙……

十六夜「おいおい一誠。とうとう夢と現実の区別もできなくなつたか？」

一誠「夢じゃねえ！本当にできたんだよ！」

オレもそうだが十六夜も信じていないようだ

達也「そうか」

達也は元よりそんなことに興味を持つわけがない

深雪「お、おめでとうございます…」

カナリア「あはは…おめでとう…」

深雪とカナリアは一応声はかけるが信じていないみたいでどんなリアクションを取ればいいのかわからなくなっている。カナリアなんていつもの元気な笑顔じゃなく所謂苦笑になっちゃった

だが少し気になることもあった

蓮夜「一誠。もしその彼女が現実だったとしよう」

一誠「本物だつて言ってるんだろ！」

蓮夜「そいつはどんなやつだ？容姿は？」

一誠「おっ！聞きたいか!?あつ！俺の彼女だからな！奪ったりすんなよ!？」

蓮夜「しねえよ」

冗談でもそういうのやめて。深雪とカナリアの視線痛いから…刺されそうだから…

一誠「ならいいけどよ。容姿ってことは見た目ってことだよな。なんというか、OL系美人だ！」

蓮夜「いつから付き合ってるんだ？」

一誠「ん？昨日だけど」

蓮夜「どこで告白した？」

一誠「オレからじゃねえよ。向こうから告白されたんだ」

蓮夜「どっちでもいい。どこでだ？」

一誠「何なんだよ!?!学校の校門だよ!文句あつか!」

ということは一誠のいう彼女というのは昨日学校の校門のところで告白したつてことか。そうなつたら昨日見たあいつで間違いないだろうな

十六夜「おい蓮夜、そいつは…」

蓮夜「ああ。間違いなく昨日のだろう」

達也「昨日言つてたやつか？」

蓮夜「そうだ」

一誠から離れつつ小声で十六夜と達也と情報を共有する。告白して付き合つたということは必ず一誠をどこかに連れ出すはずだ。そのときに何かをするに違いない。一誠への監視をより強化しないと

そんなわけで一時間目が終わった後オレは今日の一誠の監視を頼むためにとある一年の教室に来た。階段を降りて一年生のフロアに来た途端一年生からの視線が集まつてきた。友達同士で抱き合いながらこつちを見る女子、持っている教科書で顔を隠して覗くようにこつちを見る女子

そしてユウキとクロメ、シノアが在籍しているクラスについて中を覗いていると

「キヤー——!!! 蓮夜様——!!!」

「えっ! ホントだ!! 蓮夜お兄様——!!!」

蓮夜「え、あ、こんにちは」

クラス内の女の子一人がオレに気づいて声を上げるとそれが波の波紋のようにクラス全体に渡り、さらに他クラスからも来ているのだから廊下にもすんごい数の女子現れた

ユウキ「蓮夜——!!」

蓮夜「おつと。ユウキ、危ないだろ」

ユウキ「えへへ。でもちゃんと受け止めてくれるでしょ?」

蓮夜「まあな」

そんなお祭りごとのような騒ぎになった中からこつちに走って飛び込んで来たのはユウキだ。シノアもその後から手を後ろで組んでゆつくりと来た

シノア「蓮夜さんは人気者ですね」

蓮夜「そうか?」

シノア「この歓声を聞いてわからないんですか?」

蓮夜「まあこの階に二年が来ることが珍しいもんな」

シノア「はあ」

なんか溜め息吐かれた。てかユウキはいつまで引っ付いてるんだ？ちゃんとしよしはしてるけど。あ、時間ねえんだ

蓮夜「クロメは？」

シノア「あそこで寝てます。授業間の休憩はほとんどあんな感じですよ」

蓮夜「そっか。シノアとクロメに用があるんだけどな」

ユウキ「ええ。ボクには」

蓮夜「ユウキにはただ会いたかっただけだ」

ユウキ「そっか」

ととつ…早く要件を伝えなければ

蓮夜「ユウキ、ちよつとごめんな」

ユウキには悪いが少し離れてもらいたいクロメの机の前にしやがむ

蓮夜「おーい、クロメー」

クロメ「…」

蓮夜「起きてんのわかってんぞ」

クロメ「ちえー」

実はオレが教室に来たときから起きてはいた。オレの気配でも感じたかな。起きてくればいいのに

蓮夜「シノアとクロメに頼みがあるんだ。今日の放課後一誠の監視をお願いしたい」  
クロメ「いいけど。ご褒美ないとやる気でない」

シノア「そうですね」

蓮夜「お前らは…わかった、何がいい？」

クロメ「今日一緒に寝る」

シノア「私もそれがいいです」

蓮夜「わかった。オレは今夜クロメとシノアと一緒に寝る。これでいいか？」

クロメ「オーケー」

シノア「ふふっ、蓮夜さんたらだいたーん」

ユウキ「蓮夜ー、ボクはー？」

蓮夜「また今度な」

ユウキ「えー…」

要件も終えて最後に三人の頭をポンポンポンとしてから「お邪魔しました」と言つて  
クラスを出て自分のクラスへ戻った

ー放課後ー

オレはリアスに墮天使の行動を報告するためオカルト研究部の部室を訪れた  
コンコン

蓮夜「リアス。オレだ」

『入っていいわよ』

蓮夜「失礼するぞ。お、今日は全員揃ってるんだな」

中に入る許可をもらったのでドアを開けて中に入る。そこにはリアスと朱乃以外にもこの前はいなかったへ学園の三大イケメンの一人である二年の木場祐斗とへ学園の五大マスコツトの一人である一年の塔城小猫の二人もいた

蓮夜「小猫ー。久しぶりだな」

小猫「はい。お久しぶりです、蓮夜兄様」

小猫は黒歌の妹であるためちよくちよくうちに来ることもあった。そんな感じに交流しているうちにオレのことを兄様と呼んで親しんでくれるようになった

リアス「今日は何の用かしら」

蓮夜「そう急かすなよ。まあいいけど。墮天使が動いたぞ。この学園の二年、兵藤一誠ってやつに接触している。それに近くの教会で何やら企んでいるようだ」

リアス「そう。報告感謝するわ。あとは私達がやるわ。手は出さないでちょうだい」

蓮夜「わかつてる。だがこの前言ったこと、忘れんなよ……？」

リアス「わ、わかってるわよ…」

蓮夜「ならいい。じゃあオレはこれで。小猫またな。祐斗も」

小猫「はい」

祐斗「またね、蓮夜くん」

今のところ保有している情報を報告してリアスの反応から不安を抱えるも小猫や祐斗に一言声をかけて部屋をあとする

この日は何もなかったらしくただ単にクロメとシノアと寝るだけとなった

ー休日ー

今日は例の墮天使とデートするらしい一誠の後をつけている。どうにもあの無責任で自分勝手なリアスのことは信用できなく、許可されていないがこっちも独断で監視を続行している。一誠のデートのことをどうやって知り得たかというところクラスの全員に一誠が自慢して回っていたからだ

さて、今オレはユウキとレムと一緒に尾行している最中…なはずなんだが、始めたときからユウキとレムはずっとオレと腕を組んでいる。しかも尾行という神経を使っているはずなんだがすごく楽しそうだ



蓮夜「ユウキ、レム…：これ尾行なんだよな？」

レム「そうですねよ♪」

ユウキ「蓮夜、いきなりどうしたの？♪」

蓮夜「なら腕を組む必要はないんじゃないかな…：」

ユウキ「ダメだよ。ばれないようにするためなんだから♪」

レム「そうですねよ。カモフラージュですよ、カモフラージュ♪」

蓮夜「それにしてもなんか楽しそうだな」

レム「そんなことないですよ♪」

ユウキ「そうですね♪」

言っていることと表情や行動があつていないなぜかルンルン気分の二人を連れて尾行を続けていく

一誠達の昼間のデートは順調であつた。店に入つては店内を一通り見て出る。また気になる店があれば入つて店内を見る。これの繰り返しだ。お昼も済ましゲーセンにも入つていった。正体を知らなければ普通のカップルに見えた

尾行を続けている中でなぜかユウキとレムもショッピングを楽しはじめ、服を持ってきてはどつちがいいか聞いてきた。何度オレ達の目的を確認したことが

そしてときは過ぎて空は赤くなり夕方になった。二人がとある公園に入つていった

ため木の陰から様子をうかがっていると、墮天使は一度一誠から少し離れていき遂に正体を現した。

墮天使「ねえ一誠くん」

一誠「なんだい？夕麻ちゃん」

夕麻「死んでくれないかな」

一誠「……えっ……ごめん、もう一回言ってくれないかな……」

夕麻「死んでくれないかな」

墮天使は再度そう言つて光の槍を生成し一誠に投げようとする

蓮夜「ユウキ！」

ユウキ「うん！」

オレがユウキの名前を呼んだだけでユウキは一つ返事をして目にも留まらぬ物凄い速さで飛び出した。そして一誠の前でいつの間にか腰に添えられていた剣を抜き墮天使が放つた槍を弾く

一誠「っ！」

墮天使「誰!？」

一誠「……ユウキ、ちゃん……?」

ユウキ「先輩はそこを動かないでね」

墮天使「あなたは一体何者なの!？」

一誠に声をかけつつ墮天使を睨みつけるユウキにいきなりの乱入で驚きを隠せていない墮天使。そこへオレとレムも出て行く

蓮夜「ようクソカラス。お前こんなところで何しよってんだ？」

一誠「れ、蓮夜…?」

蓮夜「悪りいな、一誠。もう少し待ってくれ。すぐ終わらす」

墮天使「この高貴な存在であるこの私をクソカラスなどと、なんて無礼な!死になさい!」

墮天使はオレが言ったことが気に触ったのかまたも光の槍を投げてきた。オレはそれを掴んで握り潰す

墮天使「なっ!」

蓮夜「こんなもんか」

「それまでよ」

オレが反撃に出ようと状態を下げて足に力を入れたところに空から声がした。そして声のした方からリアスが悪魔の羽を出し飛んできた

リアス「私はリアス・グレモリー。私の土地で何をしているのかしら」

墮天使「グレモリー家の者か…ここは引かせてもらうわ」

墮天使はそう言って敵であるはずのこちらに背を向けて去って行った。こちらを舐めきっているのか余程の無能なのか

一誠「リアス、先輩……え、その羽……」

蓮夜「一誠、そのことは明日説明する。もちろんオレのことも。だから今日のところは帰れ。ユウキ、レム、送ってやってくれ」

ユウキ「わかったー」

レム「わかりました」

混乱している一誠を二人に頼み三人は公園を出て行った。オレはリアスの方に向き直り言い放つ

蓮夜「おい、リアス」

リアス「っ!!」

蓮夜「オレは言ったはずだぞ、覚悟しておけと……それなのにお前はさっきまで何をしていた……?一誠が殺されそうになったのに傍観しているだけだったな。見つからないでもないとも思ったか……?」

リアス「っ!!」

オレのいつもよりも強めな口調と怒りの表情と雰囲気明らかに明らかに怯えるリアス

蓮夜「何を企んでいる。まさかとは思うが無理矢理眷属にする、とか考えてないだろ

うな」

リアス「つ!!!」

リアスの明らかな凶星の反応にさらに口調を強める

蓮夜「お前いい加減にしろよ…いくらお前が”魔王”の妹だからってそんなことしてみろ…オレがお前を消す…」

リアスはオレの放つ殺気に耐えられなくなったのか地面にへたり込んだ。そしてオレを見上げながらプルプルと震えている

蓮夜「明日の放課後一誠に説明する。お前が使いを出せ」

オレはそう言い残して転移魔法で家に移動した

シユン

雪菜「え…」

蓮夜「へっ?」

転移は完了して家には帰って来た。しかしキレていたためか細かい指定をせずに転移してしまったため家の中の自分の部屋ではなく、なんと脱衣所に転移してしまった。しかもタイミングの悪いことに雪菜が着替え中のごとくに移動して来てしまった。なので今オレの目の前には服は着ておらず下着に手をかけている雪菜が呆然とオレの方を見ている

雪菜は段々と顔を赤くしていき眉間に皺をよせ目には涙を浮かべ始める

雪菜「せん、ばい…何かを言い残すことはありませんか…?」

蓮夜「いや、えつと…綺麗だぞ?」

雪菜「っく!先輩の、バカーーーーーー!!!」

蓮夜「グハッ!!」

雪菜の渾身の鉄拳を腹に喰らい、ドアを破壊して廊下の壁まで吹っ飛ばされる。雪菜の悲鳴を聞きつけたみんなが駆けつけた

雪菜「先輩のおバカ!変態!」

蓮夜「わ、悪かったよ…」

シノア「ははくん。覗きとは大胆ですね」

黒歌「私に言ってくればいつでも見せてあげるにやん♪」

犬千代「胸なんてただの脂肪の塊…」

とこんな感じで我が家の団欒(?)のおかげでさつきまでのシリアスがどっかへ消えてしまった

## 第4話

―次の日の放課後―

前日の騒動から一日が経った放課後、オレは今オカルト研究部の部室に来ている。昼間一誠が松田や元浜に昨日のあの墮天使のことを聞いていたが二人とも覚えている様子はなかった

昨日のことがあつたからかオレとの会話は少しぎこちなかつた気がした

今祐斗が一誠を呼びに行っているらしい。オレはソファーに座つて朱乃のお茶を頂いてる。朱乃のお茶は美味しいな。レムの方が美味いがな（二回目）

リアスはというとなぜかシャワーを浴びている。というかなんで部室にシャワー室があるんだよ。朱乃曰く昨日リアスが帰るの遅くなつてシャワーを浴びる時間がなかつたらしい。そうこうしていくうちに祐斗が一誠を連れてきた

祐斗「失礼します、部長」

一誠「し、失礼します」

蓮夜「よう一誠」

一誠「お、おつす。つておーーーい!!!」

蓮夜「？」

昼間のよそよそしい態度で接していたのが嘘のように大声でツツコミをしてきた。  
ボケてないのに

一誠「お前何してんだよ！」

蓮夜「ん？何が？」

一誠「何が？じゃねえよ！なんて羨ましいことをーーー!!!」

蓮夜「ん？」

一誠「とぼけんな！何で学園の五大マスコットの一人の塔城小猫ちゃんを膝に乗せてんだ!!」

一誠のいう通り今オレの膝の上には小猫が乗っついてお菓子を食べている。それが一誠には気に食わなかったらしい

蓮夜「これは小猫から、だよな？」

小猫「はい」

一誠「なん、だと…」

それを聞いた一誠はどんどん崩れていきorzの体制になった。だが一誠はすぐに何かに気づいたのか勢いよく顔だけを上げた。するとニヤけて鼻の下を伸ばした。おそらくシャワーの音とその影だろう。まったくこいつは…



小猫「いやらしい顔」

小猫もそんな一誠の顔をチラッと見てそう呟く。それと同時にぐらいのタイミングでリアスがバスローブ姿で出てきた

リアス「ごめんなさいね。昨日お風呂に入れなかったから」

蓮夜「いいから早く着替えてこい」

リアス「わ、わかったわ…」

リアスは昨日のことでまだオレに怯えているのか、オレが声をかけると体をビクツとさせる

朱乃「粗茶ですが」

一誠「うおー！！こっちはリアス先輩と並ぶ学園の二大お姉様の一人である姫島朱乃先輩!!」

一誠は小猫同様学園の人気者に会えて興奮している様子。テンションが高い。オレも朱乃からおかわりをもらう。するとリアスが制服に着替えた姿で戻ってきた

リアス「お待たせしたわね。私達オカルト研究部はあなたを歓迎するわ」

一誠「はあ…」

リアス「でもオカルト研究部とは仮の姿なの。私の趣味みたいなものよ」

一誠「は？それはどういう…」

一誠はリアスの言っていることを理解できていない様子。お茶うめえ

リアス「単刀直入に言うわ。私達は、“悪魔”なの」

一誠「…はい？」

悪魔の羽を出しながら自分を悪魔だと暴露するリアス。いきなりの私達悪魔ですよ  
宣言で頭の上の？マークを増やす一誠

リアス「そしてあなたを襲った”天野夕麻”」

一誠「っ！やめてください…その話をするのは…その、不愉快なんで…」

蓮夜「一誠、受け入れろ。天野夕麻は実際に実在していた」

一誠「蓮夜…じゃあ本当にオレは襲われた、ってことか…」

リアス「そうよ兵藤一誠くん。イツセーって呼ばせてもらうわね」

蓮夜「残念だが事実だ」

一誠「そうか。今の話とこの前あの場にいたってことは、蓮夜も…」

蓮夜「ああ…オレも悪魔だ」

一誠「そうか…」

オレもリアスと同じく悪魔の羽を一瞬出してまた引つ込める

蓮夜も「それでだ一誠。お前にはこれから生きていくのに二つの選択肢がある。一つ、オレらの記憶をなくして今まで通りの生活に戻る。もう一つは……」

リアス「私の眷属になって悪魔として生きることよ」

一誠はリアスのその言葉に目を見開いて驚く。おそらくいきなりのことでの驚きが半分。あとの半分は眷属ってなに？ っていうのだな。あいつバカで頭ん中ピンク色な世界で広がってるからな

リアス「あなたには神器が眠っているわ」

一誠「？ 神器って何ですか？」

リアス「あなたの中にある物騒なものよ。あなたはそれのせいで殺されかけた」

一誠「そう言えば夕麻ちゃん、〃セ……〃 なんとかって言ってたっけ」

蓮夜「〃セイクリッド・ギア〃」

朱乃「特定の人物に宿る力。歴史上に残る人物はそのほとんどが所有していたとされてますわ」

蓮夜「時には悪魔や墮天使をも脅かすほどの力を持ったものも存在する」

オレとの朱乃が神器へセイクリッド・ギアについて簡単に説明する

リアス「イツセー、腕を上にかざしてちょうだい」

一誠「えっ、こうですか？」

一誠はリアスの指示通り左腕を上には伸ばす

リアス「目を瞑って一番強いものを何か思い浮かべてちょうだい？」

一誠「きゅ、急にそんなこと言われても」

リアス「集中して、イツセー」

一誠「はい！集中、集中！」

リアス「そうよ、イツセー。集中するの」

一誠「集中、集中！」

オレは見逃さなかった。一度一誠が目を瞑って集中した後目を開けてリアスのスカートの中を見たことに。まあリアスもスカートの中が見えるように机に座って膝を抱えてるのも悪い。一誠は集中と声に出しているものの何度も目を少し開いてはリアスのスカートの中を見る。そのため発する言葉とは裏腹に全く集中できていな。この助平が！

一誠「これ以上は無理っす！」

リアス「いいわ。まだ難しいみたいね」

そりゃあ集中できてないからな

一誠「でもやっぱ何かの間違いなんじゃ…」

蓮夜「墮天使が一誠の中のものに危険を感じて殺しかかったのはおそらくホントだろ

う。一誠には悪いがオレはあの夕麻って女が墮天使で一誠に近づいて来た理由もすぐに察した。だからあのときお前を助けることができた」

一誠「そう、だったのか…」

リアス「さてイツセー。あなたはどうするのかしら？記憶を消す？それとも私の眷属になる？」

一誠「オレは…」

蓮夜「焦らなくていい。今日中に決めるにはことが大きすぎる。また改めし「悪魔になればハーレムも夢じゃないわよ？」おまつ！」

一誠「ま、マジっすか!？」

リアス「ええ。努力次第だけどね」

一誠「そ、それはオレの好きなことをできるってことですか!？」

リアス「そうよ」

一誠「ぜひ！眷属にしてください！」

蓮夜「ちよつ！ちよつと待て一誠！眷属になるってことは人間をやめるってことだぞ!？そんな簡単に決めていいのか!？」

一誠「いいんだ!!オレの夢が叶うなら悪魔にでも何でもなつてやらあ！」

蓮夜「はあ…このバカ…」

オレは一誠のアホさに呆れ頭を抱える

一誠の決断でリアスは自分の持つ駒をかぎす。しかし一個では転生できず、二個、三個とかざしていき結局八個でようやく転生が完了した。はあ…やっちゃまった…

一誠「こ、これでオレも悪魔になったんすか…?」

リアス「ええ。改めて歓迎するわ、兵藤一誠」

リアスはもう一度悪魔の羽を出しそれに呼応するように一誠にも羽が生える  
リアス「私の下僕として頑張るのよ」

一誠「は、はい！」

蓮夜「おい、リアス…」

オレは今のリアスのある言葉を聞いて気分が悪くなる

蓮夜「オレの前で眷属である者を下僕呼ばわりするなど言つたはずだ…」

『っ！』

リアス含め部屋にいる全員の表情が強張り汗もかき始めた。オレは怒りを鎮め小猫の頭を優しく撫でる

蓮夜「小猫、悪りいな」

小猫「い、いえ」

そうは言いつつまだ震えている。やはり怖がらせてしまったらしい

一誠「お、お前もんだよ…」

蓮夜「ああ、悪いな」

一誠「そう言えば、お前も悪魔ならお前も眷属っているのか？」

蓮夜「ああ。だがオレと一緒にいてくれるのは眷属じゃない。家族だ。いいか？」

一誠「あ、ああ…」

蓮夜「ならいい。紹介するよ。みんな…」

オレがそう呟いた瞬間にオレの座っているソファアの後ろに魔法陣が出現しそこからみんなが姿を現した

蓮夜「ここにいるのがオレの大切な家族だ。まあほとんどはお前も知ってるだろ」

一誠「な、なんだってー!!小猫ちゃん以外の学園の五大マスコットのユウキちゃん、クロメちゃん、犬千代ちゃん、タツマキ先輩がだとー!!」

ユウキ「あ、先輩悪魔になっちゃったんだ。まあよろしくね」

クロメ「頑張れば」

犬千代「小猫、それちようだい」

タツマキ「こんな弱そうなやつが私達と同じ悪魔だなんて!不愉快!」

蓮夜「こら、タツマキ」

満面の笑みであいさつするユウキと端から興味なさそうに振る舞い小猫が食べてい

るお菓子の方につられるクロメと犬千代。そして口悪く今日もツンツンしているタツマキ

一誠「それに学園の二大清楚お嬢様の司波さんと雪菜ちゃんまで!!」

深雪「こんにちは、兵藤くん」

雪菜「どうもです、兵藤先輩」

礼儀正しい軽くお辞儀をしてあいさつをする二人

一誠「こっちは学園の悪戯っ子美少女のシノアちゃん!!」

シノア「どうも」

何とも素っ気ない。これはあいさつと言えるのか？

一誠「それに我らが元氣ハツラツお姉さんもカナリアちゃん!」

カナリア「やつほー、兵藤くん」

学園内で呼ばれている名前通りの元氣いっぱいな表情で軽くあいさつするカナリア

一誠「それから学園の美少女妹のアンナちゃん、ティナちゃん、レムちゃんだトー

!!!

アンナ「…」

ティナ「テ、ティナ・スプラウトです…」

レム「よろしくお願ひします」



一誠なんて眼中に入らないかの如く無言でオレの膝の上に座って自分でオレの左手を自分の頭に乗せるアンナと緊張しているティナ。それに深雪と雪菜同様行儀よくお辞儀するレム

一誠「達也と十六夜もそうなのか？」

達也「ああ」

十六夜「まあな。へえ」

深雪に手を出すなよと言いたげな顔で一誠を睨む達也と一誠の持っている神器に興味を持ったのか不敵な笑いをする十六夜

一誠「うおー！その他にも名前も初めて見る美女が二人も!!!」

ジブリール「私はジブリールと申します。以後お見知り置きを」

黒歌「白音ー!!」

小猫「姉様！」

自分の名前を名乗るジブリールと小猫にジャンピングハグを食らわす黒歌。小猫はまだオレの膝の上にいるわけで勢いよく飛びついてきた黒歌を受け止めるのは実質オレな訳で…

蓮夜「ゴホッ！」

小猫「兄様！」

黒歌「あ、ごめんだにや」

一誠「ね、姉様？」

蓮夜「ああ…黒歌は小猫の實の姉なんだ…」

一誠「そうなのか…つて！お前こんな美女、美少女侍らせやがって!!!なんて…なんて羨ましいんだ!!」

今日一番の大声をあげいきなり血の涙を流す一誠。さすがのオレでもそれには引いた…

朱乃「あらあら。これはお茶を入れなおさなければいけませんね」

蓮夜「あ、それならレムも手伝ってやってくれ。レムのお茶も飲みたい」

レム「っ！わかりました！すぐ淹れますね♪」

蓮夜「頼む」

レムと朱乃は奥へ入っていった。ていうか一気に騒がしくなったな

ユウキ「アンナと小猫だけズルいよ」

クロメ「鼻根はよくないと思う」

犬千代「…ズルい」

テイナ「お兄さん…」

いつの間にか周りを囲まれていた

蓮夜「そんなこと言われてもなあ。オレの膝は二つしかないからな」

と言うと『じゃあじゃんけんで決めよう!』となつて長くなりそうだ

蓮夜「達也達、もしあれだったら先帰つてもいいぞ?」

深雪「いいえ。お伴します…」

雪菜「先輩。そんなに私達がいたら迷惑ですか…?」

蓮夜「いや、そんなことは…」

何でだろう…二人とも怒つてる…深雪なんて魔法発動して部屋の気温どんどん下がってるからね…

蓮夜「悪りいリアス。迷惑になりそうだからオレ達は帰るよ」

リアス「え、ええ…わかったわ」

小猫とアンナに降りてもらつてオレも立ち上がりレムを呼ぶ

蓮夜「レムー」

レム『はい?』

蓮夜「帰ることにしたからお茶は帰ってから淹れてもらえないか?」

レム「わかりました♪」

蓮夜「悪いな」

レム「いえ。蓮夜くんのお世話ができるならレムはどこでも構いません♪」

蓮夜「ん、ありがと」

オレはなんていい家族を持ったのだろう。無意識にレムの頭を撫でてしまう。てか一誠はまだ泣いてるのか

蓮夜「じゃあ帰るぞ。ジブリール」

ジブリール「かしこまりました」

オレ達の足元に魔法陣が形成される

蓮夜「じゃあなんかあつたらまた連絡する。小猫、またな」

小猫「はい」

黒歌「白音、またにゃー」

オレ達は転移し目の前がうちのリビングの風景に変わった

それからは一誠が悪魔になった経緯をみんなに話すとみんなの一誠への評価が大分下がった

ー次の日ー

学校に行つて一誠が悪魔になっての初日はどうだったか聞いてみると、小猫の代わりにお得意様のところへ奉仕に行こうとしたところリアスの魔法陣では転移できなかつ

たらしい。まあまだ悪魔になりたてだから魔力が足らなかつたのだろう。だから深夜の町を自転車で移動したらしい

そして学校も終わって今は夜だ。オレは今犬千代とタツマキと一緒に町を巡回している最中だ。犬千代は二つ返事について来てくれたがタツマキはこんな地味な仕事はイヤらしく不満八割のところをお願いして来てもらった

巡回を続けている中である廃工場から悪魔の気配を感じて足を止める。タツマキは実際能力で浮いてるから地面に足は付いていないんだけども…ってそんなことは今はどうでもいい

犬千代「蓮夜、悪魔の匂い。しかもはぐれ」

蓮夜「そうか、わかった。行こう」

タツマキ「仕方ないわねー」

蓮夜「いいから行くぞ」

タツマキ「何よ！ついて行ってあげるって行ってるでしょ！ぷいっ！」

ぷいっ！で自分で言ってるよこの子…そんなタツマキと犬千代を連れてその廃工場の中へ入っていく。すると中から声が聞こえた

「美味しそうな匂いがする。甘いのかな？苦いのかな？」

蓮夜「はぐれ悪魔の…えっと、バインダーだっけ？」

犬千代「バイザー」

蓮夜「そうだったけ？」

タツマキ「どっちでもいいわよ！はぐれならもうやっちゃっていいんでしょ!!」

蓮夜「ああ。ならタツマキ頼むわ。犬千代もそれでいいか？」

犬千代「うん」

戦闘の方はタツマキに任せオレはそこら辺に腰掛け犬千代はオレの膝の上に座る。膝の上ってそんな人気なのか？ブーム到来か？

タツマキ「ふん！一瞬で片付けてやるわよ」

バイザー「黙れ小娘！お前も真つ赤n「誰が小娘よ！」…」

最後まで話させてあげてー。てかそんなことで怒るなよ

バイザーはタツマキの態度で頭に血が上ったのかタツマキめがけて突っ込もうとする、がでしなかつた。なぜならタツマキが能力で持ち上げた瓦礫の数々が自分に向かって落ちてきたからだ

バイザー「ぎやあああああ!!!」

バイザーが瓦礫の下敷きとなり最後の悲鳴から何も聞こえなくなった。呆気なさすぎ。一分も経ってないぞ。タツマキは手応えがなさすぎて不満気な顔をして戻ってきた

蓮夜「お疲れさん」

タツマキ「弱すぎ！もつと強いやつはないの!？」

蓮夜「いやいや：お前より強いやつはなんてそうそういないだろ」

犬千代「蓮夜なら勝てる」

蓮夜「ん？まあまだ負ける気はないな」

タツマキ「そのうち倒してやるんだから！」

蓮夜「ああ、期待してる」

タツマキ「ふん！」

だからふん！とか自分で言うものか？可愛いからいいけど

さてやることも終わったし帰ろうかね、つてところに来訪者が現れた

リアス「はぐれ悪魔のバイザー！あなたを滅ぼしに：つてあら？」

それは自分の眷属を連れてやってきたリアスだった

一誠「あれ？蓮夜じゃん。こんなとこで何してんだ？」

蓮夜「巡回してたらはぐれ悪魔の気配を感じてな。様子を見にきたら襲われたから倒

した。死体はあの瓦礫の下だ」

タツマキ「弱すぎて話にならなかつたわよ」

リアス「ふざけないで！あなた達にそんなことを許した覚えはないわ！」

あん？何言ってるんだこいつ…

蓮夜「ふざけるな？ふざけてんのはお前の方じゃないのか？リアス。お前は町の管理者と言ったな？それなのに全く管理ができていない。被害が出てないから大丈夫とも思っていたのか？被害が出る前に解決するために動いていたのはオレ達だ。それなのにお前達はなんだ？何をしていった？一回でもオレ達がやってる町の巡回をやるうと思っただか？ないだろうな。ふざけるなよ？そんなんで管理ができるとも思っただのか？」

オレは怒りを含めながら言葉を察する。それに加えて殺気のオーラを飛ばす

蓮夜「オレ達がいなければ被害が出ていた件もいくつかあった。その例が一誠だ。だからオレ達はお前をここの管理者と認めない。事実この土地は日本神話の方々の領地だ。お前はその方々の許可を得ているのか…？」

リアス「そ、それは…」

蓮夜「取っていないだろうな」

犬千代「蓮夜は許可もらってる」

リアス「なん、ですって…」

蓮夜「このことを魔王に報告するなら勝手にしろ。お前の無能さが露見するだけだ。それにオレにはどうでもいいことだ。だがこの土地は正式に日本神話の方々からお願



いされた土地だ。これ以上勝手なことをするなら……」

オレはオーラを強くして続ける

蓮夜「たとえお前でも……潰すぞ……」

リアスと朱乃、祐斗は立っているのがやつとの状態で今にも倒れそうで青ざめた顔をしている。小猫は体を震わせ涙を浮かべている。一誠は吐きそうなのか口を押さえて蹲っている

蓮夜「リアス。自惚れるのも大概にしろ……」

オレはそこまで言つて殺気を消し涙を流している小猫の元まで歩み寄り頭に手を置く

蓮夜「ごめんな小猫。お前まで怖がらせるつもりはなかったんだがな……」

小猫「だい、じょうぶです……」

大丈夫ではなさそうだ。今日は黒歌と一緒にいてもらおうか。そうすれば少しは安心できるだろう

蓮夜「今起きている墮天使騒動もオレ達で片付ける。その間に自分は何をすべきかよく考えろ、リアス」

オレは去り際にそれだけ言い残し、犬千代とタツマキを連れて帰宅した

## 第5話

ーとある夜ー

はぐれ悪魔討伐から数日後、何やら墮天使が例の協会に集まってきたという情報を得た。それを聞いてちまちま殺つていくのはめんどくさいということで、今日一網打尽にすることにした。なぜ今日なのかという点と特に意味はない。強いて言えば墮天使の気配の数が増えなくなったからだ。なので今日ようやく教会で何やら企んでいる墮天使を掃討しようと思つている。今日は眷属みんなで行く。問題はないだろうし正直これぐらいのレベルならうちの連中誰でも1人で片付けられるしな。完全なオーバークルだ

蓮夜「みんな準備はいいか？」

オレはみんなに聞くとみんな頷く。それぞれ大丈夫なようだ

蓮夜「じゃあジブリール、頼む」

ジブリール「はいマスター」

ジブリールに例の教会までの転移をお願いする。ジブリールはオレの眷属の中で最

も魔力量が多い。もしかしたらオレよりも多いかもしれない。よってジブリールにかかれば100人でも1度で転移できる。実際にしたことはないがな

一瞬で教会に着くとそこには小猫と祐斗そして一誠がいた

蓮夜「お前らはこんなところで何をしている？リアスの指示か…？」

一誠「違う！これはオレの独断だ！部長は関係ねえ！」

蓮夜「そうか、まあ何でもいいが邪魔はするなよ？」

一誠「蓮夜頼む！オレも連れていってくれ！アジアを助きたい！」

蓮夜「アジア？誰だ？」

一誠「心優しい聖女さんだ」

蓮夜「聖女？この前十六夜が言ってたやつか？」

ちよつと遡つたある日、十六夜からとある家ではぐれ悪魔祓いと会つたと聞いた。そ

のときに一緒に聖女もいたと報告があつた

十六夜「ああ、あのときのやつか」

蓮夜「だが、一誠だけならともかく祐斗と小猫までいるなんてな。二人はどうして？」

小猫「先輩だけでは不安だったので…」

祐斗「一誠くんは仲間だからね。放つてはおけないさ。それに個人的にも墮天使や神

父は嫌いだね。恨んでるほどに…」

さつきまでの優しい祐斗の表情が一瞬だけ鋭くなった

蓮夜「まあ事情はわかった。その聖女さんはお前が助けてやれ、一誠。だがそれまではオレの指示以外の勝手な行動はやめてくれ。いいな？」

一誠「すまねえ。恩にきるぜ」

蓮夜「そんじやまあ、行きますか」

一誠「えっ、正面からでいいのかよ！」

蓮夜「あちらさんも気づいてるだろ。特に一誠は気配消せてないし」

一誠「そ、そうだったのか……」

蓮夜「まあ仕方ないさ。じゃあ達也は向こうにいる3匹よろしく」

達也「はあ……わかった、すぐ追いつく」

達也は森の方へ歩いて行つた。オレ達も協会に正面から堂々と侵入する。すると奥の方に一人の男がいた

「やあやあやあ。再会だねー、感動的だねー。おやあ？なんか増えてんじゃん」

一誠「フリード！」

フリード「俺的には同じ悪魔に二度会うことなんてないんすよ。俺、めちゃくちゃ強いんで。一度会ったら即これなもんで☆」

一誠がフリードと呼んだ男は何やら自慢げに話し始め親指を立てた手を首の端から

端に移動させる。首が落ちるようなときに使うジェスチャーだ

フリード「だからさあ、お前はムカつくんだよ。俺に恥かかせたからさあ!!!」

一誠「アーシアはどこだ!」

フリード「ああ、悪魔に魅入られたクソシスターならこの祭壇から通じてる地下祭儀状におりますですー。まあ行けたらですけどね」

蓮夜「ああ、前置きはもういいか?」

フリード「あん?」

蓮夜「話長いんだよ。早く帰りたいからそのけ」

フリード「へえ…この俺様に対してそんな態度取って、余程死にたいらしいですねえ?」

蓮夜「はあ…もういいや。十六夜よろしく」

十六夜「マジか。めんどくさ」

フリード「まったく…悪魔はうざいですねえ!」

十六夜「いいからやるならとっととかかかってこいよ」

フリード「なら、あなたからあの世に送ってやりますよ!!」

フリードはそう言いながら剣を取り出し十六夜に襲いかかる。が…

十六夜「しゃらくせー!」

フリード「グヘッ！」

十六夜のパンチが腹に炸裂。天井をぶち破りどこかに吹っ飛んでいった

蓮夜「相変わらず加減を知らないな」

十六夜「んだよ。あれでも加減したのわかってんだろうが」

一誠「マジかよ…」

一誠や祐斗は驚いているがもし十六夜が手加減しないで殴っていたらあいつの体は木っ端微塵になっていただろう

そしてフリードの言っていた祭壇をぶっ壊し、その下にあつた階段を降りていく。すると下には広間がありそこには墮天使がざっと五百ほどの群れがあつた

蓮夜「よくもまあここまで集まったな」

ジブリール「まさに烏合の集でございますね」

蓮夜「深雪、頼めるか？」

深雪「わかりました」

深雪は手に携帯のようなものを出し、同時に魔法を発動させその場の空気が一気に寒くなる

「うわあああ!!!何だこれは!!!」

墮天使の体が足からどンドン凍っていく

これは深雪の魔法の一つ「ニブルヘイム」領域内の物質を比熱、相（フェーズ）に関わらず均質に冷却する領域魔法。上級者にもなれば液体窒素すらも作り出すことができる

蓮夜「ジブリール…」

ジブリール「はいマスター」

ジブリールはオレの言いたいことを瞬時に理解し天撃、すなわち雷撃を一つ放ち凍らされた墮天使を木っ端微塵にした

蓮夜「深雪、ジブリールありがと」

オレは2人の頭を撫でてあげる

深雪「いえ、滅相もございません」

ジブリール「光荣です」

ユウキ「むう…：出番なかつた」

蓮夜「そうむくれるな。一対一ならユウキや雪菜の方が強いが、一対多なら深雪やジブリール、アンナの方が強いし効率的だ」

そう。騎士であるユウキや雪菜、それに剣を使うクロメや槍を使う犬千代は一対一になるとものすごく強い。だが今みたいに多数の敵を相手にする場合は全体攻撃ができる深雪達の方が有利となる。まあこれぐらいの雑魚ならユウキ達でも数分もあれば一

人でやれんだろうけど

そうこうしていると達也が追いついてきた。当然か達也には“あれ”があるからな

蓮夜「おう、達也。さすがに早いな」

達也「ああ」

一誠「お前の眷属のみんなすげーんだな…」

祐斗「僕も驚いた…」

二人は微笑を浮かべている

蓮夜「一誠、この奥にいるぞ」

一誠「っ！アーシア！」

アーシア「一誠さん！」

そこには十字架に手足を縛られている聖女と例の墮天使がいた

「どうしてここに!?!外のやつらは何をしている!」

蓮夜「そいつらならオレらがやっちまった」

「なんですつて!?!カラワナー!ミッテルト!ドーナシック!何をしてるの!?!早く来なさい!」

「い!」

蓮夜「誰を呼んでるか知らんがおそらくその三人は達也のおかげで粒子になつて

?」



「つ！使えないやつらね…まあいいわ　あとはこの子から神器を抜き取るだけ」

蓮夜「ティナ」

ティナ「はい！」

ティナはあらかじめ構えていたライフルで親玉の翼を撃ち抜いた

レイナーレ「ぎゃあああああああ!!!」

蓮夜「一誠、行け」

一誠「アーシアに手を出すなー！」

一誠は左腕に神器を召喚しそれでレイナーレを殴り飛ばした。あれは…やっぱりか

…

一誠「アーシア！」

アーシア「一誠さん！」

一誠「よかった」

蓮夜「さてクソ堕天使、なんか消える前に言い残すことはあるかい？」

レイナーレ「助けて一誠くん！私はあなたを本当に愛していたわ！」

一誠「もういい、蓮夜終わらせてくれ…」

蓮夜「あいよ」

達也「オレがやるか？」

蓮夜「いやいい、これはオレのけじめだ。我、神崎蓮夜が汝の枷を解き放つ。来い！  
五番目の眷獸、【獅子の黄金（レグルス・アウルム）】！」

オレが呪文を唱えたとそのは雷を纏った巨大な黄金の獅子がいた

レイナール「その力は……！」

蓮夜「やってくれ」

レイナールに向かって獅子は突進し跡形もなく消し去った

一誠「蓮夜、サンキューな。それにしてもお前ってヤバいんだな……」

蓮夜「礼なんていいさ。ってそれは褒めてんのか？まあそれよりその子が無事でよ  
かったな」

一誠「ああ。これも蓮夜達のおかげだ、ありがとう！」

一誠はオレに頭を下げてきた

蓮夜「頭を上げろ、一誠。ほら、お前んとこの部長のお出しましたぞ」

一誠「え……」

一誠が頭を上げたと同時に魔法陣が出現しそこからリアスと朱乃が姿を現した

リアス「イツセー！」

一誠「ぶ、部長！」

リアス「よかった……無事で……」

一誠「ええ。蓮夜達のおかげです」

リアスは現れてすぐイツセーに抱きつく。そして一誠に怪我がないことを確認し安堵する。オレはみんなに目で合図を出すとジブリアルが魔法陣を形成した

リアス「蓮夜！」

蓮夜「ん？」

リアス「来週、部室に来てちょうだい」

蓮夜「わかった」

オレはそれだけ言ってジブリアルの作った魔法陣に入り家に帰ってきた

クロメ「ねえ、今日全員で行く必要あった？私何もできなかったんだけど」

蓮夜「そうだな。悪かったな、こんなことに付き合わせて」

クロメ「いいよ。蓮夜のご飯で許してあげる」

カナリア「あ、それさんせーい！」

ユウキ「ボクも！」

蓮夜「わかったよ」

レム「では、お手伝いしますね」

深雪「私もお手伝いします」

雪菜「私もやります」

蓮夜「ありがと。じゃあできたら呼ぶから」

『はい』

みんなはそれぞれ自分の部屋に戻ったりリビングに残りゲームをするなどした。オレ達は仲良く料理をする。レムは昔から料理が得意だったが深雪と雪菜はそうでもなかった。特に雪菜は自分が使っている武器以外の刃物の使い方が全くなっていなかった。包丁なんて持たせようならそれはすんごいになったので、オレとレムで一から教えて今は一人でもある程度の料理はできるようになったらしい

まあそんなこんなで夕飯を食べ終え、明日に備えて就寝した。あ、明日土曜で学校休みだった

ー土曜ー

ユウキ「わー！蓮夜蓮夜！あっち行ってみようよ！」

蓮夜「勝手にどっか行くんじゃないやねえぞー。迷子になっても知らないからな」

オレは今アンナ、ティナ、犬千代、ユウキ、クロメ、黒歌を連れて動物園に来ている。なぜこうなったかと言うと、朝早くどっか連れてつてと起こされたからだ。全員を連れては来れないので今日の土曜と明日の日曜で人数を分けた。それで今日はこのメンツ

で動物園ということである

土曜ということでは園内には多くの人がはびこっている。その中をユウキははしやいでいて今にも迷子になりそうな勢いである。オレはというと犬千代を肩車し左をティナと右をアンナと手を繋いで歩いている。その横にはクロメと黒歌が並んで歩いている。側から見たら仲のいい兄妹にでも見えるのだろうか

今日はみんな私服できている。ユウキは黒いフリル付きのタンクトップに薄紫のノースリーブのフード付きのパーカーを着ていて下はデニムっぽいショートパンツを履いている。それに黒のニーソックスとパーカーと同じ色のスニーカーを合わせている。クロメはなぜか全身真っ黒のセーラー服に赤いリボン、黒のストッキングに靴もローファーとどこかの学生みたいな格好だ。でもこれが彼女にとっては私服らしい。ティナは深緑色のワンピースで裾と胸元にはフリルが付いている。足元は黒いハイソックスとブーツだ。犬千代はいつも通り黄色いTシャツと黒い短パン、それにトラの被り物をしている。アンナは赤と黒のフリル付きのワンピースに薄手で同じ色合いのフード付きのポンチョのようなものを羽織っている。黒歌もいつも通り黒い着物を着崩して肩はだけさせている。靴も下駄でカランカランと歩くたびに音を立てている。みんな可愛くてそれを伝えると一斉に顔を俯かせていた

それからはほとんどユウキの行きたいと言うところを回っていった。その間でティ

ナがフクロウと会話してる風に見えたり、黒歌のことを熱い眼差しで見てる黒豹がいたり、なかなかユニークな動物がいるらしかった。犬千代がトラの被り物をしているからなのか本物のトラに威嚇されたように感じたのは気のせいだろうか…

さて、回るに回って今は触れ合いコーナーに来ている。ここではウサギやモルモット、ヒヨコを直接抱っこしたり、ポニーに乗せてもらえる体験コースがあるなど様々なイベントがあるらしい

ーウサギ、モルモット組ー

ティナ「とても可愛いですね」

黒歌「モフモフだにゃ」

クロメ「黒歌も猫のときはこんな感じ」

蓮夜（オレのところにすごい集まってきたな）

ーポニー組ー

ユウキ「蓮夜ー！」ブンブン

犬千代（…馬刺し、食べたい…）

アンナ「…」

蓮夜（アンナが乗りたいなんて珍しいな）フリフリ

そんな久しぶりの遠足気分みんな満足したようでよかった

一日曜

深雪「お兄様もいらしたらよろしいのに」

蓮夜「あいつは仕事もしてるからな。忙しいんだろ」

雪菜「それよりも本当によろしかつたんですか？お金出してもらって」

蓮夜「いいんだよ。こんなときくらい男を立たせてくれ」

レム「さすが蓮夜くんです」

今日は水族館に来ている。メンツは深雪、雪菜、レム、ジブリアル、シノア、カナリアだ。メンツ的に静かな場所の方がいいかと思つてここにした。カナリアは昨日のメンツでもいけそうだけど

昨日の動物園ほどではないがここにも多くの人々が来客しているようだ。だが館内で空調も聞いているし静かなので昨日よりも落ち着いて回ることができそうだ

今日のみんなも私服で来ている。深雪は薄水色のロングシャツに水色のパンプス。雪菜は黄緑色の水玉キャミソールに白いパーカー、デニムのショートパンツに黒歌ニーソとちよつとかかとの上がった白い靴。ただそのパーカーはいつだかオレが貸してそのままパクられたものというのはオレしか知らないだろう。レムは上半身は白で下半

身は黒のほぼメイド服のようなワンピース。それに黒のニーソにローファーだ。ジブリールはいつもと変わらない。特に服を変える意味がわからないんだと。シノアは黒いシャツに赤のネクタイ、黒のスカートに白いスニーカーと合わせている。カナリアは白のニットのような素材のオフショルダーのトップスとブラウンのスカートに白いニーソに赤いスニーカー。みんなが通る道の男どもは全員彼女たちを目で追っていた。周りからの視線を感じながら館内を歩いて回っていた。ジブリールは見るもの全てが珍しいようで本では見たことがあるが現物でしかも動いているのを見るのは初めてだったらしく目をキラキラさせていた

しかし今日のメンツは気が使えすぎて逆にくつちがダメになりそうだ。喉が渇いたと思った瞬間レムが飲み物をくれたり、次は何のエリアだろうとマップを見る前に雪菜が「次は○○のエリアです」と教えてくれたり、トイレはどこだと探そうとすると深雪が教えてくれたりとなんとも優秀なメンツであった。オレはそんなみんなに嬉しいやら申し訳ないやらで：

ートンネル水槽ー

深雪「幻想的ですね」

レム「はい。綺麗です」

雪菜「下から見るとこんな感じなんです」



蓮夜（絵になるな）

ーイルカショーー

ジブリール「これから何をするのでございますか？」

カナリア「イルカさん達がいるんな技を見せてくれるんだよ！」

シノア「調教済みというわけです」

蓮夜（言い方…）

今日もみんな楽しんでくれたようでよかった

## 戦闘校舎のフェニックス

## 第6話

墮天使騒動から週が明けた月曜、オレ達が助けた聖女のアーシアさんが転校という形でオレ達のクラスにやってきた。しかもなんと“悪魔”になって。なぜそうなったか聞いてみたらまあ強制とか無理矢理ではなく自分から志願したというのでホッとした。もし無理矢理とかだったらあいづらを滅ぼしていた…てか聖女が悪魔って、人のこと言えないか。ジブリアル眷属にしちゃったし……

放課後になってオレは約束通りタツマキと一緒に旧校舎に向かっている。リアスからの話とは何でしょうね。どうせ行くところは一緒だからと一誠、祐斗、アーシアと一緒に向かっている

蓮夜「リアスに襲われた？」

タツマキ「ほんと変態ね。そんな妄想聞きたくないわよ」

一誠「ほ、本当なんですよ！今思い出すとなんか深刻そうな顔してた…」

蓮夜「深刻ね…まあリアスにもいろいろあんだろ」

一誠と一緒にいるからなのかさつきから眉間にシワがよりっぱなしのタツマキちゃん。しかも今の話を聞いてさらに不機嫌な顔をなつていく。とそのときタツマキが何かを感じたように目を開く

タツマキ「蓮夜」

蓮夜「ああ。部屋からだな」

オレも何かに気づき、もちろんその気配はタツマキの感じたものと同じであった。しかしその気配はオレ達の目的地から感じるのので別に何の行動もしなかった

旧校舎までの道をいつも通り通って部室の前に来たとき祐斗が何かに気づいた様子

祐斗「僕がここまで来て初めて気がつくなんて……」

祐斗の表情は強張っていた。一誠やアーシアは何のことかわからんとポカーンとしている

蓮夜「まだまだ鍛錬が足らなくて、祐斗」

オレはそう言つて部室の扉を開ける。そこには既にリアス、朱乃、小猫とそしてもう一人、銀髪のメイド姿の女性が立っていた。彼女、グレイフィア・ルキフグスはオレを見てハツとした表情になり跪こうとしたがオレは手を前に出しそれをやめさせる。それを見たりアスはオレに聞いてきた

リアス「あなたたち知り合いなの？」

蓮夜「あとで教えてやる。てか話ってなんだ？」

リアスの顔は深刻な感じになり、そしてあのプライドの高いリアスがオレに頭を下げ謝ってきた

リアス「これまでの身勝手な言動を謝るわ。ごめんなさい…あなたに言われてこれまでの自分の行動を思い返して見た…あなたの言う通り自分の地位をいいことに自惚れてた…だからこれからは正しく生きて行くと決めた…その一步としてまずはあなたに謝りたいと思つて今日来てもらったの……本当は私から行くのが筋なんだろうけど、あなたの家を知らなくて…」

その姿を見て最後の確認をするため頭を上げさせる

蓮夜「リアス。言葉でならどうとでも言える。だからお前はこれからどうしていくか教えてくれ」

リアス「これからは魔王の妹ではなく一人の上級悪魔として、そして悪魔として恥ずかしくない行動を取っていくわ！」

まだ漠然としていて根本はできてないようだがまあ言いたいことはわかった。だが本質には触れていないのはいただけない

蓮夜「それでも納得するやつはいるだろう。だがオレが知りたいのはもつと本質だ。

“この管理”はどうする…?”

リアス「っ！あなたに託そうと思うわ…」

蓮夜「それはお前の本音か…？」

リアス「ええ。悔しいけど私は適任ではなかったわ。それに私は一から踏み直したい。だからもうこの管理者とは名乗らないわ」

他のやつらからは責任放棄だの口だけだの言われるかもしれない。だがリアスも魔王の妹だ、自分の言ったことに責任を持ってないほど腐ってはいない。オレはもう大丈夫だろうと思った

蓮夜「オツケー合格だ。その心を絶対忘れるな！」

リアス「ええ」

蓮夜「ようやく仕事がひとつ終わった」

リアス「どういうこと？」

蓮夜「オレがここにきた目的の1つにお前を正すっていう目的があったんだ」

朱乃「そうでしたの」

蓮夜「だがもう大丈夫だろう。なあ？グレイファイア」

グレイファイア「はい。ありがとうございます」

リアス「え、どういうこと？」

蓮夜「その前にさっきの質問だがオレとグレイファイアは…」

オレとグレイファイアの関係話を話そうとすると床に魔法陣が展開されその模様を見て「……フェニックス」

祐斗がこう漏らした。おいおいあの焼き鳥が何でこんなところにくるんだ…？

魔法陣から光が発せられそれが収まると炎が巻き起こりそこから一人の男が現れた「ふう、人間界は久しぶりだ。会いに来たぜー、愛しのリアス」

男は不気味に笑いながらリアスを見る。リアスと何やら因縁があるようでリアスは男を睨みつける

一誠「誰だこいつ」

グレイファイア「この方は”ライザー・フェニックス”様。純血の上級悪魔でありフェニックス家の御三男様です」

一誠「フェニックス家？」

グレイファイア「そしてグレモリー家の次期当主の婿」

蓮夜「そういうことか…」

一誠「グレモリー家次期当主…ということとは！」

蓮夜「その通りだ一誠。リアスの婚約者だ」

一誠「婚約!?!」

まあ一誠ならそういう反応をするわな。グレモリー眷属のみんなも驚いた反応をし

ている

リアス「いい加減にしてちょうだい！わたしはあなたと結婚なんてしないわ！」

ライザー「これは君のお父様もサーゼクス様もご了承された縁談なんだぞ？」

リアス「わたしの結婚相手は自分で決めるわ！」

ライザー「俺もなりアス、フェニックス家の看板背負ってるんだよ」

ライザーはリアスに近づきリアスの顎を持ち上げて続ける

ライザー「俺はな、君の眷属を全員焼き尽くしても君を冥界へ連れ帰る」

リアスとライザーがやり合うような雰囲気になりつつある

グレイフィア「お二人ともお収めくださいませ。わたくしはサーゼクス様の命を受けてこちらにきています。よって容赦はいたしません」

ライザー「最強の女王にそんなこと言われたらさすがの俺も怖いよ」

グレイフィア「いえいえ、あちらに居られる方に比べたらわたくしなどとてもとても」

ライザーはゆつくりとタツマキの方を見る。そして目を見開いて驚愕する

ライザー「な！なぜこんな下界に【戦慄のタツマキ】がいるんだ！」

タツマキ「ちよつと！汚れるからこつち見ないでくれる！」

蓮夜「グレイフィアお前がここにいてことは何か聞かされてるんだろ？」

ライザー「ん？誰だお前は？悪魔なようだがこんなところにいるということは下級だ

ろ！口を慎め！」

気配や魔力を押さえているとはいえ実力の差もわからんのようなならこいつもそこま  
でということだな。ライザーはそう言い終わった瞬間地面に叩きつけられた：タツマ  
キの能力によって……

タツマキ「あんたが黙りなさい……このまま殺すわよ……？」

タツマキの能力によってライザーはどんどん床にめり込んでいく

グレイフィア「タツマキ様！お収めください！」

蓮夜「タツマキ……」

オレの声を聞くと能力を解除し一度すごい形相でライザーを睨みオレのところに  
やってくる

タツマキ「次はないわよ……」

ライザー「くっ！」

ライザーは立ち上がれないのか片膝を床につけてこつちを睨んでくる

オレは戻ってきたタツマキの頭を撫でてやり小声で「ありがとな……」と言っておいた。  
タツマキは顔を見られたくないのかオレの背後に隠れてしまった

グレイフィア「感謝いたします。蓮夜様のおっしゃる通りこの場で決着がつかなかっ  
た場合、ライザー様と「レーティングゲーム」にて決着を……と旦那様から仰せ仕りまし



た」

それを聞いたリアスは驚き、言葉を失った

ライザー「リアス、俺はゲームをなんでも経験済みだし勝ち星も多い。君は未経験はおろか公式の資格までないんだぜ？」

やつとこさ立ち上がったライザーの言葉にリアスはあからさまに悔しそうな顔をする。まあリアスには不利だな

ライザー「リアス、念のため確認しておきたいんだが…君の下僕はこのメンツで全てなのか？」

リアス「だとしたら何なの？」

ライザーは指を鳴らす。その瞬間グレイフィアの後ろに魔法陣が展開されそこに15人の女性や少女が現れた

ライザー「こっちは全ての駒が揃っているぞ」

一誠「こんな美女美少女ばかり！なんて男だ！」

一誠はライザーの眷属を見て急に泣き出した

ライザー「おいリアス…この下僕くん俺を見て号泣してるんだが…」

リアス「その子の夢がハーレムなの…」

タツマキ「キモっ」

ライザー「ははっそういうことか…ユーベルーナ」

ユーベルーナ「はい、ライザー様」

何か思いついたのか自分の眷属の一人を呼び寄せた。オレはその瞬間タツマキの目を塞いだ…だが、音を防ぐことができなかった…ちっ！ジブリアルを連れてくればよかった。それはライザーと眷属による不快なたわむれだった

タツマキ「ほんとに最低…」

その音に不快になるタツマキ。目では見えないがやはり音で察してしまっただけ

ライザー「お前じゃこんなこと一生できまい、下級悪魔くん？」

一誠「う、うるせえ！そんな調子じゃ部長と結婚した後も他の女の子とイチャイチャするんだろ!?この種蒔き焼き鳥野郎!!」

ライザー「貴様…自分の立場を弁えてものを言っているのか？」

一誠「知るかつ！こんな奴に部長は渡さねえ!!ゲームなんて必要ねえ！この場で全員倒してやるっ!!」

アーシア「イツセーさん！」

一誠は左腕に神器を出し突っ込むが

ライザー「ミラ」

ライザーの指示で前に出た少女のミラに棍棒で突かれそうになった瞬間

蓮夜「タツマキ…」

タツマキがオレの指示を聞かずとも能力で止めてくれた。一誠に襲いかかろうとしたミラと呼ばれた少女はタツマキによって宙でに浮かんでいる状態になった

蓮夜「一誠落ち着け」

リアス「わかったわ…レーティングゲームで決着をつけましょう……」

グレイフィア「承知いたしました」

ライザー「ちよつと待ってくれ最強の女王。おい！小僧！」

ライザーはオレを指差して言った。その態度にタツマキが再びライザーを睨みつける。オレはタツマキを落ち着かせるためタツマキの頭に手を置いて答える

蓮夜「小僧ってオレか？」

ライザー「お前もレーティングゲームに参加しろ！そこで焼き殺す！」

蓮夜「あー、大丈夫なのか？グレイフィア」

グレイフィア「今回は非公式のゲームなので問題ありません」

蓮夜「なら問題ない。オレの仲間も同伴でいいよな？」

ライザー「ああ、せいぜい楽しませてくれよ？」

グレイフィア「それでは10日後にゲームを行います。皆様それでよろしいですね

「ライザー「それじゃありアス、次はゲームで会おう」

そう言い残し、ライザーとその眷属は炎に包まれて消えた

その後グレイフィアからリアス達にオレの正体を伝えられた。オレの正体を聞いたリアスと朱乃、祐斗とアーシアはすごく驚いていた。それはもう腰が抜けるぐらいに。一誠は「何それ？」みたいな顔で突っ立っていただけだったが。小猫は黒歌を眷属にしたときに全部話していたから特に驚いた様子もなく、どちらかといえばキラキラした目でこつちを見ていた

そして事実を知った上でリアスとグレイフィアから特訓を見てくれとお願いされた。オレはあいつらにもいい運動の機会になるだろうと思つて承諾した

## 第7話

焼き鳥野郎襲来の次の日、オレは眷属のみんなと一緒に山に來ている。昨日焼き鳥野郎が帰って行った後リアスから合宿場所に行く前に一度学校の方に来てほしいということだったので一度学校に寄り、オカルト研究部のみんなも合わせて山を登っている最中だ。ちなみに山を徒歩で歩いているのは一誠が鍛錬として、その付き添いで男どもは全員徒歩で登っている。グレモリー眷属のみんなはリアスからの足腰の鍛錬と言われて一誠と一緒に歩いてのぼっている、が彼女たちの荷物は全て一誠が持っている。小猫のはなぜかオレが持っているが…うちの女性陣はタツマキの能力で宙に浮いて移動している

一誠「ぜえ…ぜえ…ぜえ…」

蓮夜「一誠、こんなんではばってたら強くなんなれないぞー？」

一誠が大量の荷物でダウンしかけていた。それを見てアーシアは心配している

アーシア「あの、私も少し持った方が…」

リアス「いいのよ、あれくらいこなしてもらわないと」

アーシアがそんな一誠を見て手助けしようとするがリアスがそれを止める。これも

悪魔になりたての一誠を鍛えるためか

祐斗「お先に」

達也「じゃあな」

十六夜「早くしろよ？ヤハハ」

一誠「くそっ！木場のやつ余裕見せやがって！てかお前らなんでオレの倍ぐらい荷物大きいのにそんなスイスイ行けるんだよ…」

蓮夜「ん？まあ鍛えてるからな」

オレと達也と十六夜は女性陣の荷物を一緒に持っている。女性陣の荷物はなにかと多い…

目的地に着くとさっそく修行を始めるようだ。各自荷物を置いて更衣室で運動服に着替えて元の場所に再集合した

蓮夜「さて、お前達にはそれぞれオレの眷属が何人かついて教える。まずは祐斗」

祐斗「はい！」

蓮夜「お前は同じ騎士のユウキと雪菜、それとクロメに教われ三人ともよろしくな」

ユウキ「はい♪」

雪菜「わかりました」

クロメ「了解」

祐斗「よろしく」

蓮夜「次に小猫だが…達也と黒歌、頼む」

達也「ああ」

黒歌「了解にや〜♪白音〜♪」

小猫「ね、姉様…お願いします」

蓮夜「達也には体術を、黒歌には仙術を教われ。比率は二人に任せる。そこで朱乃にはジブリールがついてくれ」

ジブリール「かしこまりました」

蓮夜「朱乃…何があつたか知らんし聞く気もないが、自分の力に向き合え」

朱乃「…善処いたしますわ」

朱乃にはただの悪魔ではなく、他の何かの力も感じる。フェニックス相手に出し惜しみをして勝てるわけがない。しかし今の朱乃にはそれを受け入れる意思はないらしい。目だけ横を見るとリアスも心配そうな顔をしている

蓮夜「さて、アーシアは回復役になると思う。だから同じような非戦闘員のカナリアにいろいろ教われ」

アーシア「は、はいですく…」

蓮夜「カナリア、魔法の使い方だったり簡単な防御魔法を教えてやってくれ」

カナリア「うん！お任せあれ〜！」

蓮夜「リアスお前は…深雪とレム頼む」

深雪「かしこまりました」

レム「わかりました」

蓮夜「魔法に関してはこの2人だが戦術とかを聞いたかつたらオレか達也に聞いてくれ」

リアス「わかったわ」

蓮夜「最後に一誠だがお前には他の奴らをつける。鼻の下を伸ばしてたりなんかしてたら死ぬからな…みんなは一誠が死なない程度に頼むな。特にタツマキと十六夜」

一誠「マジかよ…」

タツマキ「なんでこんなことを私が」

十六夜「わかったよ」

シノア「わかりました〜」

ティナ「わかりました」

犬千代「わかった」



アンナ「…(コクツ)」

蓮夜「それで最後にライザー対策として全員一回はアンナと戦ってもらおう」

一誠「?なんでだよ?」

蓮夜「見た方が早いかな:アンナ」

アンナ「ん:」

オレがアンナを呼ぶとアンナは能力を発動し、周りが一瞬のうちに炎に包まれそれは空高くへと火柱となって上がっていった

蓮夜「これが理由だ。アンナサンキューな」

アンナの頭を撫でるとアンナは少し頬が緩む。リアス達はこんな小さいアンナがあげられないみたいな顔をしている

蓮夜「じゃあ解散。オレは全部の場所を見て回るから」

―祐斗修行場―

祐斗「はあー!」

クロメ「遅い:」

祐斗の修行場ではクロメ、ユウキ、雪菜が交代交代で祐斗の相手をしている。とりあ

えずこつちからの攻撃は禁止。祐斗の攻撃をひたすら避けたり捌いたりするのみに徹底させている

祐斗「はあ…騎士の駒の力…全開にしてるのに…はあ…当てられる気が、しないなんて…」

始めてから少しして祐斗が膝に手をつけて呼吸が荒くなったので少し休憩にすることにした

蓮夜「祐斗は大振りが多いな」

雪菜「それに木場先輩は真っ直ぐすぎます。フェイントなども入れた方が…」

ユウキ「クロメも手加減してあげなよ〜?」

クロメ「わかつてる…それよりもユウキ」

ユウキ「ん?なに?」

クロメ「ズルい」

ユウキ「いいじゃん♪」

ユウキは今オレに抱きついてしている。クロメは祐斗と戦いながらもこちらをチラチラと見てくる。集中しなさい

蓮夜「ユウキさんや…離れてくれやしませんかね?」

ユウキ「ダメだよ〜♪」

蓮夜「いや、他んどこも行かないとだし…」

ユウキ「むう、そういうことなら…」

ユウキは不満な顔をしながらでも離してくれた

蓮夜「じゃあこの後もよろしくな」

オレはそう言つてクロメと雪菜の頭を撫でた

クロメ「うん♪」

雪菜「わ、わかりました…」

クロメは機嫌が直つて、雪菜は耳まで真っ赤になつた

ユウキ「あー！2人ともズルい！」

そう叫んでいるユウキをあとにして、オレはその場を離れた

ー小猫修行場ー

蓮夜「達也、どんな感じだ？」

達也「ああ、仙術より体術優先でやっている」

蓮夜「そうか」

小猫は疲れているのか木にもたれ掛かりはあ…はあ…と呼吸を荒くしている。その

小猫に仙術をかけている黒歌

そして黒歌の仙術で体力が回復した小猫はオレの目の前で再び達也と組手に入った。しかし一発も達也に当たる気はせず、すべて受け流されている

蓮夜「ストップ。小猫、相手と戦うとき相手の何を見てる？」

小猫「…」

考えてはいるが答えは出せそうにない。いつもは相手に当てることだけを考えてるのだから

蓮夜「小猫、一つアドバイスだ。見るのは相手の“重心”だ」

小猫「重心…」

蓮夜「そう。重心を見るようにすればフェイントにも引っかけにくくなる。難しいことだがこれがわかればお前は格段に強くなる」

小猫「はい！わかりました！」

蓮夜「よし。じゃあ達也と黒歌、引き続き頼むな」

達也「わかった」

黒歌「任せろにや〜♪」

小猫が達也に「お願いします」と言つて組手を再度始めたところで次の場所に移動し

た

―朱乃修行場―

朱乃「雷イカッテよ！」

ジブリール「そんなんでは蟻も殺せはしませんよ？」

朱乃「はあ…はあ…くっ！」

朱乃の修行場合には一体どれだけ魔法を放ったのかその辺がクレーターだらけになっていた。その一方ジブリールは一回も放っていないみたいだな。あいつがやったらかこんなもんじゃないからな

蓮夜「おーい、とりあえず少し休め」

朱乃「…わかりました」

ジブリール「私には休憩など必要ありませんが、マスターがそうおっしゃるなら致し方ありませんね」

羽を出して空中にいる二人がゆっくりと降りてきた

蓮夜「ほれ」

オレは持っていた飲み物を朱乃に渡す

朱乃「ありがとうございます」

蓮夜「どうだ？ジブリール」

ジブリール「正直に申しますと、話になりませんね」

蓮夜「いやいや、そりやお前には対してはそうだが聞きたいのは焼き鳥野郎の奴らには対抗できるかだよ」

ジブリール「そうでございますね…女王相手ぐらいまでならなんとかなりそうでございます」

蓮夜「そうか」

ジブリール「しかし、まだ自分の力”全て”を使おうとはしません」

朱乃「…」

蓮夜「そうか…朱乃、別にそれを使おうが使わないかは自分で決めることだ。だがな、自分のそれとリアスの人生を天秤にかけてどっちが大切かなんてことはお前自身がかつているはずだぞ」

朱乃「っ！それは…」

朱乃はそれだけ言って籠る

蓮夜「まあいい…ジブリール、引き続き頼むな。あんまりすぎんなよ？」

ジブリールの頭を撫でると珍しく頬を赤くする

ジブリール「かしこまりました♪」

蓮夜「朱乃、よく考えろ」

オレはそう言い残してその場を去った

ーアーシア修行場ー

カナリア「あ！蓮ちゃん！」

アーシアのいる修行場に着くとカナリアがオレに気づいて呼んだきた。だが他にアーシアしかいないにしても大声で蓮ちゃんは恥ずかしいからやめてほしい…

蓮夜「アーシアはどうだ？」

カナリア「シアちゃん魔法の才能あるよ！もう基礎段階ができるようになったよ！」

蓮夜「へえ、すごいじゃないか（シアちゃん？）」

アーシア「そ、そんな…！」

蓮夜「試しに一回やって見てくれ」

アーシア「は、はい！」

返事をしたアーシアは胸の前で手を祈るように組み目を瞑ると、彼女の体から魔力が彼女を包むように出現。それはどんどん大きくなり半径一メートルぐらいの円になっ

た

蓮夜「へえく…やるじゃないか。この短時間でこれだけになるとはオレも予想外だ」  
カナリア「ね!? シアちゃんすごいよね!」

アーシア「あ、ありがとうございます…」

アーシアの成長にオレもカナリアも驚きもあり喜びでもあった

蓮夜「じゃあ今やってたとき、何を考えてた?」

アーシア「はい? 何を、ですか…?」

蓮夜「ああ…」

するとアーシアはそこで黙ってしまった

蓮夜「ここからは質を上げていこう。そのためにはアーシア、お前の“気持ち”が重要だ」

アーシア「気持ち、ですか?」

蓮夜「そうだ。何を思い、何を助けたいと願うか。次からはそれを考えて見るといい」

アーシア「わかりました」

蓮夜「カナリアはこの後はそこら辺も加えて教えてやってくれ」

これまでと同じように頭を撫でてやる

カナリア「了解だよ♪」



ーリアス修行場ー

リアス達はちようど休憩中のようだった

蓮夜「よーつす、どうよ調子は？」

レム「あ、蓮夜くん。リアス先輩は魔法自体は強力なんですけど……」

深雪「その大きい魔法しか使わないのですぐ疲れてしまうみたいです」

蓮夜「そうか、なら最小限で放てる魔法を教えてやってくれ」

深雪「はい、そう思って今その練習中です」

蓮夜「さすがだな」

そう言つて頭を撫でる

深雪「ん……」

レム「むう〜」

レムが頬をぷくつと膨らませてこつちを見ている

蓮夜「あーわかつてるよ、ほれ」

レムの頭も撫でてやる

レム「ふふっ」

リアス「仲がいいのね」

蓮夜「そうか？」

レム「仲がいいことはいいことですよ♪」

深雪「そうですねよ♪それにもう長いお付き合いじゃないですか♪」

蓮夜「それもそうだな、じゃあ二人とも引き続き頼むな」

深雪、レム『はい♪』

蓮夜「リアスもがんばれよ」

リアス「ええ」

リアスにも何かアドバイスをと思っただがオレの言いたいことは既にレムと深雪がやってくれているので二人に任せ次へ向かった

――誠修行場――

蓮夜「さて、一誠は生きてるかな？」

とつぶやきながら山の方に向かっていると

「ぎゃー—————!!!」

大きな悲鳴と爆発音、そして何か大きなものが落下する男が聞こえてきた

蓮夜「あ、生きてた」

なぜか心配ではなく生存確認をするオレであった。少し進むと崖の上にティナとシノアがいるのが見えたのでオレは崖の上に跳躍した

ティナ「あ！お兄さん♪」

蓮夜「おーティナ。シノアも」

シノア「お疲れ様で〜す」

ティナは抱きついてきた。シノアは体育座りをしたまま首だけ見上げてくる

蓮夜「どうだ？一誠は死んではいないみたいだが」

ティナ「はい、タツマキさんが岩を飛ばしたり十六夜さんが殴りかかったりと様々な

攻撃を避けさせて体力向上を目指してます」

蓮夜「あー、でもあいつら本気の1割も出してねえな。退屈そうだな」

ティナ「そうですね。特にあのお二人はそうだと思います」

シノア「確かに、手応えがまるでないですのぞ」

犬千代「犬千代も退屈。一誠弱すぎ」

蓮夜「わつ！犬千代！よくわかつたな。気配は消してたんだがな」

犬千代「蓮夜の匂いがした」

蓮夜「あー、匂いはどうにもできないからな。オレそんな臭う？」

ティナ「そ、そんなことないです…」

シノア「蓮夜さんはいい匂いしますよ〜」

犬千代「犬千代もそう思う」

アンナ「安心する匂い」

蓮夜「っ！アンナ！お前もか」

アンナ「蓮夜がいるところはすぐにわかる」

蓮夜「あはは、アンナには敵わねえな〜。じゃあ4人ともこの後もよろしくな。夕飯になつたらまた呼ぶ」

そう言つて四人の頭を撫でる

ティナ「わ、わかりました！」

シノア「了解で〜す♪」

犬千代「蓮夜のご飯」

アンナ「楽しみ」

蓮夜「シノアはサボるなよ」

シノア「そんなことしませんよ〜」

蓮夜「どうだか」

オレは夕飯を作るためロツジに戻った

一誠「死ぬ――――」  
!!!!!!  
「

## 第8話

蓮夜「みんな揃ったな。じゃあ召し上がれ」

『いただきます！』

みんなより少し早く戻ってきたオレは備え付けのキッチンに入り夕食の準備に取り掛かった。今回はいつもより人数が多いしレムや深雪などのいつも手伝ってくれるメンバーもいないでオレ一人でつくらなきゃいけないから、手取り早くカレーにすることにした

そして四十分ぐらいでできあがり、みんなを呼んで食べ始めた

一誠「うんまー！！！」

祐斗「本当だ。美味しいよ」

ユウキ「そうでしょ！」

クロメ「なんでユウキが威張るの？」

さつきまでグツタリしていた一誠が嘘のようにお皿を持ち勢いよく食べている。祐斗も驚きと共にスプーンが止まらない様子である。二人の感想に自分が作ったわけ

はないのに威張るユウキに静かにツツコミを入れるクロメ。しかし二人も食べる手は止まらなかつた

リアス「本当に美味しいわね」

朱乃「なんだか自信がなくなつてしまってますわ…」

レム「その気持ち、わかります…」

蓮夜「カレーなんて誰でもこれぐらいの味になるだろ？」

雪菜「先輩は本気で言ってるんですか…？」

蓮夜「？」

深雪「悪気がないのがさらに夕子悪いですね…」

カレーは順序さえ間違えなければ誰でもできると言つたつもりなんだがなぜかみんなから反感を買つてしまったらしい

蓮夜「それより今日はどうだったよ？」

リアス「まったく歯が立たなかつたわ…」

小猫「1発も当てられませんでした…」

祐斗「僕もだよ…」

朱乃「そうですわね…」

一誠「死ぬかと思つた…」

アーシア「えっと…」

アーシア以外は凹んでる。一誠はそれとは少し違うが…

蓮夜「お前らそんなに凹むことないぞ？オレの事聞いたんだろ？自分で言うのもあれだが、これでもこの世界で”一番”なんだぞ。その眷属から教わってんだから、なにか奪うつもりでいけよ」

リアス「そうね…確かに勉強になるわ」

一誠「蓮夜…お前ほんとにすごいやつだったんだな……」

あの日、焼き鳥野郎が帰った後にグレイフィアがリアス達にオレの正体を明かしたリアス「やつぱり敬語とか使った方がいいかしら…」

蓮夜「いや今までと同じでいい」

世界で一番と言うことは魔王より上というわけだ。だがオレは特に敬語とか気にしないタイプなので口調などは変えなくていいと伝えた

合宿開始五日目。今日は一旦個人の修行をストップしてチームの連携の修行をすることにした



蓮夜「今日はアンナをあゝの焼き鳥野郎に見立てて対戦してもらおう」

オレはアンナの頭にポンツと手を乗せてリアス達にそう告げる

蓮夜「おそらく多くの連中は“フェニックス家は不死身だから勝てない”とも思っているだろう。だが不死身だけで弱点がないわけじゃない。いいか？不死身は傷は治せてもダメージまで回復するわけじゃない。負ったダメージは蓄積されていく」

『っ！』

蓮夜「気づいたか？他にも精神を壊すなんてこともできるがこのメンツ的にそれをできる者はいないだろう。だから勝機はどれだけ焼き鳥野郎と戦うまでに生き残れるだろうかだ」

リアス「生き残れるか…」

蓮夜「そうだ。さすがにリアスと焼き鳥野郎の一騎打ちではやるがダウンするまでにリアスの魔力が切れる。そのために個人の修行の時に回避の修行も入れていた」

オレが今言ったようにこれまでの修行に技術の向上だけでなく回避能力の向上も組み込んでいた。それは全てこのためである

蓮夜「そこでこれからは全員が生き残った程として焼き鳥野郎と戦うシミュレーションをする。これに関してはオレは口を挟まない。全てリアスの指示次第だ」

リアス「ええ、わかってるわ…」

蓮夜「ならいい。では、始め！」

そして時間は過ぎ最終日

蓮夜「よし、皆よく頑張った」

タツマキ「ふん！まだまだよ！」

ユウキ「でもみんな始めたときよりはよくなったんじゃない？」

蓮夜「そだな……じゃあ最後にオレらもやるか」

オレがそう言った瞬間、眷属のみんなは戦闘態勢をとる。十六夜だけは楽しそうに笑っているが全員真剣な表情に変わった

リアス達には悪いが特にタツマキと十六夜は中途半端な訓練で鬱憤が溜まっているだろう。それで鬱憤晴らしも含めて少し体を動かそうということだ

蓮夜「リアス達は下がった方がいいぞ？下手したら怪我じゃすまないかもよ？カナリアは悪いがリアス達を守ってやってくれ。何も無いとは思うが」

カナリア「うん！オツケーだよ！」

オレがそう促すとリアス達はカナリアについて崖の上に行ったので、それを確認してから唱える

蓮夜「我、神崎蓮夜が汝の枷を解き放つ。来い！四番目の眷獸、  
 // 甲殻の銀霧（ナト  
 ラ・シネレウス）  
 “

オレはザリガニのような形をした銀色の霧が灰色の甲殻が覆っている眷獸を顕現させ  
 せ辺り一体を霧に変える。これでどんなに壊しても壊れないようになった

蓮夜「さーて始めるぞ。全員でも一人ずつでもどっちでも…」

十六夜「オラアーーー！」

説明が終わる前に十六夜が殴りかかってきた。オレは軽く避けるがオレの横を通り  
 過ぎた十六夜の拳は後ろにあつた崖のような岩に大きなクレーターを作つた

蓮夜「おいおい、最後まで話させろよ」

十六夜「こちとら力抑えられててイライラしてたんだ！そんなん待つてられつかよ！

オラアーーー!!!

蓮夜「わかつたよ…怪我すんなよ！」

十六夜「しやらくせー!!!」

オレと十六夜の拳がぶつかつた。次の瞬間、十六夜が飛ばされ岩にめり込んだ

蓮夜「まだオレの方が強いな。さて次は？」

ユウキ「じゃあ蓮夜、行くよ！雪菜！クロメ！」

雪菜「お願いします！」

クロメ「わかった」

ユウキと雪菜は目に見えないほどの速度で（オレは見えているが）オレに切りかかってきた。それに続いてクロメも剣を抜いて襲いかかってくる。どうやらクロメは神器「死者行軍・八房」の能力は使わず剣技でくるようだ。オレは3人の剣戟をことごとくかわす

蓮夜「3人とも連携がうまくなったな」

雪菜「全部避けてるのに言われたくないです！」

ユウキ「全然当たらない！」

蓮夜「クロメは能力使わないのか？」

クロメ「ほんとは使いたいけど壊されたら嫌だから」

蓮夜「そっか…おっと」

3人の剣戟を避けていると突然横から槍による突きがきた

蓮夜「今度は犬千代か」

犬千代「むく…当たんなかった…」

蓮夜「狙いはいいぞ。あとは直前まで気配を消すことだな」

パンッ！

今度はティナによるライフルの銃弾が打たれた

蓮夜「今度はティナか。ちゃんと回避位置にも的確に撃ってきてるな」

位置的に崖の上。移動するのも素早くなっているようだ。しかも言わずもがな狙いは超性格。でもオレの回避速度と撃ってからオレに当たるまでの距離の計算が少しズレてるな

そう思っているとユウキ達が一旦さがった

蓮夜「ん？」

何かを感じた瞬間右側は深雪の吹雪、左側はアンナの炎、上からはジブリーの電撃がそれぞれものすごい威力で襲ってくる

蓮夜「こりややべーな…」必殺ちよつとだけマジシリーズ。三連続ちよつとだけマジ殴り」

オレの三連続のパンチでそれぞれを粉碎する、がその粉碎したあとの煙の中から達也が複数人かかってきた

蓮夜「黒歌の幻影か…あいつもやるようになったな。気配まで全部同じだよ。だけど…」

パシッ！

達也の拳を受け止める

蓮夜「若干スピードが違う…」

達也「っ！」

達也は一瞬驚いた顔をするがすぐにいつもの冷静な顔に戻り何かの魔法を使う。そしてオレは目に見えない何かに縛られた。そして背後からシノアが具現化した四鎌堂子を手にして攻撃してききた。オレは身動き取れないため仕方ないからシノアの着地と同時に地面を踏み地震を起こす

蓮夜「ほんとに連携がうまくなった」

達也とシノアは一旦煙の中へ姿を消す。姿だけではなく気配まで完全に消えているのはさすがだ

ゴゴゴゴゴ……!!!

達也の魔法をぶち破り煙が晴れるのを待っていると上からすごい音がするのが聞こえる。その音が大きくなると煙が一瞬のうちに晴れ頭上にはでっかい隕石が迫っていた

蓮夜「こりやさすがにやべーな。我、神崎蓮夜が汝の枷を解き放つ。来い！九番目の眷獣！」  
 // 双角の深緋（アルナスル・ミニウム） //

緋色の双角獣（バイコーン）の姿をした眷獣が身体そのものが振動であるため、実体化中は常に高周波振動を撒き散らす傍迷惑な存在が隕石に向かって突進し隕石を粉砕する

タツマキ「もう！なんなのよ！当たりなきいよ！」

なんかプンスカ言ってるタツマキはほっとく。だって当たったら痛いじゃん…

蓮夜「よし、じゃあ終わりな—おつかれ」

これで終わる。まあみんな少しは鬱憤晴らしができたかな

リアスSide

なんのよこれは…私達の前では一体何が起きていると言うの…？

私と私の眷属達は今高い崖の上から蓮夜と連夜の眷属達による模擬戦を観戦している。でもこの模擬戦が別格過ぎて声が出なかった。それは他のみんなも同じなように全員口を開けながら見入っている

一誠「な、なあ木場…今日の前では何が起こってるんだ…？俺には何も見えないんだが…」

祐斗「ああ…残念だけど、僕にも所々しか目で追えていないんだ…」

騎士であるユウトがこういうのだから相当な速さなのでしょうね…

開始早々私達の立っている崖とは反対側の崖に大きなクレーターができた。そしてその直後にそのクレーターの隣にそれよりも大きなクレーターが出来てそこには十六

夜くんがめり込んでいた。それからユウキさんや雪菜さん、クロメさんが立っているところからいきなり消えたり吹雪や炎、朱乃の何倍も威力のある天撃が起こったと思ったらそれが雲散霧消して煙が立ち込めたり、もう何が何だかわからなくなっている

カナリア「今ね、ユツキーとアンちゃん、ジブちんの魔法を蓮ちゃんが殴って消したとこだよ」

私達が疑問に思っていることをまるで心を覗いたかのように答えるカナリアさん。というか蓮夜はあれだけの魔力をただの拳で止めたって言うの!?

すると上からは巨大な隕石が落下していき煙を晴れさせた。その隕石もいきなり粉々に粉砕しその衝撃風から身を守ろうと顔を腕でガードするような姿勢を取ったが一向に風は来なかった。前を見るとカナリアさんが防御魔法をかけていた。この人も尋常ではないらしい

リアス達と合流し今は帰宅中

リアス「あなた達……ほんとにすごいよね……」

祐斗「全員、僕でも目で追えなかったよ……」



小猫「さすがです」

朱乃「壮大でしたわ…」

一誠「なにが起きてるかさえわかんなかった…」

アーシア「す、すごかったです…」

小猫以外はみんな驚いてるようだった

蓮夜「みんなあれでも抑えてたんだけだな。特にタツマキや達也、ジブリールが本気出したら日本、いや世界が一瞬で消し飛ぶな」

タツマキ「ふん、当然でしょ」

リアス達はそれを聞いて青ざめている

蓮夜「まあやれることはやったんだ。あとは本番がんばるだけだ」

リアス「そうね」

最後にオレ達のを見て自信がなくなってしまったか全員暗い表情になる。オレは足を止めみんなの方に向き直る

蓮夜「リアス。お前はこの合宿で魔力の使い方が格段に上がった。それに戦術にも手を抜かず勉強し続けた」

リアス「え、ええ」

蓮夜「朱乃。お前はまだ自分にあるものを全て出し切ってはいない。それはお前自身

の問題だからオレからは何も言えん。だがリアス同様魔力の使い方は焼き鳥野郎の奴らより確実に上手い」

朱乃「は、はい」

蓮夜「小猫は最初こそ力任せに殴っていたただけだが修行していくに連れて段々立ち回りが上手くなった。今なら中級悪魔ぐらいなら一人で倒せるだろう」

小猫「はい」

蓮夜「祐斗。お前も技術が格段に成長している。それにユウキ達の速さを見てるおかげであいつらは止まって見えると思う」

祐斗「うん」

蓮夜「アーシア。君には才能と何より人を想う優しい心を持っている。その心があればみんなを助けてやれる」

アーシア「は、はい！」

蓮夜「そして一誠。はつきり言ってライザーを倒せるのはお前だけだ」

一誠「ま、マジか…？」

蓮夜「ああ。もし恐怖を感じたときは今回の修行のことを思い出せ」

一誠「はっ！ああ！オレ、やるよ！」

蓮夜「その粹だ」

オレの言葉でみんなは目にやる気が戻った。こうして長かった修行が終わった

## 第9話

本日はレーティングゲーム当日。先にリアス達のレーティングゲームだったのだが、リアス達は修行でレベルアップはしたもののまだフェニックス家には勝てなかった。相手の眷属をほとんど倒すまで善戦できてはいたが、フェニックスの不死身な体はどうしようもなかったようだ

ユウキ「負けちゃったね」

蓮夜「ああ…」

犬千代「蓮夜、怒ってる」

アンナ「(コクツ)」

蓮夜「んなこと…いや、そうだな…少し頭にきてる」

ジブリール「マスター、やはりあの女でございますか？」

蓮夜「…」

オレの表情からみんなはオレがどんな思いなのかを察し、ジブリールが尋ねたことにオレは無言で返す

蓮夜「ふうく…とりあえず次はオレらの試合だな。ん？」

ライザー「ほお、逃げずに来たようだな」

一息ついてさつきよりは頭に上った血は引いてきたところにライザー・フェニックスがこつちに近づいて来た

蓮夜「なんか用か？」

ライザー「なーに、これから負かす奴らを拝見しに来たのさ」

十六夜「はっ！ だいぶ余裕じゃないの」

ライザー「当たり前だ。ん？ ほー、よく見るとなかなかの上もの達じゃないか。おいお前！ オレが勝ったらそこにいる女どもを寄越せ」

蓮夜「あ？」

オレはその言葉に殺気は出さずともドスの効いた声で反応する

ライザー「お前にはもつたいたない。オレが可愛がってやるよ」

焼き鳥野郎はその汚らわしい手つきとその下品な目つきで深雪達を舐めるように見た

雪菜「最低ですね…」

タツマキ「キモっ！」

ライザー「ははは！ せいぜい頑張りたまえ！」

ライザーは気色悪い笑いをしながら去っていった

蓮夜「…」

眷属一同『…』

オレ達はそんな焼き鳥野郎の去っていく姿を見ながら数秒間沈黙した

蓮夜「みんなちよつといいか…正直結構頭にきてる」

達也「ああ…俺もだ」

ユウキ「僕も、あれは無理だよ」

ティナ「はい」

蓮夜「徹底的にぶちのめすぞ」

みんなは強く頷く

その後魔王にある確認に行く

蓮夜「よう、サーゼクス。元気か？」

サーゼクス「はい、おかげさまで」

蓮夜「…気持ち悪いからその口調やめろ」

サーゼクス「あははは、そうかい。この後は君たちの番だね。楽しみにしているよ」

蓮夜「そのことなんだが…さつき向こうさんからケンカを売られてな、あいつ殺つて

いいか……？」

サーゼクス「……すまないがそれは困る……一応上級悪魔だ」

蓮夜「……わかった。だが使い物になると思うなよ」

そう言い放つて会場へ降りる。何かを感じ取ったのかサーゼクスの額には珍しく汗が滲み出ていた

『それではこれよりライザー・フェニックス様対神崎 蓮夜様のレーティングゲームを開始いたします』

グレイフィアの合図とともにゲームが始まった

蓮夜「じゃあ打ち合わせ通り行くか。深雪、アンナ、ジブリール、やっていいぞ」

深雪、ジブリール「「かしこまりました」」

アンナ「(コクツ)」

3人はそれぞれ魔法を繰り出す。3人の魔法は威力が抑えられてるとはいえ建物を全て吹き飛ばした。焼き鳥野郎の眷属もほとんどがこれでやられてしまったようだ。アナウンスがあつた

蓮夜「じゃあ行くか」

オレらは正面から堂々と歩いて進む。少し進むと相手の生き残りが出て来た  
「止まりなさい!」

蓮夜「あん?」

「ライザー様の所には行かせないわ!」

あいつは：確か焼き鳥野郎の女王だったか。さっきの爆発で消えなかったことはリアスのときと同じで不意をつくため上空にでもいたか?と考えていると爆弾を投げて来た。がそれは空中で停止した

タツマキ「爆弾、お返しするわ」

「きやー!!!」

タツマキが念力で爆弾を相手に返し、相手はそれにやられリタイヤとなった

蓮夜「サンキュータツマキ」

タツマキ「ふんっ!」

そのとき瓦礫の陰からまた1人出て来た

蓮夜「まだいたか?」

「お待ちください! わたくしは戦うつもりはありません」

達也「どういふことだ?」

「わたくしはレイヴェル・フェニックスと申します」



雪菜「フェニックス…ということは」

レイヴェル「はい…ライザー・フェニックスの実の妹です」

カナリア「実の妹を眷属に!？」

レイヴェル「…」

蓮夜「そんなことオレにはどうでもいいことだ。戦闘する気がないのなら離れてい  
ろ。だがお前の兄は壊れるものと思っておけ」

オレはそう言い放って再度進む

蓮夜「ようやくおでましか」

ライザー「貴様!よくも!」

蓮夜「黙れ…やるなら早くかかってこい」

ライザー「言わせておけば!」

焼き鳥野郎がこっちに殴りかかってきたから腹を殴ってやった。すると腹には大き  
な穴が空いた

ライザー「ぐはっ!」

蓮夜「へえ、一応痛覚はあるんだな」

ライザー「なんだ今の一撃は!?!だがオレは不死身!どんな攻撃をしてもオレには無意

味なんだよ!!!」

蓮夜「はあ…みんなもう終わらせていいか？」

シノア「はい」

クロメ「こんな下衆もう見たくないわ」

レム「蓮夜くんの爪の垢でものんでほしいですね」

蓮夜「じゃあ早く終わらせて帰ろう」

ライザー「くっ！貴様ー!!調子に乗るなー!!!」

蓮夜「我、神崎蓮夜が汝の枷を解き放つ。来い！三番目の眷獣、  
// 龍蛇の水銀（アル・

メイサ・メルクーリ）//」

オレが呪文を言い終わるとそこには巨大な双頭の龍が顕現した

ライザー「こ、これは…!!」

蓮夜「食い破れ」

オレの指示に従い眷獣は焼き鳥野郎の手足を食いちぎった

ライザー「ぎゃー!!!」

手足を失った焼き鳥野郎は地面に転がる。普通ならフェニックスの力で元どおりに

なるはずだが…

ライザー「なぜだ！なぜ回復しない！」

蓮夜「お前のフェニックスとしての能力ごと食ったからだ」

ライザー「そんなことありえない！」

蓮夜「現実には起きてるじゃねえか。これで決着だな。本当ならお前を殺してやりたいところだが…魔王様に感謝するんだな」

オレが強い殺気を放つと焼き鳥野郎は気絶した

『ライザー様戦闘不能により神崎蓮夜様の勝利といたします』

グレイフィアからのアナウンスがあった

蓮夜「帰るぞ」

これでつままないレーティングゲームは幕を閉じた

後日行われるはずだったライザー・フェニックスとリアス・グレモリーの結婚式はライザーの意識不明と魔王による決断で白紙となった。リアスはとうとうとレーティングゲームで自分のことを身を呈して守ってくれた一誠に惚れたらしい。一誠よかったな

## 第10話

焼き鳥野郎とのレーティングゲームも終え数日が経ったある日、オレはリアスから話があると言われたのでオカルト研究部の部室にきている。なぜ呼ばれたかは不明だ。すると

コンコン

朱乃「どうぞ」

ドアがノックされ朱乃がそれに返事するとドアが開き10人ほどの男女が入ってきた。た。

蓮夜（ん？真ん中のやつは…）

その中ほとんどの顔に見覚えはあるが1人だけ知らない顔が入っていた  
「失礼します。ごきげんようリアス」

リアス「ええ、ごきげんようソーナ」

一誠「せ、生徒会長？」

入ってきたのは生徒会の面々らしい。一誠が挨拶した女性が会長の支取蒼奈。そし

て入ってきたのはメンツの中で唯一の男子が発言する

「リアス先輩、彼に俺達のこと話してなかったんですか？ 同じ悪魔なのに気づかないこともどうよって感じですが」

蓮夜「嫌味な言い方だな。一誠は悪魔になつてまだ日が浅いんだから仕方ねえだろ」

「っ！神崎!!なんでお前がここに!!」

金髪男子生徒の発言に少しイラツときたから言うときついにはオレに気づき睨んでくる

ソーナ「お止めなさい、匙！彼の言う通りです。それに私達はお互い干渉しないようにしているの。兵藤くんも知らなくて当然です。失礼しました。こっちは兵士の匙元四郎」

リアス「兵士の兵藤一誠、僧侶のアーシアアルジェントよ」

リアスと支取先輩がそれぞれ新たに加わった仲間を紹介してようやく一誠はその場を理解したようだ。朱乃が説明しようとするがオレが先に口を開く

蓮夜「ソーナ・シトリー。上級悪魔の次期当主だ。そして姉が現四大魔王の一人だ。セラフォルーは元気か？ まあ元気じゃないあいつは想像でさんが……」

ソーナ「え、ええ……姉は相変わらずだと思えます。改めて私はソーナ・シトリーといえます。兵藤くん、アルジェントさん、そして永遠の皇帝《エターナル・エンペラー》神

崎蓮夜さん、これからよろしくお願いしますね」

匙「永遠の皇帝《エターナル・エンペラー》って、まさか…!!!」

ソーナ「そのまさかよ、匙。先日レーティングゲームであのフェニックス家の三男を容易く意識不明の重体に晒し、魔界、天界、人間界、この世で最強と言われている人物です」

匙「神崎が…マジか…」

蓮夜「知ってたのか？」

ソーナ「ええ、毎晩のようにお姉様から話を聞かされたうえにリアスからの報告もあつたので」

ソーナは既にオレのことは知っているみたいだが、匙は未だに信じられないといった様子で口を開けている

一誠「お前も兵士かー」

匙「俺としては変態3人組の1人と一緒にされるのは酷く遺憾だね」

蓮夜「オレはまだ何も知らないのにそんなこというやつとおんなじ悪魔だという事が酷く遺憾だ」

こいつの言い方が気に入らなかつたので少し殺気を出し匙に言う

匙「うぐっ！」

ソーナ「申し訳ありません！匙にはあとできつく言っておきます！」

蓮夜「：気をつけな」

ソーナに免じてオレは殺気を出すのをやめる

一誠「蓮夜の前ではお前も全然じゃねーか」

匙「なんだと!?やるか？俺は悪魔になつたばかりだが、それでも駒を4つ消費してるんだぜ？」

ソーナ「いい加減にしなさい、匙！それに彼は駒を8つ消費してます」

匙「8つって全部じゃないですか!?信じられん：こんな冴えない奴が：」

一誠「うるせー!!!」

蓮夜「お前らしい加減にしろよ：」

一誠、匙『はいっ!!!』

オレの声に2人顔が青くなる

ソーナ「ごめんなさいね、兵藤くん、アルジエントさん。よろしければ新人悪魔同士仲良くしてあげてください」

それから匙とアーシアが握手をしたり、それに一誠が割り込んだりした

蓮夜「そういえばみ：司波はいないのか？」

ソーナ「はい、彼女は私の眷属ではないのでここへは連れてきてはいません。生徒会

室にいると言っていましたか、何かありましたか？」

蓮夜「いや、別に。そうだな…深雪ー」

オレが深雪の名前を呼ぶと、オレの隣に魔法陣が浮かび上がり深雪が姿を現した

ソーナ「っ！…どういことでしょうか…？」

深雪「会長、改めまして蓮夜さんの僧侶、司波深雪です」

蓮夜「ということだ」

オレは深雪の頭を手をおいてそう言う

ソーナ「そうでしたか…全く気付きませんでした」

蓮夜「そりやそうだろ。なんたつてうちの僧侶なんだから」

深雪「申し訳ありませんでした」

オレは我が子を自慢するかのように深雪の頭を撫でながらソーナに言うが、深雪は黙っていたことを素直に謝った。ソーナと生徒会のみんなは初めは驚いていたがすぐに納得してくれたようだ

蓮夜「ところでよー、リアス」

リアス「ん？なにに？」

蓮夜「オレを呼んだ要件はなんだ？」

リアス「ああ、そうだったわね。実は一誠とアーシアの使い魔を探しに行くんだけど、



一緒に来てくれないかしら…？」

蓮夜「ん…別にいいぞ。そろそろオレらも行かないとマズイ…しな…」

深雪「そうですね…あのー、それはいいんですが…いつまで撫でてるんですかー！」

蓮夜「おー、悪い悪い」

オレは深雪の頭から手を離れた

深雪「あ…」

蓮夜「ん？…まったく、別にみんなの前でも甘えていいんだぞ」

手を離れたときの深雪の表情から察し離れた手を戻し再び撫でる

深雪「く／＼／＼」

深雪は恥ずかしいのか俯いてしまった

一誠、匙「羨ましい!!」

それを見てか匙と一誠は叫び、ソーナもこんな深雪は見たことがないとも言おうように驚きの表情を出している

リアス「じゃあいいということまで夜にまた来てちょうだい」

蓮夜「わかった」

ソーナ「紹介も終わったことですし、私達はこれで」

リアス「ええ、ありがとうね」

そう言つてソーナは部室から退室しようとする。

蓮夜「深雪はまだ仕事があるのか？」

深雪「まだあと少しあつたと思います」

ソーナ「司波さん。後は我々が片付けておくのであなたはこのまま帰宅して構いませんよ」

深雪「会長。しかし……」

ソーナ「そこまで多くはないので大丈夫ですよ」

深雪「ですが……」

蓮夜「たまには先輩に甘えるのもいいんじゃないか？」

深雪「蓮夜さん……」

ソーナ「神崎さんの言う通りです」

深雪はオレの顔を見てから再び会長に顔を向ける

深雪「わかりました。よろしくお願いします」

ソーナ「はい」

ソーナはそう言つて他の人達を連れて部屋から退出した

蓮夜「じゃあオレたちも。また後でな」

深雪「失礼します」

リアス「ええ」

その後オレと深雪も部屋を出て久しぶりに一緒に帰宅した

一夜

昼間のリアスとの約束通りオレは眷属のみんなと一緒にオカルト研究部の部室へ来た

蓮夜「リアス、来たぞー」

リアス「みんなわざわざ悪いわね」

ユウキ「いえいえ」

達也「そろそろ俺達も行かないといけなかったしな。な？蓮夜」

蓮夜「あー…あははは…」

リアス「さてグズグズはしてられないわ」

そして目的地を教えてもらい、オレ達とリアスの眷属と別々の魔法陣で転移した

到着

一誠「ここが…」

朱乃「使い魔が生息する森ですわ」

一誠「確かに何が出てきてもおかしくないな」

アーシア「そ、そうですね」

一誠は驚き、アーシアは少し恐怖していると、木の上から声がする

「ゲットだぜ！」

声が出た方には白のランニングに短パンで帽子のつばを後ろにして被っている人がいた

「俺はザトウジー・世界一の使い魔マスターを目指してる男だぜ！」

一誠「使い魔…」

アーシア「マスター？」

ザトウジー「オレにかかればどんな使い魔でもゲットだぜ！」

朱乃「彼は使い魔に関してのプロフェッショナルですよ」

一誠「はあ…」

ザトウジー「さーて、どんな使い魔がご希望なんだぜ？」

一誠「そつすねー…可愛い使い魔とかいないっすかねー、女の子系とか」

鼻の下を伸ばして言う一誠

蓮夜「使い魔は有用で強いのにするのが普通だぞ」

一誠「じゃあ蓮夜はどんな使い魔を持つてるんだ？」

蓮夜「ん？オレか？オレは…」

レム「蓮夜くん…」

シノア「あらく。どうやら向こうからいらしたみたいですね」

蓮夜「あらく」

オレを含め眷属のみんなは感じ取ったようだ

一誠「どうしたんだ？」

蓮夜「お前らは少し下がっての方がいいかもしれない…突風に気をつけろよ」

リアス「どういうこと…きやつ！」

リアスが聞いてきたが、その瞬間強い突風が吹いた。その発生源、頭上には3体のド

ラゴンが飛んでいた

蓮夜「やつぱりか…はあ…」

リアス「なんなのあのドラゴン達は！」

ザトウジ「なぜ…なんでこんなところに!!!」

3体のドラゴン達はこっちに向かって急降下してきた

祐斗「こつちに來ますよ！」

朱乃「これはさすがに……」

敵かと思ひ戦闘態勢を取ろうとするオカルト研究部の面々

雪菜「大丈夫です」

慌てふためくりアス達を落ち着かせる雪菜

蓮夜「避けたらダメかな……？」

犬千代「そんなことしたら、地の果てまでも追いかけられる」

蓮夜「ですよねー」

一誠「なんでそんな落ち着いてられるんだ!!!？」

オレが覚悟を決めていると一誠が聞いてきた。答えようとしたがそんな時間はなく3体のドラゴンが光り出し徐々に小さくなつていき人型となつて落ちて來た。そして

オレに直撃

「ぐはっ！」

オレは耐えきれぬはずもなく押し倒される

「蓮ちゃん!」「蓮ちゃん!」「蓮くん!」

「いたたたた……ひ、久しぶり……レア、ミル、ルカ」

「久しぶりじゃないわよ!なんで全然來てくれなかつたの!」

朱乃ほどではないが長い黒髪ロングで雲の刺繍が入った黒い着物を着ているレアがオレの右腕に抱きついている

「蓮ちゃん、あたし寂しかった」

セミロングの白髪に白のレアと同じ着物を着ているミルが左腕に抱きついてくる

「蓮くんのおバカおバカおバカ！」

そして紅いショートヘアで赤の2人と同じ柄の着物を着ているルカがオレの上でオレの胸をぽかぽかと叩く

一誠「おい、蓮夜！お前ユウキちゃん達みたいな美少女を眷属に持ちながらまた美少女達を…なんて羨ましい！なんでお前ばかりー!!!」

オレとレア達とのやり取りに嫉妬で怒り狂う一誠

蓮夜「あー、紹介するから。お前らもいい加減離れろ」

「なら妾もいた方がよいな」

今度は青いセミロングに青い着物を着た少女が姿を現した

ティナ「ティアさん！」

ティア「おーティナ。久しぶりじやのう」

ティナとティアは抱き合って再会を喜び合う

一誠「またもや美少女！部長、部長か…らも…部長？他のみんなもどうしたんだ？」

リアス達はすごい驚いているようだが、一誠はそれがなぜだかわかっていないみたいだ

リアス「蓮夜、その方々は…」

蓮夜「ああ、この3人がオレの使い魔でこつちから”黒龍ミラボレアス”のレア、”紅龍ミラバルカン”のルカ、そんで最後が”祖龍ミラルーツ”のミルの三姉妹だ。そんでそつちでテイナと抱き合ってるのが…」

ザトウージ「五大竜王の1匹、天魔の業龍の”ティアマツト!!!”」

蓮夜「なんだ、知ってたのか」

一誠「えー…!!!でもドラゴンが人間に…なんで…」

蓮夜「こいつらは人型になれるんだ。理由までは知らん」

みんなはレア達の正体を知って固まっている。やっぱりみんな有名なのな

ルカ「蓮くん、この人達は？」

蓮夜「現魔王の1人、サーゼクス・ルシファアの妹、リアス・グレモリーとその眷属達。そつちの短パンは違うが」

レア「そうでしたか。蓮くんの使い魔のレアです。よろしくお願いします。ミル、ルカ。あなた達も」

ミル「は〜い。ミルです」



ルカ「ルカだよ！みんなよろしく！」

リアス「こ、こんなところで伝説の古龍に出会えるなんて…」

朱乃「ではティアアマツトさんも蓮夜さんの…？」

ティア「妾はここにいるティナ・スプラウトの使い魔じゃ。だが使い魔になるため勝負して負けたのは蓮夜にだがの」

それを聞いて再び硬直するグレモリー眷属とザトウジ

一誠「おい、木場。ティアアマツトさんてその…どのぐらい強いんだ？」

祐斗「そうだね。僕も詳しくは知らないけど、魔王に匹敵するって僕は聞いてるけど…」

一誠「はーーーーー!!!じゃあ蓮夜つてそれに勝ったつていうのかよ…どんだけ強いんだよお前…」

アーシア「はわわわわわ!!!」

クロメ「永遠の皇帝は伊達じゃないからね」

蓮夜「なんでお前が威張るんだ？」

クロメは自分のことのように胸を張る。顔は真顔なのにティア「それにちゃんと蓮夜のことを好いておるぞ？」

一誠「蓮夜、お前ってやつはーーーー!!!」

一誠そろそろうるさい。ティアもなに言ってるんだよ…

リアス「じゃあみんなにも…？」

リアスはオレの眷属の方を見て聞いてくる

蓮夜「ああ、タツマキと十六夜以外はみんなそれぞれ使い魔がいるぞ。今日は来ないみたいだがな」

リアス「そう」

蓮夜「さて、オレの使い魔の紹介も終わったし、一誠とアーシアの使い魔を探しに行くか」

そう言つて出発しようとしたが首根つこと両腕を掴まれる

ミル「なくに言ってるのかな、蓮ちやくん」

ルカ「蓮くんどこに行くのかな…？」

レア「蓮くんは私達とOHANASHI☆しましょうね」

3人は笑顔だがこれは普通の笑顔じゃない

十六夜「蓮夜、がんばれよ」

カナリア「あとで迎えに来るから…」

誰も助けてくれないで行ってしまった

それからオレはみんなが戻って来るまで正座でお説教された…

# 月光校舎のエクスカリバー

## 第11話

使い魔を探しに行った次の日、朝6時に目が覚めた。が……

蓮夜（どうしてこうなった……）

犬千代「zzz…… zzz……」

仰向けに寝ているオレの上にトラの着ぐるみのような寝間着を着て寝ている犬千代がいる。ユウキやクロメほど頻繁ではないがこれはよくある事だからあんま気にしない、のだが……

深雪、雪菜「すう…… すう……」

右側を見ると水色の半袖とショートパンツの寝間着を着ている雪菜が寝ている。左側を見ると水色と白のボーダー柄のパーカーとショートパンツの寝間着を着ている深雪が寝ている

蓮夜（この2人つてのは珍しいな……）

まだ6時だし起こすのは早いと思い、レムには悪いがオレも二度寝に突入する

140分後1

また3人より先に起きた。犬千代はともかく深雪と雪菜はそろそろ起きなければいけない時間帯だろう、ということでおレは2人を起こそうと試みる

蓮夜「おーい、深雪、雪菜、そろそろ起きな」

雪菜「うん……」

深雪「…おはよう、ございます……」

蓮夜「はい、おはよう」

2人は目をすぐに目を覚ましゆっくりと起き上がる

蓮夜「はい、おはよう。2人が来るのは珍しいな」

深雪「申し訳ありません」

雪菜「ご迷惑でしたか……?」

蓮夜「いや、別にいいんだけどさ」

オレはまだ犬千代が乗っかってるため起き上がれないが、2人は体を起こし横になっているオレを見て申し訳なさそうな顔をしたので手を伸ばし2人の頭を撫でつつ返答する

蓮夜「とりあえず着替えてきな」

深雪「わかりました」

雪菜「犬千代さんに変なことしないでくださいよ？」

蓮夜「しねえよ！雪菜はオレをそんな風に見てるんだな…」

雪菜「ふふっ、冗談ですよ♪」

深雪「蓮夜さんがそんなことしないのはみんなわかってますから♪」

犬千代「んう…蓮夜…」

少し大きい声を出してしまい、犬千代が薄目でムクツと起きた

犬千代「…蓮夜…」

蓮夜「どした？」

犬千代「…もう少し寝たい…」

蓮夜「…わかった」

それを聞いて犬千代は再び眠りについた。それもオレに抱きついたまま…

蓮夜「もう少しこのままだな…」

雪菜「そうですね」

深雪「では、先に行つてますね」

そう告げて2人は自分の部屋に戻つて行つた。そして犬千代が7時を少し過ぎたあ

たりに起きてるまでそのままだった

学校ではあの三馬鹿トリオが馬鹿やったのに制裁をくださったぐらいで、いつもと変わらなかった

―放課後―

時間は過ぎて夜、今日は達也と黒歌に巡回をしてもらっている。オレは家で待つている。たんだが突然達也から連絡があり、その場所に行ってみると：

パァーン！

その場から何かを叩くような音が鳴り響いた

リアス「少しは目が覚めたかしら？」

祐斗「…すみませんでした」

どうやらリアスが祐斗の頬を叩いたようだった

リアス「どうしたの？あなたらしくもない」

祐斗「調子が悪かったただけです。今日はこれで失礼します」

リアス「祐斗…」

祐斗はそう言い残しその場を去っていく。それを一誠が追いかける

一誠「おい、木場！お前マジで変だぞ」

祐斗「君には関係ない」

一誠「心配してんだろうが！」

祐斗「心配？誰が誰をだい？」

祐斗は一誠に背を向けながら続ける

祐斗「悪魔は本来利己的なものだろうか？」

一誠「お前、何言ってるんだよ」

祐斗「今日は僕が悪かったと思ってるよ。それじゃ……」

一誠「おい、木場！何か悩み事があるなら相談してくれよ。俺達仲間だろ!？」

祐斗はそれを聞いて一誠の方を振り向く。その目はなにかに取り憑かれたような目をしている

祐斗「仲間、仲間か……一誠君は熱いね。でも僕は今基本的なことを思い出したんだ」

一誠「基本的なこと？」

祐斗「生きる意味……僕がなんのために戦っているかってことさ……」

一誠「そりゃ、部長のためだろ？」

祐斗「違うよ……僕は復讐のために戦っている」

そう言い残して去ろうとするが…

蓮夜「おい、祐斗…」

祐斗「はあ…何かな蓮夜く……」

ドガツ!!!

オレは祐斗が言い終わる前に、振り向こうとした祐斗の顔を殴る。達也と黒歌から事情を聞き、祐斗がぼーつとしてたせいで小猫がケガをしたと聞いたからだ。祐斗はその反動ですつ飛ばされた

蓮夜「お前がどう思つてようが知らねえがな、小猫がケガしたのはお前のせいだよな？それは小猫の分だ。そんなもんですんでよかつたな。黒歌はお前を殺そうとしてたがな」

祐斗は頬を抑えフラフラになって去つて行つた。オレは黒歌と小猫のもとへ行き頭を撫でながら言う

蓮夜「今回はオレに免じてこれで許してやってくれ。小猫もすまん」

黒歌「ホントは私がやりたかつたけど、わかつたにや…」

小猫「私は大丈夫です」

蓮夜「リアス、オレらはこれで帰るが、一誠達にいろいろ話しとけよ？」

リアス「ええ、わかつてるわ」



オレはリアスの返事を聞き、達也と黒歌と帰宅した。なぜかそれに小猫もついてきた。ちゃんとリアスには許可取ったらしい

ー次の日ー

今日オレが起きた瞬間”ある気配”を感じた

蓮夜「ジブリール」

ジブリール「お呼びでしょうか、マスター」

オレが小さい声でジブリールを呼ぶと壁からスルスルつと出てきた

蓮夜「この気配は”聖剣”か…？」

ジブリール「はい、間違いないと思います」

蓮夜「そうか」

ジブリールに確認を取り、オレはその気配が何か確信した

ジブリール「ところでマスター…」

蓮夜「ん？」

ジブリール「なぜマスターのベッドに駄猫がいるんですか…？」

オレのベッドでは小猫と黒歌がオレに抱きついて寝ていた

小猫、黒歌『すう……すう……』

蓮夜「昨日小猫と一緒に寝るってなったら、黒歌も一緒にな……お前らも早く起きな」  
オレは2人の肩を揺らしながら起こす

小猫「うん……おはよう、ございます……兄様……」

黒歌「……にや〜」

小猫はすぐに起きたが黒歌はまだ寝ぼけているのかまだ抱きついたらまだ

ジブリール「早くマスターから離れてください、この駄猫」

黒歌「お前に指図される筋合いはないにや、この屑鳥」

蓮夜「(起きてんじゃねえか) 2人とも、朝っぱらからケンカはやめろ」

一触即発状態の2人の頭を撫でながらやめさせる

ジブリール「マスターがそうおっしゃるなら……」

黒歌「気持ちいいにや♪もつと撫でてにや♪」

蓮夜「早くどきなさい」

それからリビングに降りていくと既に全員揃っていたので、みんなで朝食を食べ登校した

―放課後―

登校してすぐにオレはリアスから今日ある者と会談するからオレにも同席してほしいと連絡があつた。誰との会談かは聞いていないがおそらく：

オレらがオカルト研究部の部屋に着いた5分後ぐらいに客人達が現れ、通された2人は白のマントのようなもので身を包んでいる。2人はリアスとは反対側のソファに座つた

「会談を受けていただき感謝する。私はゼノヴィア」

「紫藤イリナよ」

青い髪に緑のメッシュが入つたショートカットのゼノヴィアと茶髪のツインテールの紫藤イリナがそれぞれ簡単にそれぞれの名前をみんなに教えた

リアス「神の信徒が悪魔に会いたいだなんて、どういうことかしら？」

イリナ「元々行方不明だった1本を除く6本のエクスカリバーは協会側の3つの派閥が管理していましたが、そのうちの3本が墮天使の手によって奪われました」

『ツ！』

一誠「奪われた!?!」

そのことを聞いた瞬間、グレモリー眷属のみんなは驚いている

ゼノヴィア「私達が持っているのは残ったエクスカリバーのうち、この

エクスカリバー・デストラクション  
破壊の聖剣と…」

イリナ「私の持つ、この擬態の聖剣の2本だけ♪」

ゼノヴィアは自分の横にある大剣を、イリナは自分の左腕に巻いてある紐のようなのをそれぞれ聖剣だと説明した

リアス「それで？ 私達にどうしてほしいわけ？」

ゼノヴィア「今回の件は我々と墮天使の問題だ。この町に巢食う悪魔に要らぬ介入をされたくないのではな」

リアス「随分な物言いね私達が墮天使と組んで、聖剣をどうにかするとでも…？」

ゼノヴィア「悪魔にとつて聖剣は忌むべきものだ。墮天使との利害が一致するじゃないか」

その言葉を聞いたリアスは明らかに機嫌が悪くなり眉間にシワが寄る。言い方ってもんがあるだろ

ゼノヴィア「もしそうなれば、我々はあなたを完全に消滅させる。たとえ魔王の妹だろうとな…」

リアス「そこまで私を知っているのなら言わせてもらうけど、私が墮天使なんかと手を組むことはないわ。グレモリーの名にかけて、魔王の顔に泥を塗るような真似はしない」

ゼノヴィア「それが聞けただけで十分だ。今のは本部の意向を伝えただけでね。魔王の妹がそこまでバカだとは思ってはいないさ。」

リアス「なら私達が神側、つまりあなた達にも協力しないことも承知しているわけね？」

ゼノヴィア「無論、この街で起こることに一切の不介入を約束してくればいい」

リアス「…了解したわ」

ゼノヴィア「時間を取らせてすまなかった」

リアスが了承の返事をする、ゼノヴィアとイリナは立ち上がり去ろうとするが…

ゼノヴィア「！」

アーシア「？」

ゼノヴィアは立ち止まり、アーシアを見つめる

ゼノヴィア「兵藤一誠の家を訪ねたときもしやと思ったが…」

イリナ「ん？」

ゼノヴィア「アーシア・アルジェントか？」

アーシア「あ、はい…」

ゼノヴィア「まさかこんな地で、“魔女”に会おうとはな」

アーシア「ッ！」

アーシアを見ていきなり魔女と言いつつ

イリナ「あー、あなたが魔女になったつていう元聖女さん？墮天使や悪魔をも癒す能力を持っていたために追放されたとは聞いていたけど、悪魔になつていたとはねー」

アーシア「あ、あの…私は…」

アーシアは下を向いてしまい肩を震わせている

ゼノヴィア「しかし聖女と呼ばれていた者が悪魔とはな、堕ちれば堕ちるものだ」

一誠「てめえ！いい加減にしろ、お前ら!!」

小猫「一誠先輩…」

ゼノヴィアとイリナに突っかかりそうになる一誠を小猫が止める

ゼノヴィア「まだ我等の神を信じているのか？」

イリナ「ゼノヴィア、彼女は悪魔になったのよ？」

ゼノヴィア「いや、背信行為をする輩でも罪の意識を感じながら信仰心を忘れられない者がいる。その子にはそういう匂いが感じられる」

イリナ「へー、そうなの。ねー、アーシアさんは主を信じているの？悪魔の身になつてまで」

アーシア「…す、捨てきれないだけです…ずっと、信じていたのですから…」

イリナの質問に対しアーシアは返事を返すが、さつきよりも肩の震えは激しくなり涙

も流しているようだ

ゼノヴィア「ならば、今すぐ我等に斬られるといい」

アーシア「ツ!!」

ゼノヴィア「君が罪深くとも我等の神は救いの手を指し伸ばしてくるはずだ。せめて私の手で断罪してやろう。神の名の下にな」

リアス「そのくらいにしてもらえるかしら」

さすがにしびれを切らしたのか、リアスがゼノヴィアの言葉を止める

リアス「私の下僕を、これ以上貶めるのなら…」

ゼノヴィア「貶めているつもりはない。これは信徒として当然の情け」

バツ!

ゼノヴィアが不敵な笑いを浮かべ返答した瞬間、怒りを露わにした一誠がアーシアとゼノヴィアの間割って入った

リアス「イツセー!」

朱乃「いけませんわ!」

アーシア「イツセーさん!」

一誠「アーシアを魔女と言ったな!!?」

ゼノヴィア「少なくとも、今は魔女と言われる存在にあると思「ふざけんな!!!」…」

ゼノヴィアが言い終わる前に一誠がその言葉を遮る

一誠「自分達で勝手に聖女に祀り上げといて、アーシアはな……！ずっと一人ぼっちだったんだぞ！」

アーシア「イツセーさん……！」

ゼノヴィア「聖女は神からの愛のみで生きて行ける。愛情や友情を求めると、もとより聖女になる資格などなかったのだ」

一誠「何が信仰だ！何が神様だ！アーシアの優しさを理解できない奴らなんかみんなバカ野郎だ！」

それを聞いてアーシアもリアスも顔が少し明るくなる

蓮夜（一誠、いいこと言うじゃねえの）

ゼノヴィア「……君はアーシア・アルジェントのなんだ？」

一誠「家族だ！友達だ！仲間だ！お前らがアーシアに手を出すのなら、オレはお前らが全員敵に回しても戦うぜ!!!」

一誠はアーシアを守るため啖呵を切った

ゼノヴィア「ほう、それは私達協会全てに対する挑戦か？一介の悪魔が大口を叩くね」  
リアス「イツセー、おやめなさい」

蓮夜「いい加減にしろ」



ゼノヴィア「ん？」

蓮夜「話が終わったんならさつきと帰れよ。それなのにグダグダと。なに？お前らそんなに暇なの？」

イリナ「なんですって！」

ゼノヴィア「最初から気になっていたが、お前は何者なんだ。そんな幼女を膝に乗せて戯れている変態がなぜこんなところにいる？」

オレはこいつらの言っていることにイライラしていたためアンナを膝に乗せて頭を撫でながら癒されていた。それに対してのゼノヴィアの発言にオレの背後から2人に向かって強力な殺気が放たれた

『ツッ！』

グレモリー眷属のみんなを含め全員大量の汗を掻いてその殺気に気圧されている

蓮夜「みんなよせ」

犬千代「でも、こいつら蓮夜のこと侮辱した…」

シノア「蓮夜さんの悪口は許せませんね〜」

クロメ「今ここで殺つてもいんだよ…？」

蓮夜「大丈夫だから」

そう言ってみんなに殺気を抑えるように言い渡しみんなはそれに応じて殺気を出す

のを止めた

蓮夜「こんなもんか」

ゼノヴィア「なんだと…」

ゼノヴィアは大剣を構えだす

蓮夜「そういうのを待ってたのがそこにいるみたいだぞ？」

オレはそう言いながらドアの方を親指で指差す。全員がその方向に目をやるとそこには壁にもたれかかっている祐斗がいた

祐斗「丁度いい、僕が相手になろう」

ゼノヴィア「誰だ、君は？」

祐斗「君達の先輩だよ…」

リアス「祐斗…」

## 第12話

会談を終了後、協会の2人と祐斗と一誠がゼノヴィアとイリナと戦うことになった。それを見届けるためオレ達も旧校舎の近くにある空き地へきている

朱乃「よろしいのでしょうか、勝手に教会の者と戦うなんて…」

リアス「これはあくまで非公式の手合わせよ」

リアスと他のグレモリー眷属のみんなは心配そうに見ている

イリナ「上にバレたらお互い面倒だし」

ゼノヴィア「死なない程度に、楽しもうか」

イリナは自分の左腕に結んである紐のようなものを変化させ、聖剣本来の姿に戻す。ゼノヴィアは大剣に巻きついている布を取っ払い構える。2人とも準備は整ったようだ。すると…

祐斗「はははは！」

ゼノヴィア「笑っているのか？」

祐斗「ああ、倒したくて壊したくて仕方なかったものが目の前にあるんだからね」

ジャキン！ジャキン！ジャキン！

祐斗が返答した瞬間、地面から何本もの剣が出現した

ゼノヴィア「魔劍創造か、思い出したよ。聖劍計画の被験者の中で処分を免れた者がいたという噂をね…」

祐斗とゼノヴィアは今にも始まりそうだ。一方で…

イリナ「兵藤一誠君！」

一誠「な、なんだよ！」

イリナ「再開した懐かしの男の子が悪魔になっていたなんて、なんて残酷な運命の悪戯！聖劍の適性を認められて遙か海外に渡り、晴れてお役に立てるよ思ったのに！はあー、でもこれも主の試練！でもそれを乗り越えることで、私はまた一歩真の信仰に近づけるんだわー！」

完全に自分に酔っている。てか早く始めろよ…

イリナ「さあ、一誠君！私のこのエクスカリバーで、あなたの罪を裁いてあげるわー！アーメン！」

一誠「なんだかよくわかんねえが、ブリスデッド・ギア赤龍帝の籠手！」

『Boost』

こつちもようやく始まった

蓮夜「どう見る？ユウキ、雪菜、クロメ」

オレは騎士の2人と剣の使いに長けているクロメに尋ねる

ユウキ「完全に先輩達の負けかな」

雪菜「そうですね。木場先輩は冷静さを失ってますし、兵藤先輩の方はそれ以前の問題かと……」

蓮夜「そうだな」

クロメ「でも相手も私達には到底及ばない」

蓮夜「お前らに勝てる奴がいたら大変だつての」

そんな感じで戦闘分析していると、なにやら必殺技のような掛け声が聞こえた

一誠「ドレスー！ブレイカー！」

イリナ「ひっ！」

一誠「まだまだ！」

イリナ「なんなのよー!!」

一誠は果敢にイリナに触れようとしているみたいだが、単調すぎてことごとく避けられている。一誠の顔を見ると絶対口クでもない技なんだろうなとすぐにわかった

一誠「俺のエロをー！甘く見るなー！」

一誠はイリナに飛びついたが、イリナはしゃがんで避けたため一誠の伸ばした手はそ

のすぐ後ろで見ていた小猫とティナの触れてしまった

キイイイイイーン!

一誠が触れた部分に魔法陣が出現し：

ドサツ!

一誠「いでっ!」

パチンツ!

一誠が地面に倒れこんだ瞬間、魔法陣が発動：

ビリビリビリビリ!!

小猫「……………」

ティナ「きやああああああああ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

2人の服が全て破かれた。オレは一誠が顔を上げる前に  
!!!

ドガツ!

一誠「ぬわあああああああああああああ!!」

一誠を蹴り上げ、自分が着ていたブレザーをティナにシャツを小猫にかけた

落ちて来た一誠にイリナは

イリナ「あのね、これは天罰だと思うの。だからこんな卑猥な技は封印すること、い

い？」

一誠「……だ」

イリナ「え？」

一誠「嫌……だ……」

一誠はその助言を断り、頭を上げてまだ何かを言おうとするが……

ガシツ！

蓮夜「てめえの意見なんてどうでもいいんだよ……」

オレは殺気を込めながらそう言い放ち、一誠の頭を掴み持ち上げる

一誠「あががががが  
!!!!」

ドゴツ！

オレの1割も出していないパンチを顔面に受ける

蓮夜「十六夜、わりーがそいつ半殺しにしてきてくれ」

十六夜「わかった」

十六夜は一誠の髪を引っ張り連れて行った

蓮夜「わりーが、手合わせはここまでにしてもらう」

オレはそう言って泣いているティナのもとに行く

蓮夜「ティナ、大丈夫か？」

ティナ「お兄さん……」

オレに抱きついて泣いている。どうにかして泣き止んで欲しく考えていたら、カナリアがオレの耳元で呟いた

カナリア「どこでもいいからキスしてあげて」ボソツ

蓮夜「はあ!？」ボソツ

カナリア「大丈夫だから！」ボソツ

そんなんで泣き止むはずがないと思いつながら、違う方法が思いつかないので、半ばヤケになって実行した

チュツ

ティナ「え、えええええ!!／／／／／／／／／／／／お、お兄さん?／／／／」

蓮夜「これで元気出してくれ」

ティナの頬にキスするとティナは顔を真っ赤にして雪菜の背後に隠れた

それと丁度同じタイミングで祐斗の方の戦闘は終わったようだ

ゼノヴィア「次はもう少し冷静になって立ち向かってくるといい、”先輩”」

地面に倒れている祐斗はゼノヴィアにそう言われ、悔しさを滲ませる

ゼノヴィア「ここまでだな：そつちも終わったみたいだな、イリナ」

イリナ「え、ええ…」

ゼノヴィア「さて、これでよろしいか？リアス・グレモリー」



リアス「ええ、聖剣がトドメでなかったことは、主人として感謝するわ」  
これで終わるかな。と思いきや…

ゼノヴィア「次は君だ」

蓮夜「は？」

くだらない争いごとが集結したと思いきや、今度はオレにその矛先を向けてきた  
イリナ「さつきなんかバカにされたからねー」

蓮夜「はあ…わかった。じゃあお前ら、”神”を相手にしてみるか？」

オレはニヤツとした顔をして言う

イリナ「はい？何言ってるの？」

ゼノヴィア「そんなこと不可能に決まっているだろ」

蓮夜「どうかかな？ジブリアル」

オレが言うことに全く信じていない2人の目の前の空中に魔法陣が展開されジブ  
リアルが現れる。その姿は天から舞い降りた天使そのものだった

ゼノヴィア、イリナ「っ！」

ジブリアル「なにか御用でしょうか、マスター」

蓮夜「急に呼び出してすまないな。その教会の回し者の2人がオレにケンカ売って  
きたから、どうせならジブリアルと戦わせようかなって…」

ジブリール「ほう、人間ごときで我がマスターにケンカを吹っかけるとは…殺してしまっても構わないということでしょうか」

顔では笑っているが、完全にヤル気モードのスイッチが入ってしまったようだ。2人はというと…

ゼノヴィア「…そんな…まさか…」

イリナ「…嘘、でしょ…」

相当驚いているようで、持っていた聖剣ですら落としてしまっている

蓮夜「あー、一応殺しちゃダメだ」

ジブリール「さすがはマスター！寛大なお心！ではどうか死なないように足掻いてご覧ください」

そう言った瞬間、一気に相当な殺気を放った。するとゼノヴィアとイリナは…

ドサツ！

ジブリールの殺気にやられ倒れた

ジブリール「おや、この程度でマスターに…身の程を弁えていただきたいですね」

蓮夜「やっぱ耐えられなかったか。こんなことのために呼び出して悪かったな、ジブリール」

ジブリール「いえ、マスターのご命令とあらば」

ジブリールはオレに向かって頭を下げてくる。

蓮夜「じゃありアス、後のこと頼んだ」

リアス「ええ、今日はありがとう」

帰宅する前にリアスに一言かける

蓮夜「んじゃあ、よつと」

帰る前にオレはティナの前に行きティナをお姫様抱っこする

ティナ「つ!!!お、お兄さん!!?これはどういう!?!」

蓮夜「ん?裸足でいるのはあれだろ?それともジブリールと一緒に先に帰るか?」

ティナ「い、いえ!このままが…いい、です…: / / /」

蓮夜「仰せのままに。じゃあ帰るぞー」

首だけ振り向いてみんなの方を向くと女性陣はものすごい顔をしていた

クロメ「ティナだけズルくない?」

ユウキ「ボクもさげたい!」

犬千代「…ズルい」

蓮夜「いや…ティナはこんな格好なんだから仕方ないだろ…」

そんな不満に満ちている女性陣と蓮夜のやり取りを達也は見ながらため息を一つつ

いていた

## 第13話

ゼノヴィアとイリナが会談をしに来た次の日のお昼、オレは一誠に呼び出されてあるカフエに来ている。それとこの前初めて会った生徒会の唯一の男子である 元四郎も来ていた

一誠「わりーな、呼び出しちまって」

匙「気にするな」

蓮夜「で、なんか用か？」

一誠はオレらを呼び出した理由を話し始めた。どうやら祐斗を手伝うために聖剣を破壊しようと考えているようだ

匙「しよ、正気かお前！」

一誠「頼む！この通り！」

一誠はテーブルに手をつき頭を下げる

匙「ふざけるな！あ…」

大きな声を出したので周りの人に見られ、すぐに座る匙

匙「聖剣なんかと関わるだけで会長からどんだけ怒られるかってのに、それを破壊しようだと！それこそ殺されるわ！お前のとこのリアス先輩は厳しいながらも優しいだろうが、俺んとこの会長は厳しくて厳しいんだぞ！絶対に断る!!!」

ソーナは酷い言われようだな…そう言つて匙は去ろうとするが、生垣を越えたあたりで進まなくなつた

匙「ん…あれ？」

一誠「あん？あ！」

生垣の向こう側を見ると、そこには小猫が巨大なパフエに向かいながら匙の制服の裾を掴んで止めていた

小猫「やはりそういうことだったんですね」

蓮夜「で、オレはなんで呼ばれたんだ？」

一誠「そりゃー、蓮夜にも手伝つてほしいからだよ！」

蓮夜「正直、オレにはどうでもいいことなんだが…」

オレは手を頭の後ろにやつて目を閉じながらそう言つと、何かがおれの体に引つ付いた感覚がした。目を開けて確認してみると小猫が抱きついていて

小猫「…兄様、お願いします…」

そして上目遣いでお願ひさる

蓮夜「うぐっ！…わかったよ」

一誠「よっしゃー！」

あの小猫の上目遣いをお願いされたら断れんわ…

そして今度は小猫もあわせてどうするか一誠が意見を出した

小猫「教会側に協力？」

一誠「あいつら、聖剣を消滅させるとか言ってただろ？」

小猫「最悪破壊してでも回収したいようですね」

一誠「木場はエクスカリバーに勝って復讐を果たしたい。あいつらはエクスカリバーを奪い返したい。目的は違ってても結果は同じ。だからこつちから協力を願うんだ」

蓮夜「素直に受け入れるとは思わんがな」

一誠「当たって砕けろだ！木場が今まで通り、悪魔を続けられるのなら思いつくことはなんでもやってやる！」

小猫「まずはあの2人を見つけなくちゃいけませんね」

小猫は立ち上がる

小猫「部長達に許可なく動くのは不本意ですが、仲間のためです」

蓮夜「オレはあの2人にいい印象持たれてないから行かない方がいいんじゃないか？」

小猫「兄様……」

蓮夜「うぐっ……」

また抱きついて上目遣いをしてきた

蓮夜「わかったからそんな顔すんな！」

小猫「〜♪」

オレは抱きついてきた小猫の頭をわしやわしやすする。意外と気持ち良さそうだし、  
そしてオレ達は教会の2人を探すため移動した

匙「……なあ、オレはいなくつてもいいだろう？無敵のルークと無敵の悪魔が参加してく  
れたんだからさ……」

一誠「戦力は多い方がいいんだよ」

匙は既にやる気を失っているようだ

蓮夜「なかなか見つからんな」

一誠「第一、こんな街中に白いローブを着たやつなんて……」

一誠がそう呟いた瞬間、オレ達は見た……

「えー、迷える子羊にお恵みをー」

「天の父に変わって我らにお慈悲をー」

一誠「…普通にいたな」

小猫「はい」

オレ達は2人に声をかけ、腹が減ってるようなので近くのアミレスに入った

アミレスに来たはいいのだが…

ゼノヴィア「美味しい！日本の食事は美味しいぞ！」

イリナ「これよこれ！アミレスのメニューこそ私のソールフード！」

蓮夜（どんだけ腹減ってたんだよ…）

ものすごい勢いで食べているから話をしようにもタイミングがない

ゼノヴィア「なんとということだ…信仰のためとはいえ、悪魔に救われるとは世の末だ」

イリナ「ああ、私達は悪魔に魂を売ってしまったのよ」

なんちゆうこと言ってたんだよ。奢ってもらったって

蓮夜「食い終わったんならさっそく話を聞いてもらうぞ？一誠」

一誠「あ、ああ…オレ達はエクスカリバーの破壊に協力したい！」

ゼノヴィア「なに？」



その後、なぜこういう経緯に至ったかを一誠が説明した

ゼノヴィア「話は理解した。1本くらいなら任せてもいい」

イリナ「えっ!?!ちよつとゼノヴィア!」

一誠「マジで!?!」

意外な返答に一誠と小猫は驚き、匙は悔しそうにしている

ゼノヴィア「向こうは墮天使の幹部、コカビエルが控えている。正直、私達だけで聖劍3本の回収するのは辛い…」

イリナ「それはわかるわ!けれど…」

ゼノヴィア「無事生還できる確率は3割だ」

イリナ「それでも高い確率だと覚悟を決めて私達はやって来たはずよ!?!」

ゼノヴィア「ああ…私達は端から自己犠牲覚悟で上から送り出されたんだからな」

イリナ「それこそ信徒の本懐じゃないの…」

ゼノヴィア「そうだな。だがこの受け入れにはメリットがある」

ゼノヴィアがそう言うてオレの方に目を向けてくる

蓮夜「ん?」

ゼノヴィア「君は一体何者なんだ…?」

蓮夜「何者って、お前らが嫌いなただの悪魔だけだ」

「イリナ「じゃあなんで」あの方」があなたの味方にいるのよ!」

蓮夜「そりゃあ、あいつがそう望んだからだな」

ゼノヴィア、イリナ「…」

一誠「えつと、とりあえず協力を許してくれるんだよな…?」

ゼノヴィア「ああ」

ゼノヴィアはオレの方を見ながら一誠の問いに返事した

その後、オレ達は近くの公園に移動した。そこで祐斗と会った

祐斗「なるほど。でも正直、エクスカリバー使いに承認されるのは遺憾だね」

ゼノヴィア「随分な物言いだね。君はグレモリー眷属を離れたそうじゃないか」

それを聞いて祐斗は目つきを鋭くする

ゼノヴィア「はぐれとしてここで切り捨ててもいいんだぞ…?」

祐斗「そういう考えもあるよね」

2人は今にもやり合いそうな雰囲気になる。それを一誠が割って止める

一誠「待てよ! 共同作戦前にケンカはやめろって!」

ゼノヴィア「君が聖剣計画を恨む気持ちは理解できるつもりだ」

祐斗は手に発動させていた魔法陣を解く

ゼノヴィア「あの事件：私達の間でも嫌悪されている。だから計画の責任者は異端の烙印を押され、追放された。」

イリナ「バルパー・ガリレイ：皆殺しの大司教と呼ばれた男よ」

祐斗「バルパー……その男が：僕の同士を……」

ゼノヴィア「手先にはぐれ神父を使っていると云っただろう？」

一誠「フリードか……？」

ゼノヴィア「教会から追放されたもの同士が結託するのは珍しくない。今回の件にバルパーが関わっている可能性は高いな」

祐斗「：それを聞いて、僕が協力しない理由がなくなったよ」

どうやら話をついたようだ

ゼノヴィア「食事の例はいつか返すぞ、赤龍帝の兵藤一誠、永遠の皇帝の神崎蓮夜」

イリナ「うふっ♪」

ゼノヴィアがそう言い、イリナはウインクをして去って行った

一誠「ふー、よかつたなーおい」

匙「よかつたじゃねー！斬り殺されるどころか、悪魔側と教会側の全面戦争に発展してもおかしくなかつたんだぞ！」

祐斗「一誠君……」

匙がキレてるところに祐斗がよってきた

一誠「お前には何度も助けられてるからな」

祐斗「君達は手を引いてくれ」

一誠「えっ!?!」

蓮夜「あん?」

祐斗の発言に少しキレそうになる

祐斗「この件は僕の個人的な憎しみ、復讐なんだ。君達を巻き込むわけには……」

一誠「俺達眷属だろ!仲間だろ!違うのかよ!?!」

祐斗「……違わないよ。でも……」

祐斗が話しているのを遮り、一誠が祐斗の両肩に強く手を置く

一誠「大事な仲間をはぐれになんてさせるか!俺だけじゃねえ、部長だつて悲しむぞ

!いいのかそれで!?!」

祐斗「リアス部長……」

祐斗は一誠の言葉で思い出したのか、祐斗とリアスの出会いを話し出した。それを聞

き終わると……

匙「うおー!木場ー!お前そんな辛い過去を……こうなつたら会長のお仕置きがなんだ

！兵藤！俺も全面的に協力させてもらおうぜ！」

一誠「お、おう。そうか。サンキュー……」

匙が祐斗の過去を聞いて涙している傍で、小猫が祐斗の袖を掴んでいた

小猫「私もお手伝いします」

祐斗「小猫ちゃん……？」

小猫「祐斗先輩がいなくなるのは寂しいです……」

蓮夜「おい祐斗。小猫にここまで言われて断るわけないよな？」

祐斗は少し笑顔になる

祐斗「参ったな……小猫ちゃんにまでそんなこと言われたら、僕の一人で無茶なんてで

きるわけないじゃないか……」

一誠「じゃあ！」

蓮夜「フツ」

祐斗「本当の敵もわかったことだし、みんなの行為に甘えさせてもらおうよ」

ようやく、ここからだな

祐斗「蓮夜君……これまでのこと、すまなかつた……」

祐斗はオレに頭を下げて謝罪してきた

蓮夜「仲間を大切にしろ……オレからはそんだけだ」

祐斗「ありがとう」

オレ達はこれより聖剣破壊計画を実行する

次の日の夜、一誠達はすぐさま行動を起こすらしくと連絡が入った。オレは少し寄るところがあるから途中から加わることにした

蓮夜「少し出てくる。クロメ、シノアは一緒に来てくれ」

クロメ「ん、わかった」

シノア「わかりました」

今回の付き添いをクロメとシノアに頼む。人選はなんとなくだ…

ユウキ「えー！なんでクロメなの!?ボクもー!」

クロメだけズルいと駄々をこねるユウキ

蓮夜「また今度な」

と頭を撫でてやると、「んー♪」と気持ちよさそうになり少しは機嫌を直してくれた  
クロメ「ユウキはゆっくりりしてて大丈夫だよ」ドヤア

蓮夜「お、おい…」

ユウキ「むう…なんかよくわかんないけどムカつくー!」

クロメのドヤ顔でせっかくユウキの機嫌が直ったのにまた…

蓮夜「ほら行くぞ、2人とも。じゃあ行つてくるな」

クロメ「うん♪」

シノア「では、参りましょう♪」

まったく、抱きついてルンルン気分になるようなところに行くわけじゃないのにな…

十六夜「蓮夜」

蓮夜「ん？どした十六夜」

十六夜「今回の黒幕の…なんてったつけ…？まあいいや、そいつ俺にやらせろ」

蓮夜「ん、別にいいぞ。現れたら呼ぶわ」

十六夜「サンキュー」ヤハハ

十六夜の闘争本能丸出しの笑みを見て、オレ達は出発する

やって来たのはとある家

シノア「蓮夜さん、ここって…」

クロメ「この気配…」

蓮夜「2人が思ってるのはおそらくあってる」

何かを感じ取った2人にそう答え、目の前の家のインターホンを鳴らす

ピンポン

『はい』

そこから聞こえてきたのは野太くオヤジ臭い声だ

蓮夜「オレだ」

『おう、空いてるから入ってきてくれ』

その返事を聞いて中に入ると付いてるか付いていないのかわからないぐらいの電気が付いている。そんな中をリビングのような部屋のドアを開ける。そこにはさっきの声の主だろうオヤジがソファアーに座っている

蓮夜「邪魔するぞ」

「おう。それで、話ってなんだ？蓮夜」

クロメ「ねえ、蓮夜。このおじさん誰？」

「おじさん!？」

シノア「クロメさん、その言い方は失礼なのは…？」

クロメの発言にげんなりするオヤジが1人

蓮夜「ああ、2人ともこいつが」ただの人間じゃない”ってのはわかるだろ？」



クロメ、シノア（コクツ）

「おい、蓮夜！こいつつて…」

蓮夜「やかましい。こいつはこれでも”墮天使の総督”なんだ」

2人はそれを聞いて少し驚いたようだが、すぐに平常になった

クロメ「じゃあこの人があの”アザゼル”？」

シノア「クロメさん、一応様をつけたほうがいいと思いますよ？」

蓮夜「こんなやつに様なんてつけんでいい」

アザゼル「おまつ！はあ…まあいい。で、要件は？」

蓮夜「今この町で起きてること知ってんだろ？」

アザゼル「…一応な。だが今回のことは完全なコカビエルの独断だ」

蓮夜「オレが聞きたいのは、コカビエルを消していいのかという確認だ」

アザゼル「…すまんが、できれば生け捕りにしてほしい。こっちからも使者を送る」

蓮夜「善処しよう…だが約束はできない」

プルプル

オレがそう言い終わると携帯がなった。ポケットから取り出し画面を見ると小猫からだった

ピッ

蓮夜「もしもし、小猫か？」

『兄様、すぐに来てほしいです！』

蓮夜「ん、わかった。少し待ってろ」

ピッ

オレは携帯を切る

蓮夜「ということでオレ達は行く」

アザゼル「ああ」

蓮夜「2人とも行くぞ」

クロメ「うん」

シノア「はい」

そう告げてアザゼルの家を後にして小猫の気配がする方へ向かった

小猫達がいると思われている場所へ到着すると

「魔劍創造!!!」  
ソードパース

既に戦闘は始まっているようだった

蓮夜「おつす、お待たせ」

一誠「蓮夜！」

小猫「兄様！」

姿を見せると小猫が走って寄って来た

蓮夜「連絡ありがとな、小猫」

小猫「はい！」

蓮夜「状況は？」

小猫「あそこにいるはぐれ悪魔祓い（エクソシスト）が聖剣を所持しています。今は一誠先輩からドラゴンの力を譲渡された祐斗先輩が戦ってる最中です」

蓮夜「了解」

小猫から現状を聞き終えた頃、建物の中から声がした

「魔剣創造か」  
ソードパース

祐斗「誰だ!？」

声の主が暗闇の中から姿を現した

「使い方次第では無敵の力を発揮する神セイクリッドギア器だ。フリード、まだ聖剣の使い方がなつて

いないようだな」

フリード「おお、バルパーの爺さん」

祐斗「なに!!」

一誠「それじゃあこいつがゼノヴィアが言ってた!」

小猫「聖剣計画の首謀者」

匙「!」

祐斗「バルパー・ガリレイ!!!」

バルパーが現れたことによって怒りが込み上げてきたのか、祐斗の目つきが変わる  
バルパー「いかにも」

フリード「そう言うがね爺さん、このクソトカゲのペロペロが邪魔で邪魔で!」

そういえばフリードの足に絡みついているものはなんだ? 見るからに匙の神器みたい  
だが

バルパー「自分に流れる因子を刀身に込めろ」

そう聞かされて実行するフリード

蓮夜「へえ」

一誠「気をつけろ! ヤバいぞ!!」

聖剣は光輝く。フリードがそれを振り下ろすと足に絡みついていたものを簡単に斬つ  
た

匙「うおっ!」

フリード「これでパワーアップってか？おやおやく？それに増援ですか？クソ悪魔がどんだけ増えたところで関係ないですが、ね！」

そう言つてフリードは振り返り、祐斗に襲いかかる

フリード「聖剣の餌食になってもらいましようかあああ!!」

フリードは飛び跳ね、祐斗に向かって聖剣を振り下ろす

ジャキン!!!

それは祐斗の顔の正面で”巨大な鎌”によつて止められた

フリード「あれー？」

止めていたのはシノアだった。そしてフリードの背後からクロメが剣をフリードの首元に当てている

シノア「別に何をどうこう言われるのはいいんですけど、愛しの蓮夜さんをバカにされるのは腹が立ちますね〜」

クロメ「殺すよ？」

2人とも殺気立ったちやつて。おつかない

蓮夜「おい祐斗、そいつの聖剣破壊してもいいか？」

祐斗「蓮夜君…しかし…」

蓮夜「しかしもカカシもないんだよ。いいのか？悪いのか？」

焦れつたくなってきたので、少し殺気を出しながら聞き直した

祐斗（コクツ）

祐斗は黙って頷いた

蓮夜「2人とも、やっていいぞ」

シノア「わかりました」

クロメ「こいつもやっていいの？」

蓮夜「それはダメ。どんなクズ野郎でもお前らが手を汚すのはオレが認めん」

クロメ「むく…わかった」

2人はオレの言葉を聞き、1度剣を弾く

フリード「うおっ！」

弾かれたことでフリードは態勢を崩してしまう

シノア「しーちゃん」

シノアがそう呼ぶと鎌が反応し、何やら黒いものが具現化された。それは鎌から放たれ素早くフリードの前に移動し、自分の神器であるでフリードの持っている聖剣を叩き

割った

フリード「ギャアス!!!」

バルパー「なん、だと…」

ゼノヴィア「なにがあつた！」

それと同時にゼノヴィアとイリナも到着したようだ。おそ：

バルパー「おいフリード！ここは一旦引くぞ！」

フリード「が、合点!!！」

フリードとバルパーは聖剣を砕かれて勝機がなくなったのを認識したのか、目くらましを使い逃げた

ゼノヴィア「くそ！追うぞイリナ！」

そう言ったゼノヴィアを先頭に祐斗とイリナが2人を追いかけて行つた。ちなみにオレとシノア、クロメは当然見えていた

その後リアスとソーナがそれぞれ自分の女王を連れて転移して来て、一誠と匙がお仕置きとして尻叩きをくらつていた。オレはというと：

蓮夜「2人とも、ご苦労さん」

聖剣を破壊してくれたシノアとクロメの頭を撫でて労つていた

シノア「いい♪」

クロメ「何もできなかった」

クロメはトドメをさせなかったからなのか少し御機嫌斜めになっていた

そしてオレらはリアス達に声をかけ、帰宅した

次の日にリアスから瀕死の状態で倒れていたイリナを保護したと連絡があつた。そして黒幕、コカビエルと会的したとも……どうやらコカビエルはこの町で戦争を起こそうとしているらしい。それを聞いたオレは久々に



キレイた…

## 第14話

オレは現在眷属のみんなを連れて駒王学園に向かっている。コカビエルの気配が学園から感じたためだ

学園に着くとそこには結界が張られておりソーナとその眷属達はその結界を支えているようだ

蓮夜「ソーナ」

ソーナ「蓮夜さん」

蓮夜「遅れた。入れてくれ」

ソーナ「はい。中では既にリアス達が戦闘を開始している模様です」

蓮夜「わかった。結界の方は大丈夫なのか」

ソーナ「…悔しいですが、正直堕天使の幹部クラスの攻撃を受けたらひとたまりもないでしょう」

蓮夜「了解だ。深雪、黒歌、レム、アンナ、ジブリールはここで結界の方を手伝ってやってくれ」

深雪「わかりました」

黒歌「わかったにや。白音をお願いするにや」

レム「こちらはお任せください」

アンナ（コクツ）

ジブリール「かしこまりました」

オレは5人に指示し、他のみんなを連れて中へ入った

中ではソーナに聞いた通りリアス達が戦闘中のようだ。そのまま直進しているといきなり特大な魔力の塊がこつちに近づいてきた

蓮夜「おいおい、あれこつちに落ちてきてねえか？」

雪菜「そのようですね」

いくら巨大ではあるが全員焦ってはいない。まあ当然か

蓮夜「達也、いいか？」

達也「わかった」

オレの頼みに達也は簡単な返事をして自分の胸のところにあるホルスターから銃型

の神器を取り出し、近づいてくる魔力に向かつて引金を引く。するとそれは跡形もなく消えてしまった。いや、”分解”されてしまった

コカビエル「ん？何者だ？こいつらの仲間か？」

蓮夜「どうも。まあそんなところだ」

なんか偉そうに踏ん返り返ってるコカビエルに一応返事しといた

バルパー「完成だ！」

祐斗「しまった！」

ゼノヴィア「クッ!!」

コカビエルがいるのとは別の場所でその声と共に光が辺りを覆い、その発光現には聖劍よりも少しばかり聖の気が強い剣があった

バルパー「ははは！これでついに!!!」

その光は柱のように空へと続いて行く

コカビエル「ははははは！ではこちらも新たに増えたことだ、余興を続けようじゃないか!!」

そう言つてコカビエルは腕を前に出す。すると地面に魔法陣が出現しそこから頭が3つある犬つころが4匹出てきた

リアス「またケルベロス！」

犬千代「また？」

朱乃「さつきも私達はケルベロスと戦っていたのです…それがまた…」

そんな説明を聞いているとその犬つころがどもがこつちに襲いかかってきた

蓮夜「んじやあユウキとクロメが右の、タツマキは真ん中の右、犬千代とティナは真ん中の左、達也は左。雪菜とシノアは聖剣の方よろしく」

オレの指示に対しみんな素早く行動する

ユウキ「はああああ!!!」

クロメ「…」

犬つころの正面からユウキが気合の入った突きをひと突き。そして横からクロメが上から下に一太刀入れて戦闘は終了した

グオオオオオオオ!!!

タツマキ「うっさいわよ！」

犬つころの遠吠えにイラついたタツマキは能力でそいつを勢いよく空高くまで上げ、そして一気に急降下させ地面に激突させる。はい終了

犬千代「ていつ！」

犬千代が犬つころの足を全て切り落とす

パアアアアアン!!!

ティナが打った弾が3つの頭がそれぞれの脳天を貫き終了

達也「…」

達也の方は既に終わっていたようで、影も形もない相手に神器を向けて立っている達也が目に入る

蓮夜「みんなお疲れ。わかってはいたが早いな」

全ての戦闘：いや、戦闘と言えないな。蹂躪が完了したのは始まって30秒もたつていなかった

コカビエル「ははははは!!これはおもしろい、おもしろいぞ!!!」

蓮夜「うるせえな。リアス、あいつももう殺つていいか?」

リアス「待つて!こいつは私達にやらせて!」

蓮夜「お前らにできんのか?」

リアス「お願いよ…」

リアスは真つ直ぐな瞳でオレを見てきた。それぐらい本気なのであろう

蓮夜「わかった。だがムリはするな。できなければオレらがやる」

リアス「ええ、感謝するわ」

コカビエル「ほお、お前がくるのか?リアス・グレモリー。お前らにこのオレを楽しませられるのか?」

リアス「っ！くらいなさい！」

リアスはさつきオレ達が見たのと同等の魔力を放つ。しかしそれは簡単に受け止めてしまった。続いて朱乃も攻撃を試みたが、それも受け止められてしまった。しかもコカビエルはその受け止めた魔力を合わせリアスに放った

朱乃「部長！」

朱乃がリアスの前に出て庇うように防御しようとしたが

朱乃「きやああああああ！」

防壁は簡単に破れもろに食らってしまった。攻撃を受けた朱乃が落下していく

バシツ

地面に叩きつけられる寸前にオレが抱き抱える形で受け止めた

蓮夜「大丈夫か？」

朱乃「…ごめんなさい」

蓮夜「…カナリア、頼む」

カナリア「うん！」

蓮夜「リアスも降りてこい」

リアス「…わかったわ」

カナリアはオレの言いたいことがわかったのかカナリアの神器であるマイクを持つ

て歌い始めた。するとリアスと朱乃の傷はみるみる治っていく

カナリア「♪」

リアス「これは…」

朱乃「あらあら…」

蓮夜「カナリアの神器の能力、愛を唄う者〔ハートウオーミング〕だ。こいつが歌うと怪我は治るし体力や魔力は回復する。じゃありアス、あいつはオレらが始末するぞ」

リアス「…ええ。悔しいけどお願いするわ」

蓮夜「てなわけだ。十六夜、あとやっていいぞ」

十六夜「待ってました！じゃあ、遠慮なく！」

そう言つて十六夜はコカビエルの方に向かって行く

蓮夜「そうだ！」

オレは振り向き、朱乃の頭に手を置いて

蓮夜「よく主人を守ったな」

そう言つて頭を撫でてやった

『あー!!!』

蓮夜「ん？」

ユウキ「蓮夜！ボクも頑張ったよ!?だからボクにも！」



クロメ「私も……！」

ティナ「お兄さん……」

犬千代「蓮夜……！」

タツマキ「なにやつてるのよ！あんたは！」

なぜかおねだりされたり、怒られたり、涙目で抱きつかれたりされた。ちなみに朱乃は顔を赤くして俯いてしまった

蓮夜「お前から落ち着け。これから十六夜のひまつ……戦いを見なきやいけないだろ？達也とリアスも見えないで手伝え」

達也、リアス「はあ……！」

蓮夜（なんだその溜息は！）

もういいやと思ひ十六夜の方に目を向けるとまだ始まつてはいなかった

コカビエル「今度はお前が相手か？」

十六夜「ああそうだ」

コカビエル「では少しでも楽しませてくれ！」

十六夜「ヤハハ！」

そして戦闘は開始された。つておいおい、遊ぶ気まんまんだな。こりゃあ長引くか。そう言えば雪菜達はどうなったんだ？

十六夜とコカビエルの戦闘が始まったころ聖剣側では…

バルパー「君らには感謝している。おかげで計画が完成したのだからな」

祐斗「完成…?」

バルパー「君達の持つ因子は聖剣を扱うまでの数値にならなかった。そこで1つの結論に至った。被験者から因子だけを抜き出せばいい！」

祐斗「っ!!」

バルパー「そして結晶化することに成功した。これはあのとときの因子を結晶化したものだ」

バルパーはそう言って自分の懐からガラスのようなものを取り出した

バルパー「最後の1つになってしまったがね！」

フリード「キャハハハハハ!!俺以外の奴らは因子に身体が追いつかなくて死んじまったんだぜ！」

フリード残りの聖剣が全て融合した剣で一誠達に襲いかかる

バルパー「偽善者めが！私を追放したのに私の研究は取り上げていきおった。どうせあのミカエルのことだ、被験者から因子を抜き出しても殺してはいないだろうがな！はははははは!!」

祐斗「僕らを…殺す必要は、なかったはずだ…どうして！」

バルパー「お前らは極秘実験の実験材料だ。用済みになれば廃棄するだろう」

祐斗「僕たちは主のためと信じてやってきたんだ…それを…それを…実験材料に廃棄…?」

アーシア「ひどい…」

リアス「…」

アーシアはそれを聞いて涙を流す。リアスも暗い顔で俯いている。するとバルパーは持っている結晶化された因子を祐斗の前に放り投げた

バルパー「欲しければくれてやる。もはやさらに完成度の高いものを生産するところまできているのでな」

祐斗はそれを拾い、何かを思い出すように両手に握りしめる

祐斗「みんな…」

一誠「許せねえ…じじいてめえ!!!」

祐斗「バルパー・ガリレイ…あなたは自分の研究、欲望のためにどれだけの命を弄んだ」

祐斗が手を握りしめたまま立ち上がると、祐斗の手の中が光り出しそれはやがて祐斗の周りに人のような形を作った

祐斗「僕は、ずっと…ずっと思っていたんだ。僕が、僕だけが生きていいのかっ

て：僕より夢を持った子がいた。僕よりも生きたかった子がいた。僕だけが平和な暮らしをしていていいのかって…」

ああ、そういうことね。まったく

蓮夜「いいに決まってんだろ」

祐斗「…蓮夜君」

蓮夜「そいつらはなんのためにお前を逃したと思ってるんだ？復讐のためか？オレはそうは思わない」

オレは一呼吸置いて続ける

蓮夜「そこにいるやつらはこう思ってたんじゃないか？”自分達の分も生きてくれ”ってさ」

そう言い終わると祐斗は涙を流し、周りにあつた光が祐斗を覆った

小猫「暖かい」

一誠「なんだ？涙が、止まらない！」

クロメ「蓮夜、あれ」

蓮夜「ああ、”至った”な」

やがて光は消え、祐斗はなにか吹っ切れたのか顔つきが変わる

祐斗「蓮夜君に言われて気づいたよ。あの子達は復讐なんて望んでいなかった、願っ

てなかったんだ。でも僕は目の前の邪悪を討ち倒さなければならぬ…第2、第3の僕達を生み出さないために！」

そう言つて祐斗は神器を発動し剣を持つ

バルパー「フリード！」

フリード「はいな！」

呼ばれたフリードが間に入る

バルパー「ふん、愚か者めが。素直に廃棄されていればよいものを！」

一誠「木場あああ！フリードの野郎とエクスカリバーをぶつ叩け！あいつら思いを無駄にするな!!」

祐斗「一誠君…」

リアス「やりなさい祐斗。あなたはこのリアス・グレモリーの眷属、私の眷属はエクスカリバーごときに負けはしないわ！」

朱乃「祐斗君！信じてますわ！」

小猫「フアイトです！」

アーシア「木場さん！」

祐斗「みんな…」

フリード「あー、なーに感動シーン作っちゃってんですか？僕ちゃんもう限界。とっ

とと君らぶった斬って気分爽快になりましたよかねー!」

フリードも剣を構える

蓮夜「雪菜とシノアは手え出さなくていいぞ」

雪菜「わかりました」

シノア「はーい」

さて、祐斗の新たな力を拝見しますかね

祐斗「僕は剣になる。僕の魂と融合した同志達よ、一緒に越えよう。あのときの果たせなかつた想いも願いも今部長やみんなのために…魔劍創造!!!」

祐斗がそう唱えると白と黒の剣が出現した

祐斗「双覇の聖魔劍〔ソード・オブ・ピストレイヤー〕…聖と魔を有する剣の力、受けるといい!」

バルパー「聖魔劍だと!ありえない!反発する2つの要素が混じり合うなど、そんなことあるはずがないのだ!」

蓮夜「へえ、あれが…」

雪菜「あれが木場先輩の…」

シノア「禁<sup>バランストレイカー</sup>手ですか」

ゼノヴィア「グレモリー眷属のナイト、まだ共同戦線は活きているか?」

祐斗「…だと思いたいね」

ゼノヴィア「ならば共に破壊しよう、あのエクスカリバーを…」

いつの間にやらゼノヴィアが祐斗の隣を歩いている

祐斗「…いいのか？」

ゼノヴィア「あれはもはや聖剣であつて聖剣ではない。異形の剣だ」

祐斗「わかった」

グサツ！

ゼノヴィアは自分が持つている聖剣を地面に刺し、右腕を横に上げた

ゼノヴィア「ペトロ、パシリオス、デュオニシウス、そして聖母マリアよ…我が声に

耳を傾けてくれ」

ゼノヴィアがそう唱えると光る魔法陣が展開され、そこから鎖で繋がれた剣が出てき

た

ゼノヴィア「この刃に宿りし聖闘士セイントの御名において、我は開放する！」

ジャキイイイイイン!!

最後の詠唱を終え鎖から解き放たれた剣をゼノヴィアは取って構える

ゼノヴィア「聖剣”デュランダール”！」

蓮夜「ほお、これはまた…」

また珍しいものが出てきたことにオレはそんなことを呟いた

バルパー「馬鹿な！私の研究ではデュランダルを扱える領域まで達していないぞ！」

ゼノヴィア「私はそいつやイリナとは違う。数少ない天然物だ」

バルパー「完全な適正者、真の聖剣使いとでも言うのか！」

ゼノヴィア「こいつは触れたものはなんでも切り刻む暴君でね：私の言うことも碌に聞かない。それゆえ異空間に閉じ込めておかないと危険極まりないんだ」

フリード「そんなのありですかー!!!」

キイイイイイ!!

ここにきて新たな聖剣が、しかも伝説とまで言えるものが出てきたことに苛立ちを見せるフリードがゼノヴィアに斬りかかるが、それはデュランダルによつて簡単に弾かれた

フリード「ここにきての超展開!!」

ゼノヴィア「所詮は折れた聖剣！この聖剣デュランダルの相手にはならない!!」

フリード「クソツタレ!!!」

ヒュン!

斬りかかるゼノヴィアに対し速度を上げ回避するフリード

フリード「そんな設定いらねんだよ！」



しかしその背後には祐斗が迫っていた

祐斗「そんな剣で!!」

ガキイイイン! キイイイン!!

祐斗「僕達の想いは断てない!!!」

バキイイイイン!!

そして何度めかの斬り合いで祐斗がフリードの剣を折った

フリード「折れたああああ!!」

そしてフリードは地面に膝をつく

フリード「マジですか…? この俺様がこんなクソ悪魔(ご)のときに…! ざけん…グアッ

!」

ザシュツ!

フリードは肩を斬られたようだ

祐斗「はあ…はあ…見ていてくれたかい? 僕らの力はエクスカリバーを越えたよ!」

バルパー「なんということだ! 聖と魔の融合など理論上…!」

ジャキイイン!

バルパー「ヒイツ!」

祐斗「バルパー・ガリレイ! 覚悟を決めてもらおう!」

バルパー「そうか！わかったぞ！聖と魔、それらを司るバランスが大きく崩れているのであれば説明がつく！つまり魔王だけではなく、神も……！」

ジャキイーン!!

その言葉が終わる前にバルパーに光の槍が突き刺さった。そしてバルパーは光となつて消えてしまった

蓮夜「おいおい十六夜、なにやってんだよ」

十六夜「ヤハハ、ちつと遊びすぎたわ」

バルパーに光の槍を投げたのは仲間であるはずのコカビエルだった

コカビエル「バルパー、お前は優秀だったよ。そこに思考がいくのも優秀であるということだろう」

リアス「コカビエル、これはなんの真似？」

コカビエル「オレはそいつがいなくても別にいいんだ。さて、余興にも飽きた。そろそろ戦争のための準備をするとし……」

ドゴツ!

コカビエル「グハッ!!」

コカビエルは頭上から殴られ勢いよく地面に衝突した。殴った正体はもちろんオレ蓮夜「戦争？やらせるわけねえだろ……十六夜、遊びは終わりだ。お前がやらないなら

オレがやる」

十六夜「いや、わりーがオレにやらせてくれ」

蓮夜「なら最初からやれよ」

十六夜「ヤハハ！」

そしてオレは祐斗のもとへ行き

蓮夜「悪かったな。バルパーにとどめをさせてやれねえで」

祐斗「大丈夫だよ。第2、第3の僕達を増やすのを防げたのは同じだから」

蓮夜「サンキュな。まああとはゆっくりしてくれ。そのうち終わるから」

祐斗「じゃあお言葉に甘えさせてもらうよ」

祐斗はそう答えてリアス達のもとへ戻って行った

蓮夜「さて、あとはこのままにも起きないで終わってくれるのを祈るだけだな」

ヤベツ！今オレフラグ立てた!?

## 第15話

さて、十六夜とコカビエルが戦い始めて数分が経った

コカビエル「ぐああああ!!」

もう何度目だろうか。コカビエルが吹っ飛ばされているのを見るのは…

コカビエル「はあ…はあ…おもしろい、おもしろいぞ!!これが戦闘だ!!!」

十六夜「うるせえ!」

ドゴツ!!!

コカビエル「グハツ!!」

十六夜のアツパーにより上空へ舞い上がるコカビエル

コカビエル「ふふふ…ははははは!!お前最高だ!この高揚感は魔王以上だぞ!!」

十六夜「そうかよ」

コカビエル「だが本当にここにいる連中はよくここまで戦うものだ。特にその聖剣

使いはな!」

蓮夜（おいおい、まさか言うつもりか?）

コカビエル「使える主はもういないというのに」

コカビエルが言った一言にここにいるほとんどのやつに衝撃が走る  
リアス「っ！っ！どういうこと!？」

ゼノヴィア「コカビエル！主がいらないとはどういうことだ！」

コカビエル「おっと口が滑った」

ゼノヴィア「答えろ!!コカビエル！」

特に協会側のゼノヴィアはそれを聞いて声を荒げている

コカビエル「ははははは!!そうだな、そうだった。戦争を起こそうとしているのに  
今更隠す必要はなかったな。先に三つ巴の戦争で四大魔王と共に神も死んだのさ!!!」

『っ!!』

オレ達以外の奴らは驚愕の顔をする。当然か…

ゼノヴィア「う、嘘だ…」

リアス「神が…死んでいた…馬鹿なことを、そんな話聞いたこともないわ!」

コカビエル「あの戦争で悪魔は四大魔王と多くの上級悪魔を失った。墮天使も幹部以  
外のほとんどを失った。もはや純粋な天使は増えることすらできず悪魔とて純血種は  
貴重はずだ」

アーシア「…そんな…そんなこと…」

これまでずっと主のことを信じてきたアーシアにとってはショックが大きいようだ

コカビエル「どの種族も人間に頼らねばならないほど落ちぶれた。天使も墮天使も悪魔も。三大勢力は神を信じる人間を残すためにこの事実を封印したのさ」

それを聞いた瞬間ゼノヴィアは地面にへたりついてしまった

ゼノヴィア「嘘だ…嘘だ…」

コカビエル「そんなことはどうでもいい。オレが耐え難いのは神と魔王が死んだことで戦争継続は無意味だとなり戦争が終局したことだ！耐え難い！耐え難いんだよ!!!」

アーシア「主はもういらっしやらない…じゃあ私達が捧げる愛は…?」

コカビエル「ふっミカエルはよくやっているよ。神の代わりに天使と人間をまとめているのだからな」

蓮夜（あ、そんな中ジブリアル取っちゃったのオレだ…）

ゼノヴィア「大天使ミカエル様が神の代行だと…では、我等は…」

コカビエル「システムさえ機能していれば神への祝福も悪魔祓いもある程度操作できるしな」

アーシア「っ!」

一誠「アーシア!」

アーシアはショックのあまり倒れそうになる

ゼノヴィア「無理もない…私だって理性を保っているのが不思議なくらいだ…」

コカビエル「聖と魔を司る者がいなくなったためにそっちのやつのようなイレギュラーが存在する。本当なら聖と魔が融合することはありえないからな。そしてオレはお前らの国を土産に新たな戦争を引き起こす!!」

リアス「また、つまらない意地を張って…私のせいで……」

一誠「ふざけんな!!お前の勝手な言い分で俺達の街を、仲間達を消されてたまるかあ!!!」

一誠が思いをぶちまける

一誠「それに俺はな、ハーレム王になるんだ!!!お前なんかには計画を邪魔されたくねえんだよ!」

犬千代「…台無し」

ごもつとも。しかし…

蓮夜「あちよつといいか」

リアス「蓮夜?」

蓮夜「とりあえず神はいない。これは事実だ」

ゼノヴィアは絶望の顔をする

蓮夜「だがな、別に祝福が受けられないわけじゃねえ。ジブリール」

ジブリール「はい、マスター」

オレが名前を呼ぶとすぐにジブリールが現れた

ゼノヴィア「あなた様は…」

コカビエル「!まさか!!」

蓮夜「そのまさかだろ。ジブリール、お前、天界にいたときどんな立場だったっけ？」

ジブリール「私は嘗て神と並ぶに値する者として扱われておりました」

『つ!!』

ジブリールの言ったことにまたもやみんなが驚愕する

蓮夜「じゃあミカエルから許可もらえればお前を神として扱っていいってことだよな？」

ジブリール「その通りでございます。しかし今はマスターの眷属となった身ですので天界の事情に口を出すことはできないと思います…」

蓮夜「それだけわかれば十分だ。ありがとうな」

ジブリール「いえ♪」

お礼の意味でジブリールの頭を撫でる

蓮夜「今聞いた通り神はいないがその神と同等のやつならここにいます。これが終わったらミカエルに許可をもらいに行ってくる。そうすればみんな今まで通り祈りを捧げ



ることができる」

「じゃあ今まででやっつけてこなかったのかって言う質問はやめてほしい。ただ単に忘れてたなんて言えない」

蓮夜「さて話すことも終わったしそろそろ終わりにしてくれないか？十六夜」

十六夜「もうちよつと遊びたかったけどな。しょうがねえ」

蓮夜「あ、殺すのはダメらしい」

十六夜「マジか!?わかったよ」

これでやつと終わるなあ

コカビエル「既に勝ったつもりとは…舐められたものだ！」

十六夜「はっ！そんなことやる前からわかってたことだ」

コカビエル「舐めるな小僧！」

光の剣を持ち十六夜に斬りかかるコカビエル。しかし…

十六夜「しやらくせえ！」

十六夜はパンチでその剣を破壊し、さらにもう1発、今度はコカビエルの顔面に直撃した

コカビエル「ガハッ!!!」

さつきよりの威力は強かったのでコカビエルは意識を失い戦闘不能となった

蓮夜「はあ長った。十六夜おつかれ」

十六夜「別に疲れてねえよ」

蓮夜「そんなこと知つとるわ」

蓮夜（ん？）

そんな会話をしていると頭上に気配を感じる

「ほお墮天使の幹部を軽々とか…」

十六夜「なんだありゃ？」

「アザゼルの使いでできた。よければこの結界を解いてくれないか」

蓮夜「あ、ああ。みんなもういいぞ」

そう言うのとみるみる結界が消えていく。そして声の発生源が降りてきた

リアス「あれは！」

朱乃「白龍皇！」

蓮夜「お前か」

白龍皇『コカビエルとあそこのはぐれ祓いは引き取らせてもらおう』

蓮夜「ああ、オレは問題ない。リアスもそれでいいか？」

リアス「え、ええ…」

白龍皇『では…』

白龍皇が2人を抱え帰ろうとすると…

『無視か白いの』

一誠の籠手から声がする

白龍皇『生きていたか赤いの』

どうやら赤龍帝と白龍皇の対面らしいな

それからしばらくして白龍皇は飛んでいきコカビエルとの戦闘は終わった。しかしオレはその後もすぐには休むことはできなかつた。ジブリアルを連れて天界に行つてミカエルと会いいろんな設定をしなければいけなかつた。その際に天界にいるやつにとつ捕まりそうになつて逃げまくつてたし、ジブリアルもジブリアルでその追つ手を排除すると言つて天界滅ぼそうとするしで大変だつた

帰つたら帰つたらで学校の修復を手伝えと休まる時間はなかつた…主に学校を壊した原因である十六夜と、その主人の立場であるオレは強制的に働かせれた…

「つゝかゝれゝたゝ」

「嘘をつけ」

「なんだよ、達也。そりや瓦礫なんてプリンぐらい軽いけどさ、おんなじ作業を何時間もさせられて精神的にまいつてんだよ」

「なら蓮夜くん、どうぞぞ」

達也と話しながらオレが精神的にやられてソファでぐったりしていると隣に座るレムが自分の膝をポンポンとしていた

「どうぞ、とは？」

「そんなの決まってるじゃないですか。膝枕ですよ♪」

「それは雰囲気からなんとなくわかったが、なぜ？」

「レムの膝枕で癒されてほしいからです♪」

「いや、でもなあ〜…」

おそらくとても癒されるのであろうがちよつと恥ずかしいと思つて頭をかく

「嫌、ですか…？」

「別に嫌とかじゃなくてだな…」

「蓮夜くんにはレムは必要ありませんか…？」

「いやいや、話が飛躍しすぎだろ」

「では♪」

レムは一度シユンとして顔をするが再び目をニツコリ笑顔に戻り膝をポンポンする

「…じゃ、じゃあ…ちよつとだけ」

「はい♡」

オレはレムの期待の眼差しを裏切ることができずゆつくりとレムの膝に頭を乗せた。

しかもそれだけではなくオレの頭を優しく撫で始めた。オレは不覚にも気持ちいいと思ってしまった

「レム…」

「はい？」

「いつもありがとな」

「っ！」

オレはいつもの感謝をレムに伝えて眠りについてしまった

レムは蓮夜が眠りについたとわかってからも頭を撫で続けた。いつもは凜としてしっかりした顔つきをしているが、寝ているときは柔らかくなるその寝顔を見ながら

「蓮夜くん…」

その最中にレムの頭にはいろんな映像が流れてきた。楽しかったこと、嬉しかったこと。不思議なことにレムの顔には笑顔が消えなかった

「レムも感謝してますよ」

蓮夜はレムのことをどう思っているのか。蓮夜の中でのレムはどんな存在なのか。そんな不安は1mmもなかった。彼はいつでもレムのことを、そして家族みんなのことを

第一に考えてくれている。それを思うだけでレムの心はポカポカしてくる

「レムの英雄は、世界一です」

レムはそつと蓮夜の額に口づけをした

「はは〜ん」

「っ!!!」

レムは不覚にもその場を見られてしまった。それも一番見られたくないであろうシノアに

「ななななななな!!!」

「はい静かに。蓮夜さんが起きちゃいますよ」

レムが恥ずかしさと驚きで奇声をあげるところをシノアが人差し指でレムの口を押さえて止める

「レムさんも大胆になりましたね〜」

「そ、そんなことは…」

「まあいいですよ。それにしても気持ちよさそうに寝てますね、蓮夜さん」

「そうですね。いつもは蓮夜くんが寝る前にレム達が先に寝てしまっているので、蓮夜くんの寝顔は新鮮です」

さつきまで恥ずかしさで耳まで真っ赤にしていたレムも今は少し落ち着いたようで

シノアと一緒に蓮夜の寝顔を堪能している

「さて、私も失礼しまゝす」

シノアは少しだけ蓮夜の眠っている姿を見てからそつと蓮夜の上に乗った

「ちよつ！シノアさん！」

「いいじゃないですか、レムさんは膝枕してるんですから」

「それはそうですね」

「んん〜…」

「っー」

シノアの振動と二人のやりとりの声で蓮夜が起きてしまった

「んあ、シノアか…？」

「は、はいはい。あなたのシノアですよ」

「シノアは…もう少し、素直になって…いいんだぞ…zzzz…」

寝ぼけている蓮夜はシノアの体に手を回し抱きしめ、そのままシノアを抱き枕にして再び眠ってしまった。シノアの顔は蓮夜の胸に埋まっているため見えないが、トマトのように赤くなっているだろう

レムは蓮夜の言葉を聞いてムスツと頬を膨らまし軽くデコピンを食らわした

## 停止教室のヴァンパイア

### 第16話

コカビエルとの戦闘から数日後の今日、オレは生徒会室に来ていた

蓮夜「ソーナ来たぞー」

深雪「蓮夜さん！」

蓮夜「おお深雪、お仕事お疲れさん」

深雪「んっ…はい♪」

生徒会室のドアを開けて中に入るとオレに気づいた深雪がガタンと立ち上がってオレに駆け寄ってきた。オレは目の前にきた深雪の頭を撫でて迎える

ソーナ「お待ちしておりました」

深雪と戯れているとソーナが奥の部屋から出て来た

蓮夜「その他人行儀止めろ」

ソーナ「ふふっ、これは癖のようなもので我慢してください」

蓮夜「まあいいや。で？オレに用ってなんだ？」

ソーナ「もうすぐプール開きになります。それに伴いプールの掃除をしなくてはなり



ません。いつもは我々生徒会がその任を受け持っていますが、今回は先日の騒動の件もありオカルト研究部の皆さんにお願いをしました」

ソーナはメガネをクイツとあげ続ける

ソーナ「そこであなたにも手伝って欲しいのです」

蓮夜「マジかー」

ソーナ「もちろんタダでは言いません。掃除後のプールで遊んでもらって構いません」

蓮夜「それはユウキ達が喜びそうだな」

深雪「そうですね」

蓮夜「でもなー」

ソーナ「何かご予定が？」

蓮夜「いや掃除は別にいいんだけど…プールで遊ぶってなったら水着だろ？」

ソーナ「そうですね」

蓮夜「深雪達の水着姿を見せたくねえ」

だって一誠いるし…

深雪「蓮夜さん／＼／＼」

深雪はなんで顔を赤らめる？

深雪「で、でも皆さん遊びたいと思いますよ？」

蓮夜「…そうだな。んじやまあ引き受けた」

ソーナ「ありがとうございます」

蓮夜「要件はそれだけか？んじやあ帰るか。深雪はもう帰れんのか？」

ソーナ「ええ」

深雪「会長、でもまだ仕事が…」

ソーナ「あとは私達でも片付けられます。深雪さんはもう大丈夫ですよ」

深雪「でも…」

深雪は本当に真面目だな

蓮夜「深雪、時には人に頼るのも大事だぞ？」

深雪「…そう、ですね。わかりました。会長、後のことはよろしくお願いします」

深雪は丁寧に礼をしながらそう伝えた。オレもソーナに挨拶をして生徒会室を出た。帰宅中深雪はずっと満面の笑みであった

ー次の休日ー

オレはそんなに人数もいらなだろうと思ひ、プールで遊びたいやつつてことで何人

かを連れて学校のプールに来了。オカルト研究部のみんなは既に集まっていた

ゼノヴィア「なぜオカ研がプール掃除をするんだ？」

リアス「本当は生徒会の仕事なのだけど、コカビエルのことがあったから今年がうちが担当してあげることにしたの。でもみんなより一足先にオカルト研究部だけのプール開きよ」

一誠「プール開き!!」

蓮夜「オレ達もいるけどな」

一誠「うおおお!!ビバプール掃除!プール掃除万々歳だぜ!!!」

小猫「一誠先輩顔がいやらしいです」

蓮夜「一誠先に言っとくぞ。うちの連中や小猫を変な目で見てみる?海に沈めるからな」

オレは最後の方をドスの効いた声で言い放つ

一誠「ひゃい!!」

リアス「さあオカルト研究部の名にかけて生徒会が驚くほどピカピカにするのよ!」

全員『はい!』

残念ながら全員は参加ができなかった。深雪は生徒会の仕事があり、達也も風紀委員で急な仕事が入ってしまったらしい。十六夜とタツマキはただ単にめんどくさいと

言つて来なかつただけだが。まあその二人はまだしも深雪は楽しみにしてたから夏休みに入つたら海にでも連れて行くか

―更衣室（男子）―

一誠「水着だ水着だ！」

祐斗「イツセー君」

一誠「ん？」

祐斗「僕は誓うよ。たとえ何者かが君を狙つていたとしても僕は君を守るから」

一誠「うおっ！なんだよ急に!？」

そういうのつて男同士で言うものなのか？

祐斗「君は僕を助けてくれた…君を助けないでグレモリー眷属の騎士は名乗れない  
や」

普通は王を守るんじゃないのか？

蓮夜「じゃあオレお先な」

一誠「おい！蓮夜！」

オレは祐人と一誠を残して先に更衣室を出ていく

―更衣室（女子）―

ユウキ「プール楽しみだなあ…ねえカナちゃん！」

カナリア「そうだねユウちゃん！」

雪菜「お二人ともまずはお掃除ですよ」

ユウキ「わかってるよ。相変わらず雪菜は真面目だなあ」

クロメ「雪菜は蓮夜に水着姿見てもらいたいだけ」

雪菜「ちよっ！クロメさん!!! なななに言ってるんですか!! 私は…そんな、こと……」

犬千代「…昨日の夜すごい真剣に選んでた」

雪菜「犬千代さんまで!!」

シノア「選びに選んだその水着を着た雪菜さんのその美貌で蓮夜さんを悩殺ですよ

」

雪菜「シノアさんまで！」

みんなにいろいろ指摘されどどん顔顔を赤くする雪菜

レム「まあまあみなさん、その辺で…」

アンナ「(ジー)」

レム「アンナさん？」

アンナ「…レムの胸おつきい」

レム「ふえ!!!」

小猫「…」

テイナ「…」

レムもどどん顔を赤くする

リアス「みんな早く着替えなさい」

その後プール掃除は滞りなく進みいよいよ遊ぶ時間となった。プールの水はというと魔法でオレと朱乃とレムで入れた

ユウキ「気持ちいい!!」

カナリア「蓮ちゃんもおいでよー!」

蓮夜「あとでなー」

水を入れ終わった瞬間にユウキとカナリアが飛び込んでいった。まあ一番楽しみにしてたのがあの2人だからな。ユウキは紫のビキニ、カナリアは白を貴重に水色の水玉が入ったビキニを着ている。二人とも似合ってるな

オレはというと普通の藍色の海パンにパーカを羽織った状態でプールサイドで座っている。するとクロメがジャージの上を着ている雪菜を（強引に）連れて来た

クロメ「ほら雪菜」

雪菜「ま、待つてくださいいクロメさん！まだ心の準備が…」

クロメ「それさつきから聞いている」

雪菜「で、でも…」

蓮夜「どうした？」

クロメ「雪菜が水着見て欲しいんだって」

蓮夜「えっ？」

シノア「昨日頑張って選んでたんですよ？」

雪菜「い、いや違うんです！えっと、あの…その…」

クロメが言ったことにビックリしたがその後のモジモジしている雪菜が可愛かった

クロメ「ああ焦れたい！えい！」

雪菜「え！クロメさん！待つて!!」

しびれを切らしたクロメが無理矢理雪菜のジャージを剥いだ。その下には白と水色のボーダー模様のビキニタイプで、下はフリル付きのスカートタイプの水着姿だった

クロメ「どう？」

シノア「可愛いですよね？」

蓮夜「おう、すごくかわいいぞ」

雪菜「ひやつ、ありがとう…ごじやいまふ…」

クロメ「雪菜カミカミ…」

雪菜「っ！／＼／＼ 私！泳いできます!!」

そう言つて雪菜はプールへダイブしていった

蓮夜「あらら」

クロメ「雪菜は恥ずかしがり屋さんだね」

蓮夜「だがそこも可愛いところだ。クロメもそれ似合ってるな」

クロメは黒のバンデウ水着を着ている

クロメ「ありがと♪私も少し泳いでくるね」

蓮夜「おう」

雪菜とは反対にクロメはゆっくりとプールに向かって歩いて行った

蓮夜「シノアは行かないのか？」

シノア「うん。遊びたいは遊びたいですけど」

シノアは顎に人差し指を当てて考える素振りをするもすぐにオレの隣に座った

シノア「少し休んでから行きます」



蓮夜「そうか」

シノアは黄色のフリル付きのセパレートタイプの水着で下はスカートになっている

蓮夜「レムも行ってきたいいんだぞ」

レム「レムは蓮夜くんのお側にいたいのでここでいいですよ」

蓮夜「そつか」ナデナデ

レム「はい♡」

と言いながらレムはオレの横に座ってオレに寄りかかって肩に頭を乗せてくる。その姿は水色のフリル付きの水着の上にジャージを前を開けて羽織っている。しかもそれオレのじゃん…

その後少し休んでオレもプールに入った。ティナや犬千代、アンナの小学生組と遊んだり、泳げないという小猫に泳ぎを教えたりした

ティナは黄緑のセパレート型水着、犬千代は黄色と白のストライプ（トラ柄）のフィットネス水着、アンナは黒のフリル付きで赤のワンピース型の水着を着ていた。小猫はなぜか普通のスク水で全員の格好を見てすごく悔しがっていた

そしてまた休憩している

カナリア「蓮ちゃ〜ん」

甘い声をきかせたカナリアが後ろから抱きついてきた。嫌な予感…

カナリア「オイル塗って♪」

蓮夜「は？」

カナリア「聞こえなかった？オ・イ・ル塗って♪」

蓮夜「なんでオレが？」

カナリア「私がそうして欲しいから」

蓮夜「はあ、貸せ」

カナリア「わーい♪ありがと♪」

昔海行つて断つたら一晩中わんわん泣いたからな…断つたらめんどくさい…

「あらあら、カナリアちゃん羨ましいですわねえ」

その声と共に背中に柔らかいものが押し付けられる

蓮夜「朱乃か？」

朱乃「うふふ、ねえ蓮夜くん。私にもそれお願いできますか？」

蓮夜「ダメだ」

朱乃「あら、なぜですか？」

蓮夜「なんでもだ」

朱乃「つれないですわねえ」

朱乃は渋々ではあったが離れてくれた。そして…

蓮夜「っ!？」

いろんな方向から我が眷属達の冷たい視線と殺気に似たものを感じ取った。この連中だけならまだしもなぜか家の方角からも感じる

蓮夜「勘弁してくれ」

カナリアにオイルを塗る際に水着を解いて背中が露わになっっているとときに一誠が卑猥な目をしていたので軽く潰しておいたのはまた別の話だ

そしてなんか一誠が用具室の方で一悶着あったみたいだが、そんなん気になつてられんかった

こうして波乱のプール掃除が終わった

## 第17話

波乱のプール掃除を終えて次の日。オレらはいつも通りのメンバーで登校しているのだが、朝から学校のある場所から一誠に似た気を感じていた。校門のところに着くと既にその気を発する者と一誠達が接敵していた

蓮夜「よお、みんな。それとお前は、白龍皇かな？」

一誠「蓮夜！」

「ほお、さすがは永遠の皇帝。いかにもオレは白龍皇のヴァーリだ」

白龍皇が名乗ったと思いきやいきなりオレに何かする気なのか足を踏み込む。が…

雪菜「無駄です」

ユウキ「ボクの蓮夜に何する気かな？」

クロメ「ユウキ、蓮夜は私の」

蓮夜「誰のものでもないんだがな…」

ヴァーリが動き出す前に雪菜、ユウキ、クロメが既にヴァーリの喉元にそれぞれの剣を当てていた。オレの後ろでもみんなは臨戦態勢は整っているようだ

ヴァーリ「…さすが最強の眷属達だな。今のオレではこのうちの1人にも勝てないだろう」

蓮夜「よくわかってるじゃねえか」

ヴァーリ「身の程はわきまえているつもりだ」

蓮夜「それはいいことだ。3人とももういいよ」

オレの声で剣を消して戻ってきた3人には「ありがとな」と言つて頭を撫でてやったヴァーリ「さて、兵藤一誠。君は今何番目に強いと思う？まあ未完成ではあるが、上から数えて4桁。1000か1500までの間くらいだろう。いや、宿主のスペックからするといいもつと下か。ちなみにそこにいる永遠の皇帝はベスト3に入るだろう」

蓮夜「…何が言いたい」

ヴァーリ「兵藤一誠は貴重な存在だ。十分に育てた方がいい、リアス・グレモリー」

一誠「部長！」

一誠が振り返つた先にはリアスが立っていた

リアス「白龍皇…何のつもりかしら？あなたが墮天使と繋がりを持っているなんて、

必要以上の接触は…」

ヴァーリ「ふん。二天龍と称された赤龍帝（ウエルシュドラゴン）と白龍皇（パニシングドラゴン）、赤い龍と白い龍に関わつた者は過去碌な生き方をしていない。あなた

はどうなるんだろうな」

嫌味な言い方でリアスに言うヴァーリ。それに対してヴァーリを睨むリアス

ヴァーリ「今日は戦いにきたわけじゃない。俺もやることが多いんでね」

ヴァーリそう言って去って行った。リアス含めてグレモリー眷属のみんなは深刻な顔をしてヴァーリの背中を見続けている

蓮夜「おいおい、深刻に考えすぎだ」

リアス「蓮夜」

蓮夜「一誠、もしあいつがリアスを攻めてきたらどうする？」

一誠「決まってるんだろ！ぜってえ守る!!」

蓮夜「なら、強くないとなあ」

一誠「っ！」

オレはニヤリと笑い学校に向かって行く

授業が始まって一誠はすぐには来なかった。どうやら保健室に行っていたようだ。そして帰ってきた一誠は現在松田と元浜に殴られていた。一誠が転校してきたゼノ

ヴィアとも知り合いだつてというのが2人には気に食わなかったみたいだ

オレはその光景を後にソーナに話があるため生徒会室に来たのだがどうやらリアスに会いに旧校舎へ行つたみたいだからオレもそつちへ向かつた

蓮夜「あーいたいた。ソーナ」

ソーナ「あら蓮夜さん。何か御用ですか？」

リアス「蓮夜、私達もいるのだけれど」

ソーナにしか声をかけなかったのを怒つたのか、リアスがそう言つてきた

蓮夜「あ、ああ。こんにちはリアス」

リアス「ええ」

どうやら機嫌は治らなかつたらしい

ソーナ「それで、ご要件は？」

蓮夜「授業参観の日、オレ授業休みたくてな。先生に助言してもらえねえかな？」

ソーナ「理由によりますね」

蓮夜「理由は、うちには親がいなくてな。代わりにみんなの授業をオレが見たいなつて」

ソーナ「そういうことでしたらお任せください」

蓮夜「助かる」

ソーナはオレの理由を聞いて承知してくれた

朱乃「うふふふ、蓮夜くんはお優しいのですね」

話を聞いていた朱乃がオレの腕に抱きついてきた

蓮夜「よせ朱乃」

朱乃「いいではありませんか♪」

蓮夜「でもあつちから全速力で走ってきてるやついるし」

オレが指差した方向から涙を流して大声を出す一誠が走ってきていた

一誠「蓮夜ー！！なんて羨ましいことを！！！」

朱乃「あらあら、うふふ♪」

蓮夜「はあ、勘弁してくれ」

ー翌日ー

今日から始まった授業参観には多くの保護者の方々が来ていた。その中オレは今日  
はみんなの授業を見ることが目的であるからいつもの制服ではなく私服で来ている

「まずはアンナ達からにするか」



オレはそう決めて小等部に足を進める。助かることにここに通っているアンナ、ティナ、犬千代の3人は同じクラスなので一度で済む

3人のクラスに入るとたくさんの保護者のみなさんが教室の後ろにズラリと並んで子供達に目を向けている。既に授業は始まっていて、算数をやっているようだ。オレは頭を低くして親御さん達の邪魔にならない位置で同じく授業風景に目をやった

「ではこの問題を、ティナさん。お願いできますか？」

「は、ひゃい！」

こんな大勢に見られているため緊張しているティナはいつもとは違う姿だった。そして前に出て黒板に書いてある問題を解いた

「正解です」

＼パチパチパチパチ／

正解したティナに対し保護者の方々から拍手が送られる。もちろんオレも拍手する。そして自分の席に戻るティナと目が合い、ティナはその瞬間顔を真っ赤にして急ぎ足で自分の席に戻った。それを見たアンナと犬千代は同時に保護者の方を向いてオレに気がついた。オレがガンバレの意味を込めて手を振ると2人は手を振り返してきた

＼キーンコーンコーン／

授業が終わる合図の鐘が鳴り、子供達は一斉に自分の親の元へ行く。犬千代、アンナ、

ティナもオレの元にやって来た

ティナ「お兄さん！来るなら先に言ってください！」

蓮夜「ちよつとしたサプライズだよ」

犬千代「ビックリした」

アンナ「…でも来てくれて嬉しい」

蓮夜「3人とも頑張つてたな。ティナは囁んじやつたけど」

ティナ「忘れてください！」

ティナはまた恥ずかしくなったのか顔を赤くしてオレの腹をポカポカと叩いてきた。その後3人に他も行かなきゃいけないからと言ってクラスから出た。ちゃんと最後に撫でてあげました

―中等部―

今度はレムと雪菜がいる中等部だ。こつちも2人は同じクラスだからありがたいな。こつちの今度の授業は社会の歴史のようだ。奇遇なことにその先生が高等部でも授業をしている先生で、オレのことに気がついたのかこつちを見ながら笑みを浮かべた

先生「では復習からいきましよう。姫終さん、1859年に起きた事件はなんですか？」

雪菜「安政の大獄です」

先生「正解です」

先生から指名されて立ち上がった雪菜は悩むことなく答えた。さすが学年主席！

先生「では次にレムさん、翌年の1600年に起きた桜田門外の変で暗殺された人物は誰ですか？」

レム「井伊直弼です」

先生「正解」

こちらにも雪菜同様即答するレム。さすが学年次席！

先生「お二人共さすがですね。皆さん拍手ー」

／＼パチパチパチパチ／

拍手の中で先生はオレに目を向けた。さては2人を指名したのはオレがいるからか？すると先生の目線に気づいた雪菜とレムがこちらを見てきた瞬間、2人はビックリした表情を浮かべる。オレは2人に手を振ると2人はすぐに前に向き直って俯いてしまった。その動作は完全にシンクロしていてすごかった

／＼キーンコーンコーン／

授業が終わった瞬間2人はこっちにやってきた

雪菜「どういうことですか！蓮夜さん!!」

レム「そうですよ。来るなら事前に言ってくれば…」

蓮夜「まあなんだ、黙ってて悪かったよ」

雪菜「まったく」

レム「蓮夜くんらしいですね」

蓮夜「はははは…ていうかクラスの男子からの目線が痛いんだが…」

雪菜「ああ…」

レム「それは…」

雪菜とレムと話している最中オレはクラスの男子からのずっと睨まれている

女生徒「2人はモテますからねえ」

雪菜「なっ！何を言ってるんですか！／／／」

レム「そんなことないですよ！／／／」

蓮夜「まあ、そうだろうな」

雪菜「蓮夜さんまで…／／／」

レム「恥ずかしい…／／／」

2人とも可愛いからな。モテないはずがないな。恥ずかしがっている2人の頭を撫

でてオレはクラスから出た

―高等部―

いつも通っている時間に私服でいるのはなんだか新鮮な感じだ。最初は1年からだな。そうしてユウキ達のクラスに行ってみると誰もいなかった。そこには男子の脱ぎ捨てられた制服があつたので体育なのだろうと思ひ校庭へ足を向けた

案の定校庭ではユウキ達1年生がサッカーをしていた。そこでは丁度ユウキが点を決めていたところだった

ユウキ「いえーい！」

ユウキは家でもクラスでも変わらず元気なようだ。そうユウキの元気な姿を見てみると、ふいに腕に誰かが抱きついてきた

蓮夜「クロメ」

クロメ「蓮夜〜♪」

抱きついてきただけでなくオレの腕に頬擦りしてきた

蓮夜「どうしてわかつたんだ？」

クロメ「たまたま見かけた」

蓮夜「そうか。クロメは参加しないのか？」

クロメ「私のチームは今休憩中だから」

蓮夜「離れなさい」

クロメ「やーだ♪」

話してはくれていても離してはくれないらしい。すると  
ピー！

「はい、では次のチーム」

担当の先生が呼びかけている

蓮夜「クロメは行かないのか？」

クロメ「…私のチームじゃないもん」

そうなのかと納得しそうなところに

女生徒「クロメちゃん！始まるよ！」

蓮夜「…嘘をつくなよ」

クロメ「…」

蓮夜「行つてきな」

クロメ「えー」

蓮夜「クロメの頑張ってる姿が見たいなー」

クロメ「行ってくる」キリッ

さつきとは打って変わってめちやくちややる気に満ち溢れているクロメ。そしてクロメと行き違いにユウキと小猫、シノアがやってきた

ユウキ「蓮夜ー！」

蓮夜「うおっと、お疲れユウキ。シノアと小猫も」

小猫「ありがとうございます、兄様」

ユウキは勢いよくオレに突っ込んできて、その後から小猫とシノアがやってきた

ユウキ「蓮夜！見た見た!？」

蓮夜「ああ見たよ。ナイスゴールドだったな」

ユウキ「えへへ♪」

まだ抱きついているユウキの頭を撫でる

蓮夜「小猫も頑張ったな」

小猫「♪」

小猫の頭も撫でてやる

シノア「私にはしてくれないんですか？」

蓮夜「だってお前ずつとベンチだったじゃん」

シノア「蓮夜さんが来るって知ってたらちゃんと出てましたよ」

蓮夜「いやいや、オレがいなくてもちゃんやれよ」

シノア「ふふん、私は大人ですからね。あんな子ども遊びには興味ないんですよ」

蓮夜「そつか。じゃあ大人なシノアには頭撫でるなんて子供にしかしないことできないな」

シノア「そ、そんなさ……」

蓮夜「うそうそ。だからそんな寂しい顔するな」

シノア「ふふつ、やりましたさ」

蓮夜「あつ、んのやろう。わざとか」

シノア「さあ、どうでしょうね」

ユウキ「むう。蓮夜、シノアばつか構って！ボクも構ってよ！」

小猫「兄様……」

オレがシノアとばつかり話してたことに嫉妬したのかユウキと小猫も詰め寄ってきた

蓮夜「わかったわかった」



その後ゲームの終わったクロメにも同じことをしてオレは校内に入り、3年生の教室へ向かった。その途中オレは大物に出くわした

「やあ蓮夜くん」

蓮夜「リアスを見に来たのか？サーゼクス」

サーゼクス「そうだよ。君は授業じゃないのかい？」

蓮夜「今日のオレは保護者の代わりだ」

サーゼクス「そういうことか」

そう、そこにいたのはリアスの兄であり現魔王の1人、サーゼクス・ルシファーだった。しかしこれにとどまらずよりすごい大物がいた

「蓮夜殿！」

蓮夜「お久しぶりです、ジオ殿」

そこにいたのはジオデイクス・グレモリー（以後ジオ）。サーゼクスとリアスの父親だ。ジオ「全然こつちに顔を出さないからな。ヴェネラナも会いたがっていたぞ！」

蓮夜「それはそれは。今度お邪魔いたしますね」

ヴェネラナとはジオデイクス・グレモリーの妻のヴェネラナ・グレモリーだ。最初会ったときはサーゼクスの姉かと思っただくらい外見が若い人だ

サーゼクス「さて父上、リアスのクラスはすぐそこです」

ジオ「おお、早く行くでしょう！」

ホント元気だなあ。てか親バカと兄バカだな。タツマキはリアスとは違うクラスなのでそこで別れた

ー3年生クラスー

授業は国語、しかも古文だった。オレも古文は好きなので授業に聞き入ってしまった  
／キーンコーンカーンコーン／  
鐘が鳴つてもタツマキは自分の席から動こうとしなかったので大声で呼んでみることにした

蓮夜「タツマキキちゃ〜ん」

タツマキ「大声で呼ぶんじゃないわよ！」

タツマキは勢いよく振り向き大声で叫んだ。どうやらオレがいたことには気づいていたみたいだ。そんなことを考えていると

『タツマキキちゃ〜ん!!』

クラスの全員がオレの真似をしてタツマキを呼んだ

タツマキ「うっさいわよ！」

2人ともクラスに馴染んでいるようでよかった。そしてタツマキはプンスカした顔でこつちにやってきた

タツマキ「信じらんない！こんなところでそんな大声で呼ぶなんてどういう神経してるのかしら！」

蓮夜「悪い悪い。タツマキがクラスに馴染んでるか確かめたくてな」

タツマキ「なら別の方法もあるでしょ！」

蓮夜「まあクラスには馴染めてるようでよかったよ」

タツマキ「余計なお世話よ！」

蓮夜「はいはい」

タツマキはクラスでもツンツンしてるんだろうな…

12年生クラスー

最後に2年のクラス。自分のクラスを保護者として見るってなんか変な感じだな

先生「今日の英語の時間は紙粘土で好きなものを作ってください。なんでもかまいません。自分が描いたものをありのまま表現するのです。こういう英会話もあるのです」

あるか!!まったく英語と紙粘土なんの関係もねえだろ

「アーシアちゃん、ファイトよ」

「アーシアちゃん、かわいいぞ」

小声ではあるがアーシアに声をかける女性と男性がいた。男性は片手にビデオカメ

ラを持つている。氣的に一誠の親かな。ていうか十六夜は寝てるし。でも成績はいいからムカつくよな！達也は授業はそっちのけでなんか難しそうな計算してるし…深雪はなぜか窓の外を見てて上の空だし…カナリアは鼻歌歌いながら楽しそうに作ってるな。なんだか、うん…みんな違ってみんないい…のかな…

先生「兵藤くん！」

いきなり先生が一誠を呼んだかと思つてそっちを見ると、一誠は紙粘土でリアスの像を完璧に作つていた

女生徒1「あれリアスお姉様じゃない!？」

女生徒2「そうよ！すごいそっくり！」

先生「すばらしい！君にこんな才能があつたなんて」

一誠「なんか適当に手動かしてただけで」

桐生「手が覚えているぐらい触ってるってわけね」

一誠「こら桐生！お前また！」

男生徒1「くそ！一誠の野郎！」

男生徒2「リアス先輩と」

女生徒1「ウソよ！」

女生徒2「リアス先輩がこんな野獣と!?神崎くんならまだしも」

そんな1人の女子クラスメートの何気ない一言。そこで急に場の空気が変わった

深雪「うふふ…皆さん、蓮夜さんとリアス先輩がなんですって…?」

やばっ!なんでかわかんねえけど深雪がめっちゃ怒ってる!

カナリア「みんな変なこと言っちゃダメだよ…」

カナリアもなんでそんな怒ってるの!ていうか十六夜は起きろよ!!達也も止めろよ

!!

蓮夜「2人ともストップ!」

深雪「あ、蓮夜さん♪」

カナリア「本当だ!蓮ちゃん♪」

蓮夜「ほえ?」

オレが声をかけた瞬間場の空気は温まり、同時に2人はオレの両腕に抱きついてきた

深雪「なぜ今日お休みになることをおっしゃってくれなかったのですか!」

カナリア「寂しかったんだからね!」

蓮夜「お、おう…それは悪かった…」

松田「蓮夜!お前もか!」

元浜「羨ましい!」

いつでもこのクラスは変わらねえな

## 第18話

蓮夜 「達也は何をやっていたんだ？」

達也 「ん？新しい実験の再計算をな」

蓮夜 「さようぞ」

達也 「何かあったのか？」

蓮夜 「いんや」

みんなの授業を見て回ったオレはみんなでお昼を食べている。すると…

「魔女っ子の撮影会だった！」

「マジか!?!」

そんなバカ騒ぎが聞こえてきた。どうやら体育館でコスプレをしたやつが勝手に撮影会を催しているらしい。でもその撮影会の中心にいるやつのが心配が…まさか…:…オレはその正体を確かめるべく、お昼を中断して体育館へ向かった

―体育館―

「もう一枚お願いします！」

「こちらに目線ください！」

体育館に入ると大勢の男子生徒に囲まれている女性を発見した

リアス「あら蓮夜。あなたも来てたのね」

蓮夜「よおりアス。今な」

そこへリアス、一誠、アーシア、朱乃の4人もやって来た

一誠「あれは、魔法少女ミルキーセブンオルタナティブのコスプレじゃないか！」

蓮夜「はあー」

オレはやっぱりかと呟いて頭を抱える

カナリア「あれって…」

ティナ「もしかして…」

蓮夜「お前らが考えてる通りだよ」

みんなが考えていることは容易にわかったのでそう答えた

匙「こら！こんなところで何やってる！ほら、解散解散！」

「横暴だ！生徒会！」

「撮影会ぐらいいいだろ！」

『そうだそうだ!!』

匙「公開授業の日にいらん騒ぎを起こすな！解散しろ！」

『なんだよー』

匙も一応は生徒会なんだよな。ちゃんと仕事してるぜ

匙「あの、ご家族の方ですか？」

「うん」

匙「そんな格好で学校に来られると困るんですが」

「えー…うふっ♪ミルミル☆ミルミル☆スパイラル☆」

せつかく匙が真面目に注意しているのに女性は決めポーズをやりやがった

匙「だから真面目に…」

一誠「よお匙。ちゃんと仕事してんじゃん」

匙「からかうな兵藤」

匙に声をかけた一誠に文句を言い放つ匙。そのとき

ガラガラ！

ソーナ「匙、何事ですか？」

生徒会長登場

匙「いえ会長。この方が…」ソーナちゃん見つけた☆…」

ソーナ「うぐっ！」

一誠「…もしかして」



匙「会長のお知り合いとか…?」

「ソーナちゃん! ☆」

女性は舞台から飛び降り、ソーナの元へ走っていく

「ソーナちゃんどうしたの? お顔が真っ赤ですよ? せっかくお姉様との再会なのですから、もーっと喜んでくれてもいいと思うの! ♪お姉様! ソーたん! って抱き合いながら百合百合な展開でもいいと思うのよう ☆お姉ちゃんは ♪」

一誠「お姉様?」

蓮夜「そいつの名前はセラフォル・レヴィアタン。現代魔王の1人でソーナの姉さんだ」

やっぱりセラだったか…ソーナも苦労してるな

セラ「ん!? その声は!! はっ! やっぱり蓮くんだー! ♪」

オレに気づいて今度はオレの方に走って来て抱きつこうとして来たが、オレはセラの頭を抑えて止めた

セラ「むう…なんで止めるの!」

蓮夜「ケガしたくないからな」

セラ「本当は私に会えて嬉しいくせに ☆この恥ずかしがり屋さん ♪」

相変わらずめんどくせえな…

リアス「セラフォル様、お久しぶりです」

セラ「あらリアスちゃん、お久々♪元気してましたか？☆」

リアス「はい、おかげさまで。今日はソーナの公開授業へ？」

セラ「うん！ソーナちゃんたらひどいのよ！今日のこと黙ってたんだから…お姉ちゃんシヨックで、天界に攻め込もうとしちゃったんだから!!」

それは冗談でもやめろ！はあ、今日はジブリールがいなくてよかった…

ジブリール「お呼びですか？マスター」

蓮夜「しまったああ!!」

オレの心の声に反応したのかセラがここにいるのを感じたのか知らんが、ジブリールが来てしまった!!!

ジブリール「おや、そこにいるのはどこぞの程度の低いクソ悪魔ではないですか」

セラ「あらあら、誰かと思えばちよつと羽が大きいだけのスズメさんじゃない」

2人は睨み合い、その間には火花がバチバチしているのがわかる

蓮夜「ジブリールそこまで。セラも落ち着け」

ジブリール「…マスターがそうおっしゃるなら」

セラ「蓮くんが言うなら仕方ないかな…おや？リアスちゃん。あの子が噂のドライグくん？」

リアス「はい。一誠、ご挨拶なさい」

一誠「は、はい！初めまして！兵藤一誠です！リアス・グレモリー様の兵士をやつて  
います！」

セラ「初めまして、魔王のセラフォル・レヴィアタンです☆レヴィアたんって呼んでね♪」

一誠「は、はい…」

さすがの一誠でもちよつと引いてるぞ

ソーナ「お姉様、私はここの生徒会長を任されているのです。いくら身内だとしてもその格好や行動は容認できません！」

セラ「そんなソーナちゃん！蓮くん！ソーナちゃんに怒られた…私悲しい」

蓮夜「いや、妹に迷惑かけるなって言いたいね。オレは。ていうか離せ」

ソーナに怒られたセラはオレに抱きついていてた。昔からこいつはオレとのスキンシップが過剰なんだよな

ソーナ「お姉様！ご自重ください!!」

セラ「大丈夫だよ♪蓮くん容認だから☆」

蓮夜「容認した覚えはないぞ…っ！」

そうしていると背後から…

『蓮夜（さん）（くん）（蓮ちゃん）（マスター）……？』

我が眷属の女性陣がすごい殺気を放っている。しかも…

小猫「……」

朱乃「うふふふ……」

小猫は無言で睨んでくる。朱乃も笑顔ではあるが目が笑っていない。みんなどうしたんだ…

蓮夜「みんな…？どう、したんだ…？なんか怒ってる…？」

これは…オレ、死んだかな…

―自宅―

放課後になってセラがオレの家に行きたいと言いつ出したが、オレはたまには姉妹水入らずで過ごして欲しいと思い、今日のところは断った

家に帰った瞬間黒歌にも怒られた。なんとかみんなに弁解して許してもらえたが、今度1人ずつデートすることになってしまった

夕飯も終えようやく落ち着いたところでオレはリビングのDVDデッキに1枚のD

V Dを入れてスイッチを入れた。それはオレが今日隠れて撮ったみんなの授業映像だ。それを今日来れなかったジブリールと黒歌と見るところだ

黒歌「ティナ噛んだにゃ！」

蓮夜「顔真つ赤にして可愛かったぞ」

ジブリール「雪菜様とレム様はさすがでございますね」

蓮夜「ああ、2人ともオレの自慢だな」

黒歌「あつ！白音にゃ！」

蓮夜「ユウキのチームに負けたけど点は決めてたぞ。ユウキもクロメもシノアもみんなと仲良くやっていたな」

ジブリール「タツマキ様は皆様に人気なのでございますね」

蓮夜「そうみたいだな。本人は否定しているが…」

黒歌「深雪達にゃ」

ジブリール「本来ならマスターもここで勉強を行なっているのですね」  
蓮夜「そうだな」

黒歌「蓮夜が勉強してる姿も見たかったにや…」

蓮夜「自分で自分では取れないからな」

ジブリール「しかし、よく気づかれませんでしたね。さすが我がマスターでござい  
ます」

黒歌「蓮夜は私のにや」

ジブリール「ほお…身の程がわからないのでございますか？この駄猫が」

黒歌「身の程がわかってないのはそっちにや…この屑鳥」

いつもながらこいつらのキレるスイッチはなんなのだろうか

蓮夜「2人ともやめい」

ジブリール「きやつ！」

黒歌「にやつ！」

ケンカしそうだった2人にチョップを入れて止めた

その後も撮った動画を存分に楽しんだ。他のみんなはというと、恥ずかしがっていたり褒められて嬉しがっていたりと様々だ

―翌日の放課後―

昨日朱乃から連絡があり、リアスのもう1人の僧侶を解放するのに立ち会って欲しいと頼まれた。なぜ封印されているかとかは以前からサーゼクスに聞いていた。オレはタツマキと一緒に旧校舎の「開かずの間」に来ていた

一誠「ここに？」

アーシア「ここに私と同じ僧侶が」

リアス「深夜は封印の術も解けるから、旧校舎限定で部屋を出てもいいことになっている。でも中にいる子自身がそれを拒否している」

一誠「要するに、引きこもり？」

朱乃「でも、この子が一番の稼ぎ頭なのですよ？」

一誠「マジですか!？」

祐斗「パソコンを介して特殊な契約を行なっているんだ」

ゼノヴィア「しかし、封印されるほどの力とは一体どんなものなんだ？」

まあそんなじよそこらのやつじゃこいつの魔法に太刀打ちできんだろう。するとリアスが魔法を繰り出し扉にかかっている鎖を破壊した

小猫「封印が解けます」

リアス「扉を開けるわ」

そう言つて扉の取っ手に手をかけるリアス。一誠とアーシアは緊張しているようだ  
「いやあああああ!!」

扉が開かれ中に入ると突然悲鳴があがつた

一誠「な、なんだ!?!」

リアス「ごきげんよう、元気それで何よりだわ」

「何事なんですか!?!」

朱乃「封印が解けたのですよ」

リアス「さあ、私達と一緒に:」

リアスが声のする棺桶の蓋を開ける。その中には

「嫌ですう!ここがいいです!外こわあい!!」

女子生徒の制服を着て涙目の子が入っていた

一誠「おお!女の子!しかもアーシアに続き金髪美少女!!僧侶は金髪尽くしてこ  
とつすか?」

祐斗「ふふつ」



蓮夜「はあ」

一誠「なんだよ木場！蓮夜！」

蓮夜「一誠…そいつは『男』だ」

一誠「えっ？蓮夜、今なんて…？」

リアス「蓮夜の言う通り、見た目は女の子だけどこの子は紛れもなく『男の子』」

一誠、アーシア「えー！！！！」

朱乃「うふふ、女装の趣味があるんですね」

今だ涙目でうずくまっているその子を優しく抱きしめるリアス

リアス「この子はギヤスパーク・ヴラデイ。私の眷属、もう一人の僧侶。一応駒王学園

の1年生で転生前は人間と吸血鬼ヴァンパイアのハーフよ」

アーシア「ヴァ、ヴァンパイア…」

一誠「吸血鬼って、こいつが!？」

まあいきなりヴァンパイアとか言われても驚くわな

一誠「マジか!?!そんな残酷な話があつていいのか!!」

アーシア「でもよく似合ってますよ？」

一誠「だから余計にショックがでかいんだって！引きこもって一体誰に見せるってん

だ！」

ギヤスパー「だ、だって…この方が可愛いもん…」

一誠「もんとか言うな！もんとか！一瞬でもお前とアーシアの金髪ダブル美少女を夢見たんだぞ？」

こいつはそういうことしか考えられんのか

小猫「人の夢と書いて儂い」

蓮夜「おお小猫。よく知ってるじゃないか！でもそれは一誠に限ることな」よしよし

小猫「はい♪」

朱乃「あらあら、小猫ちゃん羨ましいですわ」ウッフ

今の一誠にぴったりの言葉を言った小猫の頭を撫でてやると朱乃がそんなことを言いながら近寄ってきた。タツマキは明らかに敵意をむき出しにするのやめなさい、の意味を込めてタツマキも撫でてやった

リアス「ギヤスパー？お願いだから外に出ましよう？ね？」

ギヤスパー「いやですう！」

一誠「ほら、部長が言ってるんだから」

一誠がそう言つてギヤスパーの腕を掴んだ瞬間、ギヤスパーが魔法を発動した  
タツマキ「主人まで動けなくなるってどういうことよ！」

蓮夜「それが今まで封印されてきた意味なんだよ。ホントだったら赤龍帝宿つてる一

「誠も動けなきやおかしいんだけどな」

ギヤスパー「きやあぁあ!!!な、なんで動けるんですか!!?」

蓮夜「なんでつて言われてもな」

タツマキ「私だからよ」

蓮夜「ああ、そうだね」

タツマキ「なによ! プイツ」

そしてギヤスパーは魔法を解除した

一誠「あれ?」

魔法を止めた瞬間みんなには一瞬でギヤスパーが移動したように見えただろう

アーシア「おかしいです。今、一瞬…」

ゼノヴィア「何かされたのは確かだね」

祐斗「ふふっ」

朱乃「停止世界の邪眼。フオービドゥン・パロールシユ時間を停止させる神器ですわ」

小猫「興奮すると目に写したものを一定時間停止させることができるんです」

ギヤスパー「部長! この人たち止まりませんでした!!」

『えー!!』

朱乃「あらあら」

小猫「当然ですわね」

蓮夜「なんで小猫が威張るんだ？」

リアス達はギヤスパーの一言に驚きの顔をして、朱乃はいつも通り笑顔で、小猫はなぜか自分のことのように威張っている

リアス「ホントなの…？」

蓮夜「まあな。一誠、こいつはこの力を制御できないばかりか主人までも止めてしまおうというわけで魔王サーゼクスの命でここに封じられていたんだ」

リアス「知ってたのね」

蓮夜「サーゼクスから聞いてた」

リアス「まあいいわ。それに加えて自然と能力が高まっちゃうみたいで、バランスフレイカー禁手化に至る可能性があるのよ」

一誠「禁手化…」

そんな話をしてしているとギヤスパーはダンボールに閉じこもってしまった

ギヤスパー「僕の話なんかして欲しくないのに、ひどいですう」

一誠「またこんなところに隠れやがって」

一誠はダンボールを蹴った

ギヤスパー「僕はこの箱の中で十分です！」

まるで聞き分けのない子供だな

朱乃「部長、そろそろお時間です」

リアス「そうね、私と朱乃はこれからトップ会談の打ち合わせに行かなくてはならないの。ユウト」

祐斗「はい部長」

リアス「お兄様があなたの禁止化について詳しく知りたいらしいの。一緒に来てちょうだい」

祐斗「わかりました」

蓮夜「オレ達も行くか」

タツマキ「ええ」

一誠「蓮夜達も行くのか？」

蓮夜「これでもこの世で最強の存在だからな。行かないわけにはいかないんだよ」  
リアス「それまであなた達には少しでもギヤスパの教育をお願いしたいのよ」

一誠「教育…？」

こいつらに任せて大丈夫かね…ん？この気配は…

蓮夜「タツマキ」

タツマキ「ええ、あいつね」

蓮夜「そうみたいだな。みんな、変なやつ来てるから気をつけてな。害はないと思うが」

オレはそれだけ伝えて部室を後にした

ギヤスパアの教育は困難を極めているらしい。しかしこれはグレモリー眷属の問題だ。できるだけオレは手助けしないことにした

そして数日が経った放課後。オレはとある場所にどでかい気を感じた

蓮夜「これは…ジブリアル」

ジブリアル「はい、間違いないと思われます」

蓮夜「久々に挨拶しとくか。ジブリアル、ついて来てくれ」

ジブリアル「マスターの仰せのままに」

オレはその気のする元へジブリアルをつれて移動した

―神社―

ここは神社か。普通の悪魔からしたら入れないけど、オレは日本の神達からの加護があるから大丈夫なんだよな。気はこの中からだな

蓮夜「ごめんください」

朱乃「あら、蓮夜くん」

蓮夜「朱乃か。その格好つてまさかここは朱乃の家か？」

朱乃「まあそんなところですよ。蓮夜くん達はどうしてここに」

蓮夜「ここに『あいつ』が来てるのが気でわかってな。挨拶にだ」

朱乃「そうでしたか。案内しますわね」

蓮夜「頼む」

オレとジブリールは朱乃に着いて行く。そこには

一誠「蓮夜！」

蓮夜「よお一誠。それと『ミカエル』」

ミカエル「ええ、お久しぶりですね蓮夜くん、ジブリール様」

蓮夜「今日はどうしたんだ？」

ミカエル「いえ、兵藤一誠くんに贈り物を」

蓮夜「そうか。まあ今日はお前がここにいるから挨拶に來ただけだから」

ミカエル「そうですか。ぜひ天界においでください。そろそろガブリエルが持ちませ

ん」

その言葉でその場の空気が一気に変わった

ジブリール「マスター、これから私は天界を滅ぼしてまいります。なあに天撃1発で終わらしてまいります」

蓮夜「物騒なこと言ってるじゃねえよ！やめなさい！」

ジブリール「…わかりました」

蓮夜「まったく…ミカエル、ガブリエルにはそのうち顔を出すって伝えてくれ」

ミカエル「わかりました。ではまた会談のときにお会いしましょう」

一誠「待つてください！少し聞きたいことが」

ミカエル「生憎今は忙しいので、会談の後に」

一誠「必ずお願いします」

ミカエル「約束します。兵藤一誠」

一誠はミカエルから龍殺ドラゴンスレイヤーの剣であるアスカロンをもらったらしい。そして今オレ

と一誠は朱乃からお茶をもらっている

一誠「あの、1つ聞いてもいいですか？」

朱乃「なんでしょう」

一誠「…コカビエルとの戦いするとき、あいつが言っていましたよね」



朱乃「っ！」

一誠「朱乃さんで墮天使の幹部の……」

朱乃「そうよ。私は、墮天使の幹部のバラキエルと人間との間に生まれた者です」

オレは目を瞑って朱乃の話を聞く

朱乃「母はとある神社の娘でした。ある日傷つき倒れていた墮天使の幹部であるバラキエルを助け、その時の縁で私を宿したと聞きます」

一誠「……あの、すいません。俺変なこと聞いて……」

オレは目を開けた。朱乃は一誠の言葉には反応せず立ち上がり背中を向け悪魔と墮天使の羽を出した

一誠「その翼……」

朱乃「ええ……悪魔の翼と墮天使の翼、私はその両方を持っています。この汚れた翼、私はこれが嫌でリアスと出会い悪魔になったの。でもその結果生まれたのは墮天使の翼と悪魔の翼を持った悍ましい生き物……この身に汚れた血を宿す私にはお似合いかもしれません」

一誠「朱乃さん……」

朱乃は振り返り続ける

朱乃「それを知って一誠くんはどう感じます？墮天使は嫌いよね……あなたとアーシア

ちゃんの身も心も傷つけ命までも奪い、大切なあなたの町を破壊しようとした墮天使。いい思いを持てるはずがありませんよね」

一誠はそこで黙ってしまふ。おそろくどう返していいのかわからないだろう

蓮夜「お前はバカか？朱乃」

朱乃「っ！蓮夜くん…」

一誠「蓮夜…」

蓮夜「オレなんて神とも同等なこのジブリールを眷属にしちまったんだぞ？そのあと天界の奴らからどんだけ言われたと思う？」

ジブリール「あれは大変でございましたね、マスター」ウフフ

蓮夜「それに一誠とアーシアを傷ついたり、この町を破壊しようとした墮天使とお前は違うだろ。だからそんなの関係ねえ」

朱乃「っ！」

蓮夜「一誠、お前はどう思う？」

一誠「えっ、あ、蓮夜の言う通りです！朱乃さんは優しいお姉さんで、最強の副部長で、とにかくオレは朱乃さんを嫌いになつたりしません！」

一誠は普段はああだが、心優しいやつだ

蓮夜「ほら、だから関係ねえんだよ。変なこと考えすぎだ」

そう言い放つとオレは朱乃に押し倒された

蓮夜「朱乃!？」

一誠「おい蓮夜!なんて羨ましい!!」

朱乃「蓮夜くん、私本気になっちゃいました」

蓮夜「…はい?」

朱乃「私、何番でも大丈夫です。でも私のことも考えてくださいね」

ジブリール「うふふふ…つけあがりましたね、この泥棒悪魔が…うふふふ」

やべっ!!ジブリールがキレた!!!これはマジでやべえ!!!

朱乃「少しぐらいいいではありませんか」

蓮夜「とりあえず降りろ!朱乃!!」

朱乃「あん」

その後、朱乃はいつも通りに戻ったがジブリールの機嫌を直すのに3時間ぐらいかかってしまった

## 第19話

蓮夜「ん…なんだ？」

トツプ会談が行われる日の朝、オレは何かの重みを感じて目を覚ました。俺が寝ている両隣にはジブリールと黒歌が、オレの上にはアンナが乗っかって眠っている。時計を確認するともう起きなきやいけない時間になっていたため、仕方ないので起きてもらいことにした

蓮夜「3人とも起きなく」

ジブリール「おはようございます、マスター」

蓮夜「おはよ」

黒歌「まだ眠いにゃ」

蓮夜「なら自分の部屋で寝ろ」

アンナ「zzzzz…」

蓮夜「アンナ」

まだ起きないアンナを揺らしながら起こそうとしているが起きない。すると

ジブリール「さつきとマスターから離れなさいな、この駄猫」

黒歌「屑鳥の言っていることは理解できないにや」

また言い争いが始まってしまった

アンナ「…蓮夜」

蓮夜「おっ、起きたか」

アンナ「…まだ眠い」

蓮夜「でももう起きる時間だぞ？」

アンナ「…連れてって」

蓮夜「仕方ねえな」

まだ眠いのか目をこすっているアンナをお姫様抱っこの形で抱き上げて部屋を出る

蓮夜「2人とも早くこいよ？」

いまだに睨み合っているジブリールと黒歌にそう言っただけは洗面台に向かう

蓮夜（ん？なんであいつがこんなところに…）

オレはあるものの気を感じ取っていた

ー夕方ー

会談に行く前にオカルト研究部の部室に来ている

リアス「じゃあ行くわよ」

一誠「はい」

リアス「ギヤスパー、いい子で留守番しているのよ？」

ギヤスパー「はい」

ギヤスパーは今日も段ボールに入っている

リアス「何かのシヨックであなたの能力が発動してしまったら大変なことになってしまうから。わかってちょうだい」

ギヤスパー「はい」

リアス「小猫と一緒にいてもらうから」

蓮夜「こつちからも黒歌を残していくから」

黒歌「白音く♪」

小猫「姉様！」

嬉しそうに抱き合う2人はホントに仲のいい姉妹だと思えるな

リアス「よろしくね2人とも」

一誠「ギヤスパー、大人しくしてろよ？これ貸してやるから」

そう言っで持っていたゲームを渡す一誠

ギヤスパー「はい！ありがとうございます、一誠先輩」

蓮夜「一応お菓子とかも持って来たから、小猫も食べな」

ギヤスパー「あ、ありがとうございます…」

小猫「さすが兄様です」

一誠「紙袋もここに置いてやるからな。寂しくなったら存分に被れ」

なんだあの薄気味悪い紙袋は。被るって…

そしてオレ達は魔法陣を介して会議が行われる部屋へ移動した

コンコン

リアス「失礼します」

リアスに続いて中に入ると魔王のサーゼクスとセラフォル、堕天使の総督のアザゼル、天使の長のミカエルが座っていた。そしてそれぞれの後ろにはソーナとソーナの眷属で生徒会副会長の椿先輩、ヴァーリ、ミカエルの御付きなのか紫藤 イリナが立っていた

リアス達はサーゼクスの後ろへ、オレは空いている席に座りオレの眷属のみんながそ

の後ろに立った

サーゼクス「紹介する。私の妹とその眷属だ。先日のコカビエル襲撃では蓮夜くんと共に彼女達が活躍してくれた」

ミカエル「ご苦勞様でした。改めてお礼を申し上げます」

アザゼル「悪かったな。俺んとこのもんが迷惑をかけて」

一誠「なんつー態度だ」

一誠と同じくオレもその態度にムカついた

蓮夜「アザゼル、態度を改めろ」

オレは威圧のオーラを出してそう言う

アザゼル「っ！わかった：」

オレの威圧に気圧されたからかアザゼルは冷や汗をかいて答える

サーゼクス「これで参加者が全員揃った。それでは会議を始めよう」

最初に報告したのはリアスからのコカビエル襲撃の件だ

リアス「：以上が私、リアス・グレモリーとその眷属が関与した事件の顛末です」

ソーナ「私、ソーナ・シトリーも彼女の報告に偽りがないことを証言いたします」

蓮夜「オレも同じく」

サーゼクス「ご苦勞様、下がってくれ」



セラ「ありがとリアスちゃん、ソーナちゃん、蓮くん♪」

今は大事な会議の場だからそのノリはやめろ

サーゼクス「リアスの報告を受けて墮天使総督の意見を伺いたい」

アザゼル「意見も何もコカビエルが単独で起こしたことだからな」

ミカエル「あずかり知らぬ事だと」

アザゼル「目的がわかるまで泳がせていたのさ。まさか俺自身が町に潜入してたことにはやつは知らなかったみたいだけだな。ここはなかなかいい町だぞ？」

蓮夜「それで納得すると本気で思ってるのか？」

オレは先程同様アザゼルの威圧しつっつドスの効いた声で言い放つ

蓮夜「単独であろうとなかろうと墮天使がこの町を襲撃してきたことは事実だ。それをお前はヘラヘラしながら単独だからで済ます気か？ふざけんなよ？」

腕を組み目を瞑ったままさつきよりも強い威圧のオーラを放つ

アザゼル「っ!!」

蓮夜「さつき言ったはずだぞアザゼル、態度を改めろと。わからないならお前がわかるまでオレ達がお前ら墮天使を滅ぼしていこうか？」

オレが目を開けたと同時に後ろに控えていたみんなが戦闘態勢を取った。神器を出す者、魔力を高める者。アザゼルの顔は真っ青になり汗もすごい量出てきた

アザゼル「…そう、だな。確かにコカビエルが何か企んでいるのがわかったのに何も対策をしなかったのは俺だ。すまなかった」

アザゼルはそう言つてオレに頭を下げてきた

蓮夜「それはオレに言うことじゃねえ」

オレの言葉を聞いたアザゼルは立ち上がりリアス達の方を向いて再び頭を下げた

アザゼル「リアス・グレモリーとその眷属達の諸君、本当にすまなかった」

リアス達はいきなり墮天使の総督に頭を下げられて驚きの表情をする

蓮夜「一誠、これでいいか」

一誠「え、あ…ああ」

アザゼル「すまん」

アザゼルはゆっくりと頭を上げて席に戻った。その顔は先ほどとは別人のように真剣なものだ。それを見てオレは右手を上にあげてタツマキ達に「もういいぞ」の合図を出した

ミカエル「しかし問題はそれだけではなくコカビエルが事を起こした動機ですね。あなたに不満を抱いていたという」

アザゼル「ああ、戦争が中途半端に終わつちまつたつてことが相当不満だったらしい。俺は戦争にさらさら興味はなかつたんでな」

セラ「不満分子ってことね」

蓮夜「まあこれだけでかい勢力になったんだ。不満分子の1つや2つ出るもんだ。あとはそれをどう鎮圧するかな」

オレは嫌味っぽくアザゼルの方を見ながらそう言う

アザゼル「なんも言えなえな」

蓮夜「だがみんな“和平”結ぶ気なんだろう？」

『っー』

みんなの表情から確信になった

アザゼル「その平和を結ぶに置いて考えなければならぬのが赤龍帝、白龍皇、それにお前なんだけどな蓮夜。とりあえずお前らの意見が聞きたい」

ヴァーリ「俺は強いやつと戦えればいい」

アザゼル「戦争しなくたって強いやつは五万といるさ。蓮夜みたいにな」

ヴァーリ「だろうな」

オレをそんな餌みたいに使うな

アザゼル「じゃあ赤龍帝、お前はどうか？」

一誠「えつ！えつと、いきなりそんな小難しい話を振られても……」

アザゼル「じゃあ恐ろしく嘔み砕いて説明してやろう。兵藤 一誠、戦争してたらり

アス・グレモリーは抱けないぞ？」

リアス「えっ!？」

蓮夜「お前少し黙れ。一誠、そいつが言ったことは忘れろ。そうだな、戦争をしたらリアスとアーシア、それに大勢の人が死ぬかもしれない。だが和平を結べばそうにはならない」

アザゼル「簡単に言えば、和平を結べば毎日リアス・グレモリーと子作りだぞ？」

一誠「子作り!!!」

蓮夜「アザゼル……」

アザゼル「いいじゃねえか。お前の眷属達も満更じやないみたいだぞ？」

オレはアザゼルの言葉に「そんなバカなこと」と思いながら後ろを振り向くと

タツマキ「……／／／」

ユウキ「???」

深雪「そ、そんな……私が蓮夜さんと……／／／」

雪菜「……子作り、なんて／／／」

クロメ「蓮夜、私はいつでも！」

シノア「……／／／」

ティナ「あわわわわ／／／」

アンナ「??」

犬千代「蓮夜と、子作り…」

レム「…／／／」

ジブリール「マスター／／／」

前を向いても

セラ「そんな、蓮くん♡私はあなたがその気ならいつでも…／／／」

ソーナ「お姉様!!」

蓮夜「お前ら…」

オレはその光景に頭を抱える

一誠「和平でお願いします!!!平和が一番です!!部長とエッチしたいです!!!」

完全に後半が目的だろう!

祐斗「一誠くん、サーゼクス様がいらっしやるんだよ……?」

一誠「あつ…」

リアス「もう、あなたって人は…」

一誠「と、とにかく俺の力はリアス様と仲間達の為にしか使いません!これは絶対で

す!」

一誠、いいこと言うじゃねえか

アザゼル「蓮夜、お前はどうか？」

蓮夜「オレはお前らがオレやオレの大事なものに危害を加えなければ敵対するつもりはない」

アザゼル「そうか」

これでなんとか和平を結ぶ方向で決まるかな

ミカエル「赤龍帝殿、私に話があるのでしたね？」

一誠「約束、覚えていてくださったんですか」

ミカエル「もちろん」

一誠「…アシアを、どうして追放したんですか…？」

アシア「っ！」

一誠「あれほど神を信じていたアシアを、なぜ追放したんですか…？」

リアス「一誠！」

ミカエル「…神が消滅したあとシステムだけが残りました。加護と慈悲と奇跡を司る力と言い換えてよいでしょう。今はジブリール様が変わって神の代行をなさってくださいますが…しかし当初システムに悪影響を与える者を遠ざける必要があります」

一誠「アシアが悪魔や墮天使も回復させてしまう力を持つていたからですか…」

ミカエル「信者の信仰は我ら天界に住まう者の源。信仰に悪影響を与える者は極力排

除しなければ、システムの制御ができませんでした」

ゼノヴィア「だから、予期せず神の不在を知ったものも排除が必要だったのでね」  
ミカエル「それであなたも、アーシア・アルジエントも異端とするしかありませんでした。申し訳ありません」

これ、オレも悪いんじゃない？

蓮夜「2人とも！オレも悪かった！！神がいなくなつたときにすぐジブリールを天界に連れてつてればこんなことにはならなかつたかもしれない！」

オレは誠心誠意2人に謝罪する

ゼノヴィア「頭を上げてくれ。今は悪魔になつてしまつたが、今の生活を楽しんでい  
る」

アーシア「私も大切な友達ができました」

蓮夜「ん？」

あん？黒歌から…：そうか

蓮夜「おいおい、邪魔者かよ。誰だ？和平結ぶつて言つてんのに裏切るやつは」

オレがそう言つた瞬間、窓の外にはたくさん魔法陣が出現した

一誠「あれは！」

蓮夜「魔法師だな。それとリアス、どうやらギヤスパーが襲われたらしい」

リアス「なんですって!？」

蓮夜「黒歌から連絡があった。あっちも相当な数がいるらしい」

オレからの報告に驚くリアス達

蓮夜「ユウキ、雪菜、シノア、犬千代は黒歌達の援護に向かつてくれ。遠慮はいらねえ、派手にやれ」

ユウキ「わかった!」

雪菜「わかりました!」

シノア「了解です」

犬千代「わかった」

蓮夜「いいよな?サーゼクス」

サーゼクス「ああ、任せよう」

蓮夜「リアス、お前らはどうする」

リアス「ギヤスパーは私の眷属、もちろん行くわ」

蓮夜「了解だ。おいサーゼクス、ミカエル、アザゼル。今のオレは結構キレてる。外のやつはオレらがやるぞ」

オレは3人にそう言って自分の眷属を率いて外へ出る

蓮夜「行くぞみんな」



『はい  
(おう)  
!』

## 第20話

蓮夜「結構な数いるな」

十六夜「ヤハハ、そんな数だけなんて意味ねえだろ」

ジブリール「雑魚の集団ほど意味のないものはありませんね」

タツマキ「ふん！こんなの私一人で大丈夫よ」

クロメ「めんどくさいな」

達也「はあ」

カナリア「みんななんか気合い入ってるね」

レム「クロメさんと達也さんはなんか違いますけど」

ティナ「どうします？お兄さん」

アンナ「…」

オレを先頭に八の字に広がって外へ出て行くと外には数えるのも面倒になるくらい  
の敵がそれを飛んでいた

蓮夜「我、神崎 蓮夜が汝の枷を解き放つ。来い！四番目の眷獣、  
甲殻の銀霧（ナ

トラ・シネレウス)！”

ウチのメンバーが暴れて被害が出ないわけないわけで：オレは眷獣を呼び、辺り一面を霧状態にした。そしてオレはみんなにそれぞれの役割を説明する

蓮夜「カナリアはオレの側でみんなの強化な」

カナリア「うん！」

蓮夜「レムは悪いんだがカナリアの護衛だ」

レム「はい」

蓮夜「他は何の制限もねえ！派手に行け!!」

十六夜「ありがてえ！」

タツマキ「ふん！私1人で十分なのに！」

クロメ「はくい」

達也「わかった」

ティナ「わかりました」

アンナ「(ゴクツ)」

蓮夜「行けっ！」

オレの号令とともにみんなは姿を消す。そしてオレは空に向かって手を出す

カナリア「あれ？あの子達呼ぶの？」

蓮夜「せっかくの機会だからな。こういう時でもないと体動かせないだろ。それにあとで何言われるかわかんねえし……」

レム「ふふっ、そうですね」

オレはある子達の名前を叫ぶ

蓮夜「レア、ミル、ルカ」

その声に反応したように3つの大きな魔法陣が空に現れ、そこからオレの使い魔である三匹の龍が姿を現した

レア『蓮ちゃんから呼んでくれるなんて！』

ミル『どういう風の吹きまわしかしら？』

ルカ『どうしたの？』

蓮夜「まあ見ての通りだ。今ならどんだけ暴れてもいいぞ？」

オレは一度周りを見渡してからニヤリと笑いそう言う

レア『本当?!』

ミル『あらく、じゃあお言葉に甘えちやおうかしらく』

ルカ『やったー!』

三匹はそれぞれそう言いながら相手へ攻撃し始めた

ティナ「すごい元気になりましたね」

蓮夜「今まで使い魔らしいことなんもやらせられなかったからな。ティナはここでもいいのか？」

ティナ「はい：／／いつものように、していただきたくて……／／／」

蓮夜「了解だ」

オレはそう言つてその場に座る、ティナはオレの横に寝そべりライフルを構える。オレはそうしたティナの頭に手を乗せる。なんでもティナにとつてこうするといつもより数段集中できるらしい。そしてティナの狙撃が始まった

蓮夜「カナリア、頼む」

カナリア「わかった！♪」

カナリアが歌い始めた。これでみんなは魔力も減らないし傷もすぐに回復する。こんな戦いで負傷するやつはいないだろうが：そこへ

蓮夜「アンナ？」

アンナ「：」

アンナが胡座をかいているオレに腰かけてきた

蓮夜「アンナもここでもいいのか？」

アンナ「私はここからでもできる」

蓮夜「そうだな」

その瞬間遠くの方ででっかい火柱が上がった。正直これぐらいの戦力であればうちのみんなは一步も動かなくても掃討できるだろう。でもみんな軽い運動がてら動きたいらしい

そしてしばらく観察しているとセラ達の方からある気配を感じた

蓮夜「ん？アンナ、ティナ、ちよつとわりー。行ってくる」

ティナ「はい」

アンナ「(コクツ)」

オレは校舎の方に新たな魔力を感じたので2人にそう告げてティナの頭から手を離しアンナを降ろす

蓮夜「レム、ここはよろしくな」

レム「行つてらっしやいませ」

オレは校舎に向かって地面を踏み込む

校舎に入った瞬間に一気に爆発した。オレはそこにいるやつらをまとめて防御壁で守った

蓮夜「おいおい、こんなことするやつはどこのだいっだよ」

「ご機嫌よう永遠の皇帝、私はカテレア・レヴィアタン。お見知り置きを」  
サーゼクス「どういうつもりだ、カテレア」

カテレア「この会談の逆の解答にたどりついただけのこと。神と魔王がないのならばこの世界を変革すべきだと」

セラ「カテレアちゃん、やめて！ どうしてこんな…」

カテレア「セラフォル…私からレヴィアタンの座を奪っておいてよくもぬけぬけと！」

セラ「私は…」

カテレア「安心なさい！ 今日この場であなたを殺して私が魔王レヴィアタンを名乗ります」

アザゼル「やれやれ、悪魔のクーデターに巻き込まれたと思えば」

ミカエル「あなたの狙いはこの世界をそのものというわけですね」

カテレア「ええミカエル。神と魔王の死を取り繕っているこの腐敗した世界を私達の手で再構築し変革するのです」

蓮夜「はあ」

カテレア「…私に何か不満でも」

蓮夜「いや何言い出すかと思えばさ、全く子供みたいな考え方でこんな騒ぎ起こして

…

カテレア「私が、子供ですって…言わせておけば!!!」  
ドンツ!!

カテレアがオレに向けて魔法を繰り出そうとした瞬間、カテレアの両肩が撃ち抜かれた

カテレア「ぎやあああああ!!!」  
撃つた正体はティナだった

ティナ「お兄さんに手出しはさせません」

蓮夜「レヴィアアタンの末裔がこんなんじや不安で任せらんないだろ。やっぱりレヴィアアタンはセラがいいだろ」

セラ「蓮くん…」

蓮夜「セラ、自信を持って」

セラ「うん…ありがと…」

セラは涙を流し顔を手で隠して座り込んでしまった

カテレア「私が、こんなところでー!!!」



カテレアの体が「黒い蛇で」包まれ魔力が上がり傷が治った

蓮夜「その蛇、やっぱりそういうことか」

アザゼル「蓮夜、あれが何かわかんのか？」

蓮夜「ああ、やめとけて言っただけだな」

そこへ

ユウキ「蓮夜ー！」

黒歌達を援護しに行っていたみんなが戻ってきた

蓮夜「おつかれ、みんなも好きにやっつけていいぞ」

『はい（うん）（わかったにや）！』

蓮夜「リアス、一誠、悪いがここはオレ達に任せてもらう。怪我したいなら参加して

もいいぞ？」

リアス「いえ、任せるわ」

一誠「悔しいが、ここはお前の言う通りにする」

カテレア「私は無視ですか！」

カテレアは無視されたことに怒りオレを襲ってきた。オレはそれを迎撃しようとするが、その必要はなかった。なぜなら：

グシヤツ!!

ミル「蓮ちゃんにお痛はく、許さないよ。ああもう聞こえてないか」

人型になっていたミルの蹴りで跡形もなく碎け散ってしまったのだ

レア「ミルー！」

ルカ「ミルちゃんずる〜い！ 私がやりたかったのに〜!!」

後からはミルと同じように人型になったレアとルカがやってきた

ミル「早いもの勝ちだもんね。ね、蓮ちゃ〜ん」

蓮夜「おい」

レア、ルカ「あー!!」

ミルはオレの腕に抱きついてきた。それを見て大声をあげるレアとルカ。すると

ガシツ!

オレのすぐ頭上で達也が禁止化の鎧を身に纏ったヴァーリのパンチを止めていた

達也「何のつもりだ？ 白龍皇」

ヴァーリ「悪いな、こちらの方が面白そうなんだ」

蓮夜「はあ、やっぱ裏切り者はお前か。アザゼルの教育はどうなってるんだ…」

アザゼル「…ヴァーリ！ 一つ聞きたい。うちの副総督のシエムハザが反抗勢力の団体

の存在を察知していた。禍の団（カオス・ブリゲード）と言ったか」

サーゼクス「禍の団…」

セラ「危険分子を束ねるなんて、相当な実力者じゃないとそんなこと……」  
そこでオレはあることに気がついた

蓮夜「そう言うことか。そのまとめ役がお前なんだな？ // オーフイス //」

リアス「オーフェイス!？」

一誠「部長？」

リアス「無限を牛耳、神をも恐れたと言われる最強のドラゴンよ」

リアスがオーフェイスについて一誠に教えているようだ

ヴァーリ「確かに俺はオーフェイスと組んだ。だが俺もあいつも覇権だとか世界とかには興味がなくてな。力を利用とするから勝手にくつついてきただけだ」

アザゼル「なるほどな……てつきりカテレアと連んで魔王の座を奪い返しにきたのかと思っただぜ」

セラ「魔王の……？」

リアス「どういうこと！」

リアスやセラは全く見当がついてないみたいだな

ヴァーリ「俺の名はヴァーリ・ルシファー」

サーゼクス「何だと」

一誠「ルシファー！」

リアス「まさか！」

ヴァーリ「俺は死んだ先代魔王の血を引く者で、前魔王である父と人間の母の間に生まれたハーフなんだ」

みんなはヴァーリの言葉におどろきを隠せていない

蓮夜「だから何だ？ お前が元魔王の息子だからって関係ねえな。今悪魔界を統治してんのはセラ達だ」

ヴァーリ「だから俺は覇権などには興味がない。先ほども言ったが俺は強いものと戦いたいんだ。だが兵藤 一誠」

一誠「っ！」

ヴァーリ「君は俺のライバルという存在であるのにあまりに弱すぎる。弱すぎて笑えるぐらいな」

一誠「何だとっ！」

ヴァーリ「君と俺には天と地ほどの差がある。いや、ありすぎる」

一誠「だから、どうしたって言うんだ！」

ヴァーリ「だから俺は今のお前になど興味はない。今の俺が戦いたいのはお前だ！ 永遠の皇帝、神崎 蓮夜！」

蓮夜「あ？」

ヴァーリ「ん？興が乗らないか？ならこうしよう、今からお前の大切な者を殺そ…グハッ！」

蓮夜「黙れ…」

オレはヴァーリが言おうとしたことを遮るようにヴァーリを殴り飛ばす。飛ばされたヴァーリの纏っていた鎧は砕け地面に蹲っている

ヴァーリ「ははっ、すごいな。たった1発でこの破壊力か…」

ヴァーリはまた立ち上がり再び鎧を身に纏う

蓮夜「おいおい、まだ実力差がわかんねえのか？お前がさっき言ったことと同じだ。オレとお前じゃあ天と地の差、いや、もう虚数の彼方ほどの差があるんだぞ。お前じゃあオレの眷属にすら勝てねえよ」

ヴァーリ「ならお前のその眷属を殺してみようか…」

バタン！

ヴァーリはその言葉を発した瞬間、前のめりに倒れた達也「深雪に、手出しはさせない…」

その理由は達也がヴァーリの目にとまらないスピードでヴァーリに一撃を食らわしたからだ

蓮夜「サンキュ、達也。おい、そこにいるんだろ？」

オレの声かけで結界が破壊され、空から1人の人物が降りてきた  
「今こいつが殺されては困るんでな」

蓮夜「美猴、闘戦勝仏の末裔か」

美猴「こいつを殺さないでくれたのは感謝する」

蓮夜「いいからさっさと連れて行け。いいか？みんな」

サーゼクス「ああ」

アザゼル「…仕方ねえか」

ミカエル「私も構いません」

セラ「うん。ありがと、蓮くん…」

蓮夜「おう。ということだ、早く行け」

そう言うのと美猴はヴァーリを連れて消えていった。残党狩りも既に完了していた。よって三勢力トップ会谈襲撃は幕を閉じた

## 冥界合宿のヘルキヤツト

## 第21話

朝、それは必ず来るものでこの人間界に住んでいる以上絶対に起きないといけないわけで：

波乱の合同会議が終わってから数日が経った朝にオレはゆつくりと目を開ける

朱乃「あらあら、おはようございます♪」

蓮夜「朱乃!?なんでここに!？」

朱乃「昨日の晩にお邪魔させていただいたのですわ」

蓮夜「でも誰が入れたんだ…」

朱乃「ふふふ♪」

蓮夜「…なぜ、何も言わない?」

起きてみると隣には朱乃がいつも結んでいる髪を解いた姿で横になっていた。ユウキやクロメがいる分にはいつものことだから驚きはしないだろう。しかしオレの眷属でもない朱乃がいるのには驚いた。どういった経緯でオレのベッドに忍び込んだか尋





朱乃「朝は人肌が恋しくなるものですから」

「うふふ…」と不気味な笑いをする朱乃と「ははは…」と全く笑いと取れないカナリアが静かに言い争う。そんな中、オレの布団がモゾモゾと動いた。オレはそつと中を確認してみると

小猫「兄様…」

ティナ「…お兄さん」

小猫とティナがオレに乗っかって寝ていた。一応起きたみたいだがまだ完全には目が覚めていなく寝ぼけ状態でオレを呼んできた

蓮夜「2人とも、まだ寝てて大丈夫だぞ」

ティナ「なら…もう少しだけ…」

小猫「さすが、兄様…です…」

オレは今の現状を2人に見せないべく、2人の頭を優しく撫でてもう一度眠らす。ちなみに朱乃とカナリアの静かな戦闘はそれから雪菜が来るまで30分も続いた

―学校―

なぜうちに朱乃と小猫がいたかというのと、昨日部活の新しい顧問になぜかアザゼルがなつたらしい。そこでアザゼルからグレモリー眷属の戦力増強のためグレモリー眷属はリアス含めて一誠の家で暮らすことになつたらしい。だが小猫は黒歌がオレのところにいるため、朱乃は自身の正体を知っていて尚且つ同じような境遇のジブリールがうちにいるからこつちで暮らすことになつたらしい。アザゼルめ、何にも言わずに勝手に決めやがって……！ 兇シめるか

そんなことを小猫と朱乃から聞きながらオレは登校した。オレの眷属のみんなは黒歌以外不満げだったがオレが追い返すのも何だと言うと渋々承知してくれた

そして明日から夏休み。うちのクラスの3バカトリオはいつものようにバカ騒ぎをしている

松田「いよいよ明日から夏休み！」

一誠「おう！ 紳士の夏！ 俺達の夏だ！」

元浜「夏といえば海にプールだ！ オレのスカウターにも磨きがかかるぜ」

スカウターって、それただのメガネだろ

桐生「変態トリオは夏の計画？」

元浜「なに！」

一誠「誰が変態トリオだ！」

松田「消えろ、桐生。愛香！メガネ属性は元浜で間に合ってたんだ！」

桐生「ふん！そんな変態メガネと一緒にしないでくれる。属性が汚れる」

元浜「なんだと！」

属性が汚れるってどういうことだ？

一誠「元浜のメガネはな女子のバストを瞬時に数値化できんだぞ！」

元浜「貴様は…80・5ってところか」

蓮夜「おい3バカ」

一誠「蓮夜！お前も俺達をバカにするのか！」

蓮夜「実際にバカなんだからしようがねえだろ」

3バカ「「うっ！」」

蓮夜「お前らがどんな夏休みを過ごすかは自由だけどな。変なことやってみる。オレが制裁を加えるからな」

一誠「ひっ！」

元浜「お、お前1人など、おとお恐れるに、たらんわ…！」

松田「そ、そうだ！」

蓮夜「なら助っ人を呼ぶか。達也ー」

達也「なんだ？」

蓮夜「元浜が深雪を卑猥な目で見てたぞ？」

その瞬間達也は普段から目つきが悪い方なのに一層元浜を睨みつける

達也「元浜：ちよつと来い」

元浜「えつ、ちよつと、うわあああ！」

達也は元浜の首根つこを掴んで教室から出た

蓮夜「おーい十六夜、松田がお前と遊びたいらしいぞー。お前なんか相手にならんらしい」

十六夜「へえ、松田。ならお外で遊ぼうか」

松田「ちよつ！俺、そんなこと一言も、ぎやあああ！」

十六夜も達也同様松田を持って行つた

蓮夜「さあて一誠。お前は何かいい…？」

オレは手をポキポキ鳴らして一誠に歩み寄る

一誠「すいませんでしたあああ!!!」

一誠は勢いよく土下座して頭を地面につけている

蓮夜「わかればいいさ」

オレは自分の席に戻る。達也と十六夜も少しして帰ってきた。ガクブル状態の元浜

と真つ白になつた松田を引きずつて

―オカルト研究室―

オレは今眷属全員を連れてオカルト研究室の部室へ来ている。なんでもリアスから夏休みのことについて話したいことがあるらしい

一誠「なあ木場、お前は夏休みの予定とかあるのか？」

祐斗「ああ、一誠くんは初めてだったね」

アーシア「小猫ちゃんは何かするんですか？」

小猫「兄様と姉様と過ごします」

黒歌「白音、どこ行きたいにや？蓮夜が連れて行つてくれるにや」

蓮夜「オレかよ……」

そうな他愛もない話をしているとリアスと朱乃が戻つてきた

リアス「みんな揃つてるわね」

リアスはソファアーに座り話し始めた

一誠「冥界に帰る？」

リアス「夏休みの間故郷に帰るの。毎年のことなのよ？つてどうしたの、一誠」

「一誠「部長が突然帰るって言い出すから、俺を置いて帰っちゃうのかと思いましたよ」」

一誠はそう勘違いしたようでも涙を浮かべている

リアス「そんなわけないでしょ。あなたと私はこれから1000年、1000年単位で付き合うのだから安心しなさい。あなたを置いてなんか行かないわ」

一誠「はい部長」

リアス「そういうわけで明日からみんなで冥界に行くわ。長期旅行の準備をしてちょうだい」

一誠「えっ」

アーシア「私達もですか？」

リアス「主人と下僕なのだから同行するのは当然よ」

アーシア「生きているのに冥界へ行くなんて緊張します！死ぬ気で行きたいと思いません」

ゼノヴィア「主に仕えていた身で地獄に送ったもの達と同じ場所に足を踏み入れるとは、悪魔になった元信者にはお似合いだね」

蓮夜「それを言うなら今現在神代行のジブリールが悪魔なんだぞ」

ジブリール「そうでございますね」

グレモリー眷属のみんなはそうだったという顔をする

アザゼル「俺も冥界へ行くぞ」

一誠「アザゼル先生」

先生…？

リアス「あなたいつの間に！」

アザゼル「俺の気配を感じられないようじややつぱり修行が足りなようだな…グハツ  
!!」

アザゼルはいつもリアスが座っているイスに現れたのでオレは朱乃と小猫のことを  
黙って決めた腹いせに1発殴った

アザゼル「何すんだ！蓮夜！」

蓮夜「オレはお前の気配を感じ取れるんでね。なぜ朱乃と小猫のことを勝手に決めた  
？」

オレはもう1発殴る勢いで手をポキポキ鳴らす

アザゼル「今日伝える予定だったんだ！本当ならお前の家に住むのも今日からのはず  
なんだ」

蓮夜「は？朱乃、小猫…」

オレはその言葉を聞いて朱乃と小猫の方を見る

朱乃「うふふ♪」

小猫「∴／／／」

朱乃は笑顔で、小猫は俯いて何も言わない

蓮夜「はあ、もういい。話を戻してくれ」

リアス「あなたをここに呼んだのは、あなたも夏休み間冥界へ帰るのか聞きたかったからよ」

蓮夜「帰るが、なんでだ？」

リアス「お母様があなたを連れてこいとうるさいのよ」

蓮夜「ああ…」

その後オレは冥界へ帰ったときにグレモリー家へお邪魔することを約束した

余談だがソーナにもリアスと同じことを聞かれ、理由はセラが連れてこいとうるさいらしい。これはオレのせいなのか…

―翌日―



オレ達とリアスは別行動で冥界へ帰る。グレモリー眷属は悪魔専用の列車で帰るようだ。オレ達はいつも通りオレの魔法陣で帰る

冥界に帰るとそこには懐かしい顔ぶれが揃っていた

ユウキ「お姉ちゃん！」

「ユウキ、おかえり」

レム「お姉様、ただいま帰りました」

「ええ、おかえりなさいレム」

「ティナ、おかえりなのだ！」

「お、おかえりなさい」

「ティナやんお久ー」

「ティナ、蓮夜。戦おう」

「小比奈さん落ち着いて、おかえりなさい」

クロメ「ただいま、お姉ちゃん。みんなも」

「ああ、おかえりクロメ」

「みな、元気そうだなによりだ」

「久しぶりだな、蓮夜！後でお姉さんところにおいで」

「ちよつと！レオーネ！あんた何言ってるのよ！」

「やつと帰つてきたんだ」

「ふむ」

「蓮夜、お前！またこんなに可愛い子たくさん侍らせやがって！あれか！オレへの当てつけか！」

「みなさん、お久しぶりです。あ、メガネメガネ……」

「ははは！蓮夜！久しぶりに一緒に鍛錬しないか!？」

蓮夜「ラバとシエーレは相変わらずだな。ブラートもまた後でな。ていうかナイトレイドが勢揃いだ」

そこにいたのはユウキの姉である藍子。クロメの姉であるアカメ。レムの姉であるラム。テイナと同じ呪われた子供達でオレが引き取った藍原あいはら延珠えんじゆと布施ふせ緑みどり、桐原きりはら弓月ゆづきと蛭子ひるこ小比奈こひな、そして千寿せんじゆ夏世かよ。クロメやアカメと同じ暗殺部隊に所属していた「ナイトレイド」のマイン、レオーネ、ブラート、ラバック、スーさんことスサノオ、チエルシー、シエーレ、そしてナイトレイドのボスであるナジーことナジエんだ。そのナジーのとなりには見知らぬ若い男が立っている。

蓮夜「ん？ナジー、新人か？」

ナジエندا「ああ紹介しよう。新たにナイトレイドに加わったタツミだ」

タツミ「タツミです！よろしくお願いします！」

蓮夜「そう固くならなくっていいよ。神崎 蓮夜だ。よろしくな、タツミ」  
タツミ「はい!!」

オレは自己紹介をしてタツミと握手をする

蓮夜「他のみんなは？」

ナジエンダ「もう屋敷に集まっているさ。お前達の戻りを心待ちにしているぞ」

蓮夜「そうか。じゃあ帰るか」

オレの一言にみんなは返事をしてオレの屋敷に向かう

ちなみに屋敷へ戻り途中オレは延珠、弓月、小比奈を順番に肩車した。それをティナ、  
緑、夏世、犬千代、アンナは羨ましそうに見ていた

## 第2話

## ―屋敷―

こっちのオレの家は自分で言うのもなんだとは思うが結構でっかいと思う。どれだ  
けでっかいかというと、どれくらいだろ…まあ家族や仲間が増えるたびに改築を重ねれ  
ばこうもなるか…

―屋敷に着いたオレ達はまずそれぞれの荷物を自分の部屋に持っていった。オレ達が  
留守の間もこの掃除などの管理はしっかり行き届いていて感謝感謝。それからオレ  
はみんなが集まっていると言われた大きな広間のドアを開けて中に入った。そこにも  
懐かしい顔ぶれが勢揃いしていた

「お兄ちゃん！」

蓮夜「おっと、危ないだろ？クロ」

クロ「だつて。でも、ちゃんと受け止めてくれるんでしょ？」

蓮夜「まあな」

クロ「えへへ♪お・に・い・ちゃん、ん〜♡」

中に入ると一目散にオレに飛びついてきた小学生ぐらいの背丈にノースリーブのパーカーにジーンズの生地の上のショパンを履いたクロエ・フォン・アインツベルン。みんなは短くしてクロって呼んでる。そのクロをオレが抱きとめるとオレの首に手を回して目を瞑り、顔を近づけてきた

「こらー！クロ！なにやってるの!?!」

「イリヤ、落ち着いて…」

後からクロと同じぐらいの背丈で一人は水色のトップスに腰のところのリボンのついたピンクのスカートを履いたイリヤスフィール・フォン・アインツベルン、もう一人はライトグリーン七分丈パンツに白を基調に青いストライプ模様のブラウスを身に纏った美遊・エーデルフェルトが追ってきた

クロ「もう、邪魔しないでよイリヤ。私はこれからお兄ちゃんと愛を育むんだから」  
イリヤ「そんなことダメに決まってるでしょ!?!お兄ちゃんも不潔だよ!」

蓮夜「いや、オレのせいじゃなくない?」

美遊「お兄さん…」

蓮夜「美遊もそんな目で見ないでくれ…」

美遊「美遊だけではなく部屋を見渡すと他多人数から様々な目を向けられていた」

蓮夜「クロ、愛云々はとりあえず置いて、とりあえず挨拶したいから下りてくれ」

クロ「むゝ…」

オレはクロを下ろして壇上に上がった。そして集まってくれたみんなに挨拶をする。蓮夜「みんな、とりあえずくださいま。今日は集まってくれてありがとう。みんなに会えて嬉しい。今はこれくらいにしてこの後夕飯までは自由に過ごしてくれ」

オレは最後に「解散！」と言ってキッチンに行き、夕飯の準備に取り掛かった。手伝いとしてスーさん、タツミ、レム、藍子、深雪といった料理できる組が手伝ってくれた。蓮夜「みんな悪いな、手伝ってもらって」

レム「何言ってるんですか、普通なら主人である蓮夜くんによってもらう方が変なんですよ」

深雪「そうですよ」

藍子「それにみんなの方が早くできるしね」

蓮夜「ありがとな。しかしタツミもなかなか手際がいいな」  
タツミ「俺村暮らしだったから、自然と身に付いたんです」

スサノオ「タツミの料理のときは俺が保証する」

蓮夜「スーさんのお墨付きなら頼りになるな」

料理中はほとんどタツミのことや、逆にオレのことをタツミに話したりしていた。蓮夜「そういえば『あいつら』はまだ帰ってないのか？」

藍子「うん。でも夕飯には帰ってくるよ」

蓮夜「またうるさくなりそうだな」

深雪「仕方ありませんね」

レム「皆さん蓮夜くんに会えて嬉しいのですよ」

そうだといいんだがな

ー夕飯ー

大勢で作ったので予定より早く作り終わった。オレらはそれをさつき行つた大広間へ運んでいった。そこには既にパーティ用の丸いテーブルが何台も置かれていた。オレはみんなを呼び、先ほどと同様壇上上がった

蓮夜「みんな、さつきも言ったがホントに集まってくれてありがとう。今日は楽しんでくれ！じゃあ、乾杯！」

『乾杯!!』

みんなはオレの号令に返す。オレはみんなの元を回ろうと壇上から下がる

「蓮夜ー！」

蓮夜「おおナツ。久しぶりだな」

大声で来たのはナツ・ドラグニル。有名な組織、//妖精の尻尾（フェアリーテイル）//の1人だ

ナツ「おう！相変わらず飯美味えな！」

蓮夜「たくさんあるから、遠慮しないで食べよ。グレイもな」

ナツの横にいるのはグレイ・フルバスター。こっちも妖精の尻尾の1人だ

グレイ「おう！ああ！ナツてめえ！それオレのだぞ！」

ナツ「早いもん勝ちだ！」

そのまま2人は食べ比べ競争を始めてしまった

「蓮夜ー！」

「蓮夜さんー！」

蓮夜「おかえりルーシイ、ウエンデイ」

次にやって来たのは同じく妖精の尻尾の一員であるルーシイ・ハートフィリアとウエン

ンデイ・マーベル、エルザ・スカーレットだ

ルーシイ「蓮夜こそおかえり！」

ウエンデイ「おかえりなさい！」

蓮夜「エルザも今日は楽しんでくれ」



エルザ「ああ、久しいメンツも揃つてることだしな」

蓮夜「あんま飲みすぎんなよ」

エルザ「わかつている」

エルザはそう言つて酒瓶を片手に行つてしまつた

「蓮夜ー♪」

「蓮兄ー♪」

蓮夜「おい、抱きつくな。ミラ、リサーナ」

今度は妖精の尻尾で全勢力で女優としても有名であるミラジエーン・ストラウスとその妹のリサーナ・ストラウスだった

ミラ「いいじゃない。久しぶりなんだから」

リサーナ「そうそう。蓮兄全然帰つてこないんだもん」

蓮夜「悪かつたな。エルフマンは？」

リサーナ「あつちで男どもと飲んでるよ」

リサーナが指差した方でミラの弟でありリサーナの兄であるエルフマン・ストラウスが「漢ー！」と叫びながらワイワイやっていた

ルーシイ「ミラさん！リサーナ！」

ウエンデイ「お二人ともズルいです！」

ミラ「あら、なら2人もやればいいじゃない」

リサーナ「そうだよ。蓮兄は心が広いから何人でも相手してくれるよ」

蓮夜「人を遊び人みたいに言うなよ」

オレはそう行つて他にも行かなきゃと告げてその場を離れた

「お、おーい蓮夜!」

蓮夜「レオ、よく来たな」

レオ「当たり前だろ」

「ちよつとー、私は無視ー?」

蓮夜「そんな気はなかつたんだがな。すまんエリカ」

エリカ「ウソウソ、大丈夫だよ」

オレは達也と深雪の友達である西城さいじょう レオンハルトと呼ばれ、そこには同じく達也

と深雪の友達の小葉 エリカがいた

蓮夜「しかし、相変わらず2人は一緒にいるんだな」

エリカ「ちよつと、蓮夜くんまでそんなこと言うの?」

レオ「さつき達也からも同じことを言われたぜ」

深雪「お二人は本当に仲がいいのね」

達也「そうだな」

エリカ「違う！」

エリカは深雪の言葉に猛反対する

蓮夜「そういえば美月達はどうしたんだ？」

エリカ「はあ、美月とミキは用事で来れないんだって」

深雪「雫とほのかも家の都合で来れないときつき連絡が…」

蓮夜「そっか。それは残念だな」

まあ長期でここにいるわけだし、時間が空いたら会いに行くか。特にほのかは達也にめちやくちや会いたいだろうしな

オレは「じゃっ」と言つてその場を離れる

その後飲み物を持ちながら歩いてしていると誰かが後ろから勢いよく抱きついて来た。その正体は延珠だった

延珠「蓮夜、こつちに来るのだ！」

蓮夜「わかったから引つ張るな」

延珠はオレの服を引つ張りどこかへ連れて行く

小比奈「あー、蓮夜だー」

「おやおや、久しぶりだね。蓮夜くん」

蓮夜「影胤さん。今日は来れたんですね」

影胤「ああ、お邪魔させてもらってるよ」

小比奈の隣にいる仮面を被り燕尾服とシルクハットを身につけているのは小比奈の実の父親である蛭子ひるこ影胤さんだ。ほとんどは外で仕事をしているので小比奈はこっちで面倒を見ているのだ

「久しぶりですね、蓮夜さん」

蓮夜「蓮太郎、なんか大きくなつたな」

蓮太郎「なんすかそれ」

蓮夜「はははは！木更も元気そうだね」

木更「はい！これ全部食べてもいいんですか!？」

蓮夜「ああ、好きなだけ食いな」

そしてまだ高校生で木更の元で民間の警備を頑張っている里見さとみ蓮太郎と蓮太郎が所属している会社の社長である天童てんどう木更も来ていた。木更は完全に食い物狙いだろ「オレ達に挨拶はなしか？ボーイ」

蓮夜「わかってるよ。妹が構ってくれないからってそう落ち込むな、玉樹」

玉樹「うるせえよ！そ、そんなんじやねえ…！」

オレの言ったことに焦る弓月の兄の片桐かたぎり 玉樹たまき 凶星かよ…

蓮夜「彰磨さんもよく来たな」

彰磨「久しいな蓮夜」

蓮太郎の兄弟子である雑沢なげさわ 彰磨しょうまさん。蓮太郎や木更と同じ道場で腕を磨いた武人

だ

弓月「おにい、恥ずかしいなあもう！」

蓮夜「そう言つてやるな」ナデナデ

弓月「く／＼／」

緑「彰磨さんは里見さん達に会えて嬉しそうです」

蓮夜「そうだな」ナデナデ

緑「く／＼／」

2人の頭を撫でてやると2人とも顔を赤くする

玉樹「あー！俺の妹になにやってやg…「おにいうるさい！」…ガハツ！そんな…妹よ…」

玉樹は弓月にひと蹴りされてダウンしてしまった

蓮夜「夏世は楽しんでるか？」

夏世「はい、でも蓮夜さんに会えなくて寂しかったです」

蓮夜「…すまん」

夏世「そう思うならもう少し頻繁に帰って来てください」

蓮夜「…善処する」

夏世「(ジー……)」

蓮夜「？」

夏世「(ジー……)」

夏世は無言でオレを見てきた。オレはそつと夏世の頭に手を乗せる

蓮夜「こ、こうか…？」

夏世「正解です♪」

よかつた…

延珠「蓮夜！妾にもナゲナゲするのだ！」

小比奈「蓮夜！私も！」

ティナ「お兄さん！」

その後子供達全員の頭を撫でさせられた

チエルシー「蓮夜く、こつちにも来てよ」

子供達からやつとのこと解放されたところに今度はチエルシーに連行された

レオーネ「お、来たな。おら蓮夜！久しぶりなんだから酒を注げ！」

蓮夜「道理がめちやくちやだな」

そう言いながらもレオーネのグラスに酒を注ぐ

ナジエンダ「まあこういう時間だからな。少しは羽目を外してもいいだろう」

蓮夜「そうだな。しかしナイトレイドも変わったな。まさかマインが惚気るとはな」

マイン「ぶふっ!!な、なななに言ってるのよ！そんなわけ、ないじゃない！」

蓮夜「さつきからタツミばっか見てんのか？」

マイン「っ！／／」

シエーレ「顔が真っ赤ですよ？マイン」

マインは顔を真っ赤にして黙ってしまう。その現況のタツミはスーさんやブライトと話していた。シエーレはマインの横でクスクスと笑っている。クロメは姉のアカメと一緒に食事をしているのが見て取れる

チエルシー「ねえ蓮夜、私には何も無いの〜？」

蓮夜「そう言われてもな…何すればいいんだよ」

チエルシー「そんなの自分で考えなよ」

チエルシーはパイッとそっぽを向いてしまった

蓮夜「はあ…手持ちが何もないからこれで我慢してくれ」ナデナデ

チエルシー「♪ま、今日はこれで勘弁してあげる♪」

オレは「それはどうも」と言つてその場を離れる。チエルシーやレオーネとのやりとりを側からラバが涙を流してハンカチを噛みながら見ていたがほつとこう

「雪菜ー！雪菜！雪菜！」

少し離れたところから雪菜の名前を連呼する声が聞こえて来たのでその声のする方に行つてみた。すると雪菜が一人の女性に抱きつかれて頬擦りされていた

雪菜「紗矢華さん」

蓮夜「相変わらず仲いいな」

紗矢華「神崎 蓮夜！私の雪菜に変なことしてないでしょうねえ!!？」

蓮夜「してねえよ。信用ねえな」

紗矢華「あ、当たり前でしょう！それに私はあなたのことなんて、き…嫌いだし…！」  
「照れ隠しでもそんなことを言つてはダメですよ、紗矢華」

「お兄さん。お久しぶり、でした」

そこへやつて来たのは飲み物を持ったラ・フォリア・リハヴァインと彼女と瓜二つの  
叶瀬<sup>かなせ</sup>夏音<sup>かのん</sup>だった

紗矢華「殿下！私は別に照れ隠しなどは…！」



ラフォリア「久しぶりですね、蓮夜」

蓮夜「ああ、ラフォリアと夏音は来て大丈夫だったのか？」

夏音「はい。せつかくですからお兄さん達と会ってこいとのこと、でした」

蓮夜「そっか」

ラフォリアはとある王国の王女なのだ。とある事情で夏音と身内であることを知り、

夏音も今はそっちで暮らしている

「まったく、前にあつた時よりも女の子増えてない？」

「さすが蓮夜だな」

「学業も怠つてはいないだろうな」

「…」

飲み物を片手に近づいて来たのはコンピューターのことに関して右に出る者はいない藍羽あいはば、浅葱あさぎと裏では情報屋として活動している八瀬やぜ、基樹もとき、魔術師でありながら小學生並みの体格の南宮みなみや、那月なつきとこの屋敷の専属メイドであり普段は那月ちゃんのお手伝いをしているアスタルテだ

蓮夜「そんな言い草はないんじゃないか？浅葱」

浅葱「事実でしょ」

基樹「浅葱、妬いてんのか？」

浅葱「ぼっ！そ、そんなわけないでしょ!？」

基樹「どうか。てかお前はどんどんハーレムになつてくな、蓮夜」

蓮夜「基樹、お前帰つてこれなくなるレベルで殴り飛ばしてやろうか？」

基樹「それはシャレになんねえから、遠慮しとくわ…」

蓮夜「はあ…那月ちゃんも変わりねえみてえだな」

那月「私を那月ちゃんと呼ぶな。まあ問題児が何人かいるが問題はない」

那月「私を那月ちゃんと呼び続けて呼ばれることにひどく抵抗があるらしい。しかしみんなは那月ちゃんと呼び続けている。ちなみに那月ちゃんは人間界で高校の先生をしている」

蓮夜「アスタルテもここの掃除とかありがとな」

アスタルテ「問題ありません」

アスタルテはこんな風に必要最低限のことしか口を開かないのだ

他にも今日来れなかったやつらにはいるがユウキは姉の藍子と、レムも姉のラムと、犬千代とアンナはティナ達と、黒歌とカナリアは妖精の尻尾のメンバーと、ジブリールは深雪達と楽しく過ごしているようだ。タツマキと十六夜の姿は見えないがそれぞれ自分の時間を過ごしているのだろう。この帰省は楽しくなりそうだな

## 第23話

ー翌日ー

今日オレはリアスに呼ばれてグレモリー家の食事に招待されたのだ。だがみんなを連れて行くわけには行かないから今日のところは珍しく仕事のない妖精の尻尾のメンバーと一緒に邪魔することにした

昨日のうちに帰って来ていたメンバーに加え、新たに今日の朝合流したガジル・レツドフオックスとレヴィ・マクガーデン、ジュビア・ロクサーの3人を加え、グレモリー家の屋敷に向かった。道中オレはルーシイとリサーナに両腕をがっしり組まれてた。後ろからはウエンデイとミラ、レヴィからすごい睨まれている気がした：

ーグレモリー邸ー

目的地に到着すると屋敷の扉が開き、中からグレイファイアが出て来た

グレイファイア「遠い中お越しいただきありがとうございます。中でジオディクス様方がお待ちです」

蓮夜「こつちこそお招きありがとな」

オレ達はグレイフィアの後に続いて屋敷内に入っていく。そしてグレイフィアがある部屋のドアを開けるとそこにはリアスに似た若い女性が立っていた

「あら、お久しぶりですね。蓮夜さん」

蓮夜「ああ、久しぶりだなヴェネラナ。お招き感謝するよ」

彼女がサーゼクスやリアスの母であるヴェネラナ・グレモリーだ

ヴェネラナ「ゆつくりしてらしてね。リアス達もすぐくると思うので」

蓮夜「わかった」

オレは部屋から出て行こうとするがヴェネラナに腕を掴まれ阻まれた

ヴェネラナ「蓮夜さんは、私の部屋”でお休みになつて」

『はいー!!!?』

ヴェネラナの一言に大声をあげる女性陣

蓮夜「遠慮するよ」

ヴェネラナ「それは残念。でもあなたが来たいときならいつでもいいですからね♪」

夫がいるにも関わらずこのスキンシップは変わんねえな

その後すぐにリアス達が到着してみんなで夕飯の席を囲んでいる。ちなみにオレの

隣はミラとウエンデイだ

ジオ「リアスの眷属諸君、そして蓮夜殿と御付きの方々、我が家だと思つて氣を樂にしてほしい」

蓮夜「ジオ殿、始める前に少しよろしいか？」

ジオ「構わんよ」

蓮夜「改めて本日はお招きいただき感謝する。知らぬ者もいるだろうから今日オレと一緒に出席してくれた者達を紹介する。ナツ」

ナツ「ああ。ナツ・ドラグニルだ」

グレイ「グレイ・フルバスターだ」

ルーシィ「ルーシィ・ハートファイリアです」

エルザ「エルザ・スカーレットだ」

ウエンディ「ウエンディ・マーベルです」

ミラ「ミラジェーン・ストラウスよ」

エルフマン「その弟のエルフマン・ストラウスだ」

リサーナ「その妹のリサーナ・ストラウスです」

ガジル「ガジル・レッドフォックスだ」

レヴィ「レヴィ・マクガーデンです」

ジュビア「ジュビア・ロクサーですわ」

精霊の尻尾のメンバーが順番に自分の名前を言っていた

サーゼクス「まさかかの有名な精霊の尻尾と君が知り合いだったとはな」

リアス「精霊の尻尾！」

一誠「部長知ってるんですか？」

朱乃「少数で悪魔、天使、墮天使のどの勢力とも互角に渡り合うことのできる有名な組織ですわ」

驚きを隠せないリアスに変わって朱乃が説明する

蓮夜「まあオレ達とは数年前から協力関係つてことで今ではオレの大事な仲間だ」

ルーシイ「：／／／」

ウエンデイ「：／／／」

ミラ「蓮夜つたら：／／／」

リサーナ「もう：／／／」

レヴィ「：／／／」

若干5人ほど顔を赤くしているがオレは気にせず食事に手をつける。一誠やアーシア、ゼノヴィアは慣れない手つきで進めている。ナツやガジルはそんなの関係なしにバクバク食ってるが…

一誠「どうしたんだ？」

ギヤスパー「こんな広い場所で食事なんて、緊張で味がわかりません」  
ギヤスパーも緊張しているようだ

ジオ「ときに兵藤 一誠くん」

一誠「はい」

ジオ「ご両親はお変わりないかな？」

一誠「はい、おかげさまで2人とも元気です。家をリフォームしていただいてとても喜んでいきます」

ジオ「いやあ、私はもつと大きな城を用意しようと思っていたんだが…」

一誠「お城!？」

リアス「お父様!こちらの文化を押し付けては…」

ジオ「だからせめて若いメイドを50人はつけよう」と

一誠「メイド!」

一誠はメイドという言葉にテンションがあがり、勢いよく立ち上がる

ジオ「しかし」そんなことをしたら一誠の生活に支障がでます!」と娘に諫められてしまつてな。ははははは!」

一誠「さすが部長…わかつてらっしやる…」

ジオ「ときに兵藤 一誠くん」

一誠「はい！」

ジオ「今日から、私のことをお義父さんと呼んでくれて構わない」

それは気が早いんでないかい…？

ヴェネラナ「あなた、性急ですわ。まずは順序というものがあるでしょう？」

リアス「もう！お父様お母様つたら！」

リアスは恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にして立ち上がり、部屋を出ていった  
まった

ヴェネラナ「では私は蓮夜さんのことを、*旦那様*とお呼びしましょうかしら♪」

蓮夜「は？」

『えー!!!』

ジオ「ヴェ、ヴェネラナ…？それはどういう…」

ヴェネラナ「そのままの意味ですよ」ウフフ

いきなりヴェネラナが変なことを言い出したかと思いきやさつきまで静かだった女性陣がオレに詰め寄る

ミラ「ちよつと蓮夜どういふことよ!？」

リサーナ「蓮兄！」

蓮夜「あいつが勝手に言ってることだろう！」



レヴィ「人妻!? 人妻がいの!?」

ルーシイ「蓮夜ヒドいよ!」

ウエンデイ「蓮夜さん!」

ミラとりサーナがオレをブンブン揺らしながら、レヴィは大声で、ルーシイとウエンデイは涙を浮かべながらオレを問い詰めてくる

朱乃「うふふふ、私は何番目でもよろしいですわ」

小猫「兄様…ヒドいです」

朱乃はいつも通りの笑顔で、小猫も涙を浮かべながらこつちを見てくる

蓮夜「勘弁してくれよ」

ヴェネラナ「うふふふ♪」

その後帰ってからその5人はやけ酒をしたらしく、深夜にオレの部屋に忍び込んできてオレは一晚中5人のご機嫌とりをやらされた

一翌日

今日はアザゼルに呼ばれてリアス達の特訓の見学に来ている。何でもオレ達の意見が聞きたいらしい

アザゼル「よし、みんな集まってるな。人間界の時間で20日間、特訓メニューを作った。蓮夜達には見学で来てもらった」

一誠「20日も特訓すんのかよ」

アザゼル「一誠、まずはお前からだ」

一誠「えっ」

すると突風ともものすごい音と共に1匹の龍が近づいてきた

一誠「昨日のドラゴンのおっさん！」

蓮夜「タンニーンか。懐かしいな」

タンニーン「蓮夜ではないか。そこまで強くなってしまったのか」

蓮夜「まあな」

魔龍聖（ブレイズ・ミーティア・ドラゴン）のタンニーンは元ドラゴンの転生悪魔だ。

一誠の特訓にはもってこいだな

アザゼル「お前の専属トレーナーだ」

一誠「なっ！」

タンニーン「ドライグを宿す者を鍛えるなど初めてだ」

アザゼル「修行中に禁止化に至らせない。ま、死なない程度に気張れ！」

蓮夜「レア達もいるか？」

アザゼル「それじゃあマジで死んじやうからな。今回は遠慮しとく」

一誠「みなさん、もう少し言方つてもんが…うわっ!!」

タンニーンが一誠の首根っこを掴み持ち上げる

リアス「一誠」

一誠「部長…」

リアス「気張りなさい！」

一誠「そうでした…優しい部長も修行のときは鬼のしごきになるんです。う

わあああ!!」

一誠はその言葉を最後にタンニーンに連れていかれてしまった

その後眷属1人1人にアザゼルが考えた特訓メニューを伝えていった

- ・リアスは基礎練習だけではなく王としての機転と判断力を高める修行
  - ・朱乃は彼女にとって憎悪の存在であるバラキエルとの自分にある血を受け入れる修行
- 行

・祐斗は彼の剣の師匠と一緒に禁止化の持続の修行

・ゼノヴィアは聖デユランダルを自分の意思で使いこなす修行

・ギヤスパーは町に出て引きこもりを克服する修行

- ・小猫は格闘に加え仙術の修行。
- ・アーシアは遠距離回復の修行

オレらも何もやらないというのではなく、眷属の1人1人にオレと一对一の戦闘を繰り返した。戦い方は様々だ。殴り合い、魔法のぶつけ合い、剣術。まあどれでもオレは負けなしだけどな

### ―屋敷―

その夜、オレの屋敷にはたくさんの「ドラゴン」が集結していた。それらは全部オレ達の使い魔。オレの使い魔であるレア、ミル、ルカに加え、ユウキの使い魔である「流星龍（シューティイングスタードラゴン）」『スター』。雪菜の使い魔である「青眼の白龍（ブルーアイズホワイトドラゴン）」の『アイズ』。達也の使い魔である「赤悪魔の龍（レッドデーモンズドラゴン）」の『アカ』。深雪の使い魔である「氷結界の龍（トリシューラ）」の『シューラ』。黒歌の使い魔である「迅龍（ナルガクルガ）」の『ナル』。クロメの使い魔である「幻龍（バハムート）」の『ゲン』。シノアの使い魔である「海龍（タマミツネ）」の『タマ』。レムの使い魔である「風翔の古龍（クシャルダオラ）」の

『シャル』。アンナの使い魔である。赤紅眼の黒炎龍（レッドアイズブラックフレアドラゴン）の『クレア』。ティナの使い魔である。天魔の業龍（ティマツト）の『ティア』。犬千代の使い魔である。武者龍（ボルメテウス武者ドラゴン）の『ボルス』。カナリアの使い魔である。夢幻龍（ラティアス）の『ラティ』が勢揃いしていた。こんな名  
の知れたドラゴンが集まってたら3勢力が束になっても勝てないな…アハハ

今はみんなそれぞれ人型になって主人との交流を楽しんでいる…はずなんだがな  
…

ラティ「ん〜♪お兄ちゃ〜ん♪」

ルカ「えへへ♪蓮く〜ん♪」

ここにいるドラゴン達の中でも年少組にあたるこの2人はまだまだ甘えん坊で、さつきからずっとオレから離れようとしな。ラティはオレの使い魔じゃないんだけどな

…

蓮夜「2人ともそろそろ離れないか…？」

ルカ「や〜だ〜」

ラティ「お兄ちゃんが全然呼んでくれないのが悪いんだからね〜」

蓮夜「お前の主人はカナリアだろ」

どうやら気がすむまでこのままらしい

ティア「あの2人は相変わらずよのう」

シャル「てか蓮夜ってあの2人だけには甘くない？」

フレア「まったくだ」

アイズ「でもあの2人はまだ甘えたい時期なのかもしれないね」

シューラ「それでもベツタリしすぎですわ」

レア「あの子は…！」

ミル「(今度寝てる間に忍び込んでんじやおうかしら〜)」

アカ、ナル、ゲン、ボルス「「「はあ…」」」

その他の使い魔の女性陣はこつちを見ながら何やらブツブツ言っている。男性陣はなんかため息をついている。誰か助けてくれよ…

## 第24話

次の日の朝は少し早く起きて達也やゲンさん達と鍛錬に励んでいた

達也「はあ…はあ…」

蓮夜「やっぱゲンさん強えなく」

アカ「お前が言うな」

今は達也とゲンさんの組手がちょうど一区切りしたところだった。鍛錬に参加してるのはオレと達也、ゲンさん、アカ、ナル、ボルスさんだ

ナル「達也も強くなってきたな」

アカ「もう少しでゲンに一本取れそうだな」

ゲン「…」

アカとナルがゆっくりと歩み寄ってきたゲンさんにタオルを渡しつつそう呟いた

ボルス「拙者達使い魔の中でも格闘においてはゲン殿が最強でござるからなあ。ゲン殿から一本取れるようになれば相当でござるな」

となりではボルスさんが両腰に剣を携え腕を組んでいる

ナル「そういえばあの鍛錬好きなブライトがいねえのは珍しいな」

蓮夜「ああ。エルザやレオーネと飲み比べをしたみたいで絶賛二日酔い中で寝込んでるよ」

アカ「あの2人にはついていけねえわ。あれにカナが入ったらもう手をつけられんわ」

蓮夜「他に危害を加えなければどんなに酔おうが自己責任だからな。ただ迷惑がかかったときには制裁を加えるがな」

仲間の中には酒好きが少なからずいる。今名前が出たエルザやレオーネはもちろんのこと、精霊の尻尾のメンバーの一人であるカナ・アルペローナは特に酒好きで名の上がる一人だ

ボルス「お主の周りには未成年も多くいるでござるからな」

蓮夜「昔ウエンディとクロが間違つて飲んだときはヤバかった…」

アカ、ナル、ボルス「「ああ」」

昔、そのときも飲兵衛共が盛大にパーティーしているときに間違つてウエンディとクロが酒を飲んでしまったことがあった。ウエンディは目を回してぶっ倒れたし、クロはいつも以上に絡んでくるで大変なときを過ごした思い出が今も頭に残っている

アカ「さて、達也の息も整ったことだし。もういつちよいくか？」



達也「ああ、頼む」

ボルス「蓮夜殿は拙者といかがでござる？」

蓮夜「そうだなあ、あまり剣は使わないんだけどせつかくだしお願いしますか」

ボルス「そうこなくては！」

ナル「みんな元気だね〜」

ゲン「…」

ナル「ゲンさんは相変わらず寡黙だね」

それから一時間ぐらいだろうか、オレも久し振りに軽く全力を出せた気がする。やっぱりウチの仲間達もそうだけど使い魔方もパネエっすわ…：そんでそろそろ切り上げようかとしていたそのときにこちらへ飛んでくる複数の影が目に入った。その影はどんな大きくなっていき次第にこつちに下りてきた

「久し振り！蓮夜くん！」

蓮夜「久し振りだな、アスナ」

「蓮夜さん！お久しぶりです！」

蓮夜「スグも久し振り。それにしても結構早い到着なんじゃないか？」

「アスナとリーファが早くあなたに会いたいわって急かしたからよ」

アスナ「そういうしののんだって早く会いたそうだったじゃない」

スグ「そうですね。あんなにそわそわしてたくせにく」

先に下りてきた3人は結城 明日菜、桐ヶ谷 直葉、朝田 詩乃。ユウキの友達であるオンラインゲームで知り合っただけらしい。明日菜のことはそのままアスナ。直葉は短くスグだったりゲーム内ではリーファって名前使ってたからそう呼ぶやつもいる。詩乃はほとんどのやつからシノンと呼ばれてる。アスナやカナリアからはしののんってアダ名つけられてるけど

「みなさん早いですよー」

「私達のことも考えなさいよねー」

「それだけ蓮夜に会いたかったんだらうな」

「あの野郎！なんて羨ましい！」

あとから下りてきた4人も同じくユウキの友達で綾野 珪子、篠崎 里香、アンドリユー・ギルバート・ミルズ、壺井 遼太郎だ。みんなはゲーム内での名前でシリカ、リズ、エギル、クラインと呼んでいる

蓮夜「あれ？キリトは？」

アスナ「あれ？一緒に来たはずなんだけど…」

シノン「あそこよ」

シノンが指差した先には目を輝かせながらボルスさんに剣の指導を懇願する1人の

青年がいた。彼は桐ヶ谷 和人。アスナやクラインとはオンラインゲームの初期時代からの付き合いらしく聞くとところによると相当強かったらしくその格好から“黒の剣士”なんて呼ばれてたらしい

蓮夜「あいつの剣バカ具合は変わらんな」

リズ「まったくよ！」

シリカ「あの情熱を少しでも私達に向けてくれれば…」

蓮夜「リズもシリカもあいつにぞっこんだな」

リズ「う、うっさいわよ！蓮夜！あんたこそどうなのよ!?!」

蓮夜「オレか？」

シリカ「ユウキちゃんに限らずここにいる3人の気持ちとか…」

蓮夜「好意を持ってくれているのは素直に嬉しいぞ？」

アスナ「ふふっ♪」

スグ「えへへ♪」

シノン「ふん…」

リズ「キリトにもそこらへんは見習ってほしいわ」

シリカ「でもシノンさんはまだ照れ隠しでよく蓮夜さんに発砲してますよね？」

シノン「シリカ！あんたそんな余計なことは言わなくてもいいの!!」

蓮夜「まあもう慣れたさ」

シノン「わ、悪いとは思ってるわよ…」

蓮夜「知ってるよ。でも、もう少し頻度を少なくしてくれると助かるかな。あとしれっと麻痺矢撃つのもやめてな」

シノン「…善処するわ」

リズ「そこでやめるって言えないのがシノンクオリテイですな」

シノン「リーズーベツトローー…!!!」

リズ「ちよつ！たんまたんま!!!」

からかいがすぎたのかリズの最後の言葉にシノンは相棒であるドラグノフを展開して銃口をリズに向けた。リズはさすがに観念して両手を挙げた

蓮夜「まあまあ、シノン」

シノン「ちよつと、勝手に頭撫でないでよ」

蓮夜「おー、悪いな。でも嫌いじゃないだろ？」

シノン「…」

蓮夜「沈黙は肯定。シノンの口癖だな」

シノン「っく／＼／」

アスナ「もう！さつきからののんばっかりズルいよー！」

スグ「そうだよ！蓮夜さんはもつと私達平等に構うべきです！」

蓮夜「お、おう…すまんな」

エギル「モテる男は辛いな」

クライン「アスナちゃんにリーフアちゃん、蓮夜なんてほつといて俺と遊ばないか？」

アスナ、スグ「クラインさんは黙ってて!!」

クライン「はい…」

ここをいい機会だと思つたのか、とにかくモテたいクラインはアスナとスグにアタックしてみるも早々轟沈…無念なりクライン…

蓮夜「そういえばサチは一緒にやないのか？」

一同『あつ…』

蓮夜「お前らなんてやつだ…」

「きやーーーーー!!!」

もう一人来る予定だった子のことを全員は今の今まで忘れていたようだ。なんてひどい奴ら…するとそこに天高くから絹を裂くような悲鳴が聞こえてきた。目を向けると羽は生やしているものの全くその機能を發揮しておらず、パラシュートを装備していないスカイダイビングのように落下してきた

蓮夜「んぎやつ!!」

そして彼女の体重＋落下速度でオレに衝突した。彼女は無傷、オレは被害甚大…

「(い、い)めんなさい！蓮夜くん！」

蓮夜「い、いや…サチのせいじゃないさ。ほっぽったこいつらが悪い。ケガはないか？」

サチ「うん。蓮夜くんが受け止めてくれたから…」

蓮夜「こんな再会になっちまったが、久しぶりだなサチ」

蓮夜「うん、久しぶり蓮夜くん」

遠山 沙知。これが彼女の本名。アスナのようにゲームでも本名を使う人は多くはないがいてサチもその1人だ。ユウキ達に比べてサチはまだ飛行に慣れていないため誰かがサポートする手筈になってたはずなんだけどな…

サチ「みんなひどいよ…：どんだん先に行っちゃうんだもん…」

アスナ「ごめん！サチ！」

スグ「ごめんなさい！」

シノン「悪かったわ」

リス「でもそのおかげで…」

シリカ「蓮夜さんに抱きつけたので…」

エギル「そこまで悪い気はしてなかったりしてな」

クライン「蓮夜！なんでお前ばっかりー!!!」

アスナ「たしかに…」

スグ「さつきからサチさん…」

シノン「まったく蓮夜から離れようよしないわね」

サチ「え、いや…これは…」

アスナ、スグ、シノン「「サーチャー（さん）」」

サチ「ご、ごめんなさいー!」

蓮夜「いや、サチが謝ることはないだろ」

それからオレ達はボルスさんとキリトの鍛錬が終わるまで思い出話にふけていた

キリトの鍛錬が終わったのはそれから40分後だった

蓮夜「やっと終わったのか、キリト」

キリト「ボルスさんと会えるのはそう多くないからな。できればもう少しやっていた

いところなんだが…」

蓮夜「ボルスさんがいって言うならいいんじゃないか?」

シリカ「キリトさん、これどうぞ」

リズ「ちゃんと汗も拭きなさいよ」

キリト「ああ、ありがとう2人とも」

飲み物とタオルを渡したシリカとリズはキリトの笑顔が溢れていた

シノン「乙女な顔ね」

アスナ「しののめも蓮夜くんに頭撫でられてるときはあんな感じだよ」

スグ「そういうアスナさんもですよ。閃光のアスナと恐れられてる姿がどこへやらって感じですよ」

サチ「そう言うリーフアちゃんだって……って私もそうだからみんなお互い様だね」

アカ「みんな仲良く蓮夜に愛されればいいさ」

ナル「蓮夜はそれだけの器だからな」

ゲン「……」

ボルス「作用！蓮夜殿はたとえ100人の女子であろうと受け入れる方でござるからな——！」

蓮夜「みんなで好き勝手言ってくれちゃって。なあ達也？」

達也「否定できないんじゃないか？」

蓮夜「んにやろう……こんなときだけ笑いやがって……」

久しぶりに達也の笑顔（ニヤケ顔）を見たところで全員で屋敷に戻った



## 第25話

―パーティー会場―

今日は上位階級の悪魔、天使、墮天使が集まつての和平を記念したパーティーが行われる。オレも悪魔であるためパーティーには参加してくれとサーゼクスから頼まれた。今はオレとオレの家族のみんなが男性陣はタキシードを女性陣はドレスを来ている。会場へ向かう中たくさんの人からの視線がうちの眷属達に注がれていた

蓮夜「みんな悪いな。付き合わせて」

―黒のスーツに黒の蝶ネクタイ

タツマキ「本当よ！なんで私が！」

―濃いめの緑のAラインドレス

ティナ「まあまあタツマキさん……」

―黒を基調に袖や裾が深緑になっているAラインドレス

黒歌「私は全然大丈夫にや」

―黒に蓮の花が多くあしらわれた着物

カナリア「にゃんちゃんはいつも和服着てるからね」

ーピンクの肩出しエンパイアラインドレス

雪菜「少し落ち着きませんね」

ー白を基調に腰元に水色のリボンのついたフレアドレス

ユウキ「動きにくいね」

ー薄紫のミニドレス

レム「蓮夜くん…カッコいいです…」

ー青と白であしらわれたスカート短めのプリンセスラインドレス

アンナ「…変な感じ」

ー赤と黒のフレアドレス

犬千代「犬千代は意外にこれ好き…」

ー虎模様の着物

シノア「でも犬千代さん、今日はいつもの被り物もないんですね」

ー薄紫のフィッシュテイルラインドレス

深雪「すぐ慣れますよ」

ー水色の背中空きロングドレス

十六夜「ヤハハ」

「黒のスーツにネクタイなし

ジブリール「面倒でございますね」

「赤の肩出しフレアドレス

達也「諦めろ」

「黒のスーツに白に水色の結晶柄の入った（深雪が選んだ）ネクタイ

クロメ「蓮夜、どう？」

「黒のAラインドレス

蓮夜「ああ、みんな似合ってるぞ」

オレがみんなに向かつてそう言うのと女性陣は揃って赤面した

パーティ会場には既にリアス達は到着していた

祐斗「こんな上級クラスの悪魔達が一堂に会するなんて僕も初めて見たよ」

ゼノヴィア「まさに圧巻だね」

蓮夜「そりゃあそうだろ。こんな滅多にねえからな」

一誠「おう、蓮夜、つてなんだその格好！」

蓮夜「上級悪魔はドレスアップが必要なんだよ」

一誠「そうなのか。でもみんな綺麗だな…ウへへ」

蓮夜「一誠、お前殺されたいか…?」

うちの眷属達を変な目で見ている一誠にオレは言い放つ

一誠「すいませんしたああ!!」

リアス「くれぐれも粗相のないようにね」

蓮夜「言うの遅いだろ」

朱乃「蓮夜くん、よくお似合いですわ♪」

蓮夜「ありがとな。朱乃も似合ってるぞ」

朱乃「あらあら、うふふ♪照れてしまいますね♪」

朱乃は頬に手を当てて恥ずかしがる

小猫「兄様。カッコいいです」

蓮夜「ありがとな」

小猫「〜♪」

小猫にも褒められたので頭を撫でてやる。そこへ

ソーナ「ご機嫌よう、リアス、蓮夜さん」

リアス「ご機嫌よう、ソーナ」

蓮夜「おう」

リアス「そちらの合宿はどう?」

ソーナ「まづまづね」

セラ「いらつしやくい、ソーナちゃん☆」

ソーナ「お、お姉様！」

そこへセラが場の空気を読まず走ってこつちへやってきた

リアス「ご無沙汰しています、セラフオール様」

セラ「あ、リアスちゃん。赤龍帝くんも元気そうで何より♪」

一誠「は、はい…」

蓮夜「セラ。ちつとは魔王らしくしたらだ…」蓮くん！その格好素敵すぎー!!!」…はあ

…」

また大声を出しながらオレに迫って着たのでセラの頭を抑えて止める

セラ「もう、蓮くんのイケず…」

蓮夜「うちの連中の視線が痛いからそういうのはやめてくれ」

背後からは複数の冷たい視線を感じ取れる。オレはセラの頭から手を離し、リアスと

ソーナに一言声をかけてサーゼクス達がいる壇上へ向かった

サーゼクス「ミカエルはもうすぐ到着するそうだ」

アザゼル「護衛を任せたバラキエルの連絡だと、オーデインもこつちに向かっている

らしい」

サーゼクス「バラキエル殿に護衛を？」

アザゼル「念のためな。蓮夜の仲間にも護衛を任せている」

蓮夜「オレのところのものから連絡は入ってる。今のところ問題なく来ているみたいだ」

アザゼル「北歐の神々には主神オーディンが悪魔と同盟を結ぶのをよく思わないものいるらしいからな」

サーゼクス「どこにも似たようなものいるようだな」

アザゼル「問題はそういうやつらを禍の団が引き入れてるってことだ」

蓮夜「まあそういうやつらの邪魔をさせないためにもオレらがここにいるんだ」

サーゼクス「すまないが頼らせてもらおうよ」

サーゼクスはオレにそう言って頭だけを下げる

蓮夜「問題ねえよ。ん？はあ：若手はこれだから：十六夜、達也、頼む」

十六夜「ああ！」

達也「わかった」

オレの指示に答えた瞬間2人は姿を消した

サーゼクス「何から何まで申し訳ない」

蓮夜「いいってことよ」

それから数分としないうちにオーデインが到着した  
アザゼル「よお、ご苦勞だったなバラキエル」

「蓮夜、ただいまー!」

蓮夜「おっと。ご苦勞様、ヒメ」

舞姫「うん!」

「ヒメに触れるな!」

蓮夜「ヒメから来たんだから仕方ねえだろ」

舞姫「仲良くしないとダメだよ、ほたるちゃん」

ほたる「ヒメがそう言うなら…チツ…」

舌打ち…オレに勢いよく飛びついて来たのがてんかわ天河舞姫まいひめ、通称ヒメで、その後りんどろに続いて来たのはヒメが大好きすぎる凜堂りんどう ほたるだ

「はあ、やっと着いた」

「足手まといがいてどうなるかと思つたがな」

「はいはい、そうですね」

「こいつは普通の受け答えさえできんのか」

「おにい言われてるし、ウケる。あ、蓮にいい」

蓮夜「霞と壱弥はもう少し仲良くできないのか」

壱弥「無理だな」

霞「そうこちらが申しているので」

蓮夜「はあ、明日葉、お疲れさん」ナデナデ

明日葉「うん／＼／」

後からケンカしいながら入って来たのは朱雀壱弥と千種霞で昔から中が悪い。

その後にはオレの元に駆け寄ってきたのは霞の妹の千種明日葉だ

この5人に今回のオーデインの護衛を頼んだ

アザゼル「久しぶりじゃねえか。北の国のじじい」

オーデイン「ふん、久しいの。悪ガキ墮天使」

サーゼクス「お久しぶりでございます。北の主神オーデイン様」

オーデイン「サーゼクス、招きに生じてきてやったぞい」

セラ「ようこそいらっしやいました、オーデイン様」

セラはお嬢様のようにスカートを摘んでお辞儀する

オーデイン「うゝん、いかなセラフォル」

セラ「はい？」



オーデイン「せっかくの宴だと言うのに若い娘がそんな色気のない姿でどうする」  
セラ「…では！ミルルン☆ミルルン☆スパイラル☆」

セラはまた魔法少女に変身した

オーデイン「ほう、それは何じゃ？」

セラ「あら、ご存知ないですか？これは魔法少女ですわよ☆」

オーデイン「ほう、なかなか悪くないのお」

蓮夜「はあ、このエロじじい」

オーデイン「なんじやと！蓮夜、相変わらず儂には辛辣じやのお！」

「オーデイン様ご自重ください！ヴァルハラの名が泣きます！」

オーデイン「お前は固いのお。それだから未だに勇者の1人も貰い手がないんじや」

「なっ！…う…うええええん！どうせ私は彼氏いない歴〓年齢のヴァルキリーですよ

！」

蓮夜「はあ…女性泣かせんなよ爺さん。ほら、ロセも泣かないで」

ロスヴァイセ（以後ロセ）「うっ…うう…蓮夜さくん…」

蓮夜「久しぶりだな。また綺麗になつたか？」

ロセ「えっ！そ、そんな！綺麗だなんて…／／もう、蓮夜さんたら…／／」

泣いてたと思つたらいきなり顔赤くしてニヤニヤしだした。忙しいやつだな

オーデイン「こいつはうちのロスヴァイセじや。器量はいんじやがこのように固く  
てのう。男の1人もできん」

そこへ

ミカエル「お待たせして申し訳ないありませんでした。オーデイン殿、あいも変わら  
ぬご壮健ぶり嬉しく思います」

ミカエルとお付きの紫藤 イリナが到着した

ミカエルが到着したことでようやくみなへの発表ができる

サーゼクス「悪魔、神、堕天使の3勢力は過去を反省し同盟を結んだが再び争いを起  
こさせないよう皆の力を借りたい。どうかよろしくお願いする。オーデイン殿、意見が  
なければ調印を」

オーデイン「ん…」

っ！これは！

『異議あり』

オーデインが調印をしようとしたところにどこからともなく声が聞こえる

オーデイン「やはり貴様か…愚か者めが」

そして天井のほうで魔法陣が開き声の主が現れた

「我こそは北歐神、ロキだ」

アザゼル「これは珍客ですな」

サーゼクス「ロキ殿、北欧の神といえども其方にこの場を荒らす権利はない」

ロキ「我らが主神殿が我ら以外の神話体系に接触するのは耐え難い苦痛でな」

オーデイン「ロキよ。今すぐヴァルハラに戻るなら許してやらんでもないが…」

ロキ「許す？ふざけるな老いぼれ」

ロセ「主神になんてことを！」

ロキ「他の神話体系と結んだことは我らが迎えるべきラグナロクが実現できないではないか」

アザゼル「どつかで聞いた話だな、おい！てめえ禍の団と繋がってやがるな？」

ロキ「協力関係にあるのは認めよう。だがこれは私の意思だ。出でよ！私の愛しき息子よ！」

ロキがそう唱えると一匹の大きな獣が出現した

グワアアアア!!

蓮夜「うるせえよ、犬っころ」

ドガツ!!

オレの1発のパンチでその獣は吹っ飛んでいった。ホントなら1発で終わらせられるんだが、この場を血みどろにするわけにはいかないから加減した

蓮夜「とりあえず動きを封じて移動させるか。ジブリール！」

ジブリール「はい、マスター」

オレの声でオレと共にジブリールがロキと獣に一時封印の魔法をかける。ここで始末してもいいんだろうが一応ロキも北欧神、オーデインの意向を聞かないでやるのも問題なのでこの措置をとることにした

ロキと獣の背後に魔法陣が出現し、そこから出た鎖がロキ達の動きを封じ魔法陣に引きずり込んだ

ロキ「クツ！神崎 蓮夜!!!」

ロキはそう叫びながら封印された

サーゼクス「ありがとう蓮夜くん。助かったよ」

蓮夜「あれぐらいならここにいて誰でもできんだろ。それよりもこれからどうするんだ？」

サーゼクス「うむ。そのことについてこれから話し合う予定だ」

オレはそう聞いて話し合いが行われる部屋へ移動した

話し合いの結果、各国の魔王クラスの者が戦えばそれこそ戦争へと発展しかねない。

そこでオーデインが「ミヨルニルを持ってくるまで足止め役を選出することで決まった。そこでその場に足止め役を買って出たのはリアスだった

サーゼクス「足止め役を買って出ると……？」

蓮夜「転送だけなら何人でもできるが、いいのか？」

アジユカ「厳しい戦いになるぞ？」

リアス「覚悟の上です」

リアスは不安ではあるが覚悟を決めた目をしていった

セラ「ウフツ、志願者はあなただけじゃないみたいね」

その声と共に開かれたドアに立っていたのはソーナだった。そう、リアスがくる少し前にソーナはセラに自分も足止め役を志願してきたのだった

リアス「ソーナ」

ソーナ「私達シトリー眷属より3名、志願いたします」

そこにはソーナ、椿先輩、匙の3人が立っていた

セラ「どうしてもって聞かなくて。まあ今回のことは私達の失態でもあるしリアスちゃんもこの子も魔王の身内だから納得できる人選とも言えるんだけど」

アザゼル「既に2人は決まってるんだ。人選に費やす時間はねえぞ？」

リアス「2人？ってことはまた蓮夜!？」

蓮夜「またって何だよ。今回はオレは大人しくしてろってここにいる全員から言われ  
ちまった」

ミカエル「今回、こちらからは…」

リアス「イリナさん！」

ミカエル「彼女は戦力として申し分ありません」

イリナ「お任せを」

ロセ「相手はアースガルドの神、私も参ります」

サーゼクス「オーデイン殿がミヨルニルを転送するまでの間、時間を稼いでくれ」

それを聞いたリアスとソーナは気合を入れた顔をして部屋から退出した

セラ「…蓮くん…」

蓮夜「わかってるよ。手は出さないが近くで見守ってればいいんだろ？」

サーゼクス「すまないな」

蓮夜「お前らが心配なんはよくわかってっからな。それに王であるお前らじゃ迂闊に  
は動けんだろ。まあ死なせはしねえよ」

先ほどオレはやれないとは言ったがそれは戦闘に参加しないだけの話であって、近く  
で観察しないわけではない。いくら魔王の2人でも格上の相手に自分の妹達が挑むの  
に心配ないわけがない。だから危険と判断したらオレが介入することになった

外へ出てジブリールが張った魔法陣の上にアーシア、ギヤスパー以外のグレモリー眷属とソーナ達3人、ロセとイリナが立ち転移していった。そのすぐ後で

蓮夜「んじゃあオレも行きますか。霞と明日葉、あと黒歌、悪いんだが着いてきてくれ」

霞「あいよ」

明日葉「わかった」

黒歌「了解にやん」

オレもその3人を連れて転移した

## 放課後のラグナロク 第26話

オレ達は戦場に着いた瞬間知覚妨害の魔法陣を形成しそこから戦闘を観察することにした

蓮夜「さて、リアス達はどこまで戦えるかな」

明日葉「そんなんわかりきってんじゃない。あのロセねえはともかく、他は確実に死ぬでしょ」

蓮夜「…霞、相変わらずお前の妹は容赦ねえな」ボソボソ

霞「そこが明日葉ちゃんのいいところだけだな」ボソボソ

明日葉「なんか言った？」

霞「な、なんでも…」

蓮夜「そうそう、ただ明日葉はいつ見ても可愛いって言ってただけだよ…ははっ…」

明日葉「っ！／／／」

明日葉は蒸気が出るんじゃないかってぐら顔を真っ赤にした。そしてあぐらをか



いたオレの足に頭を乗せてゴロンと寝っ転がった

蓮夜「明日葉ちゃん？」

明日葉「いいから」

蓮夜「か、かしこまりました……」

黒歌「蓮夜、封印が解けるにや」

蓮夜「お、おう。霞は一応射撃準備をしておいてくれ」

霞「へいへい」

黒歌の声と共にロキを抑えていた封印が解けた。霞はうつ伏せ状態でライフルを構えた

—————

匙「敵は北歐の神か。修行明けからキツイぜ……だが、これも会長の夢を実現するためだ」

一誠「会長の？」

匙「冥界に下級悪魔でも通えるようなレーティングゲームの学校を作ることが会長の夢なんだ」

一誠「へえ、会長が……でも今回の件とどんな関係があるんだ？」

匙「下級悪魔の学校なんて言う悪魔もいるんだ」

一誠「悪魔は貴族社会だしな」

匙「だからさ他の神話体系と和平を結べればさ」

一誠「なるほど。悪魔社会も変わるかもってことか」

匙「俺な、会長の学校で先生になるのが夢なんだ」

一誠「へえ、いい夢じゃねえか」

匙「会長と俺の夢を邪魔するやつはたとえ北欧の神様だろうと好きにさせるわけには

いかねえんだ！」

一誠「ああ、お互い頑張ろうぜ！」

一誠と匙はそこで硬く激励しあつた

リアス「くるわよ」

リアスの言葉と共に封印の魔法陣は光り輝き、砕け散つた

ロキ「神崎 蓮夜、小癩なマネを。しかし永遠の皇帝もこの程度か」

ロキ「ロキ様！主神に牙を向けるなど許されることではありません！しかるべき公正な場で意を唱えるべきです！」

ロキ「オーデインのお付きのヴァルキリー。優秀と聞いているが神の相手には程遠い」

ロセ「聞く耳持たずですか…」

ロキ「ふっ、しかしラグナロクの前座にしてはあまりに貧弱」

ロキはそう言つて先ほどの獣を再び呼び出した

グアアアア!!

ロセ「フェンリル!」

グアアアア×2

ロキはフェンリルだけではなくその子である2匹も呼び出した

ロセ「フェンリルの子、ハティとスコル!」

キエエエエ!!

続いて今度はドラゴンを呼び出した

リアス「五大龍王の一角、ミドガルズオルムまで…」

イリナ「伝説の魔物達をあんなに…」

リアスが言った五大龍王の1匹であるミドガルズオルムは終末の大龍（スリーピング・ドラゴン）でありティアマトやタンニーンに並ぶドラゴンである

ロセ「おそらく龍王を模造したものでしょうが…」

匙「取り囲まれちまった」

ロキが呼び出した魔獣達はリアス達を逃さないように取り囲む

リアス「怯んだら負けよ。とにかく今は、時間を稼ぐことだけ考えましょう」

一同『はい!』

ロキ「神を相手にしたことを後悔せよ!」

ロキの合図と共にリアス達に襲いかかる魔獣達

—————

蓮夜「始まったな」

黒歌「これはちよつと厳しいにや」

霞「いやいや、ちよつとどころじゃないでしょ」

明日葉「…」

この戦闘はどうやら気合いでどうこうできるものじゃないのがすぐわかった。それぞれの修行の成果に期待するしかないな

そう思っていると各々その修行の成果を見せ始めた。祐斗、ゼノヴィアの騎士組は前よりも剣の扱いが上手くなっている。2人でフェンリルを相手できてくる。小猫も黒歌のおかげで仙術をおりませ上手く戦っている。そのおかげが一誠と協力しながらフェンリルの子を1匹相手している。だが一誠はマジでこのままじゃ死ぬぞ。

霞「蓮夜、本当にあいつが赤龍帝なのか？下手したら死ぬよ？」

蓮夜「ああ事実だ。タンニーンの話じや禁手化の一手手前までできているらしい」

黒歌「あれじやあ白音の足手まといにや！」

蓮夜「あいつも頑張つてはいるんだが、実際そうなんだよな」

それに問題はまだある。ミドガルズオルムに対するのはリアス、ソーナ、そして朱乃だった。そこで朱乃が先制の攻撃を仕掛けるが、それは今までと同じ雷のみであった。修行が成功したなら今頃その雷は雷光に変わっているはずであるのに……まだ自分の気が整理できていないようだ

蓮夜「朱乃はまだダメか……」

明日葉「蓮にどういうこと？」

蓮夜「あいつホントは光も放てるはずなんだ。だが自分でそれを受け入れられないみたいだな」

明日葉「だからあの人から半分だけど墮天使の気配がするんだ」

蓮夜「そういうこつた（今のままじや勝てねえぞ、朱乃）」

オレはどうにか乗り越えてほしいと思いつつながら観察を続ける

戦闘では椿副会長がミドガルズオルムが先制で放った炎を鏡で跳ね返していた。あれ神器かな。便利そうな能力だねえ……そしてリアス、ソーナの攻撃も始まった

そして違う方を見てみると、ロセとイリナがフェンリルのもう一方の子どもの相手をしていた。よく見るとイリナには翼が生えている。どうやら転生天使となつたみたいだな

しかし、オレの目には未だにどうすればいいかわからずモヤモヤした表情を浮かべている朱乃の姿が入っていた。そしてこの場で一番役に立てていないのを実感し、悔しい表情を浮かべている一誠も目にしていた

蓮夜「はあ：仕方ねえ」

オレはそう言つて結界を解き、大声で叫ぶ

蓮夜「おら朱乃!!お前いつまでウジウジ考えてるつもりだ!!!」

朱乃「っ！蓮夜くん：」

リアス「蓮夜！」

みんな一瞬オレの声に反応するがすぐに戦闘に気を戻した

蓮夜「いつまでその状態のままにする気だ！前にも言ったが、他の墮天使とお前は関係ねえつて言つたら!!お前はお前だ！だから自分自身を受け入れろ！心配すんな、どんな朱乃でもみんな受け入れてくれる！もちろん、オレもな！」

もうオレができることは何もねえ。これでダメだったら打つすべはねえ：オレがそう思っている中、朱乃が口を開く

朱乃「私は姫島<sup>ひめじま</sup> 朱璃<sup>しゆり</sup>と墮天使バラキエルの娘！そして！リアス・グレモリーの女王、  
姫島 朱乃！」

片方の翼を悪魔の、もう一方に墮天使の翼を生やしそう宣言した朱乃。受け入れたんだな…

朱乃「『雷光』よ！」

そう言い放った朱乃の右手には雷が、左手には墮天使の光の力が発動し、その2つが組み合わせり雷光となった。その力は一瞬でミドガルズオルムを痺れさせるほどだった

蓮夜「やればできんじゃないん。さて次は…」

ロセとイリナは無事フェンリルの子の1匹を倒し、祐斗とゼノヴィアもフェンリルを抑えていた

蓮夜「一誠！お前はここにきて何も感じないのか!？」

一誠「うるせえ！悔しいに決まってんだろ!!」

蓮夜「なら今することはなんだ!?!一刻も早く禁手化に至ることだろ!!」

一誠「わかってんだよ！だけどどうしたらいいかわかんねんだよ!!」

蓮夜「ドライグからも聞いているはずだ。禁手化には劇的な変化が必要だと。自分にとつてそれは何かもう一度考えろ！」

一誠「劇的な…変化…はっ！」

何か思いついたらいいな。オレは座り直す

一誠「部長！おそらく禁手化するためには部長の力が必要です」

リアス「私でいいならどんなことでも力を貸すわ」

一誠「…おっぱいを突かせてください！」

……………はっ？

リアス「…わかったわ。それであなたの思いが成就できるのなら」

…あいつらマジで意味わかんねえ

明日葉「…キモっ」

蓮夜「あいつらマジでか」

黒歌「蓮夜も突きたいのかにゃ？♪」

黒歌は自分の胸を持ち上げて尋ねてくる

蓮夜「からかうのはやめろ」

黒歌「別にからかってないにゃ♪蓮夜がしたいならいつでもいいにゃ♪」

明日葉「ダメ！」

黒歌「にゃ！」

ふざけている黒歌を両手で勢いよく押しした明日葉。その顔は赤くなっている



明日葉 「蓮に何もそういうのはダメ！」

蓮夜 「なんでオレが怒られるんだよ」

明日葉 「だって…で、でも蓮にいが、その、どうしてもって…言うなら、私の…」  
ソボン

霞 「明日葉ちゃん、お兄ちゃんそういうのはよくないと思うな」

明日葉が最後に何か言ってたけど、それは霞の声によって遮られた

霞 「そういうのはもう少し大人にな…グハッ!!」

明日葉 「おにいマジでウザい！」

途中で話を止められた明日葉は霞をなんどもふんずける。戦闘見ろよ

明日葉 「はっ！蓮に待って！」

蓮夜 「うおっ！」

オレは勢いよくきた明日葉に目隠しをされた

蓮夜 「何だ！どうした！」

明日葉 「いいから！今は見ちゃダメ…」

蓮夜 「…わかったよ」

そして目隠しをされてもその声は聞こえてしまった

リアス 「…イヤん」

ドライグ『至った！本当に至りやがった！』

蓮夜「…マジで至りやがったのかよ」

一誠「赤龍帝（ウエルシユドラゴン）、禁手化（バランスブレイカー）！主人の乳を突いて参上だぜ！」

はあ、もう何も考えたくねえ…

しかし一誠はさきほどとは比べられない力を得た。フェンリルの子を殴り飛ばせるほどだ

ロキ「雑魚どもめが。なかなかやるではないか」

ロセ「ロキ様、どうかお考え直しを。今ならまだオーデイン様も…」

ロキ「勘違いも甚だしいな。私は貴様らの過ちを正しているのだ」

ロセ「…やむを得ません！」

ロセがロキに攻撃を仕掛ける。そっちに意識のいったロキになにやらロープのようなものが繋がった。ロキは解こうとするが全く解けない。そしてそのロープに黒い炎のようなものがまとわりつく

ロキ「これはヴリトラの邪怨か」

匙「ヴリトラの呪いはたとえ神でもそう簡単に払えるものじゃないぜ！」

ソーナ「向上心の強い悪魔は厄介ですよ？悪神ロキ」

その傍らでは一誠がミカエルから譲り受けたアスカロンでもう一匹のフェンリルの子を一突きにしていた

一誠「ロキ！」

ロキ「じやかしい悪魔とドラゴンだ！」

ロキは自身の力を上げヴリトラの呪いを断ち切り

ロセ「ロキ様、なりません！そんなことをしてしまつては、冥界だけでなく全ての神話の体系が！」

ロキ「ラグナロクが早まるだけにすぎん。元よりそれが私の悲願なのだからな！」

ロキは頭上に巨大な魔法陣を形成し、嵐のような突風が引き荒れる。続いて氷が礫となり押し寄せてきた

霞「ここらが限界なんでない？」

蓮夜「…」

オレ達の眼の前では祐斗の頭に氷の礫が直撃し、フェンリルを抑えきれなくなつてしまつた

ロキ「ラグナロクの前に我が子に食われるがいい。雑魚にふさわしい最後だ」

ロキは空へ魔法を放ち、それはレーザーとなり雨のように一気に降り注いだ

バババババ!!

大半の者は防御魔法が間に合い防げたが、祐斗とゼノヴィア、そして匙はもろにそれを受けてしまった

## 第27話

ロキの攻撃を受けてしまった祐斗、ゼノヴィア、匙の3人はソーナと椿先輩から何か液体のようなものをかけられてケガが回復した。どうやらあれがどんなケガでも一滴で治してしまうという「フェニックスの涙」のようだ。さあて一度崩れかけた体制が戻り始めてる。ここからはどうなるかな…すると

ロセ「間に合いました！」

一誠「何だ!？」

そこへロキを倒すため事前にオーデインのおっさんから借受けることを約束していたものがそこへようやく届いた

ロセ「トール様の武器、どんな敵にも裁きの一撃を与える絶対の槌！」

ロキ「ミヨルニルだと!？」

ロセ「オーデイン様よりそこに赤龍帝がいるなら彼に任せよとのことですよ」

一誠「俺!？」

ロキ「オーデインめが！」

ロキはミヨルニルを何とかしようとして移動を試みるが、それは復活した匙によつて阻まれた

匙「行かせねえよ！」

リアス「一誠」

一誠「はい、部長！」

一誠はミヨルニルめがけて飛んでいく

蓮夜「(あいつら周りが見えてねえな) ……霞」

霞「あいよ」

オレの合図で霞が狙撃した。その狙いは一誠に噛み付こうとしていたフェンリルだった

リアス「っ！蓮夜！」

蓮夜「詰めがあめえよ。さっさとやれ」

一誠「ありがとよ！行くぜロキイイイ!!」

一誠はミヨルニルを手にしロキめがけて振りかぶった。しかしその瞬間、ミヨルニルが消えてしまった：

一同『っ！』

ロキ「ふふふ、ははははは！やはりとっておきは最後まで取っておくべきだな！」

ロキの手にはなにやら円形の道具があった

ロセ「あれは！強制転移装置！なぜあなたが!!」

ロキ「そんなことはどうでもいい。間も無くラグナロクが始まる終焉の黄昏に殉ずるがいい」

ロキの言葉で空間が歪み始めた

蓮夜「限界だな。なあロセ」

ロセ「…はい。残念ながらミヨルニルがなければもう…」

蓮夜「…みんな、よく頑張った。悪神相手にここまでできれば十分だ。あとはオレ達に任せろ」

オレは立ち上がりそう叫ぶ。その周りの明日葉、黒歌、霞も立ち上がった

蓮夜「3人はフェンリルを頼む」

霞「あいよ」

明日葉「ん」

黒歌「わかったにや」

フェンリルを任せると伝えると三人は周りから姿を消し、オレは飛翔しロキの前に出て相対した

ロキ「永遠の皇帝、貴様も邪魔を！」

蓮夜「ああ、他の神話の方々に迷惑だからな」

ロキ「ふん！なら止めてみよ！」

ロキはさつきよりも断然強い魔力の一撃を放ってきた。しかしオレはそれをワンパ  
ンで蹴散らした

蓮夜「こんなもんか」

ロキ「クツ！」

蓮夜「さつさと終わらせるか。我、神崎 蓮夜が汝の枷を解き放つ。来やがれ！7番  
目の眷獣、夜摩の黒剣（キファ・アーテル）！」

オレの提唱で出現したのは三鉈の形をした巨大な剣だ

ロキ「〃意思を持つ武器」（インテリジェンスウエポン）！裁きの剣だど!?バカな！」  
蓮夜「バカにすんなよ。そいつキレンぞ」

そう言っているときには夜摩の黒剣はロキの頭上へ移動していた

蓮夜「あくあ。はあ、ご愁傷様…」

オレは手を合わせ合掌をする。そして夜摩の黒剣はロキめがけて落下していった。  
それも能力である重力を一杯にかけて

ロキ「お、おのれえええええ!!!」

ロキは跡形もなく消滅した



蓮夜「お前は相変わらず喧嘩っ早いな。誰に似たんだか…」

オレは消える前の夜摩の黒剣に言っておいた。消える前のそいつは「うるせえ」と、返した気がした

フェンリルの方も黒歌が出した鎖で動けなくなっているようだ

蓮夜「3人ともお疲れ」

そうは言ったものの3人に疲れの表情は全くない。リアス達の方を見てもみんなは驚きすぎて言葉も出ないような表情をしている

蓮夜「どうしたみんな」

一誠「どうしたじゃねえよ！オレ達がフェンリルの子供を倒すのにだってめっちゃくちゃ苦戦したのに、そのフェンリルをたった3人で軽々とだぞ!!」

匙「そうだ！どんだけ強い人たちだよ!!」

みんなも一誠と匙の言葉に頷いている

黒歌「ところで蓮夜。こいつどうするにや？」

蓮夜「そうだな。なんかそこにこいつ欲しそうに見てる奴がいるんだけど」

オレが指差す方には

「やはりバレていましたか。私はヴァーリチームのアーサーと申します」

蓮夜「じゃあこいつ欲しがってんのはヴァーリってことか」

一誠「ヴアーリ！」

「ヴアーリ」その通りです。つきましてはそのフェンリルをお譲りいただきたいのですが」

霞「いやいや、なに言っちゃってんの？」

蓮夜「すまないが敵に塩送る趣味はないんだ」

「ヴアーリ」そうですか。残念です。では…」

「ヴアーリ」は転移していった

明日葉「それで蓮にいい。ホントにどうするの？」

蓮夜「うん…ペットにでもするか。ユウキやちびっ子達も喜ぶだろ」

明日葉「そう」

蓮夜「いいか？ロセ、リアス、ソーナ」

ロセ「え、は、はい。オーディン様には私から報告しておきます」

リアス「私も構わないわ」

ソーナ「私も異論ありません」

蓮夜「なら黒歌、よろしく」

黒歌「わかったにゃ♪」

黒歌はフェンリルに近づき目を見て妖術でフェンリルに催眠をかける。それが終

わって鎖を解くとオレに懐いてきた

蓮夜「さすがだな」

黒歌「当たり前じゃ♪」

そしてオレ達はグレモリー邸へ帰還した

帰ってきたオレ達はとりあえず休んでくれ言われて各々が自分の部屋に戻った。しかしオレだけは事後報告として集まりに参加しなければいけなかった

オーデイン「今回は、いや、今回もじゃが…本当に蓮夜がいてくれて助かった。まさかロキの奴がそんな隠し球を持っていたとは…」

ミカエル「しかしロキ殿はそちらの重要な神。よろしかったのでしようか…」  
オーデイン「時代は変わらなければならん」

悪神でも神は神、やはり北欧的には痛手なのだろうか

アザゼル「しかし、ようやく赤龍帝が禁手化に至ったか」

蓮夜「ああ。今までとは段違いに強くなったと思う」

アザゼル「だがヴァーリと戦うにはまだまだ足りんな」

蓮夜「そうだな。あいつとやるならまだ修行が必要だ」

いくら禁手化を成功したと言っても、その扱いや持続時間はヴァーリには遥かに劣る。そこは一誠次第だな

蓮夜「そうだサーゼクス、1つオレから提案なんだが」

サーゼクス「何だね？」

蓮夜「オレは悪魔だ。だがどちらかと言えば人間の方に近い。だからオレはオレ達だけの、新しい勢力を作ろうと思う」

一同『っ！』

サーゼクス「…確かに君と君の眷属達だけで我々三勢力を圧倒するだけの力があるが」

蓮夜「だからだ。オレが悪魔側にいるだけで三勢力が同等にならないと言う輩もいるそうさ。だったらオレが中立の立場に立てばいい。悪魔、墮天使、天使の全てと手を組む中立としてな。そう思ったんだ」

オーデイン「ふむ、良い考えかもしれんな」

蓮夜「メリットは他にもある。オレには多くはないが日本神話の方々と交流がある。もしオレが独立したとなればその人達とも同盟が組める。ヴァーリ達の禍の団がどんな戦力を有しているかわからない以上、戦力は多く且つ幅広い方がいいと考えるが…ど

うだ？」

アザゼル「オレは賛成だぜ？その方が蓮夜も動きやすいだろ」

蓮夜「面倒ごとを押し付けやすいの間違いじゃないのか？」

アザゼル「そ、そんなわけないだろ……」

アザゼルは明らかに凶星の顔をする

ミカエル「私も異論ありません」

サーゼクス「……わかった。いいだろう」

蓮夜「ありがてえ。ついでにで悪いんだがそれぞれのところでこの情報を公開しといてくれ。あ、何日かあとに天界行くからミカエルよろしく」

ミカエル「わかりました」

オレはそう言つて部屋を出た

―屋敷―

オレは自分の屋敷に戻り全員を広間に集め、さつき決めたことの事情を話した

蓮夜「……というわけだ。タツマキ達には前々から話してたから大丈夫として、他の奴らがこれからどうするか聞きたくて集まってもらった。別に今すぐ結論を出す必要は

ない。オレ達が帰るまでに言ってくればいい。では解散！」

その場では答えは聞かず、とりあえず今日のところは解散にした。そしてオレは行かなければいけないところがあつたので雪菜や深雪に言つて屋敷を出た

―天界―

オレはミカエルが帰るのを機に天界へ顔を出すことになつていた

天界に到着してミカエル達天界の偉い奴らがいるという宮殿に案内された。宮殿の中に入ると

「蓮夜様〜!!」

蓮夜「うおっ！」

長い廊下の奥からももの凄いスピードでこっちにきた1人の天使にそのスピードのまま抱きつかれたので危うく倒れるとこだった

「もう、会いに来るの遅すぎですよ!!」

蓮夜「わ、悪い。久しぶりだな、ガブリエル」

ガブリエル「はい！お待ちしておりました!!」

蓮夜「このままじゃ歩けないからとりあえず離れてくれ」

ガブリエル「はっ！し、失礼しました！では参りましょう♪」

そう言つて離れてはくれたのだが今度は右腕をガツチリホールドされてしまった

彼女の名は熾天使ガブリエル。天界でミカエルを含む四大天使の中の一人である。前に天界が危機に見舞われたときに危うく命を落としていたところからオレが救つたらこういう風になつてしまった。よく墮天しないよな…

とある部屋に案内され、そこには残りの四大天使のラファエルとウリエルの姿もあつた

ラファエル「蓮くんお久ー」

ウリエル「こらラファエル！大恩人の蓮夜様になんて無礼を！申し訳ありません！」

蓮夜「大丈夫だから。大恩人とかもやめろ。もうすぎたことだ」

ラファエル「そうだよ。ウリちゃん堅いんだよ」

ウリエル「お前はもつとシャキツとせい！」

いつものほほんとしているラファエルと自分にも他人にも厳しいウリエルじゃあこ  
うもなりますね

ミカエル「皆さん早く席についでください」

ラファエルとウリエルの口論をミカエルが止める

ミカエル「今日は皆さんに大事な話があります。それは蓮夜くんを筆頭に、新たな勢力が作られるそうです」

ガブリエル「そうなんですか!?!では、私もそちらに…」

蓮夜「待って待って! 四大天使の1人が抜けるのはマズいだろ!」

ガブリエル「それなら私は早急に墮天します!」

蓮夜「落ち着け!」

ガブリエル「ひゃん!」

オレはなんともおバカなことを言い出したガブリエルをチョップして止めた

ミカエル「今あなたにいなくなられるのは困るのですが」

ガブリエル「でも!」

目元に涙を浮かべて懇願するガブリエル

蓮夜「はあ…」

ラファエル「蓮くん蓮くん。じゃあこう言ってみ」

蓮「ん?」

オレがため息をついているとラファエルがなにやら耳打ちしてきた。オレはその言葉を一言一句間違えずにガブリエルに伝えた



蓮夜「なあガブリエル。オレは天使でいるお前が好きなんだがな。それに天界にお前がいるからこそ安心できるんだ」

オレはホントにこんなことでいいのかと思っているのだが、そんな思いとは裏腹にガブリエルはニヤけ始めた

ガブリエル「そ、そんな、私のことが好きだなんてく／＼蓮夜様ったら大胆なのですねく／＼」ウッフ

大好きとは言っていないけどな

ガブリエルは両頬に手を当て体をクネクネさせながらすぐくニヤけている

ミカエル「はあ」

ウリエル「始まったよ」

蓮夜「何がだ？」

ラファエル「ガブちゃんは蓮くんのことになるというもああなつちやうの」

蓮夜「そ、そうか。なんか悪いな」

ミカエル「いえ、蓮夜くんのせいではありません」

ウリエル「そうですよ！しかしあと3、4時間はこのままですな…」

オレはマジかと思いいながらガブリエルを見る。その本人は「蓮夜様く♪」と言いいながらクネクネしている

蓮夜「みんなには悪いけどオレはこの辺で失礼するよ」

ラファエル「えく、もう行っちゃうのく？」

蓮夜「すまん。他にも行かないといけないところがあつてだな」

ウリエル「蓮夜様もお忙しいのだ！」

ラファエル「うく、わかつた：でもまた来てよ？」

蓮夜「ああ、約束する。じゃあミカエル、よろしくな」

ミカエル「ええ、お気をつけて」

蓮夜「ああ」

オレは3人に別れを告げ、天界を後にした

余談だがガブリエルが正気に戻りオレがいなくなつてて今度は3時間自分の部屋に閉じこもつたらしい：

## 第28話

―人間界―

天界を出たオレは今度は人間界に一度戻り、日本神話のみなさんに会いに出かけた。これからもしかしたら手を貸してもらおう機会が訪れるかもしれないので話し合いに行くのだ。それと今回は付き添いとして犬千代とシノアと一緒にいる

蓮夜「こつちに来るのも久しぶりだな」

シノア「そうですね、みなさんお元気でしょうかね」

犬千代「多分…姫様は怒ってる…」

蓮夜「だよな」

久しぶりにに会える喜びと会ったらどうせ怒られる場面が眼に浮かぶ失望感という妙な気分でおレは手土産を持って京都の山奥に入ってしまった。そして数分歩いたところで人払いの結界が張ってある場所に行き着いた。そこには既にお迎えが来ていた

「蓮夜兄様〜!」

蓮夜「おおサクヤ。久しぶりだな」

サクヤ「はい！サクヤはずっと待っていました！」

蓮夜「ありがとな」ナデナデ

サクヤ「えへへ♪」

犬千代「蓮夜、犬千代にも…」

蓮夜「おう」

サクヤは本名木花咲耶姫（コノハナサクヤヒメ）と言い繁栄の神とも言われているがまだ子供っぽく甘え上手である

「これからサクヤ。もう少し大人しくしなさい」

「まあまあ、サクヤも蓮夜さんに会えて嬉しいのですよ」

蓮夜「久しぶり、ウズメ、クシナダ」

シノア「お久しぶりです」

クシナダ「はい、お久しぶりでございます」

ウズメ「本当にこちらにいらっしやるのは何年振りですかね」

蓮夜「アハハハ…」

ウズメは本名天鈿女命（アメノウズメノミコト）と言い芸能の女神である。クシナダは本名奇稲田姫（クシナダヒメ）と言い農業、特に稲作を司る神と言われている

クシナダはにつこりと、ウズメは嫌味つたらしくオレを所謂ジト目で睨んできた

クシナダ「ウズメさんもそこまでで…蓮夜さん、中で皆様がお待ちです。特にアマテラス様が…」

蓮夜「ああ、なんかすまないな」

サクヤ「蓮夜兄様はサクヤと手を繋いでれば中に入れるよ♪」

蓮夜「そうか。なら頼む」

サクヤ「はい♪」

犬千代「蓮夜、犬千代も…」

蓮夜「はいはい」

それでオレはサクヤと犬千代と手を繋ぎ中に案内された。その後からシノアとウズメ、クシナダが続いた。なぜか冷たい視線を感じる気をするのは気のせいかな…？

中には大きな神社があり、普通なら悪魔は入れないんだが今はサクヤ達のおかげで入れる。もしここに単独で入ろうとすればこの結界を壊さないといけないが、そうなることは一生ないだろう

大広間へ案内されオレは中に入りクシナダ達は中に入ったのを確認すると襖を閉め

た。そこには2人の男性と2人の女性が座っていた。オレは犬千代、シノアと共にその4人の前に正座し挨拶をする

蓮夜「この度は突然の来訪を快諾していただき、ありがとうございます」

「何を言うか、私達と君の仲じゃないか」

「そうですよ。友達の家遊びに来る感覚でいらっしやって構わないのですよ」

蓮夜「お、お言葉ありがとうございますですが…さすがにそれは…んっ！改めて、お久しぶりです。イザナギさん、イザナミさん」

イザナギ「ああ」

イザナミ「お久しぶり。犬千代さんとシノアさんもお元気そうでなにより」

犬千代とシノアは何も言わずに軽く頭を下げる

向かって右側に座っているのが伊奘諾（イザナギ）さん。向かって左側に座っているのが伊邪那美（イザナミ）さんだ。このお二人が国生みと神生みを行なったおかげで今の日本がある

「…」ソワソワ

そしてオレの右側でソワソワしている女性が目に入った

蓮夜「えっと、来て早々申し訳ないのですが少々粗相を許してもらいたいのですが…？」

イザナミ「さつきも言ったでしょう？ここでは何の遠慮もいりませんよ」  
イザナギ「イザナミの言う通りだ」

蓮夜「ありがとうございます。じゃあ…」

オレは右側を向いて手を広げる

蓮夜「ほら、おいで」

「れ、蓮夜ー!!」

女性はおれの言葉を聞いてオレに飛び込んできた

蓮夜「しばらく顔を出せなくてすまなかったな、アマテラス」

アマテラス「本当だよ！すつごく寂しかったんだから！」

オレに抱きついてきたアマテラスは本名天照大神（アマテラスオオミカミ）と言い太陽神であり、太陽、光、慈愛、真実、秩序を象徴する。そんな威厳を持ちながらも根っこはすごい寂しがり屋のアマテラスを落ち着かせるため頭を撫でる

蓮夜「スサノオも久しぶり」

スサノオ「ふん！」

オレはアマテラスの頭を撫でながら顔だけ振り向いて残りの座っていた男性に言った  
た

彼はスサノオ。本名は須佐之男命（スサノオノミコト）と言い海を支配する海の神だ

蓮夜「なんか怒ってる？」

スサノオ「当たり前だ！アマテラスやツクヨミがどれだけ面倒だったかお前にはわかるまい！」

蓮夜「ああ、そのなんだ：すまんかったな」

スサノオ「ふん！悪いと思ってるなら後で少し鍛錬に付き合え」

蓮夜「わかった。そう言えばそのツクヨミはどうしたんだ？」

スサノオ「お前が全然来ないから部屋に閉じこもっておるわ」

蓮夜「あちゃ〜」

イザナミ「アマテラスちゃんも昨日まで押入れにこもってたのよね」

ツクヨミは本名月夜見尊（ツクヨミノミコト）と言い月の神だ。オレがここに来た当初は全く喋ろうとしない、とても静かな子だったからな

イザナギ「本当はすぐに話し合いをしたいのだが、そこにはツクヨミもいてもらわなくては困るのでな」

イザナミ「申し訳ないんだけどツクヨミちゃんのとこへ行ってあげて」

蓮夜「わかりました」

お二人のお願いじゃ聞かないわけにもいかないな。と言ってもお願いされなくても行つてたけど。でもその前に



蓮夜「あの、そろそろ離してくれないかな…」

アマテラス「いや！」

アマテラスは断固として離してくれない

蓮夜「すぐ戻ってくるから」

アマテラス「いや！」

蓮夜「…じゃあ1つだけしてほしいことやつてやる。どうだ？」

アマテラス「っ！なんでも？」

蓮夜「オレのできる範囲なら…」

アマテラス「…わかった」

アマテラスはようやく離してくれた。立って振り向くと犬千代とシノアがムツとした顔でこつちを見ていた

オレはイザナギさんとイザナミさんに「失礼します」と言って退出し、スサノオに案内されツクヨミがいる部屋の前に立った。襖を開けると中は真つ暗で部屋の隅つこで膝を抱えて蹲っている少女が目に入った

蓮夜「スサノオは戻っててくれ」

スサノオ「わかった」

オレは1人で中に入り、その少女の前に膝をついた

蓮夜「ツクヨミ」

オレが名前を呼ぶと少女はゆっくりと顔を上げた

「に……さま……？」

蓮夜「ああ、来るのが遅くなってすまない」

オレがそう言い終えるとギユツとオレに抱きついてきた

ツクヨミ「兄様！兄様！」

蓮夜「おう！オレだよ」

オレはオレの首に手を回してワンワン泣き始めたツクヨミを優しく抱きしめ背中をさする

―数分後―

ツクヨミが落ち着いた後で体を離してツクヨミの顔を見る

ツクヨミ「申し訳ありません。見苦しいお姿を……」

蓮夜「気にするな。会いに来なかつたオレが悪い」

ツクヨミ「そんな！兄様がお忙しいのはわかつていました。勝手に期待した私の落ち度です」

蓮夜「それでもだ。オレがお前を泣かしてしまった。ホントにすまない」

オレは頭を下げる

ツクヨミ「頭を上げてください！こうして会いに来てくださっただけで私は嬉しいですので：／／／」

蓮夜「ありがとう」

ツクヨミ「っく！／／／」

オレは頭を上げて笑顔でお礼を言うとツクヨミは部屋の暗さでもわかるくらい赤面した

蓮夜「さて急で悪いんだが少し話したいことがあってな。みんなのここに行けるか？」

ツクヨミ「はっ！はい！」

オレは「よし」と言つて部屋を出ようとするとツクヨミが手を握ってきた

ツクヨミ「：ダメ、ですか：？／／／」

蓮夜「まさか」

オレはその手を握り返しさっきの大広間へ向かった

蓮夜「戻りました」

アマテラス「あー！」

犬千代「むー、ズルい……」

シノア「蓮夜さんはホントに……」

大広間へ戻った瞬間アマテラスが発狂した。うるさい。しかも犬千代とシノアにジ  
ト目で見られた

イザナギ「おお、戻ったか」

イザナミ「あらあらツクヨミちゃん」

ツクヨミ「く／＼／／」

ツクヨミは恥ずかしいのかオレの後ろに隠れてしまった

イザナギ「では全員揃ったことだし、始めようか」

蓮夜「あ、ウズメ達も呼んでもらっていいですか？できればみんなに聞いてほしいの  
で……」

イザナミ「わかりました」

それから一分もしないうちにウズメ、クシナダ、サクヤも部屋へ来て、オレは今までの  
の出来事とこれからのオレのありようについて説明しようとする。廊下からドタドタ  
と誰かが駆けてくる音が聞こえ、そして襖が勢いよく開かれた

「蓮夜！来てるなら早くあたしのとこに来なさい！」

蓮夜「げっ……」

犬千代「あ、姫様……」

今入ってきた容姿は美少女そのものなものの格好が茶筌まげ・腰ヒヨウタンのバサラ風で騒がしく気性の荒いこやつこそが犬千代の言う姫様こと織田 信奈だ。名字でわかるようにかの織田信長の末裔だ

アマテラス「うるさいわよ信奈。だから他所からうつけ姫なんて呼ばれんのよ」

信奈「なんですって！」

今の会話で分かる通りアマテラスと信奈は馬が合わない。だが良い意味では切磋琢磨している。お互いがお互いをライバルとして見ているためこいつは負けないオーラがよくわかる

「信奈！お前走りすぎだ！」

「姫様ー！早いですよー！」

「あら蓮夜殿。お久しぶりですね、70点♪」

「れ、蓮夜さん！お、お会いしたかったです……」

「神崎氏はいつも女と一緒にいるでござるな。相良氏にもあれくらいのうちゆわをみつしえてほしいでござる」

「神崎先輩、来るの遅いでやがります！」

後からきたのは信奈に仕えている相良 良晴、柴田 勝家(六)、丹羽 長秀(万千代)、竹中 半兵衛、蜂塚 五右衛門、明智 光秀(十兵衛)だ

蓮夜「信奈落ち着け。会いに行かなかつたのは、その…なんだ…驚かせようと思つて、だな…」

信奈「デアルカ…」

おつ、その場しのぎで出たウソが通じてしまった。なんか罪悪感が…

蓮夜「みんなも久しぶり。とりあえず話したいことあるから座つてくれ。よろしいですか？」

イザナギ「構わん。どうせあとで話さないといけないことだ」

世間話もあるだろうがとりあえず信奈一行に座つてもらいこの経緯を説明した

イザナミ「そう、そんなことが…」

蓮夜「禍の団が今後どういう行動を取るかわからないので、日本神話の方々とは是非同盟を結んでほしいのです。別に三勢力と結ばなくてもいいです。オレとだけでも交友的でいていただけたら幸いです」

イザナギさんを見ると腕を組み目を瞑つて考えていた。そしてその状態のまま口を開いた

イザナギ「蓮夜くん。我々日本神話は他の三勢力とはわからんが、少なくとも君とは

敵対する意思はない。こちらとしても君とは友好的でありたいと思う」

イザナギの言葉に日本神話の人達が頷く

蓮夜「ありがとうございます！」

イザナギ「信奈くんはどうかね？」

信奈「聞くまでもないわね。私も蓮夜との関係はこれからも保っていくつもりよ」

その信奈の言葉に勝家達が頷いた

蓮夜「ありがとな、信奈」

信奈「か、勘違いするんじゃないわよ!?私はその方法が最善だと判断したからよ!別にあなたのためってわけじゃないんだっからね!!」

蓮夜「お、おう…」

長秀「姫様、こういうときぐらい素直になればよろしいものを。30点です」

信奈「余計なことは言わなくていいのよ!」

オレはこのとき何が何でもこの人達が守る「日本」を必ず守ると決意した

イザナギ「さあ!難しい話はこちらまでだ。せつかく蓮夜くんが来たのだ。今日は大いに盛り上がるのではないか!みな!宴の準備だ!」

一同『はっ!』

イザナギさんの声と共に慌ただしく宴の準備が始まった。オレも何か手伝おうとし

たんだがアマテラスやウズメから「大人しくしてて！」と一喝されてしまったので、準備ができるまでサクヤと遊んでいた

宴は盛大に開かれ食事はとても豪華なものだった。余興ではウズメが舞を踊ったり、スサノオが剣舞をやっている中にオレが乱入したりと楽しく過ごせた。悪酔いしたイザナギさんにすごい絡まれて大変だったがとてもすごくいい時間を過ごすことができた

食事が一段落したところでオレは縁側に出た。庭にある池には綺麗に出ている月がくつきりと映っていた

良晴「蓮夜ー」

蓮夜「なんだ？サル」

良晴「お前までその呼び方はやめてくれよ…」

良晴は信奈に名前を略されてサルと呼ばれることになったらしい。（サガラヨシハルだから）

蓮夜「ははっ、冗談だ。それで？どうしたんだ？」

良晴「別に話題があつたわけじゃねえよ。ただ勝家が酔っ払つたから逃げてきただけだ…」

蓮夜「あいつ、まだ自分の酒癖の悪さわかつてねえのか」



良晴「しかも今日はイザナギさんと一緒だから余計にな」

蓮夜「あらら、明日イザナミさんにみっちり怒られるんだらうな…」

良晴「だらうな…さて、オレは信奈のところに行ってくるよ」

蓮夜「ああ、オレも後で顔出すわ」

良晴「了解つと」

良晴が離れるとタイミングを見計らったように長秀さんと半兵衛がやってきた

蓮夜「二人はどうした？」

長秀「私はお酒が回ってしまつて、少し夜風にあたりに」

半兵衛「わ、私は…蓮夜さんを探してて…」

蓮夜「オレを？なんか用だったか？」

半兵衛「いえ…少し、お話したくて…」

蓮夜「そつか」

長秀「お隣、よろしいですか？」

蓮夜「ええ、こんなヤツの隣でよければ」

長秀「ふふつ、そんなことをおつしやられてもほとんどの方からしたらそこは特等席ですよ」

長秀さんはそんな冗談を言いながら隣に座った。そして半兵衛が反対側にチョココン



イザナミ「いいのよ。今日はあなたのおかげでとても楽しめたもの」  
蓮夜「ありがとうございます」

サクヤ「兄様！今日はサクヤと一緒に寝ましょう！」

犬千代「ダメ…蓮夜は私と寝る…」

2人はそう言いながらオレの両腕を引っ張り合う

イザナミ「あらあら」

ウズメ「はあ…」

クシナダ「…」

アマテラス「…」プルプル

十兵衛「先輩…」

シノア「ジー…」

オレらのやり取りをイザナミさんは嬉しそうに笑顔で、ウズメは手で顔を覆いため息をついている。クシナダは無言で睨んでくるし、アマテラスはなんかプルプルと震えている。十兵衛とシノアはなんか言いたげにこつちをジト目で睨んでいる

アマテラス「ダメ！」

唐突にアマテラスが叫んだ

蓮夜「ど、どうした…？」

アマテラス「蓮夜は今日私と寝るの！」

蓮夜「えっ、いや…オレは1人で…」

アマテラス「蓮夜さつき約束したよね？なんでも1つだけ言うこと聞くて！」

蓮夜「あ、ああ…」

アマテラス「だから私と寝るの！」

蓮夜「…わかったよ」

オレはそんなことに使っているのかと内心思いながらもそのお願いを受け入れた。  
だが…

犬千代「蓮夜…アマテラスだけズルい…」

シノア「そうですよ。鼯鼠は良くないです」

蓮夜「いや、お前らのわがままはいつも聞いてんだろ」

サクヤ「そうです！お姉様にだけなんてあんまりです！」

クシナダ「シノアさんの言う通り、鼯鼠はよくありませんよね…？」

十兵衛「先輩！」

五人がどんどんオレに迫ってくる

蓮夜「…わかった。お前らの言うことも1つだけ聞こう」

そう言った瞬間さつきまでとは別人のように満面の笑みを浮かべる3人

犬千代「帰ったら犬千代と一緒に寝る」

蓮夜「ん、わかった」

シノア「私はそうですね。デート一回にしましよ〜」

蓮夜「かしこまり」

サクヤ「じゃあ兄様。これからサクヤと一緒に風呂に入りましょう♪」

蓮夜「ブフツ！サ、サクヤ!？」

ウズメ「サクヤ！あなた何言つて…!」

サクヤ「ダメ、ですか…?」

蓮夜「うっ!」

ウズメが怒鳴ったと同時にサクヤはオレに抱きついて上目遣いに再度お願いしてき  
た

蓮夜「…わ、わかった」

サクヤ「やったー!じゃあ早く行きましょう♪」

蓮夜「その前に、クシナダと十兵衛はどうするんだ?」

クシナダ「私は今後のために取っておくことにします♪忘れないでくださいね♪」ウ  
フフ

その笑顔にオレは今後どんなお願いをされるんだろうと少し不安になった

十兵衛「わ、私は別に……でもどうしてもって言うんなら、また会いに来やがれです！」  
蓮夜「なんで怒ってんだよ……」

その後オレは約束通りサクヤと風呂に入り、アマテラスと一緒に寝て、次の日の朝には一つ約束をするということをつかから聞きつけたツクヨミに起こされ近くを散歩した。アマテラスは寝ている間ずっとオレの腕を掴んでいたのか起きたとき腕が痺れていた。そしてお昼少し前にオレはお暇することにした

蓮夜「大変お世話になりました」

イザナギ「いやいや、こちらにも有意義な時間を過ごせたよ」

イザナミ「またいらしてね」

蓮夜「はい、ぜひ」

サクヤ「蓮夜兄様帰っちゃうの……?」

蓮夜「ごめんな。また来るからな」

ウズメ「蓮夜様も忙しいのだ」

クシナダ「またすぐ会えますよ。ね?」

蓮夜「そ、そうだな」

クシナダはまたすぐ来るよね?とでも言いたそうな顔をしながらオレの方を見てき

た

アマテラス「またすぐ来るのよ!」

ツクヨミ「お待ちしています」

蓮夜「ああ。約束する」

信奈「今度はちゃんと私のところに来るのよ!」

良晴「またな、蓮夜」

勝家「うとうう…頭が…」

長秀「次お会いできる日を楽しみにしていますね♪」

半兵衛「蓮夜さん、またお話ししたいです」

五右衛門「お三人とも、お達者で」

十兵衛「絶対にまた会いに来やがれです!」

オレは最後にみんなに「じゃ」と言つて犬千代とシノアを連れて山を下った。次はい

つ来れるかな…

## 第29話

イザナギさんや信奈達のところを出てからオレは犬千代、シノアと手を繋ぎながら空に上昇していた。見られては大変だと思つて夜を選んだが夜になるまでの日中は大変だった。時間が空いたことで犬千代とシノアに連れ回されていろんなところに行つた。しかも近所の公園なんてレベルではなく北海道から沖縄までの大旅行だ。それを半日で過ごしたのだからこつちはもうクタクタだ…

まあその辺はとりあえず置いといて人の目につかない深夜を選んでオレ達とはある所？物？を指摘している。それはこの人間界に存在しているものだが使われている技術が圧倒的に違うもの。飛行船のように空に浮かんでいるがそれ自体の姿はこの人間界ではありえない技術、“光学明細”によつて見えなくなっている

蓮夜「犬千代は先に帰つてもよかつたんだぞ？」

シノア「そうですよ」

犬千代「シノアと蓮夜、二人きりになんてさせない…」

夜空へ上がりながら首だけ犬千代のほうを振り向くとむすつとした顔をしている

蓮夜「まあ別にまったくの他人に会いに行くわけじゃねえからいいけどよ」



シノア「せっかくの蓮夜さんとの今宵のアバンチュールが〜」

犬千代「そんなこと、させない…」

蓮夜「そろそろ着くぞ〜」

ちよつと曇りがかかっている空に雲の切れ目から月明かりが差したとき、ほんの少しだけ空の空間自体が歪んだ。その歪みに向かってさらさら上昇していく。そしてある境目からなにかの中に入った

『オカエリメエ〜』

『オカエリメエ〜』

蓮夜「おう、ただいま。ただいま？」

シノア「ただいまでいいと思いますよ」

犬千代「帰るところは何個あってもいい」

入ってきた場所は浮遊艇と呼ばれる戦闘艇。そして出迎えてくれたのはこの輪貳艇の防衛システムで日々の雑用から警備まで何でもこなす高性能な黒い羊たち

羊『平門達モ待ッテルメエ』

蓮夜「わかった。案内頼むな」

羊『ツイテクルメエ』

羊について綺麗な廊下を歩いていく。案内された先には大きな扉が待ち構えていた

羊『ココメエ』

蓮夜「ありがと」

感謝をこめて羊達の頭を撫でる。それはロボットとは思えないほどふわふわして、気持ちよさそうに『メエ〜♪』と鳴いている。これを見て誰がロボットと思うだろうか、いや、思わない

犬千代「蓮夜…」

シノア「蓮夜さん…」

蓮夜「なんでこんなところで嫉妬してんの」

名残惜しいが羊たちのもさもさ頭を撫でるのを辞めて扉の前に直立した

蓮夜「んじゃ、久々の再開といきますか」

二日続けて昔なじみとの再会。嬉しさのあまりにニヤケ顔にならないように注意しながら扉の手すりに手をかけてゆっくりと押した。すると中にはオレ達の方を向いて横一列で待っている団体がきれいに並んでいた

「久しぶりだな、蓮夜」

「再開できて嬉しいぞこのやろうが！」

真ん中にいる背の高い青髪と赤髪の二人が第一声と二声を上げた

蓮夜「久しぶりです、平門<sup>ヒラト</sup>さんに朔<sup>ツキタチ</sup>さん。みんなも」

「蓮夜くん!!!」

簡単なあいさつを済ませると平門の左隣にいた金髪くせつ毛野郎が腕を広げてこっちに抱きつこうとしてきた。オレがそれをひらりとかわすとそいつは後ろの扉に顔を直撃させた

「蓮夜くんヒドイよー!」

蓮夜「おー悪い。男と抱き合う趣味はなかつたんでな」

「感動の再開だよ!?!」

蓮夜「それにしたつてもっと違う方法もあるだろうよ。まあなんにせよ久しぶりだ、  
與儀<sup>ヨギ</sup>」

ヨギ「うん!久しぶり!」

ヨギとそんなやり取りをしていると何人かがこちらに歩いてきた

「蓮夜…」

「来るの遅すぎですう〜」

蓮夜「ツクモにキイチ。しばらく見ない間に綺麗になったな」

ツクモ「あ、ありがと…」

キイチ「そ、そんな見え透いたお世辞…嬉しくなんか…」

蓮夜「お前の素直じゃないところは相変わらずだな」

歩み寄ってきた中の金髪のツイントールにしているのがツクモ、青い髪に黒のキツシュつきカチューシャをしているのがキイチだ。ツクモは寡黙、キイチはツンデレで最初のころはコミュニケーションをとるのに苦労したものだ

「その会話聞いていると親戚の子に会ったおじさんみたいだよ、蓮夜くん」

蓮夜「オレは喰<sup>ジキ</sup>さんよりも年下です」

ジキ「それは人間としての年齢だろ？」

蓮夜「ジキさんの意地悪さも相変わらずで…」

ジキ「褒め言葉として受け取っておくよ」

同じメガネでも平門さんとは違って丸メガネをかけているジキさんは他人を弄るのが好きな腹も心も真つ黒な人だ

「蓮夜、久しぶりー」

蓮夜「よお无<sup>ナイ</sup>。花礫<sup>ガレキ</sup>も。勉強の方は進んでんのか？」

ガレキ「ああ、おかげさんでな」

見た目からして幼く白髪のナイとそのお守り役で黒髪した元盗人のガレキ

ヒラトさんとツキタチさんが統率するこの団体は「輪(サーカス)」と呼称されている国家防衛最高機関だ。大陸中を飛び回り、犯罪者や犯罪組織を取り締まる集団。ツキタチさんがリーダーとして活動している壺號艇とヒラトさんがリーダーとして活動して

いる貳號艇は能力者を追うための専門員で構成されている。つまりここにいる者はみな能力者である。ナイとガレキは例外で能力者ではないが大切な仲間であることはかわらない

再会を喜んでいるところに突然、背後から刀で切りつけられた。オレは瞬時に応戦しようとしたが後ろを向けば既に終わっていた。犬千代が槍でその刀を抑え切りつけた本人の首筋にはシノアが大鎌の刃を当てていた

蓮夜「なにかと物騒な挨拶なんじゃないか？ 優」

シノア「いくら優さんでもおいたは許しませんよ」

優「さすがにこんなんじややれないことはわかってたさー」

打つ手が無い優こと百夜優ひやくやゆういちろう一郎はニヤリと笑った。その刹那頭上から双剣の攻撃が迫っていた。しかしこれもオレが防戦する必要はなく犬千代が止めていた優の刀を掬うように持ち上げてその攻撃を止めた。攻撃してきたやつは表情を強張めて後ろにジャンプして後退した。がそれを読んだ犬千代が先に着地地点に移動し首元に槍を添えた

「ぐっ……参った……」

優「くっそおー!!!」

蓮夜「この攻撃パターン前にもやってたじゃねえか」

「同じ攻撃も相手が忘れてればどうとでもなる、つてそのバカが言ったんだよ。だからムリだつて言ったじゃねえか、このバカ優！」

優 「んだと！お前だつて作戦思いつかなかつたじゃねえか！」

双剣で攻撃してきたのは君月士方きみづきしほう。同じ二人とも元々シノアが率いてた治安維持部隊に所属していたがそのころからこうしてケンカばかりしている仲良しだ

「このバカ共！おに、蓮夜さんに失礼だろ！」

「はは…二人とも元気だね。蓮夜くん久しぶり！」

「二人とも少しは落ち着くことを覚えなよ…久しぶりだね蓮夜くん」

単細胞二人を怒鳴り散らかしてるのが三宮三葉さんぐうみつば。シノアとは同期でもありライバルであるがいつもシノアに弄られている元気な子だ。そして二人に呆れているのが早乙女与一さおとめいちとミカこと百夜ミカエラだ。与一は単細胞組みにいつも苦労している苦労人。ミカは優とは一緒の施設で育った義理の兄弟だ。こつちも苦労人である

シノア 「みなさん、お久しぶりです」

蓮夜 「与一とミカはいつもご苦労さんだな。三葉もな」

三葉 「おに…！蓮夜さん!？」

いつの間にかオレの前に移動してきて腰に手を当てて仁王立ちしている三葉の頭を  
 労いの意味も込めて撫でる

犬千代「蓮夜。犬千代、蓮夜守った。だから撫でて」

蓮夜「ん？そうだな、ありがと」

犬千代「ん♪」

戻ってきた犬千代の頭も撫でてやると後ろから凝視されてる気配がした。振り向いてみるとツクモとキイチがこつちを睨んでいた

再会を喜んでいたのも束の間、オレの周りにはシノア、犬千代、ツクモ、キイチ、三葉といった女性人に囲まれてしまった

「あら、蓮夜じゃない。来てたのね」

蓮夜「げっ…イヴァねえ…」

向かって左側の奥にあるドアからまた知り合いが入ってきた。ここにいる女性陣より大人の雰囲気をもし出している女性だ。名前はイヴァ。オレの中で怒らせるとヤバイ人ランキングでもトップ3に入る怖いお人だ…

イヴァ「あんた、今失礼なこと考えたね？」

蓮夜「ナ、ナンノコトデショウ…」

イヴァ「カタコトになつてる時点で自覚してるもんでしょ。まったく、カワイイ子達に囲まれてなんて羨ましい。だから一発殴らせなさい」

蓮夜「それは、できれば遠慮したいのですが…」

イヴァ「ダ・メ♪」

あらイヴァねえさんカワイらしい笑顔。でもなんでだろう、足が震えて言うこと聞かない…

オレが覚悟を決めて衝撃に備えようと前にいるツクモとキイチを後ろに下がらせると、今度はキレイな銀髪にワンピース風な服を着た女の子がイヴァねえさんの入ってきたドアからタツタツタと走ってきてイヴァねえさんの背中に抱きついた

イヴァ「ん？あら」

「イヴァ、にいにのここといじめちゃメッ！」

イヴァ「白♪」

振り向いたイヴァねえは抱きついてきた少女、白をまるで小動物を愛でるように撫で回す。しかし白はそれを振り払い今度はタツタツタツとこつちに走ってきた

白「にいに！」

蓮夜「しゝろゝ」

蓮夜、白「ヒシッ！」

こうしてオレと白は感動を再開を果たしたのであった…

つと涙溢れる描写はこんな感じで。白は所謂超天才。11歳にして数々のタイトルを持つている。それはTOIECや数検などに限らず、囲碁や将棋、チェスなんかでも



名人を破ったAIに対して20連勝している。特にゲームに限っては白の兄と共に最強とまで言われている。あれ、そういえば…

蓮夜「白、空はどうしたんだ？」

白「にいならまだゲームしてる」

蓮夜「？珍しいな、二人で一緒にやってないの」

白「にいに、早く会いたかったから…」

スカート下の裾をギュツと掴んで恥ずかしそうに俯く白に、その部屋にいる者全員が心打たれてしまった

イヴァ「やくん、白カワイイ」

蓮夜「ダメだ！いくらイヴァねえでも今の白は渡さん！」

イヴァ「あら、蓮夜。姉の私に刃向かう気…？」

蓮夜「イヴァねえがその気なら、仕方ない…」

オレとイヴァねえは向かい合い、仲間内で出るものではない異様な雰囲気にも包まれるヒラト「イヴァ、その辺にしておけ」

ツキタチ「蓮夜もだぞー」

二人の言葉にオレは冷静になって周りを見ると三葉やキイチが涙を浮かべて震えていた。ツクモや犬千代、シノアも平然を保っているようでも汗をかいている。オレは

やつちまつたと頭をかかえみんなの前に移動する

蓮夜「みんな、悪かった…」

みんなの前に立つて謝罪をする。怖がらせてしまった。こんな特に何も無いものでオレが頭を垂れて地面を見ていると、五人が抱きついてくる

シノア「まつたく…なんで蓮夜さんは、こんなことで…!」

犬千代「あの蓮夜は、イヤだ…」

三葉「バカ! お兄ちゃんのバカ!」

ツクモ「あんなの、いつもの蓮夜じゃない…いつもの、優しい蓮夜でいて…」

キイチ「べ、別に泣いてなんかありません…でも、今は顔見ないでほしいです…」

ホントバカだなオレは…こいつらにこんな思いさせて…

蓮夜「イヴァねえ…悪かった…」

イヴァ「私の方も悪かったわね」

イヴァねえもオレと同じ心境なのか、オレと目は合わせないが腕を組み暗い顔をしている。周りではナイは泣きじやくり、一番泣きそうなヨギはガレキやジキさん、優や君月、ミカと同じように真剣な表情を浮かべている。与一はただオロオロしているが…そんな中白だけは何がなんだか分からずポカンとしている

しかしその中でヒラトさんとツキタチさんはなぜか笑っていたが…そして再度イ

ヴァねえの方を向くと体制は変わらないがオレと目が合ってしまった頬を赤らめてそばを向いた。しかし、大きいな…

蓮夜「イテツ…」

シノア「蓮夜さん…今、イヴァさんの胸見てましたね…？」

蓮夜「ソ、ソナナコト…」

優「蓮夜もやっぱ男なんだな！」

君月「でも、あれはヤベエよな…」

イヴァ「あんた達ー？一旦奥に行こうか♪」

優、君月「ヒツ!!!」

ミカ「はあ…」

与一「あはは…」

犬千代「胸なんてただの飾り…」

さつきまでのシリアスがどこにいったのやら…でもまあ、やっぱこっちの方がいいな

…

蓮夜「さてと。白、空のどこ行くか」

白「ガッテン！」

オレのせいで悪くなった雰囲気も優達のおかげでなんとか持ち直した。それを機に

オレは白と手を繋いで部屋を出て白の兄、空の元に向かった

蓮夜「おい、空」

白に案内されてきた部屋の中は電気がついておらず真つ暗。その中でパソコン光だけが灯っていた

空「はあ：はあ：」

蓮夜「あれま、どうしたよ」

白の兄、空、童貞18歳。一日中部屋でゲーム三昧。しかしながら白とはまた違う種類の天才。ブラフ、はったり、そこらへんの心理戦が得意としている。そんな空が相当お疲れの様子でイスの背もたれに体を預けている

白「にいい、おつかれ？」

空「おいおい妹よ。ゲーム最中に担当ほっぽって出て行ったのはどこのどなただったかな？おかげで手足使って4キャラ操作しなきゃいけなくなっただろ」

蓮夜「それはまたすげえな：」

白「にいい許せ」

オレの右腕をガツチリホールドしながら片腕だけ離してグッジョブサインを出す白。どうやら兄への労いはないようだ

蓮夜「んー。久しぶりにきたし、なんかゲームすつか」

白「ん、やる」

空「す、少し…休ましてくれ…」

蓮夜「なんだ？世界最強のゲーマー様がこれぐらいで。まさか、負けるのが怖いのか？」

空「負ける…？」

オレはニヤリ顔で挑発すると空はイスから立ち上がった

空「蓮夜。いつも言ってるようにな、ゲームに関してオレ達には負けはねえんだよ。

空と白、オレ達『　　くうはく』にはな」

蓮夜「わつてるよ。んじや何すつか。囲碁とか？」

空「お前！前にそれやって劣勢になったら碁石破壊してただろ！却下だ！」

蓮夜「えー。んなことあつたけかなー」

白「そんなにいいもカッコいい」

蓮夜「おー、嬉しいこと言ってくれるなーこいつめ！うりうり！」

白「〜♪」

オレは白の頭をわしやわしやと撫で回す

蓮夜「あ、オレ新しいゲーム？遊戯？見つけたんだった」

空「あん？」

白「新しいゲーム？」

蓮夜「ああ。『軍儀』って言うらしい。将棋に似た感じかな」

空「へえ。なら白の専売特許だな」

白「将棋やチェスなんて、ただの????ゲーム」

さすがゲーマーさん達だ。新しいゲームって聞いてすぐに説明書に目を通してやがる。それから何局か遊んでいると空と白も慣れてきて五分五分の勝負が続いた。さつきは『』に敗北はないんて言っていたがお互いには負け合ってる。いい兄妹愛だ。その後はみんなで食事してワイワイして寝た。寝るときにぞろぞろとオレの布団に入ってきていたのはみんな甘えたがりなのだろう

## 第30話

人間界から屋敷に帰ってきたオレと犬千代、シノアの3人はいつ見ても思うほどつかい門の前で一旦足を止めた

この2、3日は再会の旅のはずだったのに結構濃厚な旅になったな。最後にツクモと三葉が泣きそうになってたのには焦った。キイチも我慢してた感じだったな。もう少し素直に甘えてきてもいいと思うのだけど。年頃の女子にはいろいろあるのかねえ。でもまたすぐ会えるって言ったら笑顔に戻ってくれてよかった

これまでの旅路を思い出しながら門をくぐると庭では剣術バカが使い魔相手に鍛錬していた

アカ「お、我らが主のご帰還つてか」

蓮夜「あんたの主は達也だろ」

アカ「その達也の主が蓮夜なんだから俺達使い魔の主でもあるだろ？」

ボルス「アカ殿の言う通りにござる」

ナル「細かいことは気にするな」

蓮夜「そういうもんかね？」

なんとなくオレも納得したのでそれでいいことにした。オレがそうした。文句は言わせん。これでいいのだ。キリトはゲンさん相手にしてるから声かけても気づかんやろ

いつも通りの鍛錬を目にしながら庭を見渡してみると一角で優雅にお茶を飲んでるグループがあつた

蓮夜「そのメンツでお茶会つてのは、絵になるな」

深雪「蓮夜さん、お帰りなさいませ」

シユーラ「あら、いつお戻りに？」

蓮夜「ついさつきな」

いつか誰か使うかなって思つて庭に設置しておいたテーブルとイスで深雪、シユーラ、アイズ、ミラ、那月ちゃんが優雅にお茶会を楽しんでいた。その景色はまるで一枚の絵のようだった

犬千代「ん：：いい匂い」

藍子「みなさーん、クツキー焼きましたよー。あら蓮夜くん。お帰りなさい」

蓮夜「おおただいま。この匂いは藍子特製のクツキーだったか。アスタルテも手伝つたのか？」

アスタルテ「肯定」



犬千代が何かの匂いを感じ取ったと思つたら屋敷の方からその匂いの正体乗せたトレーを持った藍子とアスタルテがやってきた

犬千代「犬千代も食べる」

シノア「さすが藍子さんですね」

藍子「蓮夜くんもお一つどうぞ」

蓮夜「お、ならお言葉に甘えて」

シノア「なら蓮夜さん、あ〜ん♪」

ミラ「ちよつとシノア！あなたただけズルいわよ！蓮夜、私の食べなさい♪」

アイズ「あらあら、なら私も便乗しましょうか♪」

蓮夜「ちよつ！わかつたから！一人ずつ！」

言いだしつぺのシノアを筆頭に最終的にはそこにいる女性全員に食べさせられることになった。それも3周で…

さてさて、しばらくの間その場でお茶を楽しんでいるとチビ共がおそらく藍子のクッキーの匂いにつられたのだろう、そろそろとやってきた

藍子「ふふつ、団体さんが来ましたね」

那月「まったく騒がしい」

シユーラ「小さい子達は元気が一番ですわ」

深雪「微笑ましいですね」

『クッキー!』

「お兄ちゃん♪」

蓮夜「おっと」

クッキー!と叫ぶチビ達の中に一人だけオレに飛びついてきたやつがいたので抱きとめた

蓮夜「毎度言つてると思うんだけど、危ないだろ? クロ」

クロ「えへへ♪私もいつとも言つてるけどお兄ちゃんが受け止めてくれるから大丈夫だよ」

蓮夜「あ、それもそっか」

イリヤ「お兄ちゃん! 納得しちやダメ! こらクロ! 早く降りなさい!」

クロ「ふふん、女の嫉妬は見苦しいわよ」

蓮夜「そんな言葉どこで覚えてくるんだよ。まあみんなが見てるから降りような」

クロ「ぶっ」

クッキーの匂いにつられてきたのは延珠、小比奈、弓月、クロ、イリヤだった。それと一緒に遊んでいたのかチビ達の面倒を見てくれたのかりズとシリカ、レヴィ、マイン、シエーレが後からゆっくりと近づいてきた

蓮夜「みんなおつかれ」

リズ「みんな元気すぎよ」

シリカ「ちよつと疲れちゃいました」

マイン「まったくまいっちゃわよね」

レヴィ「そんなこといいながら楽しんでたくせに」

シエーレ「鬼ごっこで延珠ちゃんたちのこと捕まえられなくて悔しがってましたよ  
ね」

マイン「なっ！そんなわけないでしょ!？」

リズ「えく、なんやかんや一番楽しんでたのマインじゃないの?？」

マイン「うっさいわよリズベツト!」

戻ってきた組ががやがややっているところを見ながら藍子お手製のクッキーをクロ達に上げながら紅茶を楽しんでいる

ミラ「マインのツンデレさは相変わらずね」

シユーラ「もう少し素直になればよろしいものを」

蓮夜「まああれがマインのテンプレだからな。ツンのないマインはマインじゃない  
な」

藍子「蓮夜さん、それは失礼なのは…」

延珠「なあ蓮夜……」

蓮夜「ん？どした？」

延珠「マインは妾達と遊ぶのは迷惑だったのか……？」

蓮夜「んなわけないだろ」

いつもの元気な延珠が少し暗めの表情を出している。そんな延珠の頭をわしやわしやと荒めに撫でる

蓮夜「さつきも言ったがマインのあれはいわゆる照れ隠しなんだよ。それに照れ屋さ  
んだから素直にホントのことが言えないんだ」

那月「あれはただ大人ぶってる子供だ」

アイズ「那月さん辛辣……」

蓮夜「容姿的には那月ちゃんも……あてっ……」

どこからともなく紅茶に入れる用の角砂糖が飛んできた。その元にはそれ以上を口に出したらただじゃおかんと言いたげな顔をしている那月ちゃんがいた

蓮夜「ま、まあマインはああ見えて結構楽しんでるからまた誘ってやってくれ。お前  
らもな」

延珠「うむ、わかったのだ！」

小比奈「ん」

弓月「蓮兄も遊んでよね」

蓮夜「また今度な」

クロ、弓月「「えー」」

イリヤ「お兄ちゃんは忙しいんだから迷惑かけちゃダメだよ」

蓮夜「ありがとな、イリヤ。みんなのこと頼んだぞ」

イリヤ「〜♪任せてよ」

最後にチビ達全員の頭を一撫でする

蓮夜「みんなは引き続きお茶会楽しんでくれ。藍子ごちそうさまな」

藍子「いえいえ」

深雪「今度はご一緒しましょう」

蓮夜「おう」

最後にお茶会してたメンバーに声をかけて家に入った。ちなみに犬千代は延珠達にシノアはお茶会メンバーに加わった

ユウキ「あ、蓮夜ー！」

蓮夜「ただいま」

フブキ「あら、おかえりなさい」

家の一室にユウキ、クロメ、レム、スグ、リサーナ、フブキ、明日葉という珍しいメンツが揃っていた

蓮夜「これは何の会なんだ？」

リサーナ「〃妹会〃だよー！」

蓮夜「妹会？あー、確かにそうだな」

言われてみれば7人共妹だったな

蓮夜「あれ、深雪は？」

明日葉「いつもはいるんだけどね」

レム「今回は他のご予約があつたみたいで。蓮夜くん、こちらどうぞ」

蓮夜「んじや、失礼して。さつき外でお茶会してたわ」

長めのソファに座っていたレムがスツと隣を空けてくれたのでそこに腰を下ろした。

右腕はレムにのつとられてしまった

ユウキ「レムりんだけずるいよ」

クロメ「レム、今すぐそこを私に譲って」

リサーナ「いいな」

蓮夜「まあまあ。それはそうとこの会はどんなことするんだ？」

フブキ「特にこれといってすることはないわ」

スグ「その日その日で違うね。お菓子食べたりゲームしたり」

蓮夜「そうなんか。でもフブキがこういうのに参加してるのは意外だった」

フブキ「私もそう思うわ。でも一人でいた私をみんなが誘ってくれたのよ」

蓮夜「そうか。よかったな」

フブキはにっこりと嬉しさを顔に出していた。と思ってる隙にレムとは反対側から明日葉がスルスルツとオレの膝の上に頭を置いて寝そべった。なのでその明日葉の頭を撫でる

蓮夜「ところで思ったんだが、スグってキリトの妹じゃなくて従兄妹じゃね？あ、そんなこと言ったら深雪もか」

スグ「あはは、それはそうなんだけどね」

クロメ「細かいことは気にしない。それと明日葉は今すぐ私と場所を変わるべき」

明日葉「ん？ごめん、ムリ」

蓮夜「明日葉はともかくレムはいつもより甘えん坊だな。どした？」

レム「別にどうもしませんよ♡」

蓮夜「ま、いいけどよ」

レムに右腕を取られ、右手では明日葉の頭を撫でる。その光景を他の面子が穴が空くぐらいに凝視している

蓮夜「んで？妹の会ってんだからそれぞれの兄や姉に対して愚痴とか言ってるのか？」

フブキ「あら、人聞きの悪い。そんなことするわけないでしょう」

蓮夜「へえ〜」

フブキ「……くたまによ」

蓮夜「あるんじゃないか」

ユウキ「特にリーファは多いよね」

スグ「うぐっ……」

蓮夜「それは興味あるな。キリトからかうネタほしいと思ってたんだ。ぜひ教えてくれ」

スグ「あ、あんまりお兄ちゃんをいじめないで……」

蓮夜「わかってるよ」



クロメ「リーファはお兄ちゃんが大好き」

リサーナ「リーファはお兄ちゃんが大好き♪」

ユウキ「リーファはお兄ちゃんが大好きー♪」

スグ「ちよつと止めてよ！私はお兄ちゃんなんて！それに私は蓮夜さんが…っ！」

蓮夜「ん？」

勢いよく立ちあがってその勢いで口に出してしまったのだろう…顔を真っ赤にするスグをクロメとリサーナ、ユウキはニヤけ顔で見ている

ユウキ「ん？蓮夜がな～に？」

クロメ「最後まで言わないとわからない」

リサーナ「ほらほら～」

シノアほどではないがこの三人もなかなかのイタズラ好き。三人の攻撃を受けてスグはプルプルと震えている

蓮夜「三人ともそこまで。やりすぎはダメだ」

三人「はい」

蓮夜「オレも調子乗った。すまんなスグ」

スグ「ううう…」

フブキ「大丈夫よ、リーファ」

スグ「フブキさん：：」

フブキ「ここにいるみんな、他のみんなもそうだけど大なり小なり蓮夜のことが好きよ。もちろん、私も含めてね。だから恥ずかしがる必要はないわ。ねえ、蓮夜？」

蓮夜「お、おう。あはは：：」

レム「レムはいつまでも蓮夜くんのことをお慕いしています♡」

ユウキ「ボクも蓮夜のこと大好き♪」

蓮夜「そ、そうか：：。なんか照れるな：：。」

明日葉「蓮兄も照れることあるんだ」

蓮夜「そりやあな。オレも普通の人ってことだ」

明日葉「蓮兄悪魔なのに？ウケる」

蓮夜「お前はそうやって揚げ足取って〜こんにやろ〜」

明日葉「ちよっ：：」

揚げ足取りの明日葉の髪をわしやわしやする

フブキ「あらあら」

リサーナ「蓮兄もああいう反応するんだね〜」

レム「そんな蓮夜くんも素敵です♡」

スグ「でもなんか見せつけられてる？」

ユウキ「いいなく明日葉…」  
クロメ「あとでもらお」

いつもとちよつとだけ違う反応を見せた蓮夜。そんな彼と明日葉のやり取りを見て羨ましがりつつもちよつとカワイイとも思っている周りのメンツである

## 第31話

妹会のメンツと別れてようやく自分の部屋に戻ってこれた。しかしまあみんな仲良くできてるようで安心した

「さて、ただいまつと… あつ」

「「えっ…」」

部屋の中にはいるはずのない3人の人影。しかもその手には何やら布のようなものを持つてる。一旦ここが自分の部屋なのか確認するため部屋の中を一周見渡す。うん、3人がいるのとベッドの布団が膨らんでること以外はいつも通りだ。さすがアスタルテ。つて今はそれよりも…

「何してんの？3人とも」

「え、えつとく…」

「ち、違うのよ神崎蓮夜！」

「そ、そうよ！別にやましい事をしてるわけじゃないの！」

「へえく… してその手に持つてるのは一体なんだと言うんだね？チミ達」

「「うっ…」」

「オレの目にはオレがアスタルテにアイロンをお願いしていたシャツに見えるのだからね。そこんとこどうだい？」

「「……」」

ぐうの音も出なくなっただんじやねえか。とりあえず…

「シ～ノン～！ゆ～きな～！ウエンデイ～！」

「「ちよっ!!!」」

「なによ」

「お呼びですか？先輩」

「蓮夜さん、何かご用ですか？」

不法侵入及び窃盗未遂の容疑で3人を起訴するべくオレは部屋から頭だけ出して尋問官を呼んだ。いや～優秀ですな。呼び出し3秒で来ましたよ

「急に呼び出してすまんな3人も。実はどこぞの不届き者がオレのいない間にオレの部屋に不法侵入したみたいだな」

「そんなのいつものことじゃない。毎日誰かしらあんたの布団に侵入してるでしょ」

「それだけならまだいいんだけどな。あれ見てみ」

「あれ？」

「「……」」

「……」

後から来た3人は既にいた3人の姿を捉えて何かを言うのではなくただ黙り込んだ。そして呆れたように同時にため息をつく

「はあく……アスナ、あなた……」

「か、顔が怖いよしののん……」

「紗矢華さん……」

「違うの雪菜！これには訳が！」

「ルーシイさん……？何をしているんですか……？」

「ウエンデイ……？その目はダメなやつだよ……」

さて、お叱りはお3方に任せて布団の膨らみの方を確認しますか

「んじやご開帳つと」

布団をバサツとはなくゆっくりと中のやつを起こさないようにめくる。そこには気持ちよさそうにお昼寝に勤しんでいるアンナ、翠、美遊と猫2匹がいた。これもまた珍しいメンツだな

「んっ……」

「やべっ」

「お兄さん……？」

「…」

「蓮夜さん、ですか…？」

「寝起きで目をクシクシクシユしている3人。なにこの可愛い生き物。ずっと愛でてた  
い

『あなたはいつからこんな変態みたいなことをするようになったのよ…』

『そんな酷いよ…』

「すまん、起こしちゃったな」

「ううん、大丈夫」

「そっか。ほらこつちおいで。髪梳いてやつから」

「ん」

「早いな…」

寝起きで髪がボサボサになってしまった3人。そんな髪を梳いてやろうとベッドにあぐらで座りその前に来るように促すときだけ行動が早いアンナが一番になった

「っってお前らはそこなんだな」

「ニヤ〜」

「お前らも後で毛繕いしてやるから待つとれ」

一緒に寝ていた猫は白い方が頭の上に、黒い方はオレのふくらはぎにそれぞれ陣取つた

『紗矢華さん、自分が何をしたのかわかってますか!?!』

『ううう…』

「ほいできた」

「ありがとう」

「あいよ。んじや交代な。次はどっちだ?」

「私。お願いねお兄さん」

「あいよ」

『ルーシイさんだけズルい… ルーシイさんだけズルい… ルーシイさんだけズルい…』

『ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…』



「ほい。どうだ？」

「うん、大丈夫」

「そか。じゃあ最後は翠だな」

「はい」

「ん」

「あの、蓮夜さん？」

「おーすまん。相変わらずの猫耳だなんて思ってたら無意識で撫でてた」

「い、いえ」

翠には出会ったところから猫耳が生えていた。普段はとんがり帽子を被って隠してるんだがみんなの前では隠さずに生活できるようにはなっている

「よっしゃ完璧だ」

「あ、ありがとうございます」

「いいえ。んなら次はお前らだな。そだ」

翠の髪の毛も終えて猫共の繕いを始めようとしたところである事を思い出した

「おーい、3人共そろそろ許してやってくれ」

「はあ、まったく」

「先輩がそうおっしやるなら」

「むう〜」

相当なお叱りを受けたのだろうか、アスナと紗矢華とルーシイは目を回してぐったりしている

「ところで雪菜。今って夏音いたか？」

「夏音ちゃんですか？ええ、いると思いますけど」

「おっけー。かのーん」

雪菜に確認を取って猫共を抱っこしながらさつきと同じように部屋から顔だけを出して夏音を呼んだ

「そういえばお前はいつの間に来たんだ？」ネコ」

「ニヤ〜」

「そっか。みんなにはこのこと伝えてるんだよな？」

「ニヤツ！」

「ならええわ」

「呼びましたか？お兄さん」

「おう。急に呼んですまん夏音」

「いえ。あれ、その猫達って」

「丁度来てるみたいだし黒歌もこの状態だから。夏音に毛繕いやつてもらおうかと思つてな」

「わあー」

夏音はオレの知る中でもかなりの猫好きだ。せつかくやし世話を頼もうと思つた次第でありんす

「雪菜もやるか？」

「い、いいんですか!？」

「そんなそわそわしてたらわかるって。黒歌もいいだろ？」

「ニヤ〜」

「はいはい。夜はオレがやってやつから」

つてなわけでネコを夏音に、黒歌は雪菜に毛繕いを任せた。白音もいればやつてあげただけだな

「蓮夜さん!」

「お、おう…。どうしたウエンディ」

「私も髪梳いてほしいです!」

「そんなことか。別にいいぞ？」

「本当ですか!？」

「おうともさ。そこ座んな」

「はい♪」

アンナ達の見て自分もやってほしくなったのかな。ウエンデイがグツと気合いを入れながら懇願してきた。そんなんしなくてもやってやんのにねえ〜

「そういえばシノンさ」

「ん？」

「フォルムチェンジできるよな」

「できるけど、なによいきなり」

「いや翠見てたらそういえばって思い出して。ちよつと変わってみてくんね？」

「なんで？」

「そんなん愛でるために決まってるだろ」

「：． いや、そんなキメ顔で言われても」

「わあくいいですね！私も久しぶりに見たいです！」

「私も見たい、でした」

ウエンデイの髪を梳きながらシノンのとある能力を思い出してちよつとお願いしてみたところウエンデイと夏音も見たいと提案してきた

「ほらほら、2人も見たいってよ」

「…」

ウエンディと夏音が期待の眼差しを向けているとシノンも折れたのか目を瞑って集中します。するとシノンの体が青白く光り頭には猫耳が生え尻尾も出現した

「これでいいでしょ」

「「おお！」」

シノンはさつきまでの通常の姿と今のケットシーモードに自由に変換することができると変化があると聞いている

「久しぶりに見たけどこっちのシノンもありだな」

「なっ！」

「あ！見てください蓮夜さん！シノンさんの尻尾がぴーんって！」

「っ！これはちがっ！」

「うんうん。シノンよりも尻尾の方が正直ってな」

「れーんーやー！」

「あ、あはは…」

そんな顔を赤くして睨まれても可愛いだけだったの

「シノンさん、可愛い」

「美遊!？」

「えっと、可愛いです」

「翠まで!」

「…」

「ちよつ! アンナ! 尻尾を触んない!」

チビ共に弄ばれるシノン。でも突き放そうとしないところ本気で嫌がってないんだ  
ろうな

「これで終わり。そのヘアゴム結構長いんじゃないか?」

「ありがとうございます。そうですね。蓮夜さんに貰ってつからずとなので」

「そっか。今度新しいの買いに行くか」

「はい♪」

「んじやウエンデイもシノンで、あ、間違った。シノンと遊んできな」

「ふふつ、はい」

「蓮夜! あんた後で覚えときなさいよ!」

「はいはい。それで、アスナ達は どうする?」

「へっ…?」

「今ならオレ櫛持つてて手持ち無沙汰になってるけど？」

「「お願います!!!」」

「あいよ」

ぐでーつとなつてたアスナ達に声をかけると魂が戻つたように元気になった

「まつたく。洗濯とか手伝つてくれんのはありがたいんだが、人のものの匂いを嗅ぐのはやめような」

「ご、ごめんなさい。なんか誘惑に負けちゃつて…」

「アスナは止める側たと思つてたんだけどな」

「あはは…」

「ま、アスナもまだまだ子供だつたつてことだな」

「むう。蓮夜くんはすぐそうやつて」

「そういうところもだぞ」

最初はアスナから。ウエンデイも髪は長い方だがアスナはもつと長い。毛先まで丁寧に梳いた

「はい終了」

「ありがと♪」

「次は紗矢華か？」

「え、ええ」

「緊張しすぎだろ」

「そ！そんなことあるわけないでしょ！」

「…はいはい」

「…悪かったわね。つい魔がさしたのよ」

「もうよしてくれよ？こんなことで紗矢華達を嫌いになつたりしないが、雪菜はどうか  
わからんぞ？」

「っ！もうしないよう努力するわ…」

「そだ。紗矢華のシユシユも結構年季入ってるよな？」

「ええ。雪菜に貰ったものとあなたに貰ったものしか使ってないから」

「紗矢華も新しいの買に行くか？」

「し、仕方ないわね。どうしてもって言うなら行ってあげてもいいわよ？」

「お前もシノンに負けず劣らず素直じゃないねえな」

「蓮夜！聞こえてるんだからね！」

「おくこわっ。ほれ終わりっ」と

「ありがと。それから私はあそこまでじゃないわ！」

「どーだか。ルーシイお待たせ」



「やつとだよう」

「じゃんけんに負けたからしやーねえ」

「もう待ち疲れちゃった」

「オレに腕は二本しかないんでね、勘弁してくれ」

「冗談冗談♪」

「今日はツイントールなんだな」

「たまには昔の髪型もいつかなって。いつもの方がよかった?」

「いや、特に深い意味はなかったんだ。昔のもいつものもルーシイらしくていいと思う」

「・・・そう?」

「ああ。ルーシイはなんとというか子どもっぽさと大人っぽさがどっちも似合うからなのかなあ。どんな髪型も似合いそうだ」

「あ、ありがと・・・」

「アスナは外面よくして大人っぽく見せてるからいきなりツイントールにしたら違和感満載だろうな」

「あー確かに」

「2人とも。聞こえてるからね!」

「おつといけね。まあ普段から大人っぽい那月ちゃんがいきなりツイントールとかして

も容姿的に問題なさそう…。あてっ」

「蓮夜!？」

いきなり窓からなんか飛び込んできてオレのこめかみに激突した

「角砂糖…。あの地獄耳は…。ストーカーかっての…。あてっ」

一撃目いただきました。まったくすぐそうやってなにかを当てるんだから

「つてなわけでルーシイはどんな髪型でも似合いそうって話だ」

「うん! ありがと♪」

「れーんーやー」

「お、お疲れシノン。お前もやって、やろう…。か…。…」

ルーシイの髪の毛の整えも終わって立ち上がるうとするシノンがこっわーい笑顔で右眉をピクピクさせていた

「言ったわよね? 覚悟しておきなさって?」

「い、いやー…。さらば!」

「あつ! ちよつと待ちなさい!」

今のシノンの状態で説教はやばい。逃げねば。オレはダツシユで部屋を出ようとする

「あ」

「ちよつ！急に止まるな！」

オレを追いかけて駆け出そうとしていたシノンの前で急に止まったことでシノンはオレの背中にぶつかつた。オレはそれを合図に後ろに向き直りシノンの頭をひと撫でふた撫でさん撫でする

「やっぱこの姿のシノン見たら頭撫でないと気がすまないわな」

「なつ！ななななにを…!!」

「んじゃ改めてさらば！」

「~~~~~!!!」

シノンはプルプルと体を震わせる。それは嬉しさからなのか恥ずかしさからなのか。はたまた怒りなのかは本人しかわからない。目に涙を浮かべ顔を真っ赤にしているシノンは弓を出現させ力一杯にそれをオレめがけて射ってきた

「蓮夜！絶対許さないからね！」

「おい待て！これ誘導式じゃねえか！」

「ふん！」

さて問題です。蓮夜がシノンの弓から逃げ切つたのは一体何時間後の話でしょう？

## 第32話

シノンの弓から逃げ切ったオレは屋敷に戻り屋根の上で一人黄昏ていた。なにを考えるのでもなくただ単にぼーっと正面を見ていた。庭からは延珠達の楽しそうな声、キリトやブラート達の鍛錬の声……ではなくそれに無理矢理付き合わされてるラバの悲鳴。賑やかである

蓮夜「おっ」

どれくらいぼーっとしていたか。わからんが突然空の一部が光ったと思うとそこから見覚えのある飛行艇が二隻現れた。二隻はゆっくりとこつちに下りてきた。それに気づいたのか屋敷から続々と人が出てきた

蓮夜「これで全員かな」

二隻が屋敷の裏に着陸し周りにはみんなが集まった。少しすると二隻からそれぞれ数名降りてきていろんな人に囲まれた。され、オレも降りますか

蓮夜「ようこそ、イザナギさんイザナミさん」

イザナギ「やあ蓮夜くん」

イザナミ「お招きありがとう」

蓮夜「アマテラス達もお疲れさん」

アマテラス「会いたかったわ蓮夜♪」

スサノオ「錚々たる面々だな」

ツクヨミ「こんなにも早く会えて嬉しいです、兄様♪」

サクヤ「蓮夜兄様♪」

蓮夜「ようサクヤ。クシナダとウズメもよく来てくれたな」

クシナダ「蓮夜さんのお呼びとあらば当然です♪」

ウズメ「知らない人も結構いますね」

蓮夜「あとで紹介する。とりあえず先に案内だな。雪菜頼む」

雪菜「わかりました」

雪菜に案内を頼んでイザナミさん達は屋敷へ入っていった

蓮夜「よっ信奈」

信奈「言われた通り来てやったわよ！」

良晴「なんか、俺場違いじゃね…？」

五右衛門「相良氏はもう少し自信を持つ方がいいでござる」

勝家「私達は姫様のお付きとしてきているのだ。もつとシャキツとせんか！」

蓮夜「相変わらずの信奈崇拜者だな。長秀さん達も長旅お疲れ様」

長秀「お気遣い感謝いたします。80点♪」

半兵衛「お呼びいただいたて、嬉しかった、です♪」

光秀「仕方ないから来てやったです♪」

蓮夜「はいはいありがとね。んじゃ犬千代、案内してやってくれ」

犬千代「ん」

犬千代は信奈達を連れて屋敷へ入っていった。その途中良晴が何か余計なことを言ったのか信奈に蹴られるところを目撃した

『メエ〜』

『ウサッ』

「おー、お：お おおおおお!!!」

『メエ』『メエ』『メエ』

『ウサ』『ウサ』『ウサ』

「ちよちよちよ!!!」

突如大量の羊と兎に押し潰される。辛うじて顔は出せたものの体は全て埋まってしまった

ヒラト「おや、いつの間に雪だるまになる趣味を持ったんだい？蓮夜」

ツキタチ「なはは！なかなか似合ってるぞ蓮夜!!!」

蓮夜「わかつてるくせに：。」

ヨギ「あわわわわ：。」

ナイ「わー！蓮夜モコモコだー！」

ガレキ「いい格好じゃねえか」

蓮夜「ガレキ後で覚えてろよ：。」

ツクモ「蓮夜、苦しくない？」

キイチ「いい気味ですう〜」

蓮夜「ツクモは優しいな。キイチも先輩を見習いな」

キイチ「余計なお世話ですう」

蓮夜「あれ？ジキさんは？」

ツクモ「仕事。みんなよろしくって」

蓮夜「そつか。それは仕方ない。まあとりあえずヒラトさん達もゆつくりしてください」

い

イヴァ「まったく。ツクモとキイチがいるつてのにまた可愛い子増えてるんじゃない

? 何人か私によこしなさいよ」

蓮夜「そんな風に言うのやめろよイヴァねえ。みんな少なからず慕ってくれてるん





蓮夜「既に諦めてたか…」

三葉「まったくあいつらは…」

蓮夜「三葉もお疲れさん。いろんな意味でな…」

三葉「あ…」

シノア「あはっ、いつもツンケンしてるみっちゃんも蓮夜さんの撫で撫では素直になっちゃうんですね〜」

三葉「なっ！シノアー!!!」

蓮夜「はいどおどお。優達もそろそろやめろー。シノアは案内だ」

シノア「はい。ではそこのおバカさん達〜、行きますよ〜」

優一郎 土方「んだとシノアー!!!」

シノアの最後の一言にキレた優一郎と土方がシノアを追いかけるように走って屋敷へ向かった。その光景を『またか…』と呟き他の3人がついていった

深雪「蓮夜さん、ほのか達も到着しました」

蓮夜「おっそうか」

ほのか「蓮夜さん！」

雫「久しぶり」

蓮夜「よく来たな2人も。ほのかは達也ともう会ったのか？」

ほのか「いえ、まだです」

蓮夜「そっか。達也ー」

達也「呼んだか？」

ほのか「た、達也さん！」

達也「ほのかか。すまん、挨拶が遅れたな」

ほのか「い、いえ…」

蓮夜「あらま」

深雪「お兄様も隅に置けない方ですね」

美月「ほのかさんは本当に達也さんのことが好きなんですね」

幹比古「僕、ここに来てよかったのかな」

蓮夜「いいに決まってるだろ。それにお前達はどうかんだ？ん？幹比古、三月」

美月、幹比古「っ!!」

蓮夜「2人ともウブだね」

雫「今日の蓮夜さんいじわるすぎ」

蓮夜「そうか？んまあ後でいろいろ聞かせてもらおうとして、深雪みんなの案内頼むな」

深雪「かしこまりました」

深雪はきれいにお辞儀をして達也と共に顔の赤いほのか、美月、幹比古とその3人を

静かに見守る雫を連れて屋敷に入っていった

白「にいに！」

蓮夜「白！」

「ヒシッ！」

白との再会の抱擁を交わしたところで後からノロノロと空が降りてきた

蓮夜「空……なんでそんな寝れてんだ？」

空「蓮夜か……。いやなに、軽く36時間ほど寝てないだけだ……」

蓮夜「マジかよまたゲームか？ちゃんと寝ないと体壊すぞ」

空「半分はお前のせいだからな……」

蓮夜「へっ？」

空「お前に会えるから白のテンションが爆上がりしてな」

蓮夜「そうか……」

空に睨まれていると白がシャツをクイツと引つ張った

白「にいに……。白と会いたくなかった……。？」

蓮夜「そんなわけないだろー！また会えて嬉しいぞー白！」

白「にいに！」

「ヒシッ！」

白と再度抱擁を交わし更なる絆を深め合っていると誰かに抱き着かれた

「蓮夜。私も撫でろ、です」

蓮夜「おーイズナ。よーしよしよし」

イズナ「〜♪」

「この変態……」

蓮夜「は……？」

「ひっ！」

「あからクラミー泣いちやつて。蓮夜さんクラミーを泣かせないでほしいのですよ」

蓮夜「なあフィーよ。今のはオレが悪いのか？」

フィー「まあクラミーも少くしただけ悪いところがあつたつて思うのですよ」

蓮夜「だろー？てかこれくらいで泣くなよ」

クラミー「な、にやいてないもん！」

空「いや大泣きじゃねえか」

クラミー「っ！そ〜ら〜！」

「そ〜ら〜！」

蓮夜「ん？今クラミー二人いなかった？」

「そ〜ら〜！」

「あ、なんだいたのかステフ」

ステフ「ムツキー！空も蓮夜さんもなんなんですよ!？」

白「許せステフ。おすわり」

ステフ「ワン!：：。って許せでおすわりってどういうことですよ!？」

イズナ「蓮夜、止めるんじゃない、です」

蓮夜「おー悪い」

イズナ「〜♪」

フィー「イズナさん気持ち良さそうですね。蓮夜さん私にもするとするといいいのです

よ〜」

蓮夜「はいはい」

フィー「〜♪いい感じなのですよ〜♪」

蓮夜「そらよござんした」

ジブリール「おやおや〜?なぜ犬つころと森の雑種がマスターのご寵愛を受けている  
のでしょうか:。」

フィー、イズナ「:。:。ふっ」

あらなんていい笑顔ドヤ顔なんですよ

ジブリール「:。:。ふふ、ふふふふ:。:。ほお〜。つけあがりましたね〜」

蓮夜「待て待て。ほら、これでいいだろ」

歪んだ笑顔のジブリールを通常に戻すために頭を撫でる

ジブリール「く♪」

蓮夜「うし。お前らちゃんと付いてこいよ？白、行くぞ？」

白「がつてん！」

イズナを小脇に抱えて白と手を繋ぎ屋敷の中へ。これでひとまず全員の案内は済んだな

屋敷の中はこれまでにない程の大所帯となった。オレは急いで宴の準備を進めレム  
達料理のできる子達が手伝ってくれたおかげでギリギリ間に合った

ホールには既に各陣営の全員が集まっており、壇上に設けられた椅子には日本神話代

表のイザナギさん、イザナミさんに国家防衛機関　〃<sup>サーカス</sup>輪〃　代表のヒラトさんとツキタチさん、更にはラ・フォリアの両親で現アルデギア王国国王であるルーカス・リハヴァインと王妃のポリフォニア・リハヴァイン、第一王女のラ・フォリア、ポリフォニアの異母妹にあたる夏音がドレスを身に纏って座っていた

オレはそんな方々がいる壇上に登り跪いた

蓮夜「この度はお忙しいところご足労いただき感謝申し上げます。今回私どもは天使、悪魔、墮天使とは中立の立場として新たな勢力を立ち上げる決意をいたしました。つきましては日本神話の方々、アルデギア王国とは対等な同盟を結びたく思い本日お越しいただいた次第です」

イザナギ「ふむ。我々には既に話を通されている。日本神話勢力代表として我々も同盟を望んでいるが、そちらはいかがか？アルデギア王よ」

ルーカス「此方としても王国としては何の異存もない。我々としても蓮夜殿、日本神話の方々、サーカスの方々とは友好的に接したいと思っっている」

ヒラト「私共サーカスは犯罪者や犯罪組織を取り締まることを主とし活動しております。故にどこかの勢力と密になることはできません。そのことは理解していただきたい」

ルーカス「承知している」

ツキタチ「しかし一友人としては是非とも友好的に接したいものです」

イザナギ「それでよい」

蓮夜「ありがとうございます。では最後に書類にサインをしていただきたく存じます。最近では酒を酌み交わすだけで締結となることがあるようですが、今回はアルデギア王国が関与しているためしつかりとした文書を残した方がよろしいでしょう。ヒラトさん」

ヒラト「承知しました」

ヒラトは立ち上がりイザナギ、ルーカス、蓮夜の順に一枚の用紙を回し最後に自分が確認する

ヒラト「では国家防衛機関『輪』代表私ヒラト観察の下、この度の三同盟が締結されたことをここに宣言いたします」